
バカとテストと独眼竜

tam

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと独眼竜

【Nコード】

N5769N

【作者名】

t a m

【あらすじ】

バカテストの世界に、自称・伊達政宗の子孫で生まれ変わりという、伊藤正宗が文月学園Fクラスに所属することになり、試召戦争で暴れまわる！

バカテストはオリジナルにもチャレンジしています！

戦国BASARAとの関係性は少ないですが、BASARAファンであるうと無かうと、『これはこれで面白いな』みたいな感想を持ってくれれば幸いです。

人物紹介（前書き）

この小説のオリジナルキャラクターの紹介です。

とりあえず今は一人です。

後々内容変更する予定は・・・・・・・・・・ないようにはしていきたいです。

人物紹介

名前 伊藤 いとう 正宗 まさむね

性別 男

得意教科 日本史、世界史、英語

苦手教科 他全部

趣味 日本史系アクションゲーム、その他 いろいろと多趣味

伊達政宗の子孫・生まれ変わり（ただし生まれ変わりは自称。子孫については家計図もあり有力らしい）。

外国に長く滞在してたこともあり、英語が使われている国にはすべて行ったことがあるらしい。

そのため英語が達者。日常生活でも気が高まるとよく口に出る。

過去のことや、トラウマを引きずりやすい。

数年前、とある事故で右目を失明。それ以来黒い眼帯をしていて、それと引き換えにあらゆる意味で身体能力が高くなった。

木下家と伊藤家は昔から犬猿の仲。しかし、正宗と木下姉妹（？）は仲がいい。

3人はなんとかして和解させたいと思っている。

召喚獣は戦国BASARAに出てくるような伊達政宗のデフォルメそのもの。

通常は一刀流だが、ある条件で六爪流になる。

点数は得意教科で200〜399点台。そのほかはFクラス中の下
(4月現在)。

文月学園の裏側である関わりを持っているらしい……

人物紹介（後書き）

物語の進行具合で更新していきます。

ネタバレになりそうなことは詳しく書きません。

第巻話 (第一次試召戦争編 スタート) (前書き)

「オリジナルを挑戦」とか言いつつ、初っ端から原作を真似させてもらいます。

第巻話 (第一次試召戦争編 スタート)

第一問

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点 合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目だという引っかけ問題なのですが、姫城さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金(すごく強い)』

教師のコメント

すごく強いといわれても。

伊藤正宗の答え

『アルミホイル』

教師のコメント

合金でない以前に、せめてアルミニウムと書いて欲しかったです。

俺がこの文月学園に入学してから二度目の春が訪れた。

春といえばいろいろあるが、俺が今思いつくのは一年間友に戦い抜いていく戦友と教室、つまり新しい教室のことだった。

この学校は世界的にも注目されている試験校である。

その一環としてクラス分けの結果は一人ひとり封筒を渡して発表している。

クラスは全部でAからFまであって、振り分け試験の成績順にクラスが決まる。

発表の仕方も、少しでも上下差別させないためであろう。

『うえー！ー！ー！』

校門をくぐった瞬間、そんな悲鳴が聞こえてきた。

すごく聞き覚えのある声だったが、おそらくいい教室ではなかったからだろう。

「伊藤、遅刻だぞ」

「あ、鉄じ、じゃなくて、西村先生。おはようございます」

「今、鉄人って、言わなかったか？」

「ははっ。気のせいですよ。ギリギリで直しましたから」

ガンツ！

拳骨された。

「まったく、吉井よりも遅く来るとは・・・」

「やっぱりさっきの悲鳴は明久のものだったようだ。あいつの成績じゃ仕方ないだろう。」

「でも普段は遅刻なんてしてませんよ」

「遅刻は、な。ほら、受け取れ」

「あ、わざわざすまねえな」

ガンツ！！

「教師にタメ口を使うな」

「以後気をつけます」

封を切って紙を開いた。その内容は・・・

『伊藤正宗・・・Fクラス』

桜印の判子で『すごくよくがんばりました』とあるのが腹立たしい。

「まあ二教科ばかりがA、Bクラス並でもほかは吉井レベルならこんなもんだろう。だが、お前だってその気になればAクラスだって目指せるはずなんだと思うがな・・・」

予想しなかったわけじゃないが、改めて残念な気分になった。

ああ・・・、こんなことなら前日はゲーム・・・じゃなくて日本史の勉強以外もやっておくべきだったな・・・

第巻話 (第一次試召戦争編 スタート) (後書き)

基本的に文章は省略していると思います。

第貳話（前書き）

今日二回目。

才り問やってみます。

第貳話

第二問

問 次の に漢字を一文字入れなさい。

- 『(1) 一日千
- 『(2) 品 方

姫路瑞希の答え

- (1) 『秋』
- (2) 『行、正』

教師のコメント

正解です。『一日千秋』と『品行方正』です。

吉井明久の答え

- (1) 『円』

教師のコメント

『一日千円』高校生の一日の小遣いにしては高いですね。それとも君の欲望ですか？

伊藤正宗の答え

- (2) 『側、面』

『品川方面』そっちに一体なにがあるのでしょうか？少なくとも文月学園は真逆かと。

(文月学園は東京都内ではないということにしていただきます。別に深い意味はありません。)

Fクラスの教室に向かうとき、ついでにAクラスの教室を見てみた。

とても学校とは思えないほどの設備であった。Aクラスがこれなら、Fクラスはどうなっているのだろうか。せいぜい畳と卓袱台ぐらいなら許せるのだが……。

二年F組と書かれたプレートのある教室の前で俺は少しだけため息をついた。

プレートを見た感じ、すでに真っ二つに割れている。誰かが叫んだだけですぐにバキッと割れてしまふんじゃないだろうか。そして戸を開けると……

「すいませーん、遅れやしたー」

「早く座れ、このゴミ虫野郎！」

んだとコラ！

「聞こえないのか？ ああ？」

「てめえこそ誰にケンカ売ってると思ってるんだ！」

坂本雄二。一年のころから同じクラスの知り合いだが、どうやっても相成れない仲だ。

「まあ落ち着いてよ正宗。僕なんてウジ虫野郎って言われたんだから」

「どっちもそれほど変わらないじゃねえか！！」

明久が落ち込んでしまった。一番の相棒に何か言葉をかけてやりたいが、どういえばいいやら……。とりあえずおいといて。

「んで、なぜお前は教壇に上がってるんだ？」

「先生が遅れてるらしいから、代わりにあがってみた」

そうか。よかった。かろうじて先生はいるんだな。

「そんなに偉そうなのはなぜだ？」

「俺がこのクラスの最高責任者だからだ」

「へー、そうなのか」

教室を見渡してみた。クラスメイトはみな床に座っている。性格には畳だ。さっき俺が予想したとおり、普通に畳に卓袱台だった。

ただし、すごくボロいことを除いては。

「まさかここまでひどい設備とは・・・想像以上だ」

「だが、そのほうが俺には好都合だ」

この方がいいって、なにを考えてんだ？

そんな話を三人で話していると、先生が来た。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしくお願いします」

先生は黒板のほうを向いたが、すぐに戻った。どうやらチョークすら用意されてないらしい。

「皆さん全員に、卓袱台と座布団は支給されてますか？ 不備があれば、申し出てください」

大有りだ。

三人ほど申し出たが、『我慢しろ』、『自分で直せ』というものだった。それ以後不備を申し出るものはいなかった。

第貳話（後書き）

意外と難しい。

今回は自己紹介です。原キャラもアレンジしてみます。

第参話（前書き）

少しは凝ったサブタイトルを考えたいです。

第参話

第三問

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- (1) 『得意な事でも失敗してしまう事』
- (2) 『悪い事があつたうえに、更に悪い事が起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- (1) 弘法も筆の誤り
- (2) 泣きつ面に蜂

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら“河童の川流れ”、“猿も木から落ちる”、(2)なら“踏んだり蹴ったり”や“弱り目に祟り目”などがありますね。

土屋康太の答え

- (1) 弘法の川流れ

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

- (2) 泣きつ面蹴ったり

教師のコメント

君は鬼ですか。

伊藤正宗の答え

(1) 猫も棒から落ちる

(2) K i c k i n g w o u n d

教師のコメント

(1) 君がリトルバスターズを知っていたことに驚きです。それとも素ですか？

(2) なぜ英語なのですか。しかも『泣きつ面蹴ったり』のほうですよ……

「それでは、自己紹介でもしましょうか。そうですね、廊下側の人からお願いします」

そして一人教壇の上に立った。そいつは一番古くからの知り合いだった。

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる。今年1年、よろしく頼むぞい」

木下秀吉。女みたいな顔をしている。俺の幼馴染。同じく優子つてのもいるんだが、確かAクラスにいたような気がする。家柄の関係が悪いのだが、こいつらとは仲がいい。

「……土屋康太」

さて、いつのまにか次の人。

こつちも知っている顔だ。自己紹介なんだからもう少ししゃべればいいのに。

土屋康太はむしろ違う名前の方が有名なのだが、それはまたあとで。

それにしても、見渡す限り男ばかりだな。

「……です。海外育ちで日本語は会話ができるけど、読み書きが苦手です」

と、また次の人。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は……」
むむ、今度は女の声だ。しかも聞いたことがある。確か……

「吉井明久を殴る事です」
と、手を振って笑った。明久は少し怯えた顔をした。

彼女は島田美波。ドイツからの帰国子女。ポニーテールと絶壁のような体の一部が特徴。顔もかわいいが、暴力的なイメージであまり人気がない。しかし隠れファンはいる。俺もその一人だったりする。うでなかつたりする。

さて次は……明久だった。

「え〜っと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね」

『ダアアーリーリン!!』

まさかほんとにいう奴がいたとは……さすがFクラスだ。

そんななか島田は、「ウチも言えばよかったかな……」とつぶやいていた。

明久は作り笑顔をしているが、内心は吐き気がしそうなほど不愉快なんだろうな。

そして俺の番。

「伊藤正宗です。伊達政宗の子孫で生まれ変わりです」

『嘘をつけーえー!!』

信用されなかった。第一印象は最悪だな。だが、まだ挽回はできる!

「証拠はある」

席の前のほうの奴に家計図を見せてやった。

『本当っばいな』

『騙されるな。いくらだって偽造できる』

『しかもけっこう遠くないか？』

そりゃ4,500年前からだからな。

「ちゃんと鑑定もしてもらってあるんだ」

この調子ならなんとか信じてもらえそうだ。

『子孫はいいが、生まれ変わりつてのは』

「じゃあこの一年間 くじり Regards!

『無視しやがった!』

ふう、自己紹介はまあまあかな。人は『第一印象』が大事だから。

過去に『第一印象』で失敗したから。

雄二以外全員の自己紹介が終わった頃、少し眠気が差してきた。
ところが・・・

ガラッ!

そこへ、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。

第参話（後書き）

正宗は美波に好意があるかのようなようですが、実際はそうでもないです。思案ストーリー上、木下優子と結ばせる予定です。本人はどちらもそんなに興味を示しません。

そのうち正宗の過去話も書きます。

第四話（前書き）

テスト勉強忙しいです。

なんとか早めに試召戦争に入りたいです。

第四話

第四問

問 空欄に入る言葉を答えなさい
東大寺法華堂や法隆寺中門に安置されている二体の像は 像
である。

(実際のテストは写真がありました)

姫路瑞樹の答え

『金剛力士』像

教師のコメント

正解です。運慶快慶によって作られた像で、ほかにも京都・奈良を中心にして全国のお寺にあります。『阿吽の呼吸』という言葉もできま
した。

吉井明久の答え

『超コワイ』像

教師のコメント

運慶快慶の作品は金額に換算できないほど貴重な一品です。
国宝をバカにしているのですか。

伊藤正宗の答え

『金剛番長』像

得意な日本史でも珍回答を出すんですね。
モデルではあるでしょうが、不正解です。
もう片方は兄でしょうか？

「あの、遅れて、すいま、せん……」
『えっ?』

その姿に、男子生徒全員が意外を通り越したかのように驚いた声がかかる。

「調度良かったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんもお願いします」

「は、はい！ あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願ひします」
「！」

「はいっ、質問です！」

「あ、はいっ。なんですか？」

「何でここにいますか？」
いや、普通は失礼だろその質問。Fクラスレベルの奴がAクラスにいるなら妥当すぎるっていうようなもんだ。

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」
……

成る程、確かに体は弱そうだな……ってこれは失礼か？

途中退席は問答無用で0点扱いだからな。

『そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ、化学だろ？ あれは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて、実力を出し切れなくて』

『黙れ1人っ子』

『前の番、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘ありがとう』

「……それらが通用するとも？ 想像以上にバカだらけだ。
」で、ではっ、今年1年よろしくお願ひします！」

姫路は逃げるように、明久と雄二の間の空いてる席に着いた。

彼女は席に着くや否や、安堵の息をついて卓袱台に突っ伏してしまふ。

明久は姫路に話しかけようとした。だが・・・

「あのさ、姫」

「姫路」

雄二が言葉をかぶせた。なんか明久は残念そうだ。

ちよつと会話に参加してくるか。

「坂本だ、坂本雄二。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしくお願いします」

深々と頭を下げる彼女。挨拶も丁寧で、育ちが良さそうだ。いろんな意味で。

「ところで、姫路の体調はいまだに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

「俺も一応・・・」

と、口を挟んでみた。

「よ、吉井君！？ と、あ、あなたは？」

なんか怖がられた！？

「姫路、明久がブサイクで正宗が強面ですまん」

そういえば、あんまり面識ないしな・・・。俺と姫路は有名人だけど会ったのは初めてだ。

「伊藤正宗だ。よろしく」

「はい、よ、よろしくお願いします」

「目もパツチリしてるし、顔のラインも細くてきれいだし、その、むしろ……、それと伊藤君だつてちよつと怖いけど逆にそれがかっこよくて・・・」

ほめられてんだかどうなんだか・・・？

「正に『伊達男』って感じですよ！」

「そういつてもらえんとすごくうれしいぜ！」

それは最高の褒め言葉だよ！

「正宗つてこの言葉に弱いよね」

「そうなんだよな。ちなみに明久、意味は分かるか？」

雄二が明久に問いかけた。

「もちろん。横たわっていない男ってことでしょ」

「縦男、とでも言いたいのか？」

「そんな言葉いつ使うのじゃ？」

「………何回も話していただろう」

「いい加減覚えなさいよ。ウチも忘れたけど」

秀吉たちもきた。福原先生は教卓が壊れたから替えをとりに行つた。

「で、どういう意味だっけ？」

「伊達政宗が豊臣秀吉に濡れ衣をかけられた時、部下に磔台を担がせ、自身は白装束という姿で上方に訪れた。このときの姿を見た町人たちが驚き、彼を伊達男と呼んだのが由来。純粋な意味としては『派手な振る舞いをする男』『派手ないでたちの男』というばさらを表す意味だが、時折「粋な男」や「美男子」と言う意味で使われることがある。これは伊達政宗が美男子だという噂から来ていると思われる」

「長くてよくわかんないよ……」

「それにしても、ウィキペディアの『伊達男』の部分だけそのまま暗記しておるのじゃからな、ある意味の才能じゃ」

「………好きこそ物の上手なれ」

そうか。全部読んだら明久に分かるわけがない。

「でも、それをほかの教科に向ければ……」

「それ以上は言うな」

「姫路もそのつもりで言ったのか？」

雄二が訪ねてみた。

「いえ、どこかで見た青いよろいを着た伊達政宗の顔が頭に浮かんできて……」

そりゃ戦国BASARAだな。どこで知ったのだろう？

このあと、久保利光の同性愛疑惑の話とかがあったが、ここは省略する。

詳しくは原作を読もう！

「……雄二、ちょっといい？」

しばらく雑談していると、明久がそんなことを言って雄二と廊下に出て行った。

そして二人が戻ってきて、そのあとすぐに先生が戻ってきた。

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

教卓は替えがあったようだが、それでもボロだった。

さて雄二、どんな紹介をしてくれる？

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ。さて、みんなに一つ聞きたい。」

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが」

たしかにそうだったがそれが何か……

「不満はないか？」

「大ありじゃあっ！！」

二年Fクラスの魂の叫び。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そつだそつだ！』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！改善を要求する！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる！』

口々に文句を言う。酷く言うと自業自得でもあるんだが・・・

「みんなの意見はもつともだ。そこで、これは代表としての提案なのだが」

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

ドクッ！

すると、『戦争』という言葉に反応するように、俺の心臓が高鳴った。

そつか、久しぶりに『アイツ』が出てきそつだな・・・

第四話（後書き）

やっと原作の第一問が終わった・・・

近頃中間テストなので更新が不安定になりそうです。

正宗の中にいるのは何者なのか・・・乞うご期待！

するほどでもないかも・・・

第五話（前書き）

テスト勉強の現実逃避。

なんとか更新しました。

第五話

第五問

問 以下の英文を訳しなさい

『 This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly .
』

姫路瑞希の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

『これは』

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか

吉井明久の答え

『 * 』

教師のコメント

出来れば地球上の言語で。

伊藤正宗の答え

『これは私の祖母の本棚が使っていたregularです』

教師のコメント

コメントをします。ルー大柴みたいですね。

ちょっと落ち着いてきたところで、周りの声を聴いてみた。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備が落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんが居たら何もいらぬ』

当然のことながら、反対するような声も出た。戦力は明らかだからな。

最後の奴は何者だ？

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」
そんな中でも雄二は自信があるようだ。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

あいつは根拠なく何かを言ったりしないはずだ。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

クラスの皆が更にざわめいた。

学年の最下位クラスで最上位に勝てると思う奴は普通いないぞ。

「それを今から説明してやる」

そして壇上を降りて歩いた。そしてその方向に・・・不振者がいた。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

やっぱりあいつか。そんなんだからあんなあだ名が付くんだ。

「土屋康太。こいつがあのお有名な、寡黙なる性職者だ」
ムツツリーニ

ムツツリーニ。一文字変えるとあの歴史上の人物になる。

その名前は男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を以て挙げられる。

『ムツツリーニだと・・・・・・・・・・？』

『馬鹿な、ヤツがそうだといいのか・・・・・・・・・・？』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ・・・・・・・・・・』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ・・・・・・・・・・』

名前は有名でも人間そのものを知らない奴は多い。

「?????」

姫路はまったく知らなかったようだ。

「姫路のことは説明する必要はないだろう。皆だってその力は知っているはずだ」

「えっ？ わ、私ですかっ？」

『そつだ。俺たちには姫路さんがいるんだつた』

『彼女ならAクラスにも引けをとらないな』

『ああ。姫路さんがいれば何もいらぬいな』

またラブコールしてる奴がいるな。さっきの声と照合すると同じ奴だな。

「更に木下秀吉だっている」

そうだった。俺の幼馴染で演劇部のホープの秀吉もいた。

『おお・・・！！』

『ああ、アイツ確か、木下優子の・・・』

木下優子。あいつはAクラスだ。俺たち二人と違って無駄に頭がいい。

戦国武将好きというところは気が合う。(別の方向性で)

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれてなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな！』

クラスの士気が確実に上がっていた。

「それに、吉井明久と伊藤正宗だっている」

・・・シン・・・

士気が一気に下がった。よりによって俺の名前をオチに使うとは明久はともかく。

「ちよつと雄二！ どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！ 全くそんな必要ないよね！」

「そつだぞ！ 『観察処分者』の明久はオチになると思っけどな！」

明久は落ち込んだ。すまん、裏切って。

「その肩書きも今言おうとしたところだ。要するに『バカ』の代名詞だ。」

その後明久と雄二が姫路に観察処分者の説明をした。（詳しくは原作を）

でもまあ、そんな感じで俺のほうに話題は「そして、伊藤正宗だが……」振ってきやがった。どんな紹介をする気だ？

「この眼帯男だ」

「それはさつき自己紹介したぞ」

「『伊達政宗の子孫』とかほざいたり、トラウマを引きずりやすかつたりする、要は過去のこと縛られてばかりの男だ！」

「それがどうした！　そして余計なお世話だ！」

こいつは俺の恥をさらしたいだけなのか！？

「これはマイナス方向の特徴だったな。注目すべきはこいつの学力！　こいつの成績はある二教科はA・Bクラス並、そのほかは明久レベル、それだけだ！」

「驚くほど微妙な紹介したな！」

「平均するとお前らと変わらん！」

「だから何でそんな説明をするんだ！」

「と、いうわけで明久、Dクラスに宣戦布告して来い」

「無視するなあー！」

明久は渋々Dクラスに向かったが、俺は反論を続けようとした。

「まあ落ち着くのじゃ。何かに秀でるのは平均人間よりもいいと思うのじゃ」

「そうよ。ウチなんて数学はBクラス並なのに説明されなかったんだから」

説明されるのは名誉なのか？　俺は不名誉だったぞ。

「そうなんだっけな。ちなみに古典は？」

「一桁よ」

言い切ったな。流石（？）帰国子女。

「騙されたあつ！」

ボロボロの明久が戻ってきた。

起こることを警戒しても騙されるとは、流石（？）観察処分者だ。

第五話（後書き）

優子は歴女設定も入れてます。

この章は二回分けていけそうです。

第六話（前書き）

テスト終わりました。

これからはしばらく1日1話いけたらなと思います。

第六話

第六問

問 以下の英文を日本語にきなさい

『 I enjoyed playing soccer. 』

姫路瑞樹・伊藤正宗の答え

『 『私はサッカーをするのを楽しんだ』』 』

教師のコメント

正解です。伊藤君が今回はルー語を使わなくてよかったです。

土屋康太の答え

『 Iはplaying soccerをenjoyedした』

教師のコメント

今度は君がやりましたか。そこまで出ているのなら後はできるはず
です。

吉井明久の答え

『 あい えんじょいど ぶれいんぐ さつカー』

教師のコメント

確かに日本語にしろとはありますが・・・。

中学レベルの問題なので土屋君もきっちり答えましょう。

ボロボロの明久に向けて、雄二は言い放った。

「やはりそうきたか」

平然と言った。そういうやつだったな。

「やはりって何だよ、使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「それ位予想できないで、代表が務まる訳ないだろ」

「少しは悪びれるよ！！」

それは絶対ないな。一年間で学んだはずだ。

「吉井君、大丈夫ですか？」

姫路が明久に駆け寄った。明久はうれしそうにしていた。

「吉井、本当に大丈夫？」

負けじと島田が駆け寄った。こういうのは珍しいな。

「平気だよ、心配してくれてありがとう」

「そう、良かった……。ウチが殴る余地は、まだあるんだ……」

「ああっ！ もうダメ！ 死にそう！」

ああ、島田もそういう奴だった……。ツンデレの反対、デレツン？

「そんなことより、今からミーティング行こうぞ」

そんなことで、一同は購買へ向かった。ムッツリーニは頬をさすりながら歩いていったが、まだ隠せるつもりらしい。

移動中、明久・島田・ムッツリーニが何か会話していた。いろいろ聞いていたが、ムッツリーニがドイツ語を知っていたことにびっくりした。しかもその意味が……。よく性格に出ているなと思った。

「明久、今日くらいはまともな飯食えよ？」

雄二が明久に告げた。明久の食事はまともじゃないんだよな。

「そう思うのなら、パンでもおごってくれと嬉しいな」

それくらいはいくらなんでも何とかならないか？

「吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

まあ姫路が事情を知るわけがない。

「いや、一応食べてるよ？」

「お前の主食は水と塩だろ？」

「砂糖だつて食べてるよ！」

いや、大して変わらんのだろ。

「あの、吉井君。水と塩と砂糖つて食べるつて言いませんよ……」

「舐める、が表現として正解じゃろうな」

「いや、それもそうだが、それ以前に食生活を改めるように言つてやれよ」

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

それだけじゃなくて、8割は無駄に使っているのだろ。

趣味にかける思いは分らんでもないが。

「……あの、良かったら私がお弁当作つて来ましようか？」
「え？」

明久、発音がおかしいぞ。言葉では説明しにくい「え」だったな。
「本当にいいの？ 僕、塩と砂糖以外のものを食べるのなんて久しぶりだよ！」

「はい。明日のお昼で良ければ」

「良かったじゃないか明久。夢にまでみた手作り弁当だぞ？」

「うん！」

喜びが素直すぎるな。まあそれだけうれしだろうな。

「……ふーん。瑞希つて随分優しいんだね。吉井にだけ作つてくるなんて」

島田は面白くなさそうだな。この二人はライバル確定だ。

「よし、じゃあ今日のところは俺がおごつてやるよ」

これで47回目になるが。

「いいの！？ ありがとう！」

「ああ、前どおり、パン粉でいいな」
「うん、全然いいよ！」

『パン粉 100g 20円』

「………そんなのあったんだ（ですか）！」「……」

「ジャムはタダだったよね」

「ああ、どんどんかけるといい」

明久はここぞとばかりにたくさんかけていった。

いやー、全然出費に困らない額だからいい。

そして、屋上で打倒Dクラスの作戦を聞いた。思っていたより単純なものだった。

第六話（後書き）

普通はパン粉なんて購買にはおいてないだろうけれど、
文月学園ならありかなと思って書いてみました。

次回から戦争です。『アイツ』が登場します。

第七話（前書き）

今回から戦争です。

試召戦争は明久目線のほうがやりやすいかなと判断しました。

第七話

第七問

問 以下の問いに答えなさい

(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を1つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、 $?$ の中から選びなさい

? $\sin A + \cos B$? $\sin A - \cos B$? $\sin A \cos B$
O S B ? $\sin A \cos B + \cos A \sin B$

姫路瑞希の答え

- (1) $X = \frac{\pi}{6}$
(2) ?

教師のコメント

そうですね。角度を『 $^\circ$ 』ではなく『 $^\circ$ 』で書いてありますし、完璧です

土屋康太の答え

- (1) $X = \text{およそ } 3$

教師のコメント

およそをつけてごまかしたい気持ちもわかりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

(2) およそ？

教師のコメント

先生は今までたくさんの生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

伊藤正宗の答え

(2) ？か？か？

教師のコメント

「下手な鉄砲数撃てば当たる」作戦でも当たらなかったのは君が初めてです。

side 明久

「行くぞ小十郎！」

「いや、明久だけど！？」

「背中は任せるぜ！」

「う、うん」

あのモードが出ると、すっかり人が変わっちゃうんだよな・・・

『Fクラス 伊藤正宗 英語 252点』

『な、なんだよあの点数は！』

『本当にFクラスなのか？』

『Dクラスでかなう奴がいるわけないぞ！』

弱音を吐くDクラスが怯えながら召喚獣に構えさせる。

それを正宗の召喚獣がバツバツサと斬っていく。

「時間のムダだぜ」

うん、本物の伊達政宗だ。戦国BASARAの。

『正宗』が『伊達政宗』になったのは、少し時間を遡る……

『出陣—————!』

そんな掛け声とともにほら貝のような音が聞こえたような気がした。

とりあえず序盤はかなり劣勢だった。

島田さんのヤバイスイッチに触れそうだったり、

島田さんがDクラスの女子と危ないことになりそうだったり、

島田さんがなんとか助かったけれどすごく怒っていたりした。

このあたりと試召戦争のルールは省略します。(忘れた人は原作で)

「待たせたな」

正宗が来た。なんか張り切ってるな。

「今ちよつとピンチだけど、やってくれる?」

「ああ、なんか『アイツ』が、騒いでいるんだ……」

「そうなんだ……。じゃ、頼むよ!」

「OK, Are you Ready? 試獣召喚!」

その掛け声とともに、正宗の召喚獣が現れた。
その容姿は・・・大きな三日月がついている兜、青い服、そして
眼帯だった。

「つて、これ伊達政宗そのものじゃないか！」

「ああ、なに言ってるやがる小十郎、俺以外に独眼竜がいるっての
か？」

あ、そうだった。あと、明久なんだけど・・・

「行くぞ小十郎！」

「いや、明久だけど！？」

「背中任せるぜ！」

「う、うん」

というかんじで、『正宗』は戦いのことになると、『伊達政宗』
になってしまふんだ。

なぜか戦国BASARAの伊達政宗に。

そしてなぜだか僕のことを片倉小十郎だと思ってるし・・・。

まあいいや・・・ちょっと乗ってあげようかな。

「あなたの背中を守る・・・存分になされよ」

これもBASARAの引用だけど、どう思うかな？

「小十郎、声がおかしいぜ？」

精一杯やったけどこれが限界です。

「声まねなら、秀吉にやらせれば・・・」

「はあ、誰が豊臣なんざに頼るか！」

いや、そうじゃなくて・・・あっちからすれば正論なんだけど・・・

「・・・失礼。しかし政宗様」

「なんだ？」

「一人も戦死してないのですが・・・」

「そうか？ とにかく進むぞ！ あとは援軍に任せるぜ」
それならいいんだけど。

ところで、『政宗』が召喚獣操れているけどなんでだろう？

なんかそれなりにうまいし、すごい感情移入もしてるし・・・。

詳しいことはあとで『正宗』に聞いてみるか。

「つて、おつと！」

考えてる際に、政宗の背後を狙う人がいた。なんとかとめられてよかった。

「小十郎、thank you！」

だから明久なんだけど。

「HELL DRAGON！《ヘルドラゴン》 ya！」

おお、なんか電気飛ばした！ 『腕輪』以外でこんなの出せるときもあるんだな！。

「やれやれ、おとなしく斬られてくれよ」

Dクラスの教室には入れた。

「ふう、やっぱり来たか、伊藤君」

妙にBクラス代表・平賀君は余裕そうだった。

一対一で進むとどんな点数であってもたまにうけるダメージもあるだろうけど、政宗はとにかく一点突破してたな。だから一回斬る程度にしたのか。

でも逆に言うと、あまりたくさんで囲まれると・・・

「出て来い！ 伏兵部隊！」

すると掃除ロッカーやストーブ入れ、更には黒板が倒れた奥から合計約十人のDクラス生徒が出てきた。

しまった！　いくらなんでも2対10はきついんじゃないか？

「いいじゃねえか、派手な戦になってきたぜ！」

「そんな余裕ではありませんよ」

派手かもしれないけど、かなりピンチだ。

「全員、伊藤君からやってしまえ！」

まずい！　政宗が狙われてる！　援護しないと。

「小十郎。いや、明久。お前は戻れ」

ん？　明久？　さっきまでは小十郎だったのに。

「ここはオレ一人で充分だ」

「政宗様。いや、マサムネはどうするの？」

「せいぜい数を減らすようにしておく」

「それで大丈夫なの？」

「いいから行け！　それが元からの作戦だったたる！」

「わ、分かった！」

僕はDクラスをあとにした。

『吉井を追撃しろ！』

『させるかっ！』

『グッ！　止められたか』

僕はFクラスに戻っていった。

さあ、真・切札の出番だ！

「雄二！　道は開いたよ！」

「よし、今だ姫路！ Dクラスまでの道は開けた！」

「はい！」

「他のみんなも姫路を全力で援護しろ！」

『『『おおー！』『』』』

廊下を見ると、なんだかすごい光景だった。

廊下をまっすぐ走る姫路さん。その周りを囲むFクラスの男子。

一見危ない絵にも見えるが、すこしでも姫路さんを消耗させないためである。

相手の召喚獣も、僕と政宗が弱らせておいたから簡単に倒せているはずだ。

Dクラスに到着。政宗が中で一人で混戦中だった。

「やっときたな」

政宗の召喚獣は何太刀か傷があったが、かろうじて生きていたようだ。

「そ、そんな……。なぜ姫路さんがFクラスに……。

普通は誰も思わない。

「いきます！ 試獣召喚！」

『Fクラス 姫路瑞希 現代国語 339点』

VS

『Dクラス 平賀源二 現代国語 129点』

「え？ あ、あれ？」

「じ、じめんなさい！」

こうして、Dクラス代表を下し、Fクラスの勝利となった。

第七話（後書き）

このDクラス戦、書きながら内容を決めていたら最終的に

原作一巻Dクラス戦 + アニメ版Dクラス戦 - 船越先生の件

って感じになってしまいました。ちょっと無理矢理感がある気がしました。

第八話（前書き）

正宗が『伊達政宗』状態になったら、明久目線にします。

第八話

第八問

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であつて、（ ）（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

伊藤政宗の答え

『水を通して助けを呼べるもの』

教師のコメント

光ファイバーのことでしょうか。あと探偵学園Qですね。今分かる人はあまりいないかと。

「Shit! 今回は楽な戦だったぜ……おい小十郎! 勝鬨をあげるオ!」

だから明久だつてば。それと僕じゃなくて勝手にやってくれるから。

Dクラス代表 平賀源二 討死

『うおおーっ!』

勝ち鬨があがり、皆が歓喜している。

「凄えよ! 本当にDクラスに勝てるなんて!」

「これで畳や卓袱台ともおさらばだな!」

「ああ。アレはDクラスの連中の物になるからな!」

「坂本雄二サマサマだな!」

「姫路さん愛してます!」

誰なんだろうか。姫路さんへのラブコールを送る人は。

「……っと、調子にのりすぎたか?」

「お、おっと……」

正宗が倒れそうになっていた。それを僕が受け止めた。

「大丈夫、正宗？」

「あ……ああ、気にすんな。ちょっと疲れただけだ。まったく、勝手に出てくるくせに体の負担がでかすぎるぞ」

一応正宗は『伊達政宗』が出てきてしまっことを知っている。あつちはあんまり意識してないみたいだけど。

「そういえば、あつちの『政宗』は妙に召喚獣の扱いに慣れてたんだけど、どうしてなの？」

少し疑問に思っていたことをたずねてみた。

「ああ。少しはな、俺の意識は残っているんだ。だから『ヤツ』は自分がやるべきことはしっかり知っている。ちなみに、そのときの記憶は俺のほうにも残っている」

「なるほど。つまり、召喚獣の操作は正宗がやってたってこと？」

「半分正解だ。操作技術は俺のものだが、実際に動いてるのは『ヤツ』指示しているからだ。だが、『ヤツ』が出てきても基本的には俺の身体能力を使っているからな」

そういえば、正宗は召喚獣の扱いが僕並にうまかったんだっけ。

政宗曰く、『ゲームで鍛えてるからかな。その要領でできる』のだそう。

side 正宗

「じゃあ、さつき僕のことを『小十郎』じゃなくて、『明久』って呼んだことがあったけど……？」

「あれは俺の意思が介入したからだ。たまに介入できることもある。少なくとも俺は明久を『小十郎』なんて呼ばねえぞ」

片倉小十郎はもつと頭がいいからな。

「それは、明久が片倉小十郎の真逆の頭を持つからか？」

誰だ！？ 核心をついてくる奴は！？

「あ、雄二。戦後対談は？」

「今終わったところだ。『Dクラスの設備には手をつけない』と言つといたぞ」

「え？　なんでそうするの？」

「目標はあくまでAクラスだからな」

「じゃあ、最初からそうすればいいじゃないか」

「その疑問は宣戦布告のときに気づけ。だからお前は近所の中学生に『バカなお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだぞ」

なんてことを言っただけ。少し間違っている。

「違うぞ雄二。中学生じゃなくて小学生だ」

「・・・人違いです」

「まさか・・・本当に・・・言われているのか？」

俺は現場を目撃したことがある。これ以上は明久の名誉で黙っておこう。

「酷いよ正宗・・・遠回しにバカといった上に、こんな半端にリアルな嘘をついて！」

「待て！　俺はバカにしたつもりはない！　それは自分の名前そのものがバカということにもなるぞ！　そして嘘ではなくリアルだ！」

ヤバイ！　関係性に亀裂が入りそうだ！

「・・・でも、パン粉に免じて我慢しておこう・・・」

それでいいのか？　100g20円？

まさか20円が友情をつなぎとめるとは思わなかった。

「いや、なんか俺のほうもごめんな」

「うん、食料のためなら仕方がない。『明久』が普通なんだから、なんにしても極力そっちで呼んでね」

「ああ、今度は本物のパンをおごってやるよ」

「ありがたき幸せ」

こうして、俺と明久の中は深まった。

「・・・なんだこの寸劇は・・・」
雄二が呆れたような、そして楽しそうな表情で見ている。

関係が崩れなくてほんとはよかった・・・。

第八話（後書き）

当初の設定が崩れそうな予感がしてきました。

改善点があったらぜひとも指摘して欲しいです。

第九話（前書き）

サブタイトル変更・内容修正しました。

第九話

第九問

問 次の文章について、後の問に答えなさい。

『 の多い生涯を送ってきました』

- (1) にあてはまる言葉を漢字一文字で答えなさい。
- (2) 何という文学作品の言葉ですか。
- (3) (2) の作品の著者を答えなさい。

姫路瑞希の答え

- (1) 恥
- (2) 人間失格
- (3) 太宰治

教師のコメント

はい、すべて正解です。

伊藤正宗の答え

- (1) 戦いくさ
- (2) ?
- (3) 伊達政宗

教師のコメント

君は本当に伊達政宗が好きなんですね。本はなかったようですね。

土屋康太の答え

(1) 性

吉井明久の答え

(1) 獄

教師のコメント

君たちはもう少しで人間失格ですよ。

Dクラス戦の翌日、明久が島田にボコされていた。

姫路は妙に機嫌が良さそうだ。明久は昨日姫路と何かあったらしいがそれが原因なのかな？

とりあえず今日は補充試験だ。昨日はギリギリまで消費したからな。

「うあー……ぶがれだー」

明久が机に突っ伏す。

無事補充試験が終わった。前の点数より過ごし上がったぞ。

「うむ。疲れたのう」

いつのまにか秀吉もいた。何で今日はポニーテールなんだ？ 女顔で悩んでいるくせにますます女みたいだぞ。

「なんか言っただかのう、正宗？」

「いや、なんにも」

「……(コクコク)」

ムツッリーニもいた。やっぱりかわいらしいと思っているらしい。

「よし、昼飯でも食いに行くぞ！今日はラーメンとかつ丼とカレーと炒飯にすっかな？」

「どうやったらそんなに入るのだろうか？」

「あつ、じゃあウチも一緒にいい？」

雄二の言葉に、島田が駆け寄った。

「いいよ。それじゃ僕は、贅沢にソルトウォーターでも」

「いやいや、パンをおごる約束だっただろ」

「そうだったね。じゃあお言葉に甘えて・・・」

「学食ならもつと別のもでもいいぞ」

「あつ、あの、皆さん？」

「うん？あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

「いえ、あの、昨日の約束の・・・」

「おお、もしか弁当かの？」

「は、はい。迷惑じゃなかったらどうぞ！」

これはありがたい。明久におごるとか言いつつ、実は娯楽費のために節約したかったところだからな。

「迷惑なもんか。ねっ、雄二！」

「ああつ、そうだな。ありがたい」

「そうですか？良かった〜」

ほにやつと嬉しそうに笑う姫路。料理好きを明久にアピールしたいんだろうな。

「むーっ、瑞希って意外と積極的なのね」

それに対し、明久を睨んでいる島田がいる。

「まあまあ、今度明久に作ってきてやればいいだろ」

「べ、別に誰がこんなやつに！」

『べ、別に』なんて使うヤツは現実ではなかない。だから荒っぽい感じで不人気だ。しかしその反面、『ツンデレ』とみれば惚れてしまうような奴もいるんだろうな。

俺はその現実での希少価値から少し気に入っていたりする。

……話を戻そう。

「どうしたのじゃ正宗。顔を赤らめつつ、すこし後悔した顔をして

「い、いや。なんでもない。それよりも、弁当もらおうぜ」

「そうじゃの。屋上でも行くのはどうじゃ？」

「そうだな。この教室ではちょっとあれだしな。先行っててくれ。飲み物買ってくるから。」

「珍しいね。雄二が自らパシリに行くなんて」

「ああ、昨日はみんな頑張ってくれたかその礼も兼ねてな」

「あつ、それならウチも行く。1人じゃ持ち切れないでしょ？」

「しょうがない。俺もついてやるよ」

「悪いな、二人とも。じゃ、他のみんなは先行っててくれ」

「了解。早めにね」

そして俺、雄二、島田の三人で飲み物を買いに向かった。

『なんか最近雄二と正宗、仲いいよね。前はすごく仲が悪かったの
に』

『確かにそうじゃな。犬猿の仲じゃったのに』

『……前はゾ とサ ジのようだった』

『でも、吉井君と坂本君も同じようなものですよ』

『????????』

『言われてみればそうかもしれんのう』

『……的を射ている』

第九話（後書き）

最後の最後にムツツリーニのワ
ピースネタでした。

第拾話（前書き）

歴史上の伊達政宗の趣味は料理だったらしいですよ。

今回はあのお弁当の話なので料理の問題を出しました。

第拾話

第十問

料理の『さしすせそ』をそれぞれ答えなさい。

伊藤正宗・吉井明久・坂本雄二・土屋康太の答え

『さ：砂糖

し：塩

す：酢

せ：醤油

そ：味噌』

教師のコメント

正解です。君たちが正解するとは正直意外でした。

木下秀吉の答え

『さ：砂糖

し：塩

す：酢

せ：醤油

そ：ソース』

教師のコメント

惜しいです。『そ』はソースではないのです。

割とありがちな間違いなのでよく覚えましょう。

姫路瑞希の答え

『さ：酢酸

し：硝酸カリウム

す：水銀

せ：青酸カリ

そ：ソーダ石灰』

教師のコメント

『調味料ですらありません』というツツコミ以前に恐怖をおぼえてしまいました。

俺・雄二・島田の三人で飲み物を買いに行った。

「しかし、島田も大変だな」

落ちてきたお茶をとりながら雄二が言った。

「え？」

「気の利く恋敵ライバルがいるとさ」

「なッ!？」

「やっぱりか。明久あいつは幸せ者だな。」

「ちょッちよつと!! からかわないでよッ!」

「フフッ、否定はしないんだな」

俺も軽くからかってみた。

「ウチだってやるときはやるんだから・・・」

そのやるときってのはいつになるだろうか。

「でもまあ頑張れ。お前は姫路には負けてない」

「そ、そうなのかしら・・・」

「ああ、俺は島田を応援しよう。どっちが勝つかはともかくな」

「ありがとう。じゃ、早く行きましょ」

「そうだな、行くか」

屋上に向かおうとしたそのとき

「正宗」

「あ、優子。どうかしたか？」

「こんなところで会うとは珍しい。」

「ちよっと話があるんだけどいいかしら？」

「おお、分かった。雄二、島田、先に行行っててくれ」

「分かった。それも持ってっておこう」

「ああ、頼むぞ。俺の分の弁当も残しとけよ」

俺が持っていた飲み物を渡しておいた。

「あえて平らげてやるっ」

本当にやってしまったらどう処刑しようかと考えながら見送っておいた。

「で、昨日はDクラスに試召戦争を仕掛けたんだって？」

「ああ、そうだが？」

それくらいは知れ渡っているはずだ。

「で、勝ったのに設備を入れ替えなかったらしいけどどうしてなの？」

「うーん、やっぱそこは気になるんだろうな。」

「俺だって詳しく聞いてないが、こっちはこっちの考えがあるんだ」

とりあえずごまかしたつもりだ。

「まさか、そのなんらかを利用してAクラスを乗っ取るうとか企んでたりする？」

正直言つとそうだ。だが正直に言うわけにはいかない。

「黙秘する。まだ試召戦争はする、とだけ言っておこう」

「・・・そっか。じゃあ、また今度」

と言つて去つていった。が、その帰り際に、

『ゲームばっかしないで、ちゃんと平均的に勉強しなさいよ！』

・・・まったく、昔と変わんねえな。

そういえば、優子は一番最初に会ったときからは俺のことを一番嫌っていたんだよな。

それでもって、『あの』出来事から接し方が180度変わったんだった。

感謝の意味からなんだろうけど、それだけではないような何かがある。

女子の心情はよく分からん。

さて、弁当よりも随分時間を食った。(あ、ちょっとうまいかな?)

早く行かないとなくなっているかもしれん。

二段飛ばしで階段を駆け上がり、屋上の扉を開けた。

「・・・・・・・・なにがあつたんだ・・・・」

箇条書きにするとこんな感じだ。

・にこやかと笑っている姫路。(かわいらしい)

・島田がいない。(これはそれほど異常でもない)

・雄二とムツツリーニが死んでいる。(異常)

・明久と秀吉の顔が苦笑い。(体が震えている)

「・・・・・・・・なにがあつたんだ・・・・?」

つい二回言ってしまった。

第拾話（後書き）

あんまり弁当の話できなかったです。

次回もう少し弁当話やります。少々短い話になるかと。

第拾巻話（前書き）

弁当の話、続きです。

前回と同じく、一応料理の問題です。

第拾壹話

第十一問

問 『赤味噌と白味噌をブレンドした味噌のことを何と呼ぶか』

伊藤正宗の答え

『合わせ味噌』

教師のコメント

正解です。一番よく使いますね。

木下秀吉の答え

『ピンク味噌』

教師のコメント

絵の具ではありませんよ。

吉井明久の答え

『脳味噌』

教師のコメント

君はその『味噌』が足りてないようですね。

(・・・)で、とりあえずなにがあったんだ？

俺たちは小声で話している。

(うん、実はね・・・)

姫路の料理は毒だと知った(詳しくは原作で)。

「う、うう。お、正宗、来てたのか。」

あ、雄二が生き返った。

「よかったよ雄二。まだ生きてたね」

正直ちょっと残念な感じだ。

「正宗、食ってみる。天国に逝きそうなほどうまいぞ」

『逝く』って、字が違うだろ。

『残念だな。話はすべて知っている』

アイコンタクトで返した。

「遠慮するな。食べ！」

「伊藤君。どうぞ食べてください」

げ、作った本人に言われたら断れない・・・

「ってよくみたら、もう弁当ないじゃないか」

「ああ、そうだね。雄二が全部食べちゃったんだ」

「そうか、それは良か・・・残念だな」

娯楽費を浮かしたかったが、命より軽い。

「大丈夫ですよ。実はもう一段ありますから」

そういつて重箱を持ち上げると一番下の段の全く手をつけられない食べ物があった。

「ああっ！姫路さんアレはなんだ!？」

「明久！次は俺でもきつと死ぬ！」

なるほど。そうやって雄二に食べさせたのか。いや、口に押し込んだのか？

「よかつたじゃないか正宗。さあ、食ってみる」

「いや、実は俺、『女子の手料理を食べると死んでしまう病』で・・・」

本当にリアルに死にそうだからワン　ースのパクリしてる場合じゃないんだが、今俺の頭はそれくらいパニックだ！

「いいから食ってみろお!!」

「ぎゃー……！」

無理矢理口に押し込まれた。

もういい、どうにでもなれ！ 意を決して咀嚼することにした。

「もぐもぐ、……ツツ！！……ああ、うまいぜー！」

親指を立ててgoodとしてやった。

姫路以外の三人はとても驚いた表情をしている。明久からのアイコンタクトが来た。

「な、なんで無事なの？」

『気合で踏みとどまった（現世に）』

『『『すげいな！』』』

正直これでも限界だ。

「それはよかったです」

よし、本心はバレテナイ……ようだな。

「ところで姫路、この料理は特殊な味付けでもしてるのか？」

それだけは聞いておかねば。

(そうだぞ！ 俺はもう霸王色のように気絶しそつなんだぞ！)

(この意気地なしっ！)

(そこまで言うならお前にやらせてやる！)

(そうだな！ おまえはまだ被害にあつてなさそつだ！)

(なっ！ 二人ともその構えは何！？ 僕をどうする気！？)

(拳をキサマの鳩尾に打ち込んだ後存分に詰め込んでくれる！ 齒を食いしばれ！)

(そして余つた分は雄二に食わせる！)

(なに！？ お前は味方じゃないのか！？)

(考えてみれば、俺に食わせたのは雄二、お前だつただろ！)

(上等だ！ まずはお前から殺つてやる！)

(望むところ！ 明久も加えた上でな！)

(ええっ！？ 僕も加わるの？)

((当然だ！))

こうして、無理矢理明久も巻き込んで三つ巴の戦いになろうとしたそのとき、

(・・・ワシがいこう)

(秀吉!? 無茶だよ、死んじゃうよ!)

(俺のことは率先して犠牲にしたよな!?)

(秀吉が大事なら、一番無被害な自分が行け!)

「どうかしましたか?」

「あ、いや、なんでもない」

もう相談時間もないな。

「あ、ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れて来ちゃいましたっ」

そういえば中身をよくみるとヨーグルトみたいな食べ物(?)だな。材料は不特定多数であるからして、間違いなく何かある。そして箸では食えない。

「取ってきますね」

よし、チャンスだな。

「秀吉、頼んだぞ」

「死んじゃダメだからね」

「恩に着る」

「・・・・・・・・・・・・・・・・無事に帰ってこい」

いつのまにか生き返ったムッツも応援していた。

「うむ。任せておけ。頂きます」

容器を傾け一気にかきこんだ。

「むぐむぐ。なんじゃ、意外と普通じゃとゴぼあっ！」

ああ、やらせるんじゃないな・・・

「・・・・・・・・雄二」

「・・・・・・・・なんだ？」

「・・・・・・・・さつきは無理矢理食べさせてごめん」

「・・・・・・・・わかってもらえたならいい。正宗もすまなかった」

「・・・・・・・・ああ、今後は気をつけよう」

「・・・・・・・・ずるなんてするもんじゃない」

死んだ秀吉が、俺たちに教訓を覚えてくれた。

その後、ずいぶん遅く来た島田も入れて、次の戦いの話をした。

次に挑むのはBクラスだ。そのためにDクラス戦が必要であって、次のBクラス戦が打倒Aクラスにつながる。

Bクラスの死者・・・じゃなくて使者は雄二の策略で明久になった。とても見事だったので、今度使ってみようかと思った。

明久の美男子度は、角度で表し、『5度』と定まった。

「・・・・・・・・言い訳を聞こうか」

午後のテスト終了。ボロボロな上にアフロにされていた。

「予想通りだ」

「くきいー！ 殺す！ 殺しきるーっ！」

「落ち着け」

「ぐふあっ！」

鳩尾を殴られてる。災難だな。だがあいつはあの弁当を食わなかったんだから仕方ない。何も食えなかった島田も含めてみんなの恨みは最高潮だった。

いろんな意味で、食べ物の恨みは大きい。

第拾壹話（後書き）

最後のほうは適当ですいません。

詳しくは原作を参照してください。

いつもこればかりですいません。

第拾弐話（前書き）

第拾話の優子の別れ際のセリフ、変更しました。

このまま読み進めても問題ありませんが、気になる方はどうぞ。

第拾弐話

第十二問

問 以下の問に答えなさい。

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント
簡単でしたかね

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント
君は化学を舐めていませんか

吉井明久の答え

『 $B \cdot E \cdot N \cdot Z \cdot E \cdot N$ 』

教師のコメント
後で土屋君と一緒に職員室に来るように

伊藤正宗の答え

『 $BeN \quad Zn$ 』

教師のコメント

なんとなく読めなくもないので少しびっくりしました。でも点はあげません。

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

本当に大変だったな。正直ダメな教科はほっとく主義だが精一杯やった。そんなに変わらんがな。

「午後はBクラス戦との試召戦争に突入する予定だが、殺る気は十分か？」

『おおーっ！』

士気はよし。モチベーションだけは負ける気がしない。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『おおーっ！』

「そこで、前線部隊は姫路に指揮を取ってもらおう。野郎共、きつちり死んで来い！」

「が、がんばります」

「それと正宗、お前は今回は一応教室で待機。戦線を抜けてきたBクラスを潰せ」

「了解した」

前回『政宗』の溜まっていた戦気は発散したあとだからか、今『

政宗』が出てくる気はしない。召喚しても俺の意識のままかもしれない。傷ついた敵からの防衛なら特に問題ないだろう。

「じゃあ他の野郎共、行ってこい！ 極力戦死はするな！」

『うおおーっ！』

side 明久

キーンコーンカーンコーン

さあ、Bクラス戦開始だ！

「いたぞ、Bクラスだ！」

「高橋先生を連れてくるぞ！」

人数はあまりいないな。とりあえず様子見つてところか？

「生かして帰すなーっ！」

「みんな、極力死なないように」

『Bクラス 野中長男 総合 1943点』

VS

『Fクラス 近藤吉宗 総合 764点』

あつというまに戦死者が出ってしまった。これは酷い点差だな。気がつくと、武藤君、君島君もやられてる。厳しいな。

「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

息を切らして姫路さんがやってきた。

「来たぞ！ 姫路瑞希だ！」

もう知れ渡ってるようだね。

今回の作戦は点差の関係もあるけれど、『姫路さんがFクラスである』という話が広まっているからこそその作戦でもある。少なくとも前と同じ戦法ではすぐに敗北しているだろう。

「姫路さん、来たばかりで悪いんだけど・・・」

「は、はい。行って、きます」

トタトタと歩く姫路さん。とてもかわいらしい。ムツツリーニがどこかで撮っていないだろうか。

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」

「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

あっちとしては早く潰したいんだろう。でも姫路さんなら大丈夫だろう。

「律子、私も手伝う！」

2対1！？ よっぽど警戒してるんだな。

『Fクラス 姫路瑞希 数学412点

VS

Bクラス 岩下律子&菊入真由美 数学189点&151点』

ん？ 姫路さんの召喚獣に腕輪がついてる・・・。

そしてBクラス女子コンビはあっけなくやられた。他の連中も体勢を立て直して、多対一の状態で何とか抵抗していた。

「み、みなさん、頑張ってください！」

指揮官らしくない指揮だが、姫路さんなら問題ない。

「やったるでえーッ！」

「姫路さん、サイコーッ！」

信者急増中。

第拾弐話（後書き）

今回少し短かったですね。

コメント下さった方々、ありがとうございます。

第拾参話（前書き）

今回のバカテスとはちょっと自信作です。

原作にはなかったタイプです。

皆さんはどっ思つか分かりませんが。

第拾参話

第十三問

問 以下の問いに答えなさい

『2008年9月、アメリカの投資銀行が破綻に追い込まれ、100年に一度と言われる金融危機へと発展した。破綻した投資銀行の名称を答えよ』

伊藤政宗・姫路瑞希の答え

『リーマンブラザーズ』

教師のコメント

正解です。2年以上前の話ですけどちゃんと覚えてましたね。

吉井明久・土屋康太の答え

『マリオブラザーズ』

教師のコメント

名前が似ていても間違いです。

伊藤政宗の答え (続き)

『とかけまして、マリオブラザーズととく。その心は、両者ともコインを集めるのが得意です』

教師のコメント

なるほど、座布団一枚! …いや、1点サービスしましょう。

戦況も落ち着いたところで、僕は秀吉と一旦教室へ戻ることにした。

「……うわ、こりゃ酷い」

「まさかこうくるとはのう」

「卑怯、だね」

穴だらけの卓袱台、

へシ折られたシャープや消しゴムなどただでさえ酷い設備が超マイナスのものとなっている。これが人為的でないものだというならなにが起こったんだ、と言う状態だ。

「酷いね。これじゃ補給がままならない」

「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

根本君は器が小さいんだな……

「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」

「雄二がそういうならいいけど。でも、なんで雄二は教室にいなかったの？ あと正宗も防衛してたんだよね？」

「協定を結びたいという申し出があつてな。調印の為に教室を離れたんだ」

「俺はその護衛。代表が出払った教室で防衛なんて意味ないだろ。だが、こんなことになるとは、不覚だった」

「それならあんまり気にしなくていいよ」

「ところで雄二よ。協定とは何じゃ？」

「ああ。四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午後九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。つてな」

「そう。姫路のこととかもいろいろあるからな」

「あ、なるほど」

あの作戦のこととかいろいろ考えるとこっちにも都合がいいのかわいさあ、なんでBクラスはそんな協定を申し込んだのだろう？

「明久。そろそろ前線に戻るぞい。向こうでも何かされてるかもしれない」

「よし。再度気を引き締めていこう！ 文具の手配よろしくね」

「任せておけ」

そして僕と秀吉は教室を出た。だがそのとき、

「Bクラス加賀屋寛！ Fクラス生徒A・Bに召喚勝負を申し込みます！」

Bクラス生徒が前線を抜けてFクラス前まで来たようだ。僕や政宗だって前の戦争では突破優先の戦いをしてきたから、他にやるような人がいても不思議ではない。

にしてもA・Bって、僕らまだそんなに有名じゃないのか、それとも名前をいちいち呼ぶのは面倒なのか。

「しょうがない！ 受けてたつ！」

「しょうがないのう。わしも手伝おう」

相手もわざわざ二対一で受けるとはそうとう強いのかもしれない。

「待て待て！ その勝負、俺が受け持つ！」

出てきたのは正宗だった。そして近くに福原先生もいる。確か、社会の先生だったはずだ。

「教科の指定はしてないよな。だったら日本史で勝負だ！」

確かにあつちは先生を連れていない。突破に集中するためにそこまで準備してなかったのかな。

「確かにな。だが、Fクラスには負けなさい！」

「やってみなきゃわからんぜ。かかってこい！」

正宗はただのFクラス生徒ではない。

「「^{サモン}試獣召喚！」」

日本史だけはAクラスに匹敵する！

『Fクラス 伊藤政宗 日本史 376点』

VS

Bクラス 加賀屋寛 日本史 197点』

「ぎゃああー!」

日本史は政宗の大得意科目。これも本人曰く、『日本史アクションゲームで覚えた』と言っていた。それだけじゃなくて、それをやったからこそいろいろ興味が出たんじゃないかな？

「いやーすごいね。相変わらずすごい点数だよ」

「おう、とりあえずこいつでこの戦いの俺の餌食3人目だ」

他にも二人いたのか。Bクラス代表はともかく、こんな正々堂々とした生徒もいたんだな。根本君は器が小さい上に人望もないのかもしれない。

「それじゃ、頑張つてこい」

「うん、そつちもしっかりね」

「任せておくのじゃ」

そうしてFクラスを後にした。

第拾参話（後書き）

やっぱりどうやっても、根元恭二は悪役で犠牲者のキャラです。

第拾四話（前書き）

今回のバカテストはFクラス総出です。

第拾四話

第十四問

問 次の日本語を英文にしなさい。

『このテストは難しすぎて、私にはとても解けない』

姫路瑞希・伊藤政宗の答え

『It's too hard for me to solve
this exam.』

教師のコメント

正解です。本当に難しいかもしれなかったですが、二人ともよくできました。

吉井明久・土屋康太の答え

『まったくそうですね』

教師のコメント

問題に同感しないでください。

その他のFクラス生徒達の答え

『Me too』

教師のコメント

みんなそろって開き直らないでください。

『雄二、俺は戦線に出ちゃダメなのか？』

『ああ、今はダメだったが、あと五分で今日は終了だから様子を見てくるくらいなら良いぞ。今はあっちも突破してくる気配もないしな。だが、戦線には参加するな』

『？ なんでだ？』

『いろいろあつてな。終了までには必ず戻ってこい』

そういえば、今回正宗は『政宗』状態じゃなかったな。正宗は『本人のノリ次第』とも言っていたから、今は気分が乗ってないのかな。

「吉井！ 戻ってきたか！」

出迎えてくれたのは須川君だった。島田さんはどこに？

「待たせたね！ 戦況は？」

「かなりまずい。島田が人質にとられた」

「な！？ 人質！？」

卑怯の王道じゃないか！

「敵はあと二人なのに手が出せなくて睨み合いの状態になっている。まずいな。明らかに作戦に支障が出てしまう。」

「よし、とりあえず救出に向かおうか」

「分かった。前へ向かえ。そこで塞がれている」

人垣を抜けて島田さんのところに来た。勝負を申し込んでくる人もいたが、部隊員に足止めしておいてもらった。

「島田さん！」

「よ、吉井！」

なんかドラマみたいな展開だな。

「そこで生まれ！ それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」

む、立会いは鉄人だ。こんな距離じゃ、この場の戦死者は逃げる隙もない。というか、人質を黙認して良いのか？

俺は今、どこにいると思う？ 答えは天井だ。

『独眼流隠密術』を使って移動して、どこか楽しそうなところを傍観しようと思ってここに来た。楽しい所じゃなさそうだが。

それはそうと、救出は手伝ったほうが良いか？ どっちにしるまだ誰にもばれていないから絶好のチャンスではあるのだが。

お、明久がなんか言おうとしてるな。任せてみるか。

「総員突撃用意いーっ！」

それでいいのかー！？

「？」

おっと、Bクラスの一人が周りを見回している。だが上は見えてないようだ。

あれ、なんか鉄人がこつちを見てたような・・・

「ま、待て、吉井！」

おっと、何かあるのか？

「コイツがどうして俺達に捕まったと思ってる？」

「馬鹿だから」

「殺すわよ」

明久、お前が言える言葉じゃない。

「コイツ、お前が怪我したって偽情報を流したら、部隊を離れて一人で保健室に向かったんだよ」

なるほど。いつものキャラと違ういいところもあるんだな。とい
うかぶっちゃけこれが『デレ』というやつだな。

「島田さん……」

「な、なによ」

島田、顔が赤くなってるな。どんな答えを期待してるのかな？

「怪我した僕に止めを刺しに行くなんて、アンタは鬼か！」

……あいつは本当にバカだ。

「違うわよ！ ウチがアンタの様子を見に行っちゃ悪いっての！？」

「これでも心配したんだからね！」

爆弾発言だな。もう半分は告白に近いな。

「島田さん。それ、本当？」

「そ、そうよ。悪い？」

流石に気づくだろうな。島田のいろんな気持ちに。

「へっ。やっとわかったか。それじゃ、おとなしく」

「総員突撃いっつ！」

「どうしてよっ！？」

……やっちゃまったな。しかし、試召戦争を
考えるとやむをえなくもな行動なんだが……

「あの島田さんは偽物だ！ 変装している敵だぞ！」

とんでもねえ理由だな！

「おい待って！ コイツ本当に本物の島田だって！」

「黙れ！ 見破られた作戦に固執するなんて見苦しいぞ！」

「だから本当に！」

『Bクラス 鈴木二郎 英語W 33点

VS

Fクラス	田中明	英語W	65点
『Bクラス	吉田卓夫	英語W	18点
	VS		
Fクラス	須川亮	英語W	59点
			』

なんだ、点数はたいしたことなかったな。

「戦死者は補習！」

「ぎゃあああー……」

「たすけてえー……」

倒された二人は鉄人に引つ張られていく。

……！ やべ、目が合った！ 見つかつちまった！

だが、何事もなかったかのように補習室に向かつてくれた。

いやー、なんかいろんな意味でよかった。危うく痛い目で見られるとかの余計な恥をかかずにすみそうだ。

「皆、気をつける！ 変装を解いて襲い掛かってくるぞ！」

まだ気づかぬえか。もし本物だったらを考えてないな。

「よ、吉井酷い……ウチ、本当に心配したのに……」

「まだ白々しい演技を続けるか！この大根役者め！」

「本当だよ！ 本当に心配したんだから！」

「取り囲むんだ。いくらBクラスでもこの人数なら勝てるから」

仕方ない。小声で忠告しといてやるか。

（明久、ここから先は死を覚悟しろ）

「？」

天井を見てきた。だがもうすでに俺は別の場所にいる。

「本当に、『瑞希のパンツ見て鼻血が止まらなくなった』って聞いて心配したんだからね！」

「包囲中止！コレ本物の島田さんだ！」

そんなことがあったのか。騙されるほうも騙されるほうだ。

明久、残念ながら手遅れだ。他のみんなは気を利かしてその場を

離れている。俺ももう立ち去ろう。

「島田さん、大丈夫だった？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

今更そのやさしさをしてもだめだ。

「無事で良かったよ。心配したんだからね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

嘘だってバレバレだ。

「教室に戻って休憩するといいよ。疲れているでしょう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

極力機嫌をとろうとしても無駄だ。

「それにしても卑怯な連中だね。人として恥ずかしくないのかな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

お前が言えたことじゃない。

「あー、島田さん。実はね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

島田はやつと口を開いたな。明久はどんな言い訳をする？

「僕、本物の島田さんだつて最初から気づいていたんだよ？」

戦争中断1分前、あいつら二人しかいない廊下で殴ったり蹴ったり

潰したり折ったりぐったり・・・etc という擬音がこだました。
仲介に入ってもいいのだが、俺は戻らねばならないので見捨ててい
くことにした。

明久、ご愁傷様。来世はなにに生まれ変わるだろうな。

第拾四話（後書き）

独眼流隠密術は歴史上にもまったくありません。オリジナルです。
いつか説明は・・・するべきかな？

第拾伍話（前書き）

今回のバカテストはある番組でやっていたものです。

分かる人もいると思いますが、すごくよくできた問題だと思ったので早速載せてみたいなと思いました。ろくな珍回答が思いつきません。

第拾伍話

第十五問

問 以下の問いに答えなさい。

『水槽の中に200匹の魚がいます。そのうち99%はグッピーです。』

このグッピーの割合を98%にするには何匹のグッピーを取り除けば良いですか?』

霧島翔子・姫路瑞希の答え

『100匹』

教師のコメント

正解です。簡単に解説しますと、

まずグッピーの数は、

$200 \times 0.99 = 198$ (匹) となります。

するとそのほかの魚は

$200 - 198 = 2$ (匹) となります。

他の魚を2匹のままでグッピーを98%にするには

そのままグッピーも98匹にすれば良いので

取り除くグッピーの数は100匹となります。

とある有名な会社の入社試験でしたが、大変よくできました。

伊藤正宗の答え

『グッピーではなく金魚のほう分かりやすいと思います』

教師のコメント

そういう意見は答えを書いてからにして下さい。

土屋康太の答え

『他の魚とは何ですか？』

教師のコメント

そこはどうでもいいです。

吉井明久の答え

『そもそもグッピーとは何ですか？』

教師のコメント

三人とも後で職員室に来るように。

「……………ここはどこ？」

明久が目覚めたようだ。

今はとりあえず休戦中。今日の戦果をまとめていた。

「あ、気がつきましたか？」

幸い生きてたようなのでよかった。千の風にもなることなく。

「まったく、少しは言葉を選んでたら最低限ですんだかもしれない

のに」

島田は返り血を洗いに行ったらしい。大変だと思いが、そもそも殴ったりしなければよかったのに。

「？ なんじゃ？ 明久になにがあったのか知っておるのか？」

「島田を怒らせて殴られ蹴られ潰され折られ、廊下に倒れていたんだ」

「なんだか、見ていたかのような言い方だね・・・」

おっと、隠れて傍観していたことがばれるのはいろいろとまずい。ま、まあなんとなく想像はついた。それよりムツツリー二、何か情報は？」

「・・・（コクリ）」

あまり大声では言えないようなので、耳を傾けて聞いた。明久たちはさっきのことをまだ考えている。

「Cクラスの様子が怪しい？」

まさかBかFの勝利組に仕掛けるつもりか？

「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

「だが、それもまた戦争。その考えだって正当でもある」

「雄二、どうするの？」

「んー、そうだなー」

時計を見て考えている。現在四時半。

「Cクラスと協定を結ぶか。Dクラスを攻め込ませるぞと、とか言っただけじゃ俺達に攻め込む気もなくなるだろ」

妥当だな。特にイレギュラーなことでもなければそれで終わるだろう。

「それに僕らが勝つとは思ってもいないだろうしね」

他クラスからすれば当然の考えだが、当事者としては自虐的だな。

「よし。それじゃ今から行ってくるか」

「そうだね」

「秀吉は念のためここに残ってくれ。あと、正宗は帰っていい」

「ん？ なんじゃ？ ワシは行かなくて良いのか？」

「俺を帰らせるとはどういうことだ？」

「秀吉の顔を見せると、万が一の場合にやろうとしている作戦に支障があるんでな。あと、正宗は今日は疲れただろうからな、今日はもう休め」

そういつて、俺の鞆になにかメモのようなものを入れた。

「よくわからんが、雄二がそう言うのであれば従おう」

「分かった。とりあえずお言葉に甘えよう」

一応帰り支度をするふりをした。

「じゃ、行こうか。ちよつと人数少なくて不安だけど」

俺はついて行ってもかまわないんだが、一応代表の厚意と考えに従おう。

そして明久たち4人でCクラスに向かった。

「で、雄二が正宗の鞆に何か入れておらんかったか？」

「まさか、たまたまそう見えただけだろ」

「わしの目は節穴ではないぞ」

「……そうか。一応見てみるか」

とりあえず俺だけでメモのようなものを読んでみた。

『帰るふりをしたら隠密術で俺たちの近くを見張って、こっそりフオローしてくれ』

……なるほどな。

実は、隠密術と言う便利な感じのスキルを俺が持っていたことは、雄二にだけばれたことがある。それ以来、よく利用されている。今日鉄人にばれた気がするが。

「なんて書いてあったのじゃ？」

「じゃあな！ 明日も頑張ろうぜ！」

「あ！ 待つのじゃ！ なんて書いてあったのじゃ！？？」

悪いが、独眼流隠密術は極力人に教えたくないんだ。秀吉なら全然いいんだが、時間もないのでまた今度にさせてもらおう。

「さあ、暗躍しようか！」

第拾伍話（後書き）

最後のセリフの元ネタ、わかりますかね？

正解は涼宮ハルヒちゃんの憂鬱4巻、古泉のセリフです。

第拾六話（前書き）

正宗が暗躍します。

なんかムツツリーと完全にかぶってますよね。

第拾六話

第十六問

問 次の英文を日本語に訳せ

『 John was born in 1940. 』

姫路瑞希・伊藤正宗の答え

『 ジョンは1940年に生まれた。 』

教師のコメント

正解です。簡単ですよ。

吉井明久の答え

『 ジョンの骨は1940本だった 』

教師のコメント

bornとbone(骨)を間違えないでください。多すぎです。

伊藤正宗の答え 続き

(この問題を作った先生はビートルズが好きだ)

教師のコメント

大当たりです。ジョン・レノンは1940年生まれです。

君もいろんなことを知ってますね。

さて、とりあえずCクラス天井裏まで向かったが、どうやら交渉は決裂したらしい。

なんとBクラス代表の根元恭二がいた。
とりあえず逃げていったみんなについていくことにした。

『逃がすな！ 坂本を討ち取れ！』

ヤバイな。何の準備もなくBクラスに敵うわけがない。

……こうなった時のために俺を準備してたんだな。
じゃあ、仕事はしっかりやろう。

『雄二！』

『なんだ明久！』

ん？ 明久が何か言っている。ちょっと様子を見よう。

『ここは僕が引き受ける！ 雄二は姫路さんをつれて逃げてくれ！』

おお！ 漫画でよくある展開だな！

『よ、吉井君、私のことは、気にしないで』

『……分かった。ここはお前に任せる』

そうだな。さすが雄二。感情に流されず的確な判断をしている。

『……（ピタッ）』

『いや、ムツツリー二も逃げて欲しい。多分明日の作戦はムツツリー二が戦争の鍵を握るから』

確かに明日の作戦はムツツリー二が不可欠だ。ここで失ってはいけない。

『んじゃ、ウチは残ってもいいのかしら。隊長どの？』

『……頼めるかな？』

『はいはい。お任せあれっと』

こうして、明久と島田が足止めすることになった。しかし、それでも数人、雄二たちを追っていつてしまったものもある。とりあえずそっちを何とかするか。

「さて、どうしようかな？」

とりあえず先回りして、今持っているもので打開策を練っていた。

- ・雄二のメモと一緒に入っていた煙幕
- ・なぜかそこから転がっていた消火器
- ・タバスコ
- ・ガスマスク
- ・睡眠薬

『何でそんなものがあるんだ？』とツッコミたいものもあるかもしれないが、そこは黙ってくれ。

「じゃあ、この四つを使おう」

『待ちやがれ！』

おっと、来たな。まずはこれに火をつけて……

「ん？ なんだ？ 煙が・・・」
「ゴホッ！ 前が見えない」

煙幕を床に転がした。よし、次は・・・

「ん？ 口に何か入ったぞ？」

「ブハッ！ 何じゃこりゃ！？ 辛ッ！」

ガスマスクで近づき、タバスコを飲ませた。煙があれば姿を見られることはない。

あとはこれを飲ませておこう。

「ソグッ！？ 今度は何か甘い匂いがする。なんだか眠く・・・」

「ZZZZZZZZ・・・」

睡眠薬。これを使えば「ZZZ」となるほど眠くなる。

よし、三人とも教室まで戻れたようだ。雄二にメールで報告しよう。

「お前らが逃げるのは援護しておいたぞ。」

それから一分もせず返信が来た。

「ご苦労。明久たちはどうなんだ？」

やべ。早く助けに行かないと。急いで戻ろう。

第拾六話（後書き）

暗躍編、次回に続きます。

第拾七話（前書き）

暗躍編、後半です。

一日休ませてもらいました。

第拾七話

第十七問

問 以下の問に答えなさい

『法隆寺は、柱の部分が少し膨らんだ形状をしている。西洋の神殿の柱にも似た、この建築方式を何というか？』

姫路瑞希・伊藤正宗の答え

『エントシス』

教師のコメント

正解です。この方式はギリシャのパルテノン神殿にも使われています。

土屋康太の答え

『イナバ』

教師のコメント

『100人乗っても大丈夫』とでも言いたいのですか？

確かに法隆寺は地震に強い設計でもありますが、世界遺産にもなっているのです。

実行はしないでください。

吉井明久の答え

『砂場』

教師のコメント

むしろ砂利のようになってます。

明久をすっかり忘れかけていて、大急ぎで、そして見つからないように戻ってみた。

するとなにやら、召喚獣で戦っていた。

『Bクラス 工藤信二 数学 159点

VS

Fクラス 島田美波 数学 171点』

おお、Bクラスに引けをとらない。本人曰く、『漢字が読めなくても何とか解ける』のだそうだ。逆に国語系は俺や明久よりも低いらしい。

続いて、明久のほうは・・・

『Bクラス 真田由香 数学 126点

VS

Fクラス 吉井明久 数学 51点』

圧倒的な差だな。だが、Bクラスの召喚獣は少しだけ体に傷がある。お得意の操作性能である程度対等に戦えてるようだ。

いや、だが更に二人召喚しようとしている。これはまずそうだな。よし、じゃあここで何か・・・

『吉井、違うわ。四対二じゃないわ』

おや？ 何かあるのか？ まさか援軍でも・・・

『ん？ 援軍でも来てくれたの？』

『五対一よ』

島田！ まさかの裏切りか！？

『島田さん、この状況で君は僕を裏切るって言うのかい？』

明久って嫌われ者だよな。だが、島田はお前のことが好きはずだ！

と、その隙に召喚獣がさらに二体追加されたようだ。しまった！何か手を打っておくべきだった！

だが意外、明久は三人がかりの攻撃を華麗にかわしていた。

『一撃あたれば倒せるのに・・・！！』

『全然当たる気がしねえ・・・』

『メタルス イムみたいなやつだな』

一度でも攻撃を当てれば倒せるような弱さなのに、なかなかダメージを与えられない。

うまい表現だな。

じゃあメタ スライムのように逃げられるようにしますか。

『さて、ウチらも続きを始めましょうか？』

『・・・くつ。悪いが、一旦退かせてもらおう！』

よし、島田の手が空いたな。ここでこいつを上から落とす！

ドンッ！！

『わあ！ アレは……島田さん、アレを！』

あえて大きな音でさっき使わなかった消火器を落とした！ 明久は不思議そうだが、俺の存在はばれてないようだ。

『了解！』

今度はちゃんと味方しているようだな。

『……………』

あれ？ 何か考え事をしているようだが、なにがあっただ？

『は、早く使って！』

『うーん。どうしよっかな？』

島田がすごく楽しそうな笑顔をしている。これは……

『し、島田さん！ なにが望みななの？』

やはり島田は脅迫しようとしている。うまい手だ。姫路を出し抜いたぞ。

『望み？ うーん、そうね』

『今ならたいの言つことは聞きます！』

『それじゃ、まずは呼び方から変えてもらいましょうか』

『変える！ 変えさせていただきます！』

『じゃ、今度ウチはあんたのことを『アキ』って呼ぶから、あんたはウチのことを『美波様』って呼ぶように』

いいぞいいぞ。呼び方だけで心の距離は全然違う。

『み、美波様！ これでいい？』

『今度の休み、駅前の『ラ・ペデイス』でクレープ食べたいな』

さりげなくデートの誘い。なかなかやるじゃないか。

『分かった！ おごらせていただきますから置いてかないで！』

『よるしい。では、最後に・・・』

『まだあるの！？ もういいでしょう！？』

何か言おうとしてるのを躊躇っている。なにが言いたいんだろう？
Bクラスがこのやりとりを聞いていて少し手を緩めていたが、そろそろ目的を思い出したようで、本気で攻めてきた。島田が何か言うまで援護しよう。

まずは、ちょっとばれる可能性もあるが・・・

ドンッ！

『『『！！！？？』』』

Bクラス全員を注目させ、そして・・・

『ぎゃー！ 目に何か入ってしみるー！』

『うわー！ 辛い刺激！ タバスコか！？』

さつき残っていたタバスコを目にかけた。二階から目薬ならぬ、
『天井からタバスコ』だ。

とりあえず時間は稼いだ。さあ島田！ 言いたいことがあるなら
言え！

『ウ、ウチのことを愛してるって、言ってみて？』

おおっ！ まさかそんなことをするとは！ 正直ここまでやると
は思わなかったぞ。

さあ明久、どう返答する？ 場合によってはタバスコかけるぞ。

『ウチのことを愛してる！』

まさか一言一句間違いなく復唱するとは思わなかった。こいつは
どこまでバカなんだろうか。

『……………ばか』

ブシヤアアッ

吹き出す消化剤。二人は何とか脱出したようだ。じゃあ俺はその
まま帰りますか。

明久へのタバスコはまた今度にしておこう。

第拾七話（後書き）

暗躍編、終了です。

原作との違いをつけたかったので、いろいろ工夫しました。

第拾八話（前書き）

正宗の体術がもうひとつ出てきます。

第拾八話

第十八問

問 以下の問いに答えなさい

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

『good? better? best
bad? worse? worst』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『good? gooder? goodest』

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。Goodやbadの比較級と最上級は語尾に-erや-estを付けるだけではダメです。覚えておきましょう

土屋康太の答え

『bad? butter? bust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

伊藤正宗の答え

『珍回答が思いつかない』

教師のコメント

ウケを狙わなくて良いです。真面目にやって下さい。

「昨日言っていた作戦を実行する」

翌朝のホームルーム前、雄二がそういった。

「作戦？ でも、開戦時刻はまだだよ？」

確かに。だが、もうひとつ、どうにかしなければならぬ問題がある。

「Bクラス相手じゃない。Cクラスのほうだ」

「あ、なるほど。それで何をすんの？」

「秀吉にコイツを着てもらおう」

雄二が鞆から取り出したのは、われらが文月学園の女子の制服。

説こうとかいろんな人たちから人気があるらしい。

どこから調達したのだろうか・・・？ あ、あいつかな？

「別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

いや、少しは構えよ。女装は慣れてるかもしれないが。

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらおう」

ああ、なるほど。それで敵意をAクラスに向けようってことが。

「と、いうわけで秀吉。用意してくれ」

「う、うむ・・・」

そういつて着替えを始めた。まだ島田や姫路が来てないから、秀吉を男としてみるのならそれほど問題はないが・・・興奮している明久たちの前でいいのか？

「よし、着替え終わったぞい。ん？ 皆どうした？」

自覚なし。

「さあな？ 俺にもよくわからん」

本当に分かってないならいいが。お前はまだ女だと思ってないよ
うでよかったよ。

「おかしな連中じゃのう」

「んじゃ、Cクラスに行くぞ」

「うむ」

「あ、僕も行くよ」

特に仕事はないだろうがな。見学しても面白そうだな。

『・・・・・・・・・・はあ、しくじるなよ』

『・・・・・・・・・・ああ、代表の作戦だから仕方がないな』

ん？ 何だ今の不信な会話は？ どうもBクラス方面のようだ。

『独眼流順風耳』を使ってみたら、そんな会話が聞こえた。

俺は『片目を失った日』から、こういう能力に長けるようになってしまった。その日から数日間、その素質に気づき、自己流で鍛えていたらしいの間にかここまでできてしまっていた。他にもあるのだが、今はここまで。

「俺は、一応待機してるよ」

また教室に何かやるんじゃないかと、警戒しておくことにした。

秀吉のほうも面白そうだな。

『妙な情報でもつかんだか？』

『ああ、ちよつとな』

ちなみにこのことも雄二は知っている。

「よし、頼んだ。行くぞ秀吉、明久」

そういつて三人は教室を出て行った。

結論から言うと、作戦は成功したようだ。Cクラスは目論見どおりAクラスに敵意を向けている。敵は減った。

だが、それとは別に問題が起きた。

「雄二が……消えた……？」

第拾八話（後書き）

一難去つてまた一難。

坂本雄二の消失

当人たちはかなりシリアスです。

第拾九話（前書き）

今回は原作から全然進みません。

第拾九話

第十九問

問 以下の問に答えなさい

『物事がなかなかうまくいかなくてもどかしい様子。、回りくどくてそのうえ効果もあんまりないこと』の意味を持つことわざを『から』の形で答えなさい。

姫路瑞希の答え

『二階から目薬』

教師のコメント

正解です。他には『天井から目薬』でもいいです。

伊藤正宗の答え

『天井からタバスコ』

教師のコメント

痛いです。

土屋康太の答え

『右から左へ受け流す』

教師のコメント

古いです。

吉井明久の答え

『メノクラゲのからみつく』

教師のコメント

弱いです。

土屋君と吉井君は微妙に合っているような気がするのが腹立たしいです。

「どういうことだ？」

「うん、作戦は成功した。秀吉が戻ってきたときにはもういなかったんだ」

「気づかなかったのか？」

「……………ごめん。秀吉に気を取られてて」

教室には特に怪しいやつは来なかった。じゃああのBクラスの会話は……………

「それで、足元にこんなものが落ちてたんだ」

明久は段ボール箱を持っていた。床に置いて開けてみた。

「これは……………テープレコーダー？」

なぜ今の時代に……………と一瞬思ったが、何かあるのか？

「とりあえず聞いてみるか」

「そうだね」

……………待てよ？ まさかと思うが……………

「聞き終わったら爆発したりして」

「いや、まさか……………」

「……………爆弾がついている」

「そのまさかかよ！」

「だれがどうやって手に入れたんだ？」

「なんにしても、聞いて見なきゃはじまんねえな」

再生ボタンを押してみた。

『あー、あー、坂本雄二は預かった。返して欲しければ試召戦争で負ける……』

そのあとも何かしゃべってるが、とりあえず置いて、

「……根元恭二の声」

「どこまで卑怯なんだBクラスは……」

「正直言うと、雄二は戻ってこなくてもいいよね？」

「いつもなら同感だが、これは戦争だ。代表がいらないじゃ強制的に負けだ」

「それは腹が立ってきた。これ叩き割っちゃ駄目？」

「明久がそう聞いたが、それはだめだ。」

「いや、これはかなりの証拠品だ。教師に聞かせたら不正発覚ってことになる」

「そういつて、停止ボタンを押した。だが……」

「あ、あれ？ 停止がきかない……」

「そんな細工までしてきたか！」

「明久！ 急いで誰か教師を呼んでこい！」

『分かってるかもしれないが、このテープは自動的に消滅する。証拠を残すと思うな！』

遅かった！ ボンツという音がしてすぐ、テープレコーダーから火が上がった。下手すりゃ畳に燃え広がるぞ！

「正宗！ 呼んできたよ！」

「どうかしたか？」

鉄人が来たようだが、もう手遅れだ。とりあえず消火作業をして、今あったことの説明だ。

「そうか。だが、証拠がないと信用できん」

こんなときに限って教師つてのは頭が固い。『こつちが被害者のふりをしてBクラスを陥れる作戦の可能性もある』だとか、『どちらかを贖罪することはできない』などとのことだ。Fクラスは信用も薄いのか？

「当然、代表が不在ならば試召戦争はBクラスの不戦勝だぞ？ 本当に坂本はいないのか？」

本当に信用がない。だが、代わりなんてのはできないだろう。

「……いないなら仕方がないな」

ちくしょう！ こんな手で負けるなんて！

「二択で選べ」

え？ 二択？

「ひとつはこのままBクラスに不戦敗すること」

不戦敗？ 冗談じゃない！

「もうひとつは何ですか？」

明久が言った。気持ちは一緒だ。

「もうひとつ。他の誰かが臨時で代表の座に着く事だ」

「……そんなルールはあるのか？」

「二つ目のほうは今回だけの特例だ。俺が学園長に許可を取ってくる」

「ここで迷うものか！

「当然、二つ目を選びます！」

「分かった。代表代理は俺が決めるぞ」

「はい。だれにするのですか？」
かなり重要だ。

「ちょうど次に代表に近い立場を持つ人間がいる」
ん？ そんな立場あるのか？
鉄人は俺を指しながら鉄人は告げた。

「Fクラス副代表・伊藤正宗、代表坂本雄二の代理になれ！」

みんなが啞然としている。というか、俺って副代表だったの？
それ以前に、副代表なんてポジションがあつたのか？

そして俺が、今日の代表者？

ドクッ！

ふう、やっぱり騒ぐよな。なんせ、お前は『奥州筆頭』だったんだから……

第拾九話（後書き）

原作とかなり変えてみました。

次回、再登場です。

第貳拾話（前書き）

とうとう『政宗』が『筆頭』として活躍します。

しかし今回は政宗の戦闘シーンはないです。

第貳拾話

第二十問

問 次の音楽記号の読み方をカタカナで書きなさい

(1) f f

(2) p p

姫路瑞希の答え

(1) フォルテツシモ

(2) ピアニツシモ

教師のコメント

正解です。簡単でしたか。

伊藤正宗の答え

(1) ファイナルファンタジー

教師のコメント

先生もRPGは好きです。まさかpだとポジションですか？

吉井明久の答え

(2) プッチンプリン

教師のコメント

二人とも音楽の授業はしっかり受けてますか？

正宗が代わりにFクラスの代表となった。

それにしても、『副代表』なんていう役職があったんだな。もしかして、Dクラス戦のときに雄二が適当な正宗の紹介をしたのも『副代表』の顔を覚えさせるためだったのかな？

いろいろ考えていると、正宗の調子がおかしいことに気がついた。

「どづかしたの正宗？」

「いいねいいねえ、ゾクゾクするぜえ！」

すると、正宗は教卓の前まで行き、皆に聞こえるように言った。

「おめえら！ 今日俺が頭をつとめる！ オレについて来いよ！」

おっと、どづやら『伊達政宗』のほづが出ているみたいだ。

『伊藤が代わりの代表なのか！？』

『本当につとまるのか？』

『だがあの自信は何かやってくれそうだぜ!』

一瞬みんなが疑うような顔をしたが、あのいつも以上の威勢のいい態度で一気に信頼度を上げた。

「おめえら、オレについてこれんのか？」

『『『死ぬ気でついてくぜ、代表!』』』

いいぞ、案外言うことを聞かないと思ったがそうでもないようだ。

「んんツ!？ 代表じゃねえ、俺のことは『筆頭』と呼べ! 『かしら頭』でもいい!」

これは『正宗』の意思なのか、『伊達政宗』の気分的なノリなのかよく分からない……でも、やる気が出るならそれがいいだろう。

『『『YEAH! 筆頭ツ!』』』

とても不思議だが、何でみんなこんなに乗ってるんだ？

「いいねいいね、楽しくなってきたぜ!」

本人のテンションも高いようだ。

「行くぜ! Are you Ready?」

『『『YEAH! OK!』』』

こうして、不思議なテンションでBクラス戦二日目が始まった。

「ドアと壁をうまく使っんじゃ！ 戦線を拡大させるでないぞ！」

秀吉の指示が飛ぶ。

Bクラス戦の再開時、昨日とまったく同じ場所から始めることになっっている。

今は亡き雄二が言っていた、『教室内に敵を閉じ込める』という作戦を実行中だ。このあとどうするかは一応僕や正宗は知っている。『正宗』も分かっているだろう。

しばらく戦争していると、姫路さんの様子がおかしいことに気がついた。

「……………ツラ、ずれてますよ？」

「っ！…！ 少々席をはずします！」

竹中先生を移動させたところで隙ができた。多少は維持できるはずだ。

「姫路さん、どうかしたの？」

「そ、その、なんでもありませんっ」

本人はこう言うが、絶対何かある。

「私が行きますっ！」

そういつて戦線に加わろうとした。だが・・・

「あ・・・・・・・・」

急に動きを止めてしまった。

どうもBクラス内の何かを見ていてこの状態のようだ。

Bクラスをのぞいてみた。根本君の姿がある。

姫路さんが大事にしていた『手紙』を持っていた。

「・・・・・・・・なるほどね。そういうことが」

あの手紙を奪われていて、姫路さんは身動きを取れないようだ。

そもそも協定を提案してくる時点でこんな算段がついていたんだ。合理的で失うリスクも少ない。

できれば、この戦争中に取り返す方法を考えてもいいんだけど・・・

「姫路さん」

「は、はい……?」

「具合が悪そうだから、あまり戦線に加わらないように。試召戦争はこれで終わりじゃないんだから、体調管理には気を付けてもらわないと」

「……はい」

「じゃ、僕は用があるから行くね」

「あ……!」

何か言いたげだったが、気にせずFクラスへ戻ることにした。

「面白いことしてくれるじゃないか、根本君」

設備破壊、人質、協定違反、代表拉致、終いには人の大事なものでの脅迫。

もう我慢の限界だ。誤っても許さないぞ。

あの野郎、ブチ殺す。

第貳拾話（後書き）

原作より怒りの強い明久。

下手すればあの卑怯者は原作より酷い末路を迎えるかもしれません。

第貳拾壹話（前書き）

この話、小十郎「明久反対の人は怒るかもしれませんが、許して下さい。」

第貳拾壹話

第二十一問

問 『hit』の現在形、過去形、過去完了形を記せ

姫路瑞樹の答え

現在 hit 過去 hit 過完 hit

教師のコメント

正解です。どれも綴りも読み方も同じなのです。他には『put』や『cost』、『cut』等。綴りだけなら『read』などもあります。

吉井明久の答え

現在 hit 過去 hited 過完 hitten

教師のコメント

前と同じような間違いですね。

土屋康太の答え

現在 hit 過去 hut 過完 hot

教師のコメント

『打つ』 『小屋』 『熱い』
一体小屋で何があったのでしょうか。

伊藤正宗の答え

現在 hit 過去 and 過完 run

教師のコメント

似たような問題だったときのリベンジでしょうか。

『やってやったぜ』みたいな感じが伝わってきます。

「政宗！」

「ああ、どうした小十郎？ まさか逃げる気じゃあねえよな？」

「やっぱり小十郎って呼んでるけど、今はそれどころではない！」

「話があるんだ」

「とりあえず落ち着け。話は聞いてやる」

前みたいに余裕があるならば片倉小十郎風に話したっていいんだけど、今回は真面目な時だ。

「一言で言つと、姫路さんを戦闘から外して欲しい」

「なぜだ？」

「理由は言えない」

政宗は少し考えてこういった。

「まさか、何かで脅迫でもされてんのか？」

「うっ、鋭い！ でもそれくらいなら・・・」

「言ってみればそういうことなんだ。脅迫の内容は言えないけど」

「・・・その物を奪還できねえか？」

「方法はあるかもしれないけど・・・できれば無しで」

「そうか・・・」

「頼む、政宗！」

「身勝手すぎる願いだけど、ここは引き下がれない！」

「・・・条件がある」

「条件？」

「姫路の担う予定だった役割を代わりにやれ。どうやっても良い。必ず成功させる」

なるほど。それならお安い御用だ！

「もちろんやってみせる！絶対に成功させるさ！」

「良い返事だ」

さすが我らが筆頭。器が違う。

「それで？なにをしたらしい？」

「根元に攻撃を仕掛ける。教室は今のままで」

「みんなのフォローは？」

「補給しに来たやつか終わったやつ2、3人貸してやる。途中でもかまわん」

今補給テストしてるのは5、6人ぐらい。残存勢力もあまりなさそうだ。

「もし、失敗したら？」

「失敗するな。必ず成功させる」

責任重大だ。失敗はそのまま敗北につながるらしい。

「じゃあ、頑張つてこい。俺はDクラスに指示を出してくる」
室外機の件だな。

「よし、策はないけどやってみせる！」

「……………」

政宗が呆れたように『やれやれ』てジェスチャーをしている。

「明久、相手は力づくでどうにかなるやつじゃないだろ」

「そ、それはそうだけど……………」

「よく覚えておけ。心は熱く、でも理論はcoolに」^{ロジック}「だ」

「……………」

「by 未来日記！」

……………さつきから『明久』って呼んでるけど、どうやら『正宗』のほっが出てるようだ（笑）

「…………俺ももうじき戦線に出る。要はお前に任せる！お前にも

秀でてる部分があるんだからな」

そうして教室を出て行った。

しかし、だいぶ心は落ち着いた気がする……。

僕に秀でてる部分……。僕にしかできないこと……。

「……………」

そうだ、僕は『観察処分者』だから……

「……………」

だが、惜しむ気はない、やってやる！

美波とその他二人の補給者をつれて、Dクラスまでやってきた。

「「^{サモン}試召召喚！」」

英語の遠藤先生に『美波と決着をつける』と言って召喚許可をもらった。

目的は別にあるわけだが。

「行けっ！」

美波に攻撃する僕の召喚獣。避けられる速さで、でも思いつきり力をこめて。

「グッ！」

「アキッ！……………」どこを狙ってるの？ そっちは壁よ」

事情を説明して演技してもらってる。これを繰り返すのみだ。

十何回か壁を攻撃したが、やっと半分くらいだろうか。

「アキ、時間がないわよ」

まずい、これでも拳の痛みで点数も下がっている。間に合うのか？

『出たぞ！ Fの代表だ！』

『こいつが噂の伊達男か？ 強えぞ！』

『まさに、戦場の蒼い稲妻!』

どうやら正宗が出てきたらしい。なかなか押しているようだ。

『ひるむなっ! 多人数で殺れ!』

『はっ、その程度でこの俺を・・・ちっ、』

『よし、背中を斬った! どんどんやれ!』

だめだ、すごくピンチらしい!

『まだまだ、ここであきらめるわけにはいかないんだあー!』

そのときだった。僕の召喚獣に突然雷が落ちた。

『うわっ! なんだこれは!?!』

その召喚獣は前髪がぱらりと落ちた髪型になっていて、全身に電気を帯びている。

『ま、まさかこれって・・・』

すると、召喚獣が壁に向かって攻撃し始めた。

木刀、殴りのほかに、蹴り、更には頭突きまで加わった。手加減してないせいか、フィードバックが強すぎる!

『あだっ! ちょ、ちよつとストップ!』

あ、あれ? 制御が効かない! ぶっちやけ暴走だ!

『な、なにが起こってるの?』

美波や他の二人もよく分かっているようだ。

『これは、極殺モード?』

あの片倉小十郎だけがなれる暴走に近い状態のことだ。すごい攻撃力とスピードだけど反動がでかい、意識が飛びそうだ!

『うう、うわぁー!』

その瞬間、Dクラスの壁がBクラスとつながった。

そして僕は意識を失った。

第貳拾壹話（後書き）

これがやりたかった。小十郎「明久反対の人がいようと。

しばらく一日一回更新できそうにないです。

第貳拾貳話（前書き）

普段よりも間が空いてしまいました。

しばらくこんなペースですがご了承ください。

第貳拾貳話

第二十二問

問 以下の問いに答えなさい

『女性は（ ）を迎える事で第二次成長期になり、特有の体付きになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理の事を月経、初潮の事を初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が1.5kgに達する頃に初潮を見るものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境栄養状態などに影響される』

教師のコメント

詳しくすぎです

伊藤正宗の答え

『老化』

教師のコメント

全国の女子中高生の皆さんに謝ってください。

「……ここはどこ？」

昨日辺りもこんなセリフ言った気がする。あの後確か……

「おおっ、起きたか明久」

ここはFクラスの教室だった。

「あれ、雄二。拉致されたんじゃない……」

「ああ、どうにか自力で戻ってきた。正宗も明久もよくやってくれた」

「そうか……って、Bクラス戦は!？」

そうだ。僕はBクラスの壁を破って道を作った。でもフィードバックのダメージで気を失ってしまった。どうなったのだろうか？

「その件は俺が話そう」

そこには正宗がいた。他のみんなはいないが、なにをしているんだろう？

「確かにお前は壁を壊してBクラスに侵入した。そしてそのあとはだな……」

side 正宗 回想

なるほど。明久、壁を破って奇襲する作戦か。あとで教師に注意

されっかもしねえが、今更あいつは気にしねえだろうな。

「さて、そろそろいくか！ 奥州筆頭伊達政宗、推して参る！」

「^{サモン}試召召喚！」

さあ、ここまで来たんだ、俺に傷の一つでもつけてみるよなあ！

「出たぞ！ Fの代表だ！」

「こいつが噂の伊達男か？ 強えぞ！」

「まさに、戦場の蒼い稲妻！」

「いいじゃねえか、派手な戦になってきたぜ！」

だが、Dクラスとはレベルがちげえな。あまり持つ気はしない。

「Give upなんて言わねえぜ！」

「ひ、ひるむなっ！ 多人数で殺れ！」

「はっ、その程度でこの俺を・・・ちっ、」

「よし、背中を斬った！ どんどんやれ！」

まずいな。他も手が空かないようだし、俺が死ねばFクラスは負け。直接出てくれば当然狙ってくる。

「やむをえない、使っぜ！ 六爪流！」

「・・・なにもでねえな。」

「？・・・い、今だ、討ち取れ！」

「「うおおりゃー！」」

ザスッ ザスッ ザスッ！

「うおおー！」

「Fクラス代表討ち取ったり！」

やられた・・・俺のせいで・・・負けた・・・

「俺もまだまだ甘かったか！」

「・・・はっ！ 戻った！ 伊達政宗は消えたようだ。」

「勝者、Bク「ちょっと待った！」え？ 誰ですか！？」

高橋先生が言いかけたとき、誰かの声がさえぎった。え？ この

声は・・・

「雄二！　なんで・・・」

「自力で脱出してきた。それよりも、つい30秒前からそいつは代表ではなくなつた」

『『『・・・はい！？』』』

「本物の代表が帰ってきたから、臨時代表の仕事は終わりだ。教師にも知らせてある」

そういつて後ろにいた鉄人を指した。

「だからつてのこのこと出てくるのはバカだ！　総員、坂本雄二を狙え！」

「おつと、こつちでいいのか？　・・・野郎共！　体勢を立て直す！　一旦下がるぞ！」

「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！」

よっしゃ！　うまく乗ってくれた！　なにやら壁の音がさつきよりも全然大きくなっている。

「あとは任せたぞ、明久」

俺と雄二の声が重なつた。

ドゴオッ

明久が壁を壊してくれた。よくやつた！

「ンな！？」

流石に予想外だつたようだな。それで、明久は・・・

「うう、うわぁー！」

なんだ！？　悲鳴を上げて倒れたぞ。よくみると、召喚獣の様子がおかしい。前髪がぱらりと落ちた髪型になっていて、全身に電気を帯びている。

「どうみても強そうだ・・・」

なんかこれ、どつかでみたような・・・

「まだまだッ、俺を守れ、近衛部隊！」

「『試召召喚！』」

ザシユツ　ボコツ　ドカツ　ガンツ！

「『……え？』」

Bクラスの近衛部隊はわずか2秒ですべて倒された。それらを倒したのは……

「えっ、明久？」

なんと明久の召喚獣だった。

「なんで本人が気絶してるのに召喚獣が動いてBクラス4人を簡単に倒してるんだ！？」

根本がそうだったが、驚いているのは全員だった。

『Fクラス　吉井明久　英語　15点』

表示されている点数は無いにも等しいような点数だった。いくら操作がうまいからってBクラス4人を速攻で倒せるわけが無い。

『Fクラス　吉井明久　英語　11点』

あれ？　明久の点数が少しずつ減っている……

疑問に思っていると、明久の召喚獣が根本に向かっていった。

「か、勝てるかッ！」

「……敵前逃亡か？」

鉄人が冷静に告げた。それなら当初の予定とは違うけど、勝ったかも知れないな。

「ぐっ、さ、試召召喚！」

やむをえず根本が召喚獣を出した。点数が危ないけど、勝てるだろうか？

「Fクラスなんざに負けるかぁ！」

明久の召喚獣が根本を襲う。

根本本人に……………

「あだつ、ぐはつ、は、反則じゃないか!？」

「召喚獣で何とかしろ。吉井に悪意は無い」

鉄人が冷静に、冷たく告げた。

それにしても、この絵はスカツとするな。どんどんやれ、と思っ
てしまった。ここにいる全員（Bクラス生徒ですら）そう思ってい
るように見える。

しかし、そんな楽しみも束の間、明久の召喚獣が……………

バタツ

『Fクラス 吉井明久 英語 0点』

突然倒れた。ノーダメージだったはずだ。

「…………へっ、驚かせやがって。勝手に倒れやがった」

ちなみに島田たちは起き上がった近衛部隊にやられていた。致命
傷だったようだが、戦死はしてないようだ。

……………結局、当初の作戦に頼るんだな。

「……………Fクラス。土屋康太」

「え？ なな、いつの間に!？」

ムツツリー二が後ろを指す。

暑さのため開け放たれた窓。そこからロープで降りてきたのだっ
た。

「……………Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申

し込む」

「ムッツリイニイーツ！」

「……………試獣^{サモン}召喚」

『Fクラス 土屋康太 保健体育 441点』

VS

Bクラス 根本恭二 保健体育 203点』

忍者姿のムッツリニの召喚獣の小太刀が一閃し、敵を一撃で葬り去った。

第貳拾貳話（後書き）

回想でお送りしました。

意見・感想があったらお願いします。

第貳拾參話（前書き）

少し読みやすくなるかと行を空けておいて見ます。

第貳拾參話

第二十三問

問 『むしろ』と言う言葉を用いて、
30字以内の文章を作りなさい。

姫路瑞希の答え

『古典文学は、国語と言うよりも、むしろ歴史の授業である』

教師のコメント

正解です。他にもいくらでもできますね。

土屋康太の答え

『勉強よりもむしろ遊んでいた』

教師のコメント

そう思うのは山々でしょうけど勉強はしましょう。

伊藤正宗の答え

『ガムシロップはどうしてガムって名前なんだ？』

教師のコメント

少し使い方が違うかと。

ちなみに、アラビアガムというものを使って作ったからそんな名前
なんだそうですよ。

吉井明久の答え

『ガムシロップは甘くておいしい』

教師のコメント

まさかそのまま飲んでたりしてませんよね。

side 正宗

「……………つてなかんじで、俺たちFクラスが勝ったんだ」

「なるほどね。にしても、すごく体が痛むな……………」

一応すべての事情を聞かせてやった。

明久は壁を壊してから、完全に気絶していたはずだ。

「魂でも出たのか？」

「……………そんなことはない……………はず」

「自信がないのか!？」

雄二が少し驚いていた。

「なんか知らないけど、召喚獣は動いていたような感覚は残ってる気がするんだ」

「明久 随分と思いついた行動に出たのう」

俺たちが解説してる間に、秀吉が来ていたようだ。

「うう………。痛いよう、痛いよう………」

今回はいつもよりも痛そうだな。フィードバックも100%近かったんじゃないだろうか。

「なんとも……。お主らしい作戦じゃったな」

「で、でしょ？ もっと褒めてもいいと思うよ？」

「後のことを何も考えず、自分の立場を追い詰める、男気あふれる素晴らしい作戦じゃな」

さすが秀吉。演劇部だけあって、うまい言葉を選んでいるな。

「……。遠まわしに馬鹿って言ってる？」

珍しく理解力が高いな。99割当たりだ。

「ま、それが明久の強みだからな」

雄二が明久の肩をたたきつつ一見フォローするかのようになんて言った。

「いたっ！ 要するにバカが名誉ってある意味不名誉でしょ！」

バンバンと叩いただけなのになんか響いてるようだ。

「心配するな。そのうち分かるときがくる」

「それは置いていて、Bクラス戦後はどうなったの？」

「これから対談だ。明久も来るといい」

明久は何かやらせたいことがありそうだな。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「……………」

再びBクラスへ来た。根本にはとりあえず正座させておいた。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

その発言に、周囲がざわついた。

「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」

「うむ。確かに」

「ここはあくまで、通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやるうかと思っ」

そう、あくまでBクラスは俺たちに協力してもらうに過ぎない。ただ一人、個人的に恨みたいやつはいるが・・・

「・・・・・・・・条件とはなんだ」

力なく根本が問う。

「条件？ それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

去年からもだろうけど、今回は特に恨みが多いだろうからな。

「そこで、おまえらBクラスに特別チャンスだ」

これはまだ当初の目的だ。恨み返し部分ではない。

「Aクラスに行って試召戦争の準備ができていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意志と準備があるだけで伝えるんだ」

「・・・・・・・・それだけでいいのか？」

思ってたよりも軽かったと思っただけだ。その程度ではあるまい。

「ああ。Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら

見逃そう」

それはさつき秀吉が着ていた女子の制服。

何も無ければそのままの格好でよかったのにな。

「ば、馬鹿なことを言うな！ この俺がそんなふざけたことを……
……！」

当然そう思うだろう。だが……

『Bクラス全員で必ず実行させよう！』

『任せて！ 必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守るなら、やらない手はないな！』

お前の味方は随分と乗り気だ。本当に人望が無い。

「んじゃ、決定だな」

「くっ、よ、寄るな！ 変態ぐふっっ！」

「とりあえず黙らせました」

「お、おう。ありがとう」

いや、変わり身が早い。

「では、着付けに移るとするか。明久、任せたぞ」

「了解っ」

早速明久が着付けに取り掛かった。

「雄二、その程度でいいのか？」

「正宗、やっぱりそう思うか。気が合っな。お前ならどっするっ。」

「そっだな……とりあえず……」

雄二に耳打ちした。

「……その程度か？」

まだ甘いとでも!?

「だったら……」

「まだまだだな。俺だったら……」

「な!?! そんなことを!?!」

『待て! なんか不吉な会話が聞こえるぞ! ぐわああっ!』

どこかの卑怯者が何かを叫んだあと、スタンガンで殺られたような断末魔が聞こえた。

いつのまにか明久がいなくなっていた。根本の制服がゴミ箱に捨てられている。どうやら制服から何かを抜き出してどこかへ行ったようだ。

にしても、明久の召喚獣のあの状態はなんだっただろうか。

………なにかデジャウのような……？

『こっ、この服、やけにスカートが短いぞ！？』

『いいからキリキリ歩け』

そんな声が聞こえてきた。ぶつちやけ見たくも無いから聞くだけになっている。

「お、明久、戻ったか」

「うん。………おえっ」

「明久。直に見てはいけない。それより、お前は何かさせたいのか？」

「んー、今回はいいや。次回なにかあったらで」

「なんか知らんが、お前と姫路が満足ならそれでいい」

「とりあえず、雄二の教科書に何か落書きしときたいんだけど」

「俺もやってやる。根本にもやっておじいぜ」

「それが一番いいね」

「あとは希硫酸でも……」

『『その二人！ なに考えてやがる！』』

雄二と根本が同時に反応した。

「それ、行くぞ！」

「了解！」

『あ、待ちやがれ！ は、離せ！』

『落ち着け、俺だって止めに行きたいが、このあとお前の撮影会があるからな』

『き、聞いてねえぞ！？』

後日、『生まれ変わったワタシを見て！』という写真集がとある商会で発売されたいらしい。置いてはあるが未だ売れてないそうだ。

『ひっひっひ、もう一人あのシステムを使えるやつがいたようさね』

第貳拾參話（後書き）

謎の人物現る。

99割の人は分かるかと。

第貳拾四話（前書き）

第六話について指摘され、修正しました。

光一なんてキャラはいないので忘れて下さい。

秋雨さん、もし読んでたらすいませんでした。

第貳拾四話

第二十四問

問 以下の問いに答えなさい

『人が生きていく上で必要となる5大栄養素をすべて書きなさい』

姫路瑞希の答え

『？脂質 ？炭水化物 ？たんぱく質 ？ビタミン ？ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね。

伊藤正宗の答え

『？漫画 ？小説 ？ゲーム ？パソコン ？三度の飯よりという心』

教師のコメント

趣味的なものばかりですね。？はある意味の栄養でしょうけど。

吉井明久の答え

『？砂糖 ？塩 ？水道水 ？雨水 ？湧水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、更に十八歳になっても所長がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

昨日雄二の教科書にいたずら書きをした結果、当然雄二から仕返しされた。敵は敵なので、根本は取り押さえたままらしい。

しばらく明久と逃げ続け、とうとう殴り合いが勃発しそうになったそのとき、鉄人が現れ、その場は同盟し撤退。

しかし結局捕まり、明久は壁壊しについて親身な指導を受けていた。

そして次の日・・・

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能と言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったことだ。感謝している」

あいつにしちゃ珍しい言葉だな。

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

「そうだぞ。恩を仇で返すお前が素直に感謝なんて・・・」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ。

政宗はいろいろ余計だ」

「これも偽らざる気持ちだ」

考えたことを素直に言い、同じように言い返した。

「まあいい。ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

『おおーっ！』

『そっだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

皆の気持ちはひとつ！

「皆ありがとつ。そしてこのこるFクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと考えている」

前の昼食時に一度聞いたから今更驚かないが、クラスの中はざわついていた。

『どついうことだ？』

『誰と誰が一騎打ちをするんだ？』

『それで本当に勝てるのか？』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二の一言でクラスが静まる。

「やるのは当然俺と翔子だ」

？ 何か違和感・・・

「馬鹿の雄二が勝てるわけなあっ!？」

「次は耳だ」

雄二がカッターを投げつけた。明久の頬を掠めて行った。

やはり相成れない仲なのか？

「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない。だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？ まともにやりあえば俺たちに勝ち目はなかった」

「自覚してるならカッター投げなけりゃい・・・よつとあぶねえなおい」

雄二がカッターを俺にも投げってきたが、キャッチしてやった。

「どうやって指二本でキャッチできるのさ・・・」

「じついつ反応速度はすごいのじ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・なかなかできない」

「……まあお前はBクラス戦で頑張ってくれたから許してやる。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺たちの勝ち揺るがない」

俺だっているいろいろ感謝している。どっかのBクラス代表と違って代表への信頼は固い。こいつのことを否定するやつなんてこのクラスにはいない。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『おおおーっ!!』

ここにいる全員が雄二を信じている。こいつがいればもう負ける気はしない！

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？ 何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

日本史か。俺が一番得意な教科だが、多分雄二は俺にもかなわないはずだ。

「ただし内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣の勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

ふむ。それなら霧島でも理不尽に高い点数にはならないだろう。Aクラス代表となれば余裕で300はあるかもしれないがこれならほとんど同じ条件だ。

しかし、小学生で上限ありという事は満点が前提だ。

「でも、同点だったら、きつと延長戦だよ？ そうなったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに明久の言うとおりじゃ」

「そうだ。結局分の悪い賭けだろ」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？ いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などというものか」

「??？ それなら、霧島さんの集中力を乱す方法を知っているとかな？」

「いいや、アイツならその程度で集中が乱れたりしないだろう」

「……………アイツ？ なんだかかなれなれしいな。」

「雄二。あまりもったいぶるでない。そろそろタネを明かしても良いじゃろっ?」

確かにな。かなり気になる。

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった」

そして再び口を開く。

「俺がこのやり方を選った理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

ある問題？ なんなんだ？

「その問題は - - - 『大化の改新』」

「大化の改新？ 誰が何をしたのか説明しろ、とか？ そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

受験校ならともかく、そこまで難しい問題は用意されるのか？

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もっと単純な問いだ」

「単純にというと - - - 何年に起きた、とかかのう？」

「おっ。ビンゴだ秀吉。おまえの言う通り、その年号を問う問題が出たら、俺たちの勝ちだ」

大化の改新か。得意な時代ではないのだが、確か645年だったはずだ。

「大化の改新が起きたのは、645年。こんな簡単な問題は明久ですら間違えない」

明久・・・まさか間違えてないよな？

「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺たちの勝ち。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

うーん、何か解せないところが・・・

「具体的にはどう間違えると思うっ？」

「おそらく、625年と答えるはずだ」

「もしかして、『625《むじこ》』って嘘をついたのか？」

「ああ、そういうことだ」

たしかに『2』を『じ』と読めなくもないが・・・

「でもどこかで間違いに気づいた・・・なんてことは？」

「ないはずだ。アイツは俺の言ったことは後で間違いと分かってても、そのまま突き通しているからな」

なるほどなるほど。えっと、要するにこいつと霧島の関係は・・・

「あの、坂本君」

「ん？ なんだ姫路」

「霧島さんとは、その・・・仲が良いんですか？」

さつきから『翔子』とか『アイツ』とか呼んでたな。それにまるでよっぽど前からの知り合いのようにいろいろ知っているようだ。

「ああ。アイツとは幼なじみだ」

「総員、狙ええっ！」

「なっ！？ なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ、男の敵！ Aクラスの前にキサマを殺す！」

「俺が一体何をしたと！？」

「そんな魅力的な存在がいるなんて俺は許さん！」

そういうのはフィクションにとどめとくべきだ。少なくとも俺の周りでは認めない！

「なんだと！？ お前だって木下姉妹とは古い付き合いなんじゃないか？」

「雄二！ 木下姉妹』とはどういうことじゃ！」

『殺せええっ！！』

道連れのもりか！ だが多分幼馴染とは少し違うはずだ！

「それは違う！ 確かに秀吉や優子とは古くからの友達だ。だが幼馴染とは少し違う」

「でも究極の解決法としては……」

「古くからの知り合いでどちらかが『幼馴染』といえば幼馴染だ！」

「なんか、今日の正宗すごくアレだね……」

「わしはもう幼馴染でもいいとおもっぞい」

「やっぱり総員狙え！」

『殺せええっ！！』

ああっ！ 秀吉、余計なことを！

「ここはやるしかないか……！」

俺はとりあえず戦闘体制に構えた。見よう見まねで『天地魔闘の構え』をやってみた。

「あ……ひょっとして足りないか？ 三人が精一杯だ」

と、半ばあきらめていたら、Fクラス反乱軍隊長（明久）が姫路と島田に殺されそうな状況だった。

こうして反乱が止まってくれた。

「まあまあ。落ち着くんじゃ皆の衆。今はとにかく試合戦争じゃ」

「む。秀吉は雄二や正宗が憎くないの？」

「冷静になって考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子じゃぞ？男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが」

霧島は同性愛者という噂がある。もしかしたら最悪雄二はストーリー扱いされてるかもしれない。

「とにかく、俺は『大化の改新』を利用してAクラスに勝つ。そうしたら俺たちの机は」

『システムデスクだ！』

第貳拾四話（後書き）

正宗のキャラクターがヤバくなってきた気がします。分かる人しか分からないネタが2つほどありますが、興味があればググってください。

第貳拾伍話（前書き）

いよいよAクラス戦です。

二週間も間を空けてすいませんでした。

第貳拾伍話

第二十五問

問 次の英文を日本語に訳し、それが現在完了形の何と言う用法か答えなさい。

『Spring has come』

姫路瑞希の答え

『春が来た／継続用法』

教師のコメント

正解です。用法まで良くできました。

伊藤正宗の答え

『バネよ来い！／命令形』

吉井明久の答え

『温泉よ来い！／命令形』

教師のコメント

違います。確かにSpringは『春』以外に『バネ』とか『泉』とかありますがこの場合は春のほうです。

それと、『温泉』は hot spring です。

土屋康太の答え

『女湯よ来い！／欲望形』

教師のコメント

どうして女湯にこだわるのですか。欲望形ってなんですか。

あと、解答用紙を血で汚さないでください。

「では、両名共準備は良いですか？」

今回の戦争の立会人は高橋先生だった。

雄二の策略は、『Bクラスを攻め込ませる』とAクラスに脅迫してみたことを言つて、一騎打ちに持ち込むことだった。当初の予定としては代表同士の1対1だったのだが、優子が余計なことを言い出して、5対5で三回先取というルールに変更された。

Fクラスの出場メンバーは雄二のほかに、秀吉、明久、ムッツ、姫路となった。

雄二のヤツ、俺は出さなくて大丈夫なのかと思つたが、作戦があると思ひ、あえて黙っておいた。

「ああ」

「……問題ない」

会場はAクラス。教室は広いし、設備もいいからな。そしてうまくいけば俺たちの教室になる。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「私から行きます。科目は物理でお願いします」

出てきたのは佐藤美穂という女子だった。50人中の5人、相当な精鋭なのだろう。

「よし。頼んだぞ、明久」

「え！？ 僕！？」

明久か。クラスを代表させて大丈夫なのだろうか？ 召喚獣の性能はいいだろうけど。

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

「ああ、精一杯戦って来い」

応援はしておいた。正直雄二は期待して無いだろう。

「ふう……………。やれやれ、僕に本気を出させてこと？」

本気？ まさか俺が知らない明久の真の力があるというのか！？

「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

『おい、吉井って実は凄いヤツなのか？』

『いや、そんな話は聞いたことはないが』

『いつものジョークだろ?』

味方からすらそんなことをいわれている。少し調子に乗ったか?

「吉井君、でしたか? あなた、まさか……」

なにやらあつちは少し動揺している。

「あれ、気づいた? ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」

明久が袖をまくって手を振っている。戦うのは召喚獣なのに。

「それじゃ、あなたは……!」

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕 -

-

大きく息を吸い、この場の全員に告げる。

「……左利きなんだ」

『Aクラス 佐藤美穂 物理 389点

VS

Fクラス 吉井明久 物理 62点』

そういえば、片倉小十郎って左利きだったよな。

「このバカ！ テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

「み、美波！ フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁して！」

点数差6倍以上だ。もう慣れや利き腕で勝てるレベルじゃない。

「よし。勝負はここからだ」

「ちょっと待った雄二！ アンタ僕を全然信頼してなかったでしょう！」

「信頼？ 何ソレ？ 食えんの？」

左手が疼くようだ。

「では、二人目の方どうぞ」

「アタシが行くよっ」

出たな優子。お前もけっこう頭が良かったからな出てきてるんだろうな。

「ワシがやるっ」

弟の秀吉。幼馴染以上にお互いを知り合っている二人だ。策は作れなくも無い。

「秀吉。何か秘策は？」

「任せておくのじゃ。雄二から聞いておる」

「最初から作戦があったのか。期待してるぞ」

どんな作戦なのだろうか。やっぱり姉妹ってのを利用するのかな？

「正宗。わしは男じゃ」

心を読まれてしまった。

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ？ 姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

たしかCクラス代表のあの人だ。そういえば秀吉が優子に化けて挑発しに・・・ああ、そういうことか。

「じゃーいいや。その代わりに、ちょっとこっち来てくれる？」

「うん？ ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

「ご愁傷様。優子が秀吉を引きずっていった。

「雄二、不戦敗で終わらせる気か？」

「正宗、やるか？」

「……………最初からそうすればよかったじゃないか」

「それでもいいんだがな。とりあえず、止めてきたらどうだ？」

「そうしようか。飛ばして進めてていいぞ」

「そのつもりだ。うまくやって来い」

「アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？ どうしてアタシがCクラスの人たちをブタ呼ばわりしてる事になってるのかなあ？」

「それは、姉上の本性をワシなりに推測して……あ、姉上！ ちがつ……………！ その関節はそっちには曲がらなっ……………！！！」

「その辺にしろいてやれ、優子」

「正宗……………話はお仕置きのおとで……………」

「だからやめろって！ それじゃ手遅れだ！」

「じゃあ「じつじつ賭けはべしっ」」

「……………聞いてやろうか」

「こいつが見返り無く条件を出すのは珍しい。聞く価値はある。」

「アタシと正宗で、召喚獣対決。勝ったほうは負けたほうの言うことを二つ聞く」

「待てまてマテ。そこはひとつが相場じゃないのか？」

「安心して。そのうちひとつは秀吉に関わることだから」

「秀吉？ どう関係するんだ？」

「あたしが勝ったら秀吉のお仕置きを続ける。あんたが勝ったら、秀吉はその辺にしておいてあげる」

「あ、姉上!？」

「おいおい、まだ続けるつもりだったのか。だがまあ、それで秀吉が助かるなら……」

「いいぜ、受けてたとう」

「………正宗も乗り気じゃのう。分かった。まかせたぞい」

「ああ、お前を死なせはしない。で、もうひとつは？」

「そ、それは………勝負が決まってからよ!」

「そうか。俺もなんか考えておこうか」

そうして、Aクラスに戻り、勝負に臨むことにした。

「では、次の方どうぞ」

「さあ勝負よ正宗」

「望むところだ。Fクラスのためにも、秀吉のためにも、ここは勝たせてもらうぞ」

ちなみに、俺たちが外でいろいろやってるうちに、ムッツVS工藤・姫路VS久保の戦いが終わったらしい。結果は快勝だったそうだ。

「科目は、そうだな……………」

「そこは迷わず日本史にするべきじゃないの？」

明久はそういうが、なんだか乗り気にならないんだよな。

「迷うなら、総合科目なんてどう？」

「総合科目って……………驚くほど俺が不利だぞ」

「アタシはね、アンタがどれだけ得意以外の勉強をしているのか見たいのよ」

「……………それは、今の俺の教室で分かるだろ」

「そうね。そんなに自分の学力がダメだって言いたいよね？」

「……………言ってくれるじゃねえか。上等だ！」

『はめられたね、正宗』

『ああ、はめられたな』

『……………はめられた』

『ダメかもしれぬ』

……………後ろから聞こえた声で冷静になった。

「高橋先生。日本史でお願いします」

「あっさり変えたわね!？」

「そうだ！得意以外すべて苦手というのは、認めざるを得ない真実だ！」

なんか逃げに入ってしまった感じもするけれど、勝利のためなら仕方が無い！

「さあ、いざ勝負！」

「なんか腹立つけど、それで戦ってあげるわ！」

「サモン試獣召喚」

いろんなものがかかっているこの勝負、絶対負けるわけにはいかない！

第貳拾伍話（後書き）

次回、第一次試召戦争編クライマックスです。

前回ほど間が開かないようにします。

第貳拾六話（前書き）

正直、正宗の勝負教科を、総合科目か日本史か迷っていました。前回の話を投稿した直後、少し後悔しましたが、変更はしません。

第貳拾六話

第二十六問

問 カタカナを日本語の直しなさい

- (1) 政治家のオシヨクジケン
- (2) 夏の夜は蚊がウルサイ
- (3) ホウカゴに部活をする

姫路瑞希の答え

- (1) 汚職事件
- (2) 五月蠅い
- (3) 放課後

教師のコメント

正解です。(3)は簡単ですが、他は書けそうでかけないかもしれないかもしれませんね。

吉井明久の答え

- (1) お食事券

教師のコメント

テストの最中っておなかが減りますよね。それとも常にそんな感じですか？

坂本雄二の答え

- (2) 暴走族い

教師のコメント

イメージはそうかもしれませんが、間違いですね。

土屋康太の答え

(3) 放火後

教師のコメント

そんな状況で部活なんてやってられませんよ。

伊藤正宗の答え

(1) 片仮名

(2) 片仮名

(3) 片仮名

教師のコメント

『カタカナ』を漢字にしないでください。

『Aクラス 木下優子

日本史 629点

VS

Fクラス 伊藤正宗

日本史 384点
『

「ええっ!? 何なのあの点数!」

「ばかな! ムツツリーニでも500点台だったんだぞ」

「……………負けた」

うーん、流石にきついなあ。

「って、そういえばお前は歴女だっ
」

「きゃあああ！ あんまりバラさないで！」

「しかも腐女
」

「それはもっとダメええ！」

あまりの怒りに、優子の右ストレートが飛んでくる。

「おっと、クロスカウンター！」

反撃することにした。女子を殴るのも気がひけるので、寸止めにした。

「ふん、そんなの脅しにもならないわ！」

「俺はな、お前の顔に傷をつけたくないんだ！」

「……………////」

「どうした、顔を赤らめて……」

なんだろう、周りから何か変な視線が……

「二人とも。喧嘩もラブコメもやめて、早く召喚対決を始めてくだ

さい」

え？ 今のどこにラブコメがあったんだ？

「と、とにかく、さっさと始めるわよ、正宗！」

「お、おう、かかって来い！」

なんか知らんが、今は対決だ。点数がダメなら操作性で上回るしかない！

勝負開始から5分経過・・・

『Aクラス 木下優子 日本史 532点

VS

Fクラス 伊藤正宗 日本史 241点』

優子の召喚獣の装備は西洋鎧と召喚獣よりも大きなランス。

基本的な戦法は、ランスを構えて、突進してくる感じだ。俺の召喚獣は刀を使ってどうにか受け流して、ついでに斬りつける。と言う戦いを繰り返しているのだが、これがまた速くて、完全には受け流せない。斬りつけるにも、あまり深くはない。

「まだまだッ！」

「…………ぐっ…………はあっ！」

『Aクラス 木下優子 日本史 517点』

VS

Fクラス 伊藤正宗 日本史 205点』

この調子でやってたら先にこっちがやられてしまう。それに……

「どうしたの、胸を押さえて？ もしかして、『政宗』が出そうなの？」

「へっ、そのとおりだ」

「じゃ、じゃあ、出したほうがいいんじゃないのかな？」

「明久。俺はむしろ、出てくるのを抑えているんだ」

「え？ 何のために？」

「これは俺の戦いだ。たとえ俺のご先祖様でも、人の力は借りられない」

そう、これは1対1の、他人でもない自分の戦い。懸かっているものは他人だが、俺がどうにかできないとどうしようもない。

「正宗……………」

「俺は勝つ！ 自分ひとりで！」

ここで負けたら、Fクラスのみんなに顔向けできない。ここはど
うにか

「それはちがうぞ正宗」

「……………なんだ雄二？」

「お前は一人で戦ってるわけじゃない。49人も味方がいるだろ」

「……………」

俺はとっさに言葉が出なかった。

「正宗、これは正宗だけの戦いじゃないんだよ」

「……………正宗、頑張れ」

「正宗、信じておるぞ」

「お、応援してます。伊藤君」

「精一杯やりなさい。伊藤」

明久・ムッツ・秀吉・姫路・島田、一人ひとり応援してくれた。

『頼むぞ筆頭!』

『お前にかかっているんだ、筆頭!』

『君ならやれるよ、筆頭!』

その他のFクラスメンバーまで……。

『『筆頭! (パ・パ・パン) 筆頭! (パ・パ・パン) 筆頭! (パ・パ・パン)』』』

……アニメ版の応援までしてくれてる。

そうか……優子とのやり取りで、昔の俺の『環境』を思い出していたようだ。

「ありがとうみんな。目が覚めたぜ!」

「ふん、なんだか知らないけど、じゃあ、いくわよ正宗!」

「よし、かかって来い!」

「『政宗』。あんたの力も貸してくれ!」

胸を押さえるのをやめた。

《……癖になるなよ》

……ここから俺の意識がほとんどなくなる。……っと思ったんだが・

「あれ？ なくならない・・・」

《おい、俺はここだ！》

確かに『政宗』の声は聞こえる。ためしにその方向を見ると・・・

《さあ、指示を出せ！》

俺の召喚獣が騒いでいる。って・・・

『『『召喚獣がしゃべってるー！！！』』』

ほんとにびっくりだよ！

「でも、どうして・・・」

《そりやおめえ、一番戦いたいのは自分だろ？ だから俺はお前に戦わせる。しかし俺も戦いたい。そこで、どうにかならねえかと考えてたらこうなった》

半分ぐらい適当だな。

『どうした、もっとtensionあげていっせ』

・・・正論だ。

「頼むぞ『政宗』！」

《楽しみじゃねえか・・・正宗 どんなdanceを踊ってくれる

んだ？》

「よくできてるわね。で、もうやっていいの？」

「またせたな。かかって来い！」

そこで俺は召喚獣の刀を使いランスの先端を動かし、あえて攻撃を受けさせた。

《ぐ、ぐああ！》

その攻撃は方を貫き、声を聞いた限りなかなかの致命傷だったようだ。

「え？ 失敗？」

「いや、わざとらしかったぞ？」

明久と雄二が疑問に思っている。

『Fクラス 伊藤正宗 日本史 141点』

「姫路。俺の点数、初期状態から何点減った？」

「えっと、243点ですが？」

よし、けっこうダメージが多かったがまあいいか。

「なんか知らないけど、次でとどめよ！」

優子の召喚獣が突っ込んでくる。食らえば終わりだな。

「政宗、剣を収めて、あの構えをしろ」

《分かってるぜ！ タイミンゲ Timingはゆた委ねる！》

優子のランスをギリギリまでひきつける。・・・よし、今だ！

「WAR DANCE！」

《WAR DANCE！》

その瞬間、召喚獣に雷が落ち、腰に携えていた六本の剣を同時に抜いた。

ガキンッ！

その剣が抜かれた瞬間、ランスの攻撃を弾いた。

「ええ？ な、何なのあれ！？」

「政宗、優子、みんな、見ている。俺のDANCEを見せてやる！」

第貳拾六話（後書き）

前回より短い期間での、改心の出来だったと思っておりますがいかがでしょうか。

自分は良さ気な話やラブコメの執筆は少し苦手かもしれないです。

ご意見・ご感想お待ちしております。

第貳拾七話（前書き）

試召戦争編、クライマックスです。
前回に続け、筆頭と仲間たちの戦いです。

第貳拾七話

第二十七問

問 以下の問いに答えなさい

『三種の神器をそれぞれ挙げなさい（いつの時代でもかまいません）』

姫路瑞希の答え

『八咫鏡やたのかがみ

八尺瓊勾玉やさかにのまがたま

天叢雲劍あめのむすぶくものこころぎ

霧島翔子の答え

『白黒テレビ

洗濯機

冷蔵庫』

坂本雄二の答え

『カラーテレビ

クーラー

自動車』

工藤愛子の答え

『デジタルカメラ

DVDレコーダー

薄型テレビ』

教師のコメント

正解です。それぞれ上から、古墳時代・1950年代・高度成長期・

デジタルと、よくできました。姫路さんは正式名まで答えられるとは流石です。

伊藤政宗の答え

『ゲーム

パソコン

ご飯を作って無償で養ってくれる人』

教師のコメント

ニート街道まっしぐらですね。

吉井明久の答え

『れいとうビーム

10万ボルト

かえんほうしゃ』

教師のコメント

それはネット上のポケモン用語です。

さて、この六爪流モードについて、分かっているところを説明しよう。

「なんかすごいそうね・・・でも、負けないわよー!」

優子の召喚獣が突っ込んでくる。

「さあ、上に飛べ、政宗！ 落ちながら切りつける！」

《よしてきた！》

まずこの状態になる条件。それは、点数が最後に補給テストを受けてから点数が半分以下になったとき（たとえば、補給テストで100点をとった場合、50点以下になったら発動させられる）。

ヒュッ ザンッ！

『Aクラス 木下優子 日本史 361点』

VS

『Fクラス 伊藤正宗 日本史 137点』

「え？ は、速い！ それに、攻撃の威力も上がってる？」

そしてこのモード利点、攻撃の威力が上がる。さらに、スピードも倍以上のものとなる。

「まだまだあつ！」

今度は乱れ突き。だがうまく受け流させ、懐に入り込み、斬りつけ

「させないわ！」

斬りつけられず、ランスで殴られた。

そしてこのモードは利点もあるが弱点がでかい。

『Aクラス 木下優子 日本史 361点』

V S

Fクラス 伊藤正宗 日本史 63点

まず一つ目の弱点。防御力の低下。受けるダメージが通常時よりも大きくなってしまう。

「正宗、こんなじゃ負けないわよ!」

優子の召喚獣が突進してくる。それを右手ではらい、左で斬りつける。

『Aクラス 木下優子 日本史 296点

V S

Fクラス 伊藤正宗 日本史 55点

「時間がない! ガンガンいくぞ!」

《あぁ、分かってる! PHANTOM DIVE!!》

「そんなの当たり前・・・あっ!」

固有技を使わせたが、それは半分フェイク。避けた隙に連続で攻撃させる

「くっ、やるわね。でも絶対勝つんだから!」

あっちもさっきのように乱れ突きで抵抗してきた。だが、攻め手は完全にこちらにある!

「すごいね・・・途中までピンチだったのに今は全然押ししてる」

「ああ、そうだな。俺の出る幕でもないか？」

「正宗の召喚獣　　政宗は踊ってるかのような動きじゃ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・流石」

みんなもすっかり見ていてくれた。もう一押しだ！

「優子、とどめだ！」

《うらあー！》

「くっ、これま　　」

しかし、優子の召喚獣の咽喉元に三つの爪が来たそのとき、政宗の動きが止まった。

「・・・・・・・・え？　なにがあつたの？」

「・・・・・・・・悪いみんな、時間切れだ」

『Aクラス　木下優子　日本史　1点

VS

Fクラス　伊藤正宗　日本史　0点』

直前に多少かすったぐらいなダメージや、刀が2本ほど折れてしまってもいたが、いずれも致死量ほどでもないのに点数が0点にな

っていた。

これが二つ目の弱点。点数が叙々に減っていく現象があること。

だいたいモード発動時から1分間でちょうど0点になるようなペースだ。(たとえば60点のときに発動なら、1秒で1点、120点だったら2点ずつ、というペース)

しかもダメージを受けてもペースは変わらないから、攻撃を受けるほど戦える時間も少なくなってくる。先ほども言ったが、ただでさえ防御力が低下している状況でだ。

つまり、この『六爪流モード』はとにかく攻め特化の捨て身状態になる、超速攻型召喚獣に変化するものだったのだ。

「俺もまだまだ甘かったか・・・」

《俺もまだまだ甘かったか・・・》

召喚獣が霧状になって消える。こうして俺は負けてしまった。

「優子、総合だとお前は何点だったんだ？」

「うーん、だいたい3500点程度かしら？」

俺は確か1000も届かないくらいだ。総合だともっと厳しい勝負になっていたな。

「くそっ、もう少しだったのに・・・」

「あたしも危なかったわ」

情けないまま自陣へ戻る結果となってしまうた。みんなにどうい
えば……

side 明久

正宗が申し訳なさそうに帰ってきた。きっと責任を感じているん
だろうけど……こんなときこそ！

「お疲れ様、正宗！」

こうやって明るく迎えるべきだ！

「……あ、明久……」

「ナイスファイトだ。後は任せろ」

「ご苦労じゃった。ゆっくり休むとよい」

「………すごい勝負だった」

「……みんな、……みんな……すまなかった……」

正宗の片方しかない目から涙が出そうになる。必死にこらえよう
としているけど……

そのとき、敵からも味方からも拍手が喝采した。

『筆頭！　　すげー勝負だったぞ！』

『Fクラスもやるやつがいるな！』

『感動したっ！』

AクラスからもFクラスからも喚起の声。勝負をたたえてくれるようだ。

「優子！」

正宗は涙ぐみながら叫んだ。

「……なに？」

「次に戦うときは、総合科目で戦ってやる！　覚悟しておけ！」

「……バカね……いつでもかかってらっしゃい」

木下さんも何かうれしそうだった。

「お二方。見事な勝負でした。では大将戦を始めます。代表者は前に出てください」

「……はい」

Aクラスからは最強の敵、霧島翔子さん。

「俺の出番だな」

Fクラスは雄二。こいつしかいない。

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は1000点満点の上限ありだ！」

ぞわ……

これこそ今回一番の勝負の鍵。これですべてが決まる。

『上限ありだって？』

『しかも小学生レベル、満点確実じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待っていてください」

ノートパソコンを閉じ、高橋女史は教室を出ていった。

とりあえずエールしておこう。

「雄二、後は任せたまよ」

「ああ、任せられた」

ムツツリーニが歩み寄り、ピースサインを雄二に向ける。

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「……………(ふっ)」

口の端を軽く上げた笑みを浮かべ、ゆっくりと戻っていった。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございます」

「ああ。明久の事が。気にするな、後は頑張れよ」

「僕の話？ 一体何があったんだろう。」

「はいっ！」

まあ彼女が幸せならそれでいいか。

「雄二！」

今度は正宗。まだ涙は渴ききっていないようだ。

「俺は……もう二度と負けねえからな！ 文句あるか、代表！」

エールと言うか、自分の目標だった。
どうでもいいけど、何でこんなときまでワンプリースの名ゼリフな
のだろうか？

「負けたって、泣いたっていいんだ………乗り越える！」

雄二まで乗らなくていいのに。

そうして、最後の勝負が始まった。Fクラスの面々は、ディスプレイに映し出される問題を凝視している。

《次の（ ）に正しい年号を記入しなさい》

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

誰もが固唾を呑んで見守っている。出ているのかな？

（ ）年 鎌倉幕府設立

（ ）年 大化の改新

「あ………！ 出て、いた」

「よ、吉井君」

「あ、アキ」

「うん」

「これで、私たちっ・・・！」

「ウチたちは・・・！」

「俺が勝てなかったのは心残りだが、これで勝てば・・・！」

「うん！ これで僕らの卓袱台が」

『システムデスクに！』

そろったFクラスのみんなの言葉。これはきつと・・・

「うん！ 最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！！」

『うおおおおおー！』

教室を揺るがすような歓喜の声。これから僕らの教室は・・・

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 97点》

VS

《Fクラス 坂本雄二 53点》

Fクラスの卓袱台が、みかん箱になった

第貳拾七話（後書き）

できるだけ壮絶な戦闘にしたつもりでしたがどうだったでしょうか？

第一拾話〜第貳拾六話、多少修正入れました。

第貳拾八話 (第一次試召戦争編終了) (前書き)

テスト勉強や本番などで、3週間も遅れてしまいました。
その代わり内容量は2倍増(作者気分比)でお送りします。

第式拾八話 (第一次試召戦争編終了)

第二十八問

問 次の() に正しい年号を記入しなさい。

『 () 年 キリスト教伝来 』

霧島翔子の答え

『 1549年 』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『 雪の降り積もる中、寒さに震えるキミの手を握った1993 』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても、間違いは間違いです。

伊藤政宗の答え (欄外)

『 以後よく『1549』 広まるキリスト教 』

教師のコメント

いい覚え方だと思います。

「三対二でAクラスの勝利です」

とりあえず俺はまず最初に、『やっぱり俺が勝っておけば……』
と思った。

だがその2秒後、すぐ違う考えに変わった。

『すべての敗因は……雄二のせいだ』と。

「……雄二、私の勝ち」

完膚なきままに負けてしまった。

「……殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！ 歯を食いしばれ！」

「吉井君、落ち着いてください！」

姫路が後ろから明久に抱きついた。

「お前の目論見せくろみは成功したかもしれないが、それでも負けてんじや
ねえか！ 悔やみ感が吹っ飛んじまったぞ！」

「だいたい、53点ってなんだよ！ 0点なら名前の書き忘れとか
も考えられるのに、この点数だと」

「いかにも俺の実力だ」

「この阿呆があーっ！」

「アキ、伊藤、落ち着きなさい！ アンタたちだったら30点も取れないでしょうが！」

「それについて否定はしない！」

「いや、俺なら一回で100点どころか、延長2回は続ける自信はある！」

「それでも、坂本君を責めちゃダメですっ！」

「くっ！ なぜ止めたり裏切ったりするんだ、姫路さんに美波に正宗！ この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに！」

「それって体罰じゃなくて処刑です！」

「明久、俺も手伝っぞ」

「アンタはアンタで黙ってなさい」

優子がすごい形相で睨んできた。処刑は後回しでいいや。

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学生の問題だと油断していなければ負けてた」

「言い訳はしねえ」

凶星かよ！

「……………ところで、約束」

「そついやそんな話があったな。なんか内容は分かってきた気がするが。」

「……………それじゃあ秀吉。覚悟はいいわね？」

「そつだ。こつちのほうもあつたんだつた……」

「うむ。負けは負けじゃ。受け入れようぞい」

「待て優子！ やっぱりやめといてくれ！」

土下座をして頼んだ。

「なによ。今更約束を変えるつもり？」

「秀吉を殺したければ、俺を殺してからにしろー！」

「どこのバトル系漫画よ……」

秀吉には過去にいろいろ恩がある。これ一回では返しきれないほどの量が。

「仕方ないわね。そこまで言うなら力づくで！」

「うおっ！ ノリと冗談で言ったけど、本当に来るとは……」

「やあぁー！」

先ほどのように、右ストレートが飛んできた。そのくらい避けられる！

「ちっ、まだまだ！」

続いて高速のラッシュ。必死にガードしてるが、傍から見るとどんな感じなんだろうか？

『ねえっ！ 何なのあの二人！』

『ああ、現実では絶対見ない、なんかのゲームみたいな戦いだな』

なんかあんまりやったことはないが、ストリートファイター的な感じだろうか。

古くからよく喧嘩してるせいか、こんなじゃれあい(?)ができるようになってしまった。

「止めるばっかしじゃなくて、反撃してみたらどうなの！」

そっいうがな、女を殴るなんて、ポリシーに反する。

『あの速さで攻撃する木下さんも、それを止められる正宗もすごいね』

『ドラゴンボールでも見たような感じがするな』

『……………カメハメ波でも撃つたりして』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・撃てたりするかな？ 殴るわけでもねえし。

「!? その構えは！」

「か・め・は・め・波 ！」

しかし何も起こらなかった。

「本当にバカねあんたは！」

ドゴツ！ ドドドドドドドドドドドドドドドドドド！ ドンダーンッ！

コンボ発動、と言ったところか。

俺がかめはめ波で失敗したところを、アッパーで空中に投げられ、そのまま16連打、その後回し蹴りで壁にたたきつけられた。

こんな戦いも久しぶりだったが、前よりも磨きがかかっているな。

「・・・・・・・・・・すごい戦いだっただね」

「ああ、あの連続技、一瞬『18 Hit!』という字すら見えてしまった気がする」

「ふう・・・・183勝2敗10分てどこかしら」

「ぐぶっ、参った・・・・！」

「まああんたを殴れたから、秀吉のほうはもう満足よ」

「……………それならよかった」

「全く……本当に死ぬわけでもないだろうにのう」

恩のひとつでも返せたならよかったが……

「……………雄二、私と付き合って」

やっぱりか。幼馴染・約束といったらそんな感じだよな。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか？」

「……………私は諦めない。ずっと、雄二の事が好き」

「その話は何度も断っただろ？ 他の男と付き合う気はないのか？」

「……………私には、雄二しかいない。他の人なんて、興味ない」

そういえば、霧島は女が好きって話があったが、それはきくと、一途に好きなやつがいたからってことなんだろうな。

「拒否権は？」

「……ない。約束だから、今からデートに行く」

「ぐあつ！ 離せ！ やっぱこの約束はなかった事に……」

ぐいつ　つつかつか

霧島は雄二の首根っこを？み、教室を出て行った。

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

あまりに衝撃的な出来事で、しばしの沈黙が訪れる。

「さて、Fクラスの諸君、お遊びの時間は終わりだ」

この声は………Fクラス御用達の鬼・鉄人だった。

「あれ？ 西村先生。僕らに何か用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思っ
てな」

ん？ 『わが』？

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に
担任が変わるようだ。これから一年、死にもぐるいで勉強できる
ぞ」

『なにいつ！？』

道理でいやな予感しかなかったわけだ。生活指導の鉄人といえ

ば、『鬼』という名がついていて、俺個人の意見としては、あの28号にもなんとか勝ってしまいそうなくらい力も強そうだと思っている。

「いいか。確かにお前たちはよくやった。Fクラスがここまで来るとは、正直思わなかった。でもな、幾ら“学力が全てではない”と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てじゃないからと言って、ないがしろにしていい物じゃない」

くっ！ 言い訳ができない。やっぱり負けたあいつにすべての責任がある！

帰ってきたら覚えてろ！

「吉井と伊藤、お前たちと坂本は特に念入りに監視してやる。何せ開校以来初の《観察処分者》と《A級戦犯》だからな」

「こいつらはともかく、俺はいつたいなにをしたんだ！」

「その壁、壊しただろう」

「あ、あれは優子に蹴飛ばされたときに・・・」

「女子にそんな力はない」

「それがあるんだよ！」

男子だってそうそういるもんじゃないのに。

「吉井や坂本とお前が主犯でいろいろ問題を起こして来ただろう。だから徹底監視させてもらう」

「でもそうはいきませんよ！ 何としても監視の目を掻い潜って、今まで通り楽しい学園生活を過ごして見せます！」

「……お前らには、悔い改めるといふ発想はないのか？」

「俺は悔い改めるべき要素はないはずだ！」

とか言ったが、俺は少しやる気が出た。

「とりあえず明日から、授業とは別に補習の時間を2時間設けてやるわ」

目的は、次回の試召戦争で鉄人を追い出すこと。もうひとつは・

「やる気があるようになによりね、正宗」

この優子に、召喚獣勝負で勝つこと。総合教科と言ったからには、操作だけでは勝てないだろう。

「じゃあ、アンタに勉強、教えてあげるわ」

と、俺の首根っこをつかんで引きずって、そう言った。

「優子。気持ちはずれしいが、俺はお前に勝つために勉強するんだ。それなのに敵に教えてもらうってのは……」

「アタシじゃ信用できないっての！？ いいから教えさせなさい！」

なんかおかしな日本語だが。
どうにか打破できないかと思ったが、明久も島田や姫路に連れ去られていた。

「そ、そういえば、なんか願いがあつたんじゃなかったか？」

何か打破できるかと思つたが、すぐに墓穴だったと気がついた。

「ああ、それね。じゃ、じゃ……」

「？ なんだそのためらう感じ」

「……じゃあはつきり言わせてもらつわ。私と付き合いなさい」

「………買い物にか？」

「(ピキッ) ……それでいいわ」

「？ な、何でそんなに怒りっぽく……」

だがまあ、行くなら早めに行つたほうがいいな。なんだか黒装束の集団がそこらから出てくる気がするから……

「それはまた今度でいいから、さっさと来なさい！」

「ちょ、ちょっと優子、さん、もう少しやさしく……ぎゃあああ
ああ！」

なんかかなり修羅な日々がしばらく続きそうな気がしてきたが、それらも受け入れ、心身ともに強くなつていこうと思つた。

第貳拾八話 (第一次試召戦争編終了) (後書き)

原作1巻分、終わりました。

次の話は、正宗の過去話か3、5巻のラブレター+ の話かどっちかにしようかと考えています。希望しだいでそれを優先します。

ご意見・ご感想お待ちしています。

罵言雑言もむしろ歓迎です。

番外編 壱ノ一（前書き）

これは、正宗や明久たちとの出会いの話です。

目線は明久。

ちよつと量は少なめですが、前編後編に分けてあるからです。

時間背景は、7、5巻の美波の話と同じです。そつちも参照してほしいです。

番外編 壱ノ一

僕が彼のことを最初に知ったのはこんな噂を聞いたことからだった。

『伊藤、うちのクラスだったなー』

『え？ 伊藤って？』

『ほら、噂になってたじゃん。師走中学から来たっていう……』

『ああ、あの超不良？ わざわざ隣町からの』

『地元じゃ騒ぎがでかくて受け入れられなかったらしいぞ』

伊藤、か……。僕は聞いたことがないな。

『あとさ、坂本って知ってるか？』

『ああ、神無月中の悪鬼羅刹って奴か』

『どっちもこのクラスらしいぜ』

『マジか！ なんかこのクラスは、保体の天才といい、男装美少女といい、ドイツの帰国子女といい、オールスターキャストだな！』

面白そうだけどいやなオールスターだな・・・

とまあ適当に時間をすごしていたら、隣の席に誰かが座った。よく見ると、眼帯をしている。その瞬間、教室内が急に静かになった。

『来たぞ・・・伊藤だ・・・』

そうか。この人がさっきから噂になってた、伊藤君か。確かに怖いイメージだけど・・・

「・・・・・・・・・・」

なんだろう。さっきからやたらとこっちを見ている。どれ、ここは・・・

「よろしくね」

軽く挨拶してみた。不良の扱いに慣れてるわけじゃないけど、悪い反応はしないと思う。

すると、何か驚いたような顔で、

「あ？ ああ」

とだけ言った。なんか無愛想だ・・・。

「・・・・・・・・・・」

またさっきみたいに僕のほうを見続けている。何かあるのだろうか？

「……………お前さ」

「え？ な、なに？」

「なんで、セーラー服なんだ？」

ああ！ まさか家を出てからずっと！？

その日はほとんど自己紹介で終わった。

噂どおり、盗撮とか言いかけていた土屋君や、女の子の顔そのものなのに男子の制服を着ている木下さん（？）がいたりした。

ドイツからの帰国子女・島田さんとは仲良くなれそうな気がした。

それと、坂本とか言う、喧嘩が強そうでバカそうなのもいたけれど、どうも相成れそうにないなと思った。

それで今日のところは帰ろうとしたところで……

「おい、吉井」

見知らぬクラスメイトに声をかけられた。あれは確か……

「お前、勇氣あるな。あの伊藤に話しかけるなんて」

思い出した。朝、伊藤君の話をしていたクラスメイトの一人だ。名前は・・・なんでもいいか。

「ただ、あいつと関わるのはやめとけ」

「？ どうしてさ？」

「あいつはやばいぞ。噂では、空手とか柔道とかボクシングにテコンドー、カポエイラにソロバンまでやってるらしいからな。下手なことすると殺されるぞ？」

ソロバンか。僕なんて一の位がどこにあるのかすら分からない。

「でも、それってあくまで噂だよな」

「信憑性は高いぞ。特にあの眼帯。きつと喧嘩中での事故に違いない」

人を見た目で判断するのもどうかと思うけどな？

しかし、そのあとで坂本君に見た目でも中身でも判断されてしまっただけだったのであった（泣）。

番外編 壱ノ一（後書き）

後編に続きます。

番外編 巻ノ二（前書き）

過去話、第二話です。

前編後編だけでやる予定でしたが、
もう1、2話増やす予定です。

番外編 壱ノ二

数日後。ある雨の日。

僕は入学して10日もないのに遅刻しそうなときだった。
走って学校に向かっていている途中に、

(あれ？ 伊藤君だ・・・)

こんな登校するには遅れている時間になにをしているんだろう？
そう思って少し近づいてみると、もう一人、小学生ぐらいの女の子がいた。

『きみ、どうかしたのか？』

『あう・・・、学校に行こうとしたけど、道が分からないんです・・・』

『そうなのか。友達とかは？』

『えっと、葉月は最近この辺りに引越して来たばかりなので、
周りの人に合わせていこうとしたのですが、傘を取りに一度戻った
ら・・・』

『そうか・・・俺もちょっと分かんないんだよね・・・』

そういつて周りを見回している。そして、

「あ！ よ、吉井！ ちょっと来てくれ！」

「え！？ あ、うん」

物陰に隠れていたつもりだけど、ばれてしまった。仕方なくそこから出て行く。

「話は聞いてたよな？」

「まあなんとなくは……。でも、遅刻するよ？」

「そうかもしれないけど、ほっとけないだろ？」

「それはまた別の話だけど……」

「というわけで、この辺にある小学校の場所を教えてください！」

そう言われたので、僕は手でジェスチャーもまじえて、

「確か、こーいって、こーいって、こーいったら……」

「いや、ジェスチャーはいいけど、口で『こー』だけじゃ分からないからな」

しまった。確かにこうされたら、僕自分も分かる自信がない。

「お前、実はバカだって周りから言われてるだろ」

「……もしかして、読心術でも使えるの？」

「バカなお兄ちゃん・・・？」

小学生にもバカ扱いされてしまった。

「そこはなんとなく分かる。でもまあ悪いな。俺がどうにかする。遅刻確定だろうから、お前から先生に言っといてくれ！」

「う、うん。分かった。って、伊藤君は傘ないの？」

「ん？ ああ、うっかりな。ここからじゃ家に戻ったほうが遅いんだ」

「えっと、じゃあ、葉月が入れてあげるです」

そういって、その小学生が背伸びして伊藤君を傘に入れた。そうか、この子は葉月って名前なのか。

「でも、それじゃ歩きにくいよね？」

「そうだな。どうしようか」

ふと時間を見る。もう間に合わそうなことに気がついた。よし！

「じゃあ、僕も手伝うよ。もう間に合わないだろうし、遅刻するなら少しでも多人数がいいよ」

遅刻常連者の知識です。

「助かるぞ。それだと確かに早いし、最低でもこの子は極力濡らさずに済むからな。というわけでその、葉月とかいったか。背中に乗

つて。吉井、俺の鞆持つて、傘さしてやって」

伊藤君が葉月ちゃんを背負って、僕が葉月ちゃんに傘をさすような形になった。

「さあて、走るぞ！ ついてこい！」

こうして無事、葉月ちゃんを送り届けることができた。しかし、僕らは遅刻してしまった。

「……言い訳を聞こうか」

昇降口で待ち構えていたのは、趣味はトライアスロン・補習の鬼という、筋肉教師・西村先生、通称鉄人が声を低くそう言い出した。仕方ない。ここは必殺の言い訳を……

「実はUFOを見かけまして（ドカツ！）……ちょっと、まだ言い訳の途中じゃないですか！」

「伊藤、お前は？」

「僕と一緒に、だよな？」

「そんなバカな言い訳はしないぞ」

むっ　どんなものか見せてもらおうじゃないか。

「西村先生。俺は、バルタン星人と交信してまして（ドドカッ！）
・・・ばかなっ！　吉井と違って二回も受けるとは・・・」

僕と同レベルじゃないか。

「まったく・・・もういい。教室に向かえ」

「はい・・・」

そうして渋々教室に向かったのだった。

「吉井。やっぱり遅刻はするものじゃないな」

「そうだね。まあ後悔はしてないけど」

おたがい笑い合った。

そんな会話をしつつ、自分の席に着いたら、なにやら肩をたたかれ
た。
よく見たら、この前の人噂をしていた人だった。小声で話しかけて
くる。

「よう。伊藤のパシリになったのか？」

「いや、そういっ

」

「そんなわけねえだろ！ 憶測でしゃべるな！」

僕が説明している途中、伊藤君が大反論した。これによって、教室全体が凍りついたようだった。表情からして、『あれが噂の伊藤か？』なんて思っただけのようない人もいる。

「僕は伊藤君のパシリじゃない。それと、みんな伊藤君を誤解してるよ」

そのまま続けて僕は言う。

「伊藤君は今日の朝、道で困っていた小学生の女の子を学校に送り届けていたんだよ。それに」

「もう言わなくていい！」

僕の説明に、聞いていた周りの人間たちはざわついている。

『ほんとにそうなのかな？』

『あいつがそんなことをするのか？』

『だいたいあの顔だと怖がられるんじゃない？』

『ああ、言えてる〜』

むっ なんだか人のことなのに僕も怒りが沸いてきた。

「僕がさっき話したことは全部」もう言うなっていったら「……」

・・・」

そこからはもう、口を開けなくなってしまった。

朝のホームルームのあと、1時間目が移動教室だったので移動中いるときに、とある女生徒が僕に話しかけてきた。

「ねえヨシイ。今日の朝ヨシイと一緒に来たあの人、フリヨウとか言う人だっけ？」

島田さんだった。この前何語だか覚えてないけど、「僕と友達になつてくれませんか」というようなことを言ってみたら、わりと仲良くなれた数少ない女友達だ。ドイツから来たばかりなので、まだ日本語には慣れないようだ。

「確かにそういわれてるけどね、でも・・・」

「・・・？ デモ？」

「でも、正宗君は噂ほど悪い人じゃないよ。むしろいい人だ」

side 美波 (ドイツ語訳)

その日の夜、葉月がこんな話をしていた。

『今日、遅刻しそうになっちゃったんだけど、助けてもらったんです』

『そうなの？　どんな人？』

『名前は分かりませんが・・・多分お姉ちゃんと同じ学校の制服でした』

『同じ学校・・・他に特徴は？』

『えと、片側の目を黒い何かでおさえている人と、あとバカなお兄ちゃんでした』

『片目の人と、バカ？　それってもしかしたら・・・』

side 明久

「オハヨウ。ヨシイ、イトウ」

「あ、おはよう」

「え・・・、あ、ああ」

正宗はこの前みたいなの、驚いた顔をしていた。

「ソレデ、イトウ。昨日ノ、アリガトウ」

「？ 昨日お前と何かあったか？」

「困ってた小学生をガッコウに送り届けてたって」

「いや、あれは明久が」

「それ、ウチの妹ダッタ」

「へっ……って、そうだったのか！」

「ウン。葉月って言うんだけど、とてもうれしそうダッタ」

そうか。あの子、島田さんの妹だったのか。そういえばどことな
く似ていた気がする。

「ダカラ、本当にアリガトウ」

「お、おう。気にするな。か、風邪とか引かなかったか？」

「エエ、それは大丈夫」

「それはよかった」

正宗の理解者が一人増えたようだ。

番外編 壱ノ二（後書き）

この調子では、今年中に第二巻入れそうにないです。
感想お待ちしています。

番外編 壱ノ三(前書き)

番外編、第三章です。

今回は雄二との出会いです。

番外編 壱ノ三

ある日の放課後・・・

「じゃあ、帰ろうか。正宗」

「おう、そうだな。明久」

いつしか名前で呼び合うようになっていた僕ら。準備をしていたら・・・

「出て来い！ 坂本！ 伊藤！」

なにやら怒鳴っている人たちがいる。よくみると、2年の先輩たちだった。

「何の用ですか？ 先輩方」

坂本君が出てきた。先輩たちが恐喝してきてるのに、随分と余裕な態度だ。

「教室でも間違えましたか？」

「なわけあるかボケ！」

「じゃあ、なんで来たんですか？」

「とりあえずお前ら。もう少し敬いとかそついうのはないのか？」

敬いか。適当に挨拶でもすればいいのかな？

「じゃあ先輩方。さよーならー」

「またいつかー」

正宗と坂本君も同じように挨拶していた。

「待て！ なんだよその気の抜けた挨拶は！」

「それとまだ帰っていいとは言っていないぞ！」

「・・・まだなんか用ですか？」

「おうよ、こっちはわざわざ貴重な時間を割いて不良な後輩達を見物しに来てやってきたってのによ」

余計なお世話過ぎる。この人たちはいくら後輩でも不良は怖くないのだろうか？

「・・・先輩方、率直な感想を言っていますか？」

「あん？ なんだよ？ 不良の脳みそでなにを感じたんだ？」

「ふん・・・尊敬するに値しない」

「それは俺も同感だな」

坂本君が最初に言い出して、正宗が賛成した。これは後輩として生意気だといわれても仕方がない感じがする。

まあ僕も正宗達に賛成だけど。

「なんだと！？俺たちが周りから不良と蔑まれる奴らよりも下だつて言いてえのか！」

「俺たちが不良なら、お前らはチンピラの下っ端だな」

「いやいや、むしろショッカーの下っ端だろ」

ショッカーって、随分昔だね？しかも下っ端だけは同じ意見なんだ。

「なにを言ってるんだ。あの意味も無い罵倒。しかも中途半端。チンピラのほうが妥当だろう」

「バカか。あの見るからに雑魚そつな容姿。ショッカーのほうがいいだろ」

とりあえず、問題点はそこなの？

「チンピラだ！」

「ショッカーだ！」

「どつちも黙れー!」

あ、言い合いしている二人に先輩たちが襲いかかってきた。

「あ、危ないよ二人とも!」

ボカッ ボカッ

「ぐはっ!」

と思いきや、先輩たちが殴られていた。

「おっと、責めないでくれよ。今は『とりあえずパンチする正当防衛』なので」

「そうです。うっかり『クロスカウンター』による不可抗力』が出てしまったのです」

二人のそんな切り返しかた、少し習ってみたいもんだ。

「て、てめえら! 先輩に手を出していいとでも(ボボカンツ)・・・
うおい! まだやるつもりなのか!？」

「お前らが先輩という立場なのは構わないが、そうやって威張っているところが俺は気に入らん」

「どんな立場でも、上であるほど力が足りなければ所詮無力だ。」

どうもこの二人、『こんな先輩たちだから』というより、先輩そのものが気に入らないというような態度だ。あまり先輩にいい思い出はないのかも知れない。

「ちっ、ずらかるぞ、常村！」

「お、覚えてろよ、お前ら！　いくぞ夏川！」

そうか。あの坊主頭とソフトモヒカンの二人、常村と夏川っていうのが。記憶に留めておいても、どうせ3日で忘れるからやめておこう。

しかし僕はそのときはまだ知らなかった。このおよそ1年後に、学園存続までかけてこの連中と戦うことになることを。

「で、伊藤とやら。お前は どうして不良と呼ばれるようになったんだ？」

帰り道、すぐに復讐が来る可能性を考慮して、3人で歩いていた。

「……お前に話す義理はあるのか？」

「嫌ならいいんだがな。いつも自分から吹っかけるのか？」

「いいや、すべて正当防衛ってやつだ。俺が少し格闘技が強いつつだけで周りの不良から喧嘩吹っかけられるし、それで勝っちゃまうか

ら周りに悪評が広がる。その繰り返しだ」

「なんだ。正宗は全然不良ではないんじゃないか。結局実際には見ていたわけじゃない噂話のせいで避けられていただけだったんだね。」

「そうか。その辺り、俺と少し違ったな」

「？ 俺とはどう違うんだ？」

「俺は中学に上がって自分から仕掛けたんだ。上級生相手に。ボコボコにされたがな」

少なくとも後輩に威張る野郎どもとは違う、と付け加えた。

「そうなのか。神童とか呼ばれてたのにか？」

その話は聞いたことが無かったな。頭がいいってことだよな？

「……そんな関係ない。そんなことより……」

「なんだ？」

「さっきの奴らのイメージはチンピラでいいよな？」

「だから、シヨッカーって言ってんだろっか！」

え？ その話、復活するんだ。なんとというか、坂本君が話をあえてずらした感じがするのは気のせいだろうか。

「だいたいシヨッカーなんて古いんだよ！」

「時代なんて関係ねえと俺は思う！」

ああ……なんて不毛な争い……

仲が良いんだか悪いんだかよく分からない2人だな。

その次の日、『坂本と伊藤が教室を荒らそうとした下つ端な雰囲気の上級生を追い払った』という噂が流れ、その後たった3日間のうちに2人のイメージが改善されていた。

そしてなんとなく分かったことが2つある。

一つは、情報や噂の力はすごいこと。

もう一つは、この学校の生徒（特に僕らの学年）は、情報操作にすぐ影響されることだ。

番外編 壱ノ三（後書き）

次回、番外編最終回です。

「ワシの出番はないのかのう？」

「……………俺の出番は？ 作者よ」

次回です！ お楽しみに！

番外編 巻ノ四（前書き）

過去話番外編、最終章です。

更新ペースが少し遅れてきた気がしますが、内容は増しているので丁度良いくらいだと思います。

番外編 壱ノ四

ある日の木下家の会話・・・

「秀吉。アンタのクラスに伊藤正宗っていう生徒がいるらしいわね」

「？ そうじゃよ。喧嘩の強い不良という噂ばかり聞いておったが、
上級生を追い払ったという話で一気に誤解だったと広まったようじ
ゃ」

「・・・・・・・・アンタ、見覚えは無いの？」

「はて？ いつあったかのう？」

「小学校時代、転校する前の学校にいたでしょ！ アタシが何回か
話したはずだけど」

「すまぬ。覚えてないのじゃ」

「そっか、アンタがバカなのもあるけど、そもそもあんまり面識無
かっただろうからね」

「バカは余計じゃ」

「とりあえず、明日話してきなさい。その顔と木下の名字で分かる
はずだから」

「ひ、久しぶりじゃのう、正宗？」

正宗達が普通の人だと知れ渡った次の日、正宗の前になぜか男子の制服を着ている女生徒（？）が現れ、挨拶していた。

確かうちのクラスの・・・

「木下秀吉・・・だったか？」

「あれ？ 正宗、木下さんと知り合いだったの？」

僕も会話に割って入ってみた。

「吉井よ。『さん』はおかしいぞい。『秀吉』でよい」

「じゃあ僕のことも『明久』でいいよ」

「ところで秀吉とやら。珍しい名前だな。かっこいいと思うぞ」

「それはうれしいのう」

正宗、かっこいいよりも、（見た目が）可愛いのほうがいいんじゃないかな？

「それより、久しぶりとか言われても・・・俺はその名字とその顔が見事に一致している奴を知っているが、そいつ自身ではないだろう。そもそもお前は男だし」

「！・・・お主、わしが男じゃと分かるのか？」

「何言ってるのさ正宗。秀吉は女の子に決まってるじゃないか」

「まあこいつはほつといて、俺が知ってるのは、木下優子って言う女で「あたしのことか しら」・・・そうそう、お前のことだ・・・
つて！」

「久しぶりね。正宗」

ん？ うん！？

「優子が二人いるー！」

「秀吉が二人いるー！」

「いや、そんな驚かなくてもいいじゃろ」

「正宗、前に言わなかったっけ？ アタシには双子の弟がいるって会ったこともなかったかしら？」

驚いた。一瞬鏡があるんじゃないかと思ってしまった。

「とりあえず、久しぶりだな」

「ええ、そうね」

「で・・・三人はどういう関係？」

「簡単に言えば、小学校時代の同級生だな。途中でこいつらが転校したから」

「ついでにいうと、なぜか家同士でいがみ合っているのよね・・・」

「そうじゃった。なぜか家同士で仲が悪いのじゃ・・・」

なぜかっつのが気になるけど、そこはおいておいておこう。

「要するに、幼馴染ってことかな？」

「うむ。そういうことじゃな」

なるほどねえ・・・それはまた・・・

「いいなあ正宗。僕なんてそんなラブコメ定番の羨ましい立場の人なんて・・・」

「なにを言っている。Cクラスにいる姫路瑞希っていう奴はお前と同じ小学校じゃなかったのか？」

「ええ！？ 瑞希ちゃ・・・姫路さんもこの学校に？ っていうか、なんで知ってるの？」

「ああ・・・いや、ちょっとした情報網があつてな」

「そっか・・・いやあ・・・そうなのか・・・」

そっか・・・姫路さんも文月学園に・・・

「どうした？ あ、もしかしてお前……」

「い、いやいや、べ、別に好きだったりとかしないからね！」

「なんでツンデレ口調なんだ？」

僕としては本心好きかも知れない。でも、確か……

「姫路さんはね、確か他に好きな人がいるんだよ」

それがたまに自分のことだと思って勘違いしてしまう、僕を戒める事実だから。

昼休み……

「おい明久。世界史のテストどうだった？」

正宗がそんなことを聞いてきた。4時間目に返ってきた小テストの話だろう。

「そうだなあ……一問だけ本当に惜しいミスしちゃってさ、それが無ければ……」

「それが無ければ？」

「二桁だった」

「それ一問だけの問題じゃねえだろ！ どれ、見せてみる」

正宗が僕の答案用紙を取り上げる。正宗自身は、本当は日本史の
ほづが得意らしいけど、世界史もそこそこいけるようだ。

「……………」

「え？ どうしたの？ 必死に笑いをこらえて」

正宗が指す問題を見てみる。

『第二次世界大戦が始まる前、日本はドイツ、イタリアと軍事同盟
を組んだ。このときドイツを指導していたのがナチスのヒットラー
であり、イタリアではファシスト党の（ ）であった。』

「はっはっは……この問題、一文字違うだけでこんな言葉になる
とはな。お前はある意味天才だ」

「どれどれ、見せてみる。ぶあははは！ 傑作だなこりゃ」

雄二も入ってきて、その答案を見た途端に大笑いした。失礼な奴
だな。

「なにになに？ ……どういう意味なのこれ？」

さらに島田さん。この短期間で随分と日本語がうまくなったと思
う。この意味は分からなかったようだけど。

「あー、分からないほづがいいぞ」

「そうだな。明久を見る目が変わってしまったからな」

見る目っていうのはよく分からないけど、

「なんていうか、少なくとも島田さんには関係がないか　　って
ぐああああ！　島田さん、なんでアルゼンチンバックブリーカーな
んでできるのさ！　いだだだだ！」

「ウチを除け者にしないで欲しいんだけど！」

「島田。この言葉は女子に教えてはいけないって明久は考えている
んだ」

「それよりも、さっきからその体勢のお前のスカートを覗こうとして
いるムツツリスケベがいるから気をつける」

「え、ちょ、ちょっと!?!」

何とか解放された。よかった、助かった。それにしても意外だな、
島田さんがあんなプロレス技ができるとは知らなかった。

シュツ　ガシツ

「おいお前。逃げようとするな」

「とりあえずお前は何者だ？」

雄二と正宗がその小柄な少年を捕まえて質問している。そしてそ
の少年は答えた。

「……………通りすがりの……戦場……カメラマンで
す」

「いや、なぜそこで渡 陽一風なんだ」

「雰囲気は似てなくも無いがな」

確かに、低い声であのしゃべり方をすれば雰囲気は似てくる。

「そんでもって、戦場(?)を撮っていたからな」

「いやいや、明らかに目的が違うからな」

それもそうだ。直接見たわけじゃないが、あの二人が言ったとおり目的は島田さんの盗撮なのだろう。

「んで、お前は確か土屋康太とかいったか」

「……………なぜ知っている？」

「なぜも何も、同じクラスだからだろ。んで、この落とし前はとう
するんだ？」

「(スツ)」

土屋君が何かを取り出した。目に入ってきたのは、女子の盗撮写
真と思われるものだった。

「・・・・・・・・一枚100円」

「2ダース買おう」

僕と雄二の声が重なった。正宗はいらなのかな？

「（ブスッ）ぐああ！ 目があ！」

「ええ！？ いきなりどうしたのさ雄二！」

「今何かがここに来て、一瞬で雄二を目潰ししてまたどこかへ行っただぞ。あいつ・・・できる・・・！」

「そんなこと言ってる場合か！ さてはあいつか！ 覚えてるよおー！」

「よく分からないが、その写真を買おうとしたのがよくないんじゃないか？」

「そうだな。身の保障のために、ここはやめておこう」

二人がよく分からない会話をしていた。

「じゃあ、僕はこれを・・・」

「吉井、その写真買ったら殴るわよ？」

「な、なんで島田さんが怒ってらっしゃるの!？」

写真についてはあきらめることにした。

「それにしても、土屋康太って、なんか普通の名前だな」

写真を買えずがっかりしていると、正宗がそんなことを言い出した。

「……………少なくとも『正宗という名前だったら』を考えると、気に入っている」

「謝るべきか？ それとも喧嘩を売っていると思うべきか？」

「うーん、なんかあだ名でも考えてみる？」

妥協案として出してみた。

「……………やめる（フルフル）」

「そうだな、どんなのがいいだろう…………？」

「……………話を聞け」

無視して進める。

「じゃあ明久。こんなのはどうだ？」

雄二がある紙のある部分を指さした。それはさっきの僕の答案用紙だった。

「「名案だ!」「」

僕も正宗もこれはすごくびっくりだと思った。

「……………すごく不本意だ(ブンブンブン)」

すごい速さで首を振っているけど、説得力はない。じゃあここは・

「あ、スカート捲くれてる!」

「(ギランツ)……………どこだ」

ほら、欲望のためにこんなうそにもだまされる。

「そんなわけで、お前は『寡黙なる性識者』、通称『ムツツリーニ』だ!」

side 正宗

そして明久が『ムツツリーニ』と間違えたことでできてしまったその名前は、すぐに1学年中に響き渡った。それでもムツツ(俺は

面倒なので少し省略する）が俺たちに絡んでくるようになったのは今でも不思議だ。

そんなわけで、これが俺や明久が雄二たちと知り合った馴れ初め（明久目線）だ。

正直、秀吉や優子が転校して以来ずっと孤高の存在だった俺にこんな友人ができるとは思わなかった。

俺はこいつらを命に代えても大切にしていきたい。改めてそう思った。

え？　ところで、なぜ明久目線なのに明久の話を知っているのかって？　それは明久が姫路の弁当を食らったときに、『独眼流走馬灯を覗き見る（正式名未定・かつこよくすつきりした名前を募集中）』を使ったからだ。

番外編 壱ノ四（後書き）

と、いうわけで、番外編終了です！

読了ありがとうございました。

次回、またもや番外編！ 3 / 5巻の手紙騒動です。

今年最後の更新です。では、よいお年を！

番外編 式ノ一（前書き）

あけましておめでとございます。

正月は執筆活動休んでいて時間がかかってしまいました。

今年もよろしく願います。

番外編 式ノ一

少しだけ早く起きてしまい、そして一本早い電車で（俺はいつも電車通学だ）学校へ来てしまった。

「まったくなぜだろうか。今日に限って少し早く起きてしまうとは・・・」

しかしまあ、おかげで人通りの少ない時間に歩いている。普段歩く時間だと学園の生徒ならともかく、通行人から警戒される。正直居心地が悪い。

いろいろ考えながら歩いていると、二人の見慣れた顔があった。

「よお、明久、鉄人」

「あ、正宗。おはよう」

「鉄人と呼ぶな。そして少しは敬語を使え。吉井より先に呼べ。又は並べて呼ぶな」

「鉄人さん、注文が多いです。（ドカンッ！）……………それより明久、また頼まれ事か？」

殴られた頭をさすりながら聞いてみた。

「うん、このサッカーゴールを運べってさ」

「そうか、力仕事だな。それなら鉄人自身でやれば良いのに」

「誰が鉄人だ。そしてこれもすべて『観察処分者』になった罰だ」
どっちにしても、鉄人さんならできそうな気がする。

「吉井、頼んだ」

「了解です、
試験サモン召喚」

幾何学模様から召喚獣が出てくる。そいつはサッカーゴールを軽々と持ち上げた。

「にしても、大変そうだな。俺の召喚獣も物理干渉できてフィードバックが無ければ30%の力で手伝ってやれるのに」

「それでも30%どまりなんだね」

ツツコミ所はあってるんだろうか。

「ならば伊藤。生身で手伝ってやったらどうだ？ 壁も壊せる腕力
だろう？」

「だからあれは俺じゃないです！」

なんで優子はあるな人間少し離れた闘いができるのだろうか（俺もついていけたが）。なんか他にも同レベルの人間がこの学園にいても不思議じゃないような予感さえしてきた。

「吉井、体育用具室にでも置いていてくれ」

「応ついでいってやるぞ。」

「はぁ………。今日もイイコトなんてなさそうだな……。」

「この早起きは何の得にもならなかったようだな」

「早起きは三文の徳、誰が最初に言い出したのやら……。」

「ほう。それはな、昔の奈良では、朝自宅の前で鹿が死んでいたら罰金をとられるっていう制度があったんだ。誰も罰金なんて取られたくないからみんな朝早くおきて家の前に鹿が死んでいないか確認していた。もし死んでいたら、3文の罰金をとられる。そんな感じで『早起きは三文の徳』って言葉が生まれたんだ」

「へ、へえ……詳しいね、正宗」

「自慢じゃないが俺はな、テレビで出るようなこつこついう豆知識的なものは結構得意なんだ」

学校の勉強より面白いし、多分学校の勉強よりも役立つ機会が多いと信じている。

「……とはいえ、最近とはある事情で強制的に勉強させられてるがな。」

「明久。今隠した手紙はなんだ？」

朝のホームルームの時間寸前、下駄箱で明久が何か叫んだと思っ
たら、咄嗟に便箋のような紙をポケットにしまいこんだ。

「どうした？ 明久」

声に反応したか、雄二が現れた。

「あ、ああ、雄二か。おはよう」

「動揺が隠しきれないぞ」

「正宗。明久に何があったんだ？」

「ああ、それがな……」

雄二に教えようとしたが、明久が『お願いだ、黙つといて』とい
うアイコンタクトをしていたので、どうにかごまかそう。

「明久、何を黙っておいて欲しいんだ？」

そうだ、雄二もこの技能があるんだっただな。じゃあ生半可なごま
かしは効かないな。

「明久の下駄箱にプリントが入っていたんだが、読まずに食べてし
まったんだ」

「黙れ！ そんな誤魔化し方があるか！」

やばい………流石に無理があったか。

「　　と思っただが、普段水と塩で暮らしている人間だ。明久ならやりかねない」

「　　そうか、そこまで深読みしてなかったが、そうおもえばそうだな・

・
「失礼な！　前に砂糖も食べてるといったじゃないか！」

「だからツツコミどころが違うだろ。あ、いや、そうか。」

「紙を食べる可能性は否定できないのか」

「と、とにかく、もうじきホームルームが始まっちゃうから、早く行こう！」

「・・・そうだな」

雄二が静かに返事をして、3人で走り出した。

だが、俺は見逃さなかった。下駄箱で雄二が明久の微妙に膨らんでいたポケットを見て何かに気付いていたことを・・・。

「工藤」　「はい」　「久保」　「はい」

なんとか間に合った俺たち。鉄人は時間正確に教室に入ってきた。

「近藤」 「はい」 「斉藤」 「はい」

そして今出席を取っているわけだが、こういうのって最初と最後は暇だよな。俺は『伊藤』だから出席番号でかなり早いほうだ。そもそも朝いちいち出席取ってる学校はあんまりないんじゃないだろうか。

まあ中学時代と入学当初は、教師から名前を呼ばれるだけで教室の空気が凍ってしまうような日々だったからな。そう思えば今は名前を呼ばれることも悪くは

「坂本」 「……………明久と正宗がラブレターを貰ったようだ」

『殺せええっ!!!』

……………は？ 何が起こった？

「ゆ、雄二！ いきなりなんてことを言い出すのさ！」

小声で言っていたはずなのに、クラス全員が聞き取っていたらしい。

『どういうことだ！？ 吉井がそんな物を貰うなんて』

『それなら俺たちだって貰っていてもおかしくないはずだ！ 自分の席の近くを探してみる！』

『ダメだ！ 腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない！』

『もっとよく探せ！』

『………出てきた！ 未開封のパンだ！』

『お前は何を探しているんだ！？』

なぜか目的が変わっている奴もいるが、それは無視しておいて……。

明久の持っていた紙は本当にラブレターだったのか？ それと俺はラブレターどころか何の手紙も持ってないはずだぞ。

「お前らっ！ 静かにしろ！」

シン

鉄人様のおかげで静かになった。一時的なものだが、今は『様』をつけて呼んで感謝しておこう。

「それでは出席確認を続けるぞ」

え？ 今さっきの状況無視ですか？

「手塚」 「吉井クロス」 「藤堂」 「伊藤クロス」 「戸沢」

「吉井クロス」

「皆落ち着くんだ！ なぜだか返事が『吉井クロス』と『伊藤クロス』に変わっているよ！」

「つい最近まで、筆頭とか言ってたよな!? 急に態度を変えたな
!」

「吉井、伊藤、静かにしろ!」

「先生、ここで注意するべき相手は僕じゃないでしょう!? この
ままだとクラスの皆は僕らに殴る蹴るの暴行を加えてしまいますよ
!」

聞く耳持たず。教師として大丈夫なのだろうか?

「新田」 「吉井コロス」 「布田」 「吉井マジ殺す」 「根岸」

「筆頭ブチ殺す」

筆頭と呼びながら殺人宣言って、お前何様だよ!

「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉学に励むように」

「待つて先生! 行かないで! 可愛い生徒を見殺しにしないで!」

「そうだぞ鉄人様! 助けてください!」

「誰が鉄人だ!」

「 って、聞き取ったのそこだけか! わざわざ『様』をつけ
た敬意を返せ!」

敬意の欠片もないだろ・・・という視線をどこからか感じるが、
こんな奴に敬意を感じる節はない!

「吉井、勘違いするな。お前は不細工だ」

「不細工とまで言われるとは思わなかったよバカ！」

明久、人にバカとか言える人間ではないだろ。でも顔は悪くないほうだと思っぞ。

「授業は真面目に受けるように」

「先生待つて！ せんせーい！」

まさか鉄人がここまで相手によって態度を変える白状者だとは思わなかった。

そんな薄々分かっていたことはさておき・・・

「アキ、ちょくつと話を聞かせてもらえろ？」

島田が明久の肩を掴む。理不尽に身の危険のようだな。

「まあ島田、皆。いったん落ち着け。雄二の勘違いかもしれないだろ」

明久のポケットから紙を取り出してみる。皆に見えるようにそれを上に。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

可愛らしい便箋。間違いなくラブレターと呼べるものだろう。

明久の肩に手を置き、静かに一言告げる。

「……………明久。諦める」

「ま、正宗！？ 弁護とかしてくれないの！」

「冗談だ。俺は友人を見捨てたりはしない。だがその前に、なぜ俺までラブレターをもらっていることになっているんだ？」

雄二がアイコンタクトで言ったことは……

『単純に面白そうだからだ』

……………そんなことで俺は巻き込まれたのか。

「とにかく、総員、ひつとらえろ！」

『『『殺せええっ！！』』』

「ひとまず逃げるぞ、明久！ それ撒菱^{まきびし}！」

「なんでそんなもの持つてるの！？」

踏んだりはしなかったが、ひるませることは成功した。なぜ持つてるかは禁則事項。

『逃がすなあっ！ 追撃隊を組織しろ！』

『手紙を奪え！ 吉井と伊藤を殺せ！』

『サーチ&デス!』

「そこはせめてデストロイで!」

「そういう問題じゃない! なんで今日のお前のツッコミは観点を間違えまくってるんだ!」

手紙をもらった明久は『妬み』や『他人との恋愛阻止』を目的に追われるが、俺はなにもなく、手紙を持っている『疑い』だけで終われる羽目になってしまった。

ほんとにこのクラスの人間は(担任含め)、人の話を効かない奴らばかりだ・・・

番外編 式ノ一（後書き）

次回に続きます。

意見・感想、よろしくお願いします。

番外編 式ノ二(前書き)

今回はパクリネタがやや多めです。

番外編 式ノ二

『坂本。どうやって追うんだ?』

『まず全員で追うのは効率が悪い。適当に部隊を組んで、部隊ごとに固まりすぎず、離れすぎないようにして追いかける』

『『『了解っ!』』』

『ムツツリーニ、秀吉、島田、姫路、須川は別行動だ。教室にて待機しろ。でもって、秀吉』

『雄二よ、ワシはあまり参加したくないのじゃが・・・』

『そうか。じゃあAクラスの・・・にこのことを話して来い。そしてたらもう終わりでいい』

『分かった。承知したのじゃ』

「さて明久。その手紙はどうするんだ?」

廊下を走りながら明久に尋ねた。

「え? 当然読みたいけど・・・」

「そうだな。読まれずに処分されちゃあ、手紙を出した人間の勇気がどこへ行く。俺は無駄になって欲しくない」

「正宗、最近の君はいろんな意味で輝いてる気がするよ」

「そりゃどう」

そのとき、背後から何か殺気を感じた。これは、さっきのFクラス
の嫉妬よりはるかに強い……！

『正宗　　！　話を聞かせなさいっ！』

声を察するにこれは優子の声だ。まさか雄二、Aクラスの優子に
まで話したのか？

「ね、ねえ！　なんか捕まると危ないんじゃない？」

「そうだな。あの状態の優子は多分Fクラス集団よりもずっと危な
いんだ。ここはまともに戦うわけにはいかない。本多忠勝みたいな
もんだ」

「……要するに？」

「まともに戦うよりうまく逃げる！　倒すべきものは別にいる！」

「なるほど、つまり雄二を　　」

『いたぞ！　吉井と伊藤だ！』

『あきらめて投降しろ!』

『人の幸せは潰すためにある!』

「いや、直接向かってあいつらに殺されるだけだ」

敵が雄二一人ならともかく、こいつら全員の相手は少々厄介だ。

「そつだね・・・どうするの?」

「・・・よし、ここはまず二手に分かれる。少なくともお前の危険は軽減されるだろう」

「それだと、正宗はどうなるの?」

「一番の危険である優子は俺が引き受ける。他のFクラスはなんとか行動不能にするぞ」

「なるほど、大丈夫なの? この前ボロ負けだったのに」

「黙らっしやい。大半のFクラスはお前に任せる。これらを持っていくといい」

明久にサッカーネットを水でぬらしたもの、スタンガンを渡した。

「使い方はおのずと分かるだろう。お前はまっすぐ行け。俺はそこで曲がる」

少なくとも優子は俺を追ってくるはずだ。

「よし、じゃあ正宗。生きて会おう！」

「明久、死ぬんじゃないぞ！ 生きて会えたら何かおごらせてやる！」

ここで明久と別れた。『おごってくれるんじゃないくて!?!』と言う声が聞こえたが、あえて無視。

この行動も、実は少し明久に彼女ができることを妬んでいるからだろうか？

ここから物語が分岐します。

明久の行方を読みたい方は原作3 / 5巻P65～P80を、

正宗の場合はこのままお読みください。

さて、どうしようか。

未来日記でも持ってたらDEAD END フラグが立ってるに
違いない。

とりあえず中立と思われるあいつと合流して助けてもらおうか。

「すまぬのう正宗。姉上を呼んだのはワシじゃ」

昇降口で秀吉と合流したら、衝撃の事実を聞かされた。

「どうしてそんなことを・・・」

「ゆ、雄二がの・・・」

「お、おのれ雄二のやつめ、秀吉の嫌なことを平然と強要するとは・・・罰が必要だ」

「いや、強要というほどでもないのじゃが」

怒りのあまり、秀吉の声も聞こえない。

(正宗もたまに人の話を聞かなくなるのではないかのう・・・)

「秀吉。とりあえず手伝ってくれ」

「う、うむ。了解じゃ」

『とりあえず外へ行くぞ明久!』

『分かった！ こつちだね！』

『吉井と伊藤は外へ逃げるようだぞ！』

『逃げ場を多くするつもりか？ 早く追うぞ！』

『逃がさないわよ、正宗！』

よし、俺を追っていた連中は皆玄関から出て行った。今だ！

ガチャツ ガチャツ ガチャツ ……

全力で走りながら、昇降口の扉の鍵をすべて閉めた。

『やられた！ 本人はまだ中にいる！』

実はさっきの俺たちの声は秀吉が発した声真似であり、追跡者たちを外まで誘導してもらった。一旦分かれた俺たちがもう合流していることすら疑問に思っていない連中だから簡単に引っかかったよ
うだ。

『秀吉、アンタの仕業ね。覚悟、できてる？』

『ち、ちがつ！…その関節はそっちには曲がらなっ…！』

秀吉は誘導したから外にいるままになってしまった。

「ごめんよ秀吉・・・君は何も悪くないはずなのにな・・・。」

「なるほど、そうやって明久に足止め食らったのか」

ロッカーと壁にはさまれた島田に会った。

「いいから助けなさい！」

「ちょうどよかった。伊藤君、手伝ってください」

遠藤先生がそういつてきたが、とりあえず無視。

「お前を解放したら、また明久を追うのか？」

「当然よ！」

「ん、だったら、却下だ」

「なんでよ！　ウチに協力してくれるんじゃないの!？」

「そつえば、そんなことも言ったな・・・」

「ああ、確かにそうだったな。だが、お前の味方であろうと、他人の邪魔はしたくない。相手は誰だか知らないが、そいつは勇気出し

て手紙を出したんだ。そういうやつ妨害なんて、俺はしたくない」

「そ、そうかもしれないけど・・・」

「それと、暴力による嫉妬は程々にしとけ。逆に嫌われるぞ。これは味方としてのアドバイスだ」

「・・・・・・・・・・」

島田が黙ってしまった。俺もよくこんなセリフが出たなと思う。

「さて、明久はどこいった？」

その教室を立ち去ることにした。

『あ、せめてここから出してよ！』

なんか叫び声が聞こえたが、無視。とりあえず明久の手紙が伝わらすぐ助けに行こう。

分岐終了

「いたっ！ 明久！」

「あ、正宗！ 今須川君が立ちふさがっているんだ！」

「しかし明久、木刀を持った相手に、爪切りで挑むのか？」

「だ、だって、武器がこれしかないんだから……」

「リトバスじゃあるまいし、逆に持っていて、武器として使うことに驚きだ」

「ムツツリーニがくれたんだ」

ムツツ、もつとまともなもの渡してやれよ。

「で、どこに向かおうとしているんだ？」

「下見も兼ねて屋上に」

トイレにでも行けばいいのに……まあ、あいつなりのこだわりなら叶えてやるう。

「じゃあこいつの相手は任せとけ。武器ならまともなものがある」

どこからともなく木刀を手に取る。

「え？ どこから出てき」

「禁則事項だ」

東京都練馬区・鷲ノ宮家代々の家宝であり、一番の使い手はとある学院の生徒会長である木刀。名前は……言えない。

「まあいいや、じゃあ頼んだよ！」

明久を見送り、須川に対峙する。

「あの伊藤が相手か。喧嘩は強いらしいが、木刀同士なら勝てるかもしれない！」

「…………やはり知らないようだな。ならば教えておこうか」

「？　なんだか知らないが、先手必勝！」

須川が突撃してくる。どうも武器を持っただけの素人だ。

「俺は確かに喧嘩はいつも素手でやっていた。相手もそうきたからだ」

「うらあー！」

木刀で斬りつけてくる、だが、自然にその太刀筋をはらう。

「だが、どちらかといえば俺は武器えものを使った戦いのほうが得意だ。特に」

「!?!?!」

刹那　　奴が気付いたときにはもう斬りつけていて、背後にいる。

「『刀』と名のつくものを持てば、3倍は強い！」

「な、なんだと……（バタツ）」

……つい本気を出してしまった。先を急ごう。

それと……

屋上へ続く階段まで来た。

「雄二、勝負だ！」

どうやら雄二が待ち構えていたらしい。よく見ると姫路もいる。

「……………お前、バカだろう」

「へ？」

何を分かりきっていることを。しかし雄二の視線は姫路が持っている制服の上着であった。

「あ、あの、手紙がポケットに入ってるみたいなんですけど……
……見ちゃってもいいんですか……」

本当にバカだ。どうにかならなかったのか。

「だ、ダメだよッ！ 戦わないでそれを見るのは反則だよ！」

「お前がバカなだけだろうが！ やれ、姫路！その手紙を始末するんだ！」

明久は羽交い絞めされている。どうするか見たかったが、仕方ないな。

「……………あれ？ こ、これってまさか……………？ あ！」

「おつと悪いが姫路。これは明久に読ませてやってくれ」

姫路から手紙を取り上げた。

「正宗。お前も来たのか……………！」

「は、速かったね、正宗！」

あとは雄二だ。どうしようか？

「だ、ダメです！ 返してください！」

「返せって言われてもな……………それは本人にでも言われないと……………」

「……………ですから……………」

姫路が涙目で訴えてくる。少し参ってしまいそうにもなるが、なんとか堪える。

だが、ひとつの仮説にたどり着いた。

「……………まさか姫路、この手紙は……」

「……………(コクッ)」

静かにならず。そうか、だったらしょうがない。

「この手紙は返そう」

「は、はい……………」

「正宗、ここで僕を裏切るの!？」

明久、まだ気付かないのか？ 出した本人が目の前にいることを。

「で、出したからには、それを伝えるべきじゃないか？」

「この手紙は落としちゃっただけです。それに、直接伝えることにしましたから……………」

「そうか……………頑張れよ！ 手紙は好きにしろ!」

「はい、そうします! (ベリベリ! ……ベリベリ! ……)」

「ああっ!」

明久は呆然と立ち尽くす。石化しているかのようだ。

あいにく金の針は持ってない。

それにしても、ラブレターがラブレター……なんて……

『正宗、すごいくだらないこと考えてるだろ』

「と、とにかく、争いの元は元から断つてめでたしめでたし！ さ、もつじき授業が始まるぞ」

口には出さなくてよかったと思う。

「さて、明久も連れて帰らねえと」

「どうせあの連中に殺されるだけだぞ？ 元は断つても、消えないものはあるぞ」

『ア~~~~~~~~！あんたよくもやってくれたわね~~~~！』

『吉井っ！絶対殺すっ！』

『ガンホー！ガンホー！』

『正宗！絶対許さないんだから！』

優子の声も聞こえる。どうやら外の連中も戻っているようだ。

明久（石化。アルベド回復薬も万能薬もない。当然エスナは使えない）は未だ動かない。仕方ないので放置。己の身を守ろう。

「雄二！ 先行ってるぞ！」

試召戦争でも使った隠密術で移動することにした。

『……雄二。匿名の電話で雄二がラブレターをもらったって話を聞いたんだけど……?』

『え? し、知らんぞ翔子! 授業が始まるぞ!』

『逃がさない……墓場まで』

そうだ、屋上方面へ向かう途中、霧島に事実無根の話の電話入れといたんだった。

「見つけたわよ、正宗。辞世の句は読んだ?」

「まさか、先回りしてるとは……というかそもそも俺は、最初から何も」

結局DEAD ENDを迎えた。このとき同時に、別の場所で二つほど同じような、聞き覚えのある悲鳴が聞こえた気がする。

番外編 式ノ二（後書き）

一応続きがあります。それはまた次回。

ご意見・ご感想お待ちしております。

どこまでのパクリネタが分かったかも教えてもらえれば参考になります。

番外編 式ノ三(前書き)

随分時間がかかってしまいました。少し長めです。

完全オリジナルストーリーです。

一応新キャラ登場！

番外編 式ノ三

結局あの後、俺たち3人は何とか無罪として解放された。

「俺については正宗が何もしなければ・・・」

「いや、それはお互い様だろ！」

「（メンチの切り合い）」

「まあ二人とも落ち着いて」

「そもそもお前がラブレターをもらったからだ！」

「ひどいよ2人とも！」

でもそれも間違いだったことだし、明久を恨むのはお門違いだな。

一番何とかしなきゃならないのは、ラブレターだけで過剰な反応をするこのクラスだろう。

放課後。朝の事件が嘘だったように、以降特別なことは起こらなかった。

しかし俺、明久、雄二で下校しようとしたとき・・・

(バサッ)

「「「「.....」」」」

下駄箱のロッカーを開けた瞬間、手紙が出てきた。

「今度こそ正宗がラブレターをもらったぞ！」

『『『殺せっ！』』』

雄二が大声で叫び、一瞬にしてFクラスの連中が集まった。秀吉は部活でいない。

「待て、これもラブレターとは限らないだろ。とりあえず中身を

」

『『『問答無用！』』』

「ちっ、しょうがねえな・・・」

またどこからともなく木刀を取り出す。

『みんな気をつける！ こいつに木刀を持たせるとんでもなく強いぞー！』

須川がそういった。この学園ではじめての俺の木刀の被害者だからな。

「何だよ須川。そんな直接斬ったわけじゃねえだろ。ただ深爪にし

「やったただけだ」

「いや待って正宗。木刀使って深爪にしたの？」

明久がなんか言ってるが、俺にとっては爪切りより簡単に扱える。

『ああ、おかげでプルトップ開けにくくなったじゃないか！』

「須川君も気にするのはそこなんだね・・・」

なんか今日の明久のツツコミは合ってるんだか間違ってるんだか分からない。

『でも相当な腕だよな。木刀で戦い中に相手の爪切りをするなんて』

「うれしいことってくれる奴もいるな。お前らもまだプルタブを開けられる手でいたいのなら俺に手は出さないことだな」

「なんか変な脅迫だね」

「明久。いちいち俺達の言うことに反論しなくたっていいんだぞ」

「いや、誰もまともな発言に聞こえないからつい・・・」

このやりとりはそんなにまともじゃないのか？

「とにかくお前ら！ 異端の芽は摘んでおかないと、こいつの暴走は止まらないぞ！ ひるむな！ やってしまえ！」

「・・・こんな奴をほっとく位なら、缶ジュース飲め

ないほうがましだろう」

『『殺せえい！！』』

「しょうがない、後悔するなよ！ 全員深爪で済むと思っな！」

「・・・なんかツツコムのも疲れてきたよ・・・」

「なかなか手ごわかったな」

40人上のクラスメイト（内半分武器持ち）に一齐に襲われたが、全員（足の指まで）深爪にした拳句、それでも止まらなかった者は脛を打ち、更に体に傷をつけずに気絶する程度で斬りつけ、昔の漫画みたいにかいつらを積み上げた。2分ぐらいで一連の作業を終えた。

「どつやら俺の出番だな」

「武器は無くていいのか雄二」

「別に構わん。俺は素手のほうがいい。武器がないと俺には勝てないだろ」

「くっ・・・」

むかつく言い方だが本当のことだ。今までに素手で雄二と戦ったとき、一度も勝ったことが無かった。逆にお互いに何か武器があった場合は俺が全勝したわけだが。

「この際決めようじゃねえか。お互いの得意なやり方で！」

「上等だ！ 覚悟！」

「が、頑張れ正宗！」

山積みになったFクラス集団にまぎれていた明久の声が聞こえた。知らぬ間に明久も巻き込んで一緒に積んでしまったようだ。

『何の騒ぎだ！』

むっ、この声は鉄人だ。

「まずいな。ちょっと派手にやりすぎたようだ」

「捕まったら決着どころじゃないな」

ここは休戦だな。ひとまず隠れることにしよう。

『正宗、雄二！ 置いていかないでよ！』

『吉井が中心か！ 全員指導室に連れて行ってやる！』

『『『ぎゃああああ！ 助けてくれー！』』』

鉄人は山積み of Fクラスメイトを持ち上げ、一度に運んでいた。

Fクラスメイトはともかく、明久は連れてくるべきだったな……

「……で、決闘再開か？」

再び昇降口へ戻ってきた。しかし雄二は随分余裕そうな顔をしている。

「いや、その必要はないさ」

「？ いいのかそれで」

「ああ。当初の目的はもう果たしたからな」

当初の目的？ ……まさか！

「………内容はすべて読んだ」

しまった！ 手紙のことを忘れていた！ ムツツにすべて読まれた後だった！

「おい！ せめて最初に読むべきは本人だろう！ とりあえず手紙を返せ！」

「………別に構わない」

「なにつ いいのかムツツリーニ！ お前も正宗の味方なのか！？」
意外だ。こんなにもあっさり返ってくるとは。

「……………中身を読めば分かる」

便箋を開き、中身の文章を確認。最初に目に入った文字が……

『果たし状』

「……………ラブレターではなかった」

「はははは！ お前らしいな！」

ラブレターでない分、精神ダメージがとにかくでかい……………

『果たし状』

本日午後5時、弥生公園にて待つ。

真* *村』

名前の部分は殴り書きのようになっていて、せいかわり読み取れなかった。知り合いだから良いけどな。

弥生公園といえば、俺の出身中学校に割と近い場所にある、ごく普通の公園だ。

時刻はもう5時30分。だいぶ遅れてしまった。

「それで、手紙の主はどんなやつなんだ？ 知り合いなのか？」

「……………男は興味はないが、面白そうだ」

「雄二、ムツツ。なぜついてきた」

「いやまあ、面白そうだからな」

「……………暇だ」

わざわざ電車まで乗ってついてくるとは……………どんだけ興味があ
るんだ？

「まあいいや。なんていうか、こいつは一言で言つと性格は『うお
おおおおおおお』……………！』熱血漢ってやつ
だろうか……………」

何か叫び声が聞こえてきた。全く、どこの誰が

『遅い！ 何時間待たせてるんだ！ 師走の独眼竜』は！』

ああ、手紙の主だった。

とりあえず1時間も待たせてはいないはず。0・5時間ってとこ

ろかな。

「あー、遅れてすまない。来てやったぞ」

「むっ いつの間に！ 叫んでいたら気付かなかったぞ！ 流石『師走の独眼竜』だ！」

「…………お前、師走の独眼竜とか呼ばれてたのか？」

「俺が名乗ったわけじゃない。どっかの戦国BASARAファンが勝手につけたんだろう」

この名前は、俺が中学のときに他校から呼ばれていた通り名だ。俺は師走中学の出身で、入学よりずっと前から眼帯をしていたからな。

「そいつらはなんだ！ 舎弟か何かか！」

雄二とムッツを見てそういった。

「似たようなものだ。俺の家来たちだ」

「何だと！ 俺たちがいつお前の家来になった！」

「……………友人ですらない」

「いや、お前ら、俺の家に来たことあるだろ？ 『家に来る』って書いて、家来だろ？」

「あゝ、なるほど…………でごまかせると思うな！ それを言うな

ら、お前だって俺の家に来たことがあるだろ！ お前こそ俺の家来だ！」

「……………俺は反論できない……………」

そういえば、誰もムッツの家に行ったことないな……

「とにかく、舎弟でも家来でも友人でも何でも構わん！ 名前だけ教えておいてやる！ 俺の名は真野雪村まのゆきむら！ 元は皐月中！ 現在は睦月高校に通っている！ お前が文月にいることはつい最近になつてわかつた！ 一年ぶりになるが、勝負しろ！」

相変わらず暑苦しい。こいつはいちいち語尾に『！』を付けないと気が済まないのだろうか？

ちなみにこの男・真野の特徴は、なんとなく逆立っている髪型と赤い鉢巻である。衣装をそろえれば、戦国BASARAの真田幸村みたいになるんじゃないだろうか？

そしてこいつは、不良でこそ無かったが、ちゃんと通り名があった。その名も『皐月の若き虎』……………絶対俺と同じやつが名付けただろ。

「まあなんていうかさ、俺のさっきの名前が売れたところにな、別の中学の人間なんだがこいつは何度も何度も腕試しに挑んでくるんだ。で、未だに決着がつかない」

「それを今日つけてやる！ 一年も遠くの学園で身を隠していたとは……………しかも世界的な注目を浴びている学校とは盲点だった……………」

俺がこの学園に来た理由、そもそももつと近くに高校もあったんだが、あの名が悪い意味で響き渡っていたから、成績は何とかなくても受け入れてもらえなかった。

いろいろあつて文月学園に入れたわけだが・・・今はそんなこと考えている場合ではなかったな。

「分かった分かった。とりあえず家来には手を出させないから安心しろ」

「だから、誰が家来だと」

「「いざ尋常に！」」

「始めるのかよ！話を聞け！」

俺はまたどこからともなく木刀を出した。そして奴は 竹槍 だった。

「師走の独眼竜よ！ 1年もの間があつたが、この武器のことは覚えてるだろうな！？」

「あゝ、お前。なんかその名前少し嫌だから、普通に名前で呼んでくれないか？」

「ふむ・・・いやなら仕方ない！覚えてるだろうな！ 独眼！」

省略しただけかよ。

「まあなんとなくな。1本にも2本にも形を変えられる特注品だったな」

「御託はいい！ さっさと始めるぞ！」

「お前が質問したんだろうが！」

そして、こいつは文月学園に来ていたならおそらくFクラスに入ったであろうバカだ。

「ほう、やるじゃないか」

「はっはっは、腕はなまってなかったようだな！」

10分ほど剣と槍を交えていたが、一向に決着が付きそうにない。

「すごいなああの真野とか言うやつ。木刀を持った正宗と互角に戦ってる」

「……………見るだけで燃える」

雄二が冷静に解説していた。ムッツも珍しく見ていて面白く感じているらしい。

「今回こそは！ 25戦24分、1勝させてもらっぞ！」

「気がつけば、中二に名が売れてから、月一回挑んできてるんだっ
たな……でも確か半分くらいは途中で邪魔が入って」

ブルルルルン！　ブルルルルルン！

「そうそう、こんなバイク音が出てきて、そいつらが俺たちの首を
取るつと……つて」

『とうとう見つけたぞ！　師走の独眼竜』！

『おい、よく見ると皐月　いや、現『睦月の若き虎』までいるぞ
！』

『ちょうどいい！　二人まとめて討ち取れ！』

20弱の人数で、金髪・モヒカン・アフロ・眉剃りなど、明らか
な不良がいた。

「はぁ……また面倒なのが来たな……」

「そつだ！　真剣勝負に針をさしたな！」

「真野、それを言うなら水だろ。どうやったら間違えるんだ？　文
字数しかあつてないぞ？」

「そつだ、思い出した！　お前ら二人つてまるで賞金首みたいこそ

「こらに悪名が広まってたんだつたな」

そうだった。自分の名を誇示するために、俺たちを討ち取って強さアピールをしようって輩がよくいたんだよな。高校進学してやめるのもいたかと思えば、まだいるにはいるみたいだ。

『おい、ちょっと待て！ あれ、坂本じゃないか!?!』

『ああ！ あの悪鬼羅刹で有名な!』

『『独眼』、『若き虎』、『悪鬼羅刹』俺たちの全盛期のオールスターじゃないか!』

「ああ、そういうばお前も名前が知れ渡ってたな」

「まさか、お前らと一緒に並べられていたとは、知らなかったぞ」

「あ、あの坂本だったのか！ それが独眼竜の家来になっていたとは……」

「だから家来じゃねえぞ！」

真野は今まで知らなかったらしい。

どうでもいいが、雄二の二つ名をつけた奴は、どうも別人ようだな。

「とにかく、また休戦だな。ここを切り抜けねえと！」

「そつだ！ 決闘も何もない！」

「しょうがない、って、そういえばムツツリーニは？」

『おい、ここに何かいるぞ！』

『何者だ、お前は』

『………通りすがりの……戦場カメラマンです……』

「捕まってるのかよ！」

「だが、確かに戦場だな」

一年前にもこんなこと言ってたような気がする。

『ああ！？ ふざけんな！』

『お前がふざけるな（ビリビリ）』

『ぎゃあああああ！』

捕まっただと思っただら、スタンガンできっちり逃げてきやがった。

「いやあ、よく帰って来た。立派な戦力になるな」

「うおおおおお！ 一匹狼だった独眼竜が、よくぞこんな家来を従えて！」

「だから家来じゃない！」

「……………友達と呼ばれたほうがまだましだ」

「そんなことより、さっさと行くぞ！ 逃げるより蹴散らすほうが簡単だ！」

『う、つ、強え……………』

「ぞつとこんなもんだらう」

全く骨のない戦いだっただ。

「じゃ、帰ろうぜ、家来。真野、また今度な。今度はもう少し間を空けてもらえると助かる」

「うむ！ 次こそは！ それまで更に鍛えていよう！ さらばー！」

真野は走り去っていった。最後まで暑苦しいやつだった。

『おい独眼。お前は、今までどこにいたんだ？ まったく情報をつ

かめなかつたぞ』

不良グループのリーダー格がそういつてきた。

「？ 全く情報が流れてなかったのか？ そんなことは知らなかつたぞ」

文月学園に入学した当初から俺の名前は噂になっていた。そこま
で有名なのに、どうして外に伝わってないのだろう？

「もしかして、学園長が・・・」

「なんだ正宗？ お前、あのババアとつながりがあったのか？」

「あ、いや、なんでもない。それより、もしそうだったらあいつは
どうやって知つたんだろうか？」

真野は俺がいる文月学園に直接来て、果たし状を置いていったの
だろう。

だが、『なぜ全く俺の話が学園外に伝わらないのに真野は分かっ
たのだろう？』

『ま、なんでもいいか。お前が着ている制服で、学校ぐらい分かる。
その制服、世界的に注目されている文月学園だろ』

「・・・・・・違う。これは、借り物だ」

『ほう？ じゃあさっき落としたこの生徒手帳は？』

そいつはなぜか持っていた文月学園の生徒手帳を開き、個人の名前などが載っているページを開いた。

「！返せ！ さ、さっさと行くぞ家来共！」

「だから・・・もう反論も疲れてきたな・・・」

とにかく急いで退散することにした。

『へっへっへ、また会おうぜ、』文月の独眼竜『！』

翌日・・・

「お前ら、昨日の正宗の手紙はラブレターじゃなかった。ただの果たし状だった」

『『『なんだあ〜』』』

「いやいやいや、なんだあ〜ってリアクションはなんだよ！」

ラブレターでさえなければどうでもいいのか。明久まで一緒にな
って言ってたぞ。

それにしても、昨日のことで俺の居場所がばれてしまった。

きっとそのうちに、直接学校まで踏み込んで来てしまっかもしれない。

そうになったら、俺は、どうすればいいだろう？

そのとき、周りの人間は俺をどう思うのだろう？

番外編 式ノ三（後書き）

オマケ程度に書いていたのに随分長く、そして少しシリアスに終わってしまった。

とりあえず次回、いよいよ清涼祭編です！

第貳拾九話 (清涼祭編 スタート) (前書き)

新章スタートです。

思ったより早く書きあげりました。

それと変更点があります。前回のお話の、

『神無月公園』 『弥生公園』 と変更しました。

雄二の中学校とかぶってしまうことに気がつきました。

旧暦は原作含め、一通り使われたわけですが、後は原作に出ようと変更はしません。

うまく辻褄があうように頑張ります。

第貳拾九話 (清涼祭編 スタート)

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください

『あなたが今欲しい物はなんですか?』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

成程、お客さんの思い出になる様な、そういった出し物も良いかも
しれませんね。

写真館とかも候補になりうると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本(訂正) 成人向けの本』

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょうか

吉井明久の答え

『カロリー』

教師のコメント

この回答に、君の生命の危機が感じられます。

伊藤正宗の答え

『真摯さ』

教師のコメント

試召戦争以来、君に何があったんですか。

桜色の花びらが坂道から徐々に姿を消し、代わりに新緑が芽吹き始めたこの季節。

俺たちの通う文月学園では、もうすぐ新学年最初の行事である『清涼祭』の準備が始まりつつあった。

いろんなクラスでいろんな出し物をするわけなのだが、俺たちFクラスはというと・・・

『吉井！ こいつ！』

『勝負だ、須川君！』

『お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！』

何の準備もせず、野球をしていた。

『言ったな！？ こうなれば意地でも打たせるもんか！』

キャッチャーをやっている雄二が指示を出す。ちなみに俺はいる面倒なのでベンチにいることにした。

『次の球は』

普通なら指を使ってサインを出すのだが、俺たちオリジナルのアイコンタクトを使っていた。

『カーブを バッターの頭に』

『それって反則じゃない!?』

野球のルールはよく知らないが、厳密に言うと反則ではないんじゃないか？

ただしデッドボールは普通は狙ってやらないだけなのだろう。

「貴様ら学園祭の準備をサボって何をしている!!」

あ、この前新しく担任になった鉄人だ。暴力的で筋肉的である28号と同等の力も持ってそんな鬼教師である。

「吉井！貴様がサボりの主犯か！ それと傍観側から余計なことを思った奴がいるだろ！」

はて？ そんなのやつがどこに と思っていたら思いつきりこつちを見ていた。

『『『散開!』』』

みんなで一斉に散らばったのだが、鉄人は俺と明久だけを追いかけてきた。

「ゆ、雄二です！ クラス代表の坂本雄二が野球を提案したんです！」

明久はあっさり仲間を売ったらしい。そんな考えはよくない

「そつだ！ 雄二が『鉄人は同名の28号と引き分けられる』とか言っていましたよ！」

かもしれないが、あえて存分に使わせてもらおう！

そうしたところで、当の本人を見てみると・・・

『フォークを 鉄人の 股間に』

「違う！ 今は球種はコースを求めているんじゃない！ しかもそれをやったら単に僕が怒られるだけだよね！？」

とりあえず変化球は関係ないだろ。いずれのせよ、なぜ俺たちの弁護を全く聞かず俺たちを追ってきてるんだ！？」

「よし明久！ 俺が仕留める！ ボールを貸せ！」

「え？ だ、大丈夫なの？」

「任せろ！ 流石の28号も体の急所にクリーンヒットすれば動きは止まるはずだ！」

「いや、そういう問題じゃなくて・・・もつこの際任せろ！」

明久からボールを貸してもらった。

「よし！ 覚悟しろ、鉄人28号！」

「やっぱり言っているだろうが！」

この前ゲームで出てきた必殺球を再現してやる！

「食らえ！ ライジングニヤットボール！！」

あえて元ネタは言わないが、これは剛速球のストレートである。

思いつきり力を込めたその球は見事に……………

『うぎゃああああー！！！！』

鉄人とは違う、誰かの悲鳴が聞こえた。

「ええ！ 正宗の投げたものすごい速そうな球が全く違う方向に走っている須川君の頭部に直撃した！？」

どうやら外してしまっただけらしい。

「正宗。前に野球とかサッカーとかスリッパ卓球とかをやったときにも思っていたけど……………君はやっぱりノーコンだね」

「……………飛び道具はあまり使わない主義だ」

ボールをどこかへ投げたり飛ばそうって時に、どうやっても明後日の方向、いや、明々後日あしたくらいに別方向へ飛んでしまう。だからさっきの野球も進んで参加しないようにしていたんだ。

「全員教室に戻れ！この時期になって学園祭の出し物が決まって無いのはうちだけだぞ！」

それはどこかが早ければどこかは遅れるわけだから、仕方が

「仕方がないわけがないだろ（ガツンッ）」

追いつかれてしまっていた。脚力でも鉄人には敵わなかった。

「さて、そろそろ春の学園祭、“清涼祭”の出し物を決めなくちゃいけないんだが……」

どう見てもだるそうに言った。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので後は任せた」

まさかの（いや必然の）人任せだった。こんな代表だったら野球になっても仕方がない。サボるのは賛成だったが、野球だけは反対だったのに。

そして適当に話を聞き流していると、どうも島田が実行委員になりそうであった。

雄二がダメ押しで副実行委員も決めようとするので、

『吉井が適任だと思っ』

『やはり坂本がやるべきじゃないか？』

『姫路さんと結婚したい』

『ここは須川にやってもらった方が』

『やっぱ我らが筆頭・伊藤にでも』

俺の中の『伊達政宗』、この肩書きが仇になるとは、余計なことしてくれたな。

あと姫路へのラブコールは一生かなわないと思うぞ。

「ワシは、明久か正宗が適任だと思うのじゃが」

「って秀吉、僕もそういう面倒な役は、出来ればパスしたいな〜なんて」

「同意見だ。俺は面倒とかの以前に、こういう企画事は苦手なんだ」

『自分で企画し』、人に指示することは全く自信がない。

「よし。じゃあ島田。今拳がった連中から二人を選んでくれ」

「そうね〜。それじゃ・・・」

島田が壊れかけの黒板に候補者の名前を書いていった。

『候補1……吉井』

『候補2……明久』

なるほど。島田は明久と一緒に仕事をしたいわけか。

なんだかんだで明久が副委員に決まった。姫路は少し複雑な顔をしていたが。

さて眠い。少し寝よ。

『候補？ 写真館「秘密の覗き部屋」』

『候補？ ウエディング喫茶「人生の墓場」』

『候補？ 中華喫茶「ヨーロッパ」』

ふと目を覚ますと、黒板にこんな文字が書かれていた。

「・・・・・・・・なにがあつたんだ・・・・・・・・」

どんなクラスだったらこんな意見が出るのだろう。

もしかしたら明久の書き方が悪かったのかもしれない。

しかし、妙に周りが活気付いていた。よく見ると鉄人が現れたよ
うだが、それだけではないはずだ。

「おい明久。なんでこいつらこんなにやる気になってるんだ？」

「あ、起きたんだ。鉄人がさ、稼ぎを出せれば設備を向上できるんじゃないかって言ったらこうなってくれた」

なるほどな。流石にみかん箱が好きな奴はいないだろうな。

『それで、どうする？ 利潤の多い喫茶店が良いんじゃないか？』

『いや、初期投資の少ない写真館の方が』

『それだと、運営委員会の見周りで、営業停止処分を受ける可能性もあるぞ』

『中華喫茶ならハズレはないだろ』

『それだと真新しさに欠けるな。汚い所為であまり人が来ない旧校舎だと、その特徴の無さは致命傷じゃないか？』

『ウエディング喫茶はどうだ？』

『初期投資が大きすぎる。たった2日の清涼祭じゃ、儲けは出ないんじゃないか？』

『リスクが高いからこそ、リターンも大きいはずだ！』

サボったのが嘘みたいにやる気があるな。だが、まだまとまりはないようだ。

『お化け屋敷とかの方が受けると思う』

『簡単なカジノを作ろう』

『焼きとうもろこしを売ろう』

ダメだ。どんどん違う方向に進んでいる。

「アキ。坂本を引っ張り出せない？」

「うーん、難しいよ。雄二は興味のないことには驚くほど冷たいから」

そういわれると、そういう節はいろいろあったような気がするな。

「ねえ正宗。何とかならないかな？ というか正宗がどうにかできない？」

「明久・・・さつきとは違ってお前から頼ってくれるとは・・・」

「そうだよ。Bクラス戦の時だって、雄二がいないとき見事にみんなをまとめられたじゃないか」

「いや、だがそれは俺じゃなくて」

「大丈夫だよ。スポーツでいろんな能力が高いけどボールを飛ばすときだけありえないコントロールを起こすのはともかく、例え『伊達政宗』じゃなくても、君には元から統率力を持っていると信じているから」

なんか明久には珍しくうまく言いくるめられてしまった。前半少し五月蠅かったが。

「まあひとつ教えてやろう。必要なのは眼力だ」

「参考になったわ」

結果から言うと、クラスをまとめることに成功した。

誰しも、本気の中で挑まれれば話を聞きたくなる。しかし、助言されて簡単にできるものでもない。島田なら元からできただろう。しかし、明久や姫路はこういう役に向かないほうだ。雄二の人も間違いないじゃなかったようだ。

多数決の結果、俺も挙げた中華喫茶に決まった。

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

そもそもの立案者・須川立ち上がった。

「……………（スクツ）」

続いてムッツ。

「ムッツリーニ、料理なんてできるの？」

「……………紳士の嗜み」

盗撮が趣味の人間が紳士かどうかは知らないが、意外と料理もできそうだ。

「まずは厨房班とホール班に分かれてもらうからね、厨房班は須川と土屋のところ、ホール班はアキのところを集まって！」

うんうん、やっと計画らしくなってきたな。

「それじゃ、私は厨房班に」

「ダメだ姫路さん！ 君はホール班じゃないと！」

明久。良くぞ止めた。あの霸王色は危険だからな。

「え？ 吉井君、どうして私はホールじゃないとダメなんですか？」

そうくるよな。本人は自信のあることだから、発揮したい気持ちもよく分かる。

「あ、えーっと、ほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客様に接した方がお店として利益が痛あゝっ！ み、美波！ 僕の背中にはサンドバッグじゃないよ！？」

明久、意外と女を口説く才能はほんの少しあるんじゃないだろうか。

「か、可愛いだなんて……吉井君がそういうなら、ホールでも頑張りますねっ」

いまひとつ根本的などころを解決しきれてないが、どうにかなるようにしよっ。

「じゃあウチは、厨房にしようかな？」

「うん。適任だと思う」

口説く才能を撤回だ。相手によって態度変えてるだけだ。

「それなら、ワシも厨房にしようかの？」

「秀吉、何バカなことを言ってるのさ！？ 秀吉はそんなに可愛いんだから、もちろんホールに決まってみぎゃああっ！ み、美波様！ 折れます！ 腰骨が！ 命にかかわる大事な骨が！」

「・・・ウチもホールにするわ」

「そ、そうですね・・・。それが、いいと、思います・・・」

大変だな。自業自得だが。

「じゃあ明久。俺は厨房にするぞ」

「ん？ 正宗、料理できるの？」

「歴史上の伊達政宗の趣味は料理だ。そして俺はその子孫（自称）だ」

「それほど当てにならないよ」

「まあ任せろって。多分どうにかなる」

まあ本当は『顔』をあまり表に出したくないだけなのだが、黙っておこう。

なにはともあれ、今年は波乱の学園祭のような予感がした。

第貳拾九話 (清涼祭編 スタート) (後書き)

意見・感想・質問・お待ちしています。

第参拾話（前書き）

もう少し更新ペース上げねば・・・

第参拾話

問 以下の問いに答えなさい。

『バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『リトアニア エストニア ラトビア』

教師のコメント

そのとおりです。

伊藤正宗の答え

『バハマ ルーマニア トルコ』

教師のコメント

国の頭文字を取ったわけではありませんよ。

土屋康太の答え

『アジア ヨーロッパ 浦安』

教師のコメント

土屋君にとつての国の定義が気になります。

吉井明久の答え

『香川 徳島 愛媛 高知』

教師のコメント

正解不正解の前に、数があっていないことに違和感を覚えましょう。

「アキ、伊藤、ちょっといい？」

HRが終わり放課後、明久と帰ろうとしたら、島田に呼び止められた。

「ん、なんか用？」

「用って言うか、相談なんだけど」

「なんだかただならぬ話のようだな。」

「相談？ 僕らでよければ聞かせてもらうけど」

「うん、ありがと。多分、二人に言うのが一番だと思うんだけど
その、やっぱり坂本を文化祭に引っ張り出せない？」

雄二か・・・どうやら自分だけでは喫茶店の成功は難しいと考えているのだろう。ムキになるうとしないだけ賢明な判断だが、俺の見た感じだと、そのままいけなくもなさそうだが・・・

「うーん、それは難しいなあ・・・。雄二は興味のないことには徹底的に無関心だから」

「そうだな・・・。なんか自分もかわることでないとな」

「でも、アキ達が頼めばきつと動いてくれるよね？」

島田の何かを期待したような眼差し。

「え？ 別に僕等が頼んだからって、アイツの返事は変わらないと思っけど」

「むしろひどく断るかもな」

「うっん、そんなことない。きっとアキと伊藤の頼みなら引き受けてくれるはず。だって」

「そりゃ確かに、よくつるんではいるけど、だからといって別に」

「だってアンタたち3人とも、愛し合ってるんでしょっ？」

「もう僕お婿にいけないっ！」

明久は婿に行く方なのか？

「いわゆる3（ピーーーー）？」

「女子がそんな言葉を使うな！ どこで覚えた！？ あと愛し合うのは事実無根！」

俺の島田のイメージが台無しだ。島田のことは恋人程でもないが、ちよつと気に入ってたのに……。あと、ピー音が聞こえたような気がするが、全く意味がない！

「誰が雄二なんかと！ 正宗はともかく、僕は、断然秀吉の方が良いよー。」

「……あ、明久？」

秀吉と俺の声が重なった。いろいろとびっくりした。

「そ、その、お主の気持ちは嬉しいが、ワシらには色々と障害があると思うのじゃ。ホラ、その、歳の差とか……」

「そうだな……俺も嫌いじゃないぞ、明久」

「秀吉、正宗！ 違うんだ！ もの凄い誤解だよ！ さっきのはただの言葉のアヤで！ 正宗は受け入れようとししないで！」

「……振られてしまった。あくまで『雄二よりは』の意味だったんだが……」

「それと、僕等のある障害は決して歳の差じゃないと思う！」

俺でも秀吉でも性別の差はあるだろ。しかも、明久は叫ぶほど顔が赤くなっていくぞ。

「それじゃ、坂本は動いてくれないってこと？」

「え？ あ、うん。そういうことになるかな？」

なんとなく落ち込んでいた俺を差し置いて、本題を進めていた。

「なんとかできないの？ このままじゃ喫茶店が失敗に終わるよう……」

「なんなんだ？ そんなに文化祭には思い入れがあるのか？ それとも設備を良くしたいからか？」

「そんなことじゃなくて、もっと深刻な話なの」

「え？ どういうこと？」

こいつはただ事じゃないようだな。

「本人には誰にも言わないで欲しいって言われてたんだけど、事情が事情だし……。けど、一応秘密の話だからね」

「う、うん。分かった」

真剣な顔の島田。こういうのはよっぽど重要な話なのだろう。

「実は、瑞希なんだけど」

「姫路さん？ 姫路さんがどうかしたの？」

「あの子、転校するかもしれないの」

「ほえ？」

なんかまぬけな返事だな。それにしても、姫路の転校か。島田にとってはFクラスで唯一の女友達、明久は好きかも知れない相手だから、それは一大事だ。でも俺にとってはどうなんだろう？ 1年のときにも特に面識はないし、ほぼ初対面でちよつと怖がられた。試召戦争で共闘するときもあったが、それ以外は特になし。そう考えると、俺の人間関係には特に支障は……

「なに伊藤？ 瑞希の転校は自分には関係ない、ってような事考え
てない？」

「そ、そんなことはないぞ！」

関係ないわけがないよな。試召戦争の主戦力だから。これから少
しずつでも仲良くなれるようにしたい。

「それよりも、明久が処理落ちしかけとるぞ」

「秀吉・・・モヒカンになった僕でも、好きでいてくれるかい？」

どんなことを考えてたらそんな返答になるのだろう。

「とりあえず、現実に戻れ！（ポカッ）」

「・・・はっ！？ ちょっとトんでた！ 美波！ 姫路さんが転
校ってどういうことさ！」

明久が気を取り直した。力ずくで叩けば確実ではあるが、うまい
具合に叩けば軽くても大丈夫だ。

「姫路の転校と文化祭の成功はどう関連するんだ？」

「確かに、全く話がつながらんのじゃが」

「それがね、瑞希の転校の理由が『Fクラスの環境』なんだから」

「ってことは、転校は両親の仕事の都合とかじゃなくて」

「そうね。純粹に設備の問題ってことになるわ」

なんか話がつながってきたな。成績は優秀だが体の弱い姫路にみかん箱とござという設備。そして成績最低クラス在籍。人間的にも設備的にも姫路に相応しくないと判断したのだろう。

「なるほどのう。じゃから喫茶店を成功させ、設備を向上させたいのじゃな」

「うん。瑞希も対抗して『召喚大会で優勝して両親にFクラスを見直してもらおう』とか考えているみたいなんだけど、やっぱり設備をどうにかしないと」

姫路も自分なりに頑張っているようだ。だが、それでもFクラス的环境は変わらない。環境もどうにかしないと不十分だな。

「……アキはその……瑞希が転校したりとか、嫌だよね……」

島田が探るような目で明久を見ていた。

「もちろん嫌に決まっている！ 姫路さんに限らず、それが美波や秀吉であつても！」

予想通りの返事だ。こいつはここで断るほど冷たい人間ではないことは分かっている。だが……

「あ、当然正宗もね」

うん。少し遅かったが、俺を忘れてなくてよかった。

「そっか……。うん、アンタはそっだよね！」

島田がうれしそうに頷いた。よかったじゃないか。

雄二とかムッツとか忘れてるけど、雄二はどこにでも行ってしまえって感じた。

「まあ俺も、この学校以外居場所はないしな……」

「え？ どういうこと？」

「他の学校には行けないってだけだが……。ってそんなのはいいだろ。とにかく、雄二を引っ張り出そうか」

「ようし、なんとしても雄二を炊きつけてやるさ！」

「そうじゃな。ワシもクラスメイトの転校と聞いては黙っておれん」

「それじゃ、まずは雄二に連絡を取らないとね」

そういつて明久が携帯を取り出して雄二の番号にかけた。教室にはいないけど、なぜか鞆は残っている。まだ学校内にはいるだろうが、何をしているんだ？

『もしもし』

「あ、雄二。ちょっと話が」

『明久か。丁度よかった。悪いが俺の鞆を後で届けに　げっ！』

翔子！』

「え？ 雄二。今何をしてるの？」

『くそつ！ 見つかつちまった！ とにかく、鞆を頼んだぞ！』

電話が切れた。常人より耳の良い俺は会話をよく聞き取れた。

「坂本はなんて言ってた？」

「えつと、『見つかつちまった』とか『鞆を頼む』とか言ってた」

「・・・なにそれ」

『使えないわね』と言いたげな眼差しだ。誰に対してか知らないが、頼んどいてそれはないだろ。

「大方、霧島翔子から逃げ回っているのじゃろう。アレはああ見えて異性には滅法弱いからの」

そつだ、あんまり意識してなかったが、あいつって女に弱い節があるな。覚えておこう。

それにしたつて、なぜ雄二は容姿端麗・才色兼備な幼馴染に追いかけて逃げてているのだろう？ ラブコメ系の漫画や小説なら最高のシチュエーションなのに。

「そつすると、坂本と連絡を取るの難しいわね」

島田がため息をつくが、俺はむしろ逆だと思う。

「いや、これはチャンスだ」

「え？ どういうこと？」

「雄二を喫茶店に引つ張り出すには丁度いい状況なんだよ。うん。ちよつと3人とも協力してくれるかな？」

難しい状況にこそチャンスがある。まさに今がそれに近い。

「それはいいけど……坂本の居場所は分かっているの？」

「大丈夫。相手の考えが読めるのは、なにも雄二だけじゃない」

「何か考えがあるようじゃな」

「まあね」

「今回は主に明久に頼もう。バックアップは任せとけ」

「ありがとう。正宗もついてきてくれる？」

「もちろん。行こうか」

そして教室を出た。雄二のいつもの行動から考えると、『敵から逃げる時に、当たり前前の場所には行かない』ような感じだった。今回もそんな感じに違いない。

第参拾話（後書き）

オリジナルのバカテストとかも載せたいので、今回はとりあえずここまで。

原作に順守しすぎました気がします。

第参拾巻話（前書き）

今回のバカテスト、ラジオ版からのネタです。

第参拾壹話

問 以下の問に答えなさい。

『「人」という字の成り立ちについて説明しなさい』

霧島翔子の答え

『立っている姿』

教師のコメント

正解です。

姫路瑞希の答え

『支えあっている姿』

教師のコメント

それは金八先生から生まれた意味だそうです。しかし多くの人が感動するような意味なので、こつ答えた人にも得点をあげます。

久保利光の答え

『僕と吉井君がつながってできている』

教師のコメント

考えを改めましょう。吉井君が寒気を感じているようです。

「それじゃあ明久。中を見てきてくれ」

俺と明久は今体育館の女子更衣室の前にいる。普通は女子が入りにくい男子トイレや男子更衣室に隠れるものだが、雄二のことだから裏をかいて男子禁制の場所に隠れていると推理した。

「え？ 僕が行くの？ 見つかったらどうなると思ってるの？」

「明久。こういうときだからってわけじゃないが、もし今この更衣室に誰もいなかったら、お前は入ってみたいか？」

「入ってみたいです 女子がいれば、倍うれしいです」

キツパリと言いやがった。しかもそれ以上の願望まで爽やかに求めた。

「そうだろ。今がその状況だ。俺の索敵スキルがそう告げている」

「索敵スキル・・・？」

「俺は誰が入らないように見張っておくから、お前は雄二を探せ。少なくとも女子はいない。なぜか男子生徒が一人、部屋の隅でしゃがみこんでいる気配がある」

「うん、この状況だと確実に雄二だね。よくそこまで正確に割り出せるね」

「細かいことは気にするな。早く探索してこい」

「OK。堪能・・・じゃなくて、探索してくるよ」

一瞬欲望の一端が聞こえた気がするが、言い間違えただけだろう。

さあ、ここには誰も入れさせないぞ！ ミッション・スタート！！

「あら正宗。どうかしたの？」

「・・・・・・・・優子。お前は どうしてここに？」

女子更衣室の前で警備していて、早速現れたのは、体操服姿の優子だった。

どうしようか。初っ端から厳しい。

「アタシはただ、そこで制服に着替えようとしてるだけよ。むしろ、男で女子更衣室の前に立っているアンタのほうが異常よ」

優子に限らず、ここに用がある女子なら全員が思うことだろうな。

「あー、なんだ。実は今この中でバルサン焚いてるんだ。だから入れないぞ」

咄嗟に思いついた嘘だが、我ながら画期的なごまかしだったと思う。

「嘘でしょ。アタシの索敵スキルでは、中に二人、誰かがいるから」

「……………お前も使えたのか」

やっぱりこいつは昔からこういう能力も長けてるんだよね……

「早く着替えたいから、そこをどいてちょうだい」

優子が明久たちを察知したということはまだ中に二人がいるんだな。確かに俺も気配を感じる。早く脱出すればいいのに、何をしているんだ。

「ええい！ ここを通りたければ、俺を倒してから通れ！」

「……………アンタ、この前同じ様なことを言ってどんな結果になったか覚えてる？」

「……………すいませんでした」

「先生！ 覗きです！ 変態です！」

済まない明久。強大な戦力に屈して素通りさせてしまった。

「逃げるぞ明久！」

『了解っ！』

よし、明久と雄二は窓から逃げたようだ。

って、さっきの声に反応したのか何かが猛スピードで走ってくる！

『吉井と坂本だと！？ またあいつらかつ！』

この声は・・・鉄人！ 今のところあの二人が犯人みたいな扱いになってるけど、ここにいると俺も共犯にさせられてしまう！（
まあ実際共犯なんだが）

さっさとここから離れよう。さてどこに行こうか。

「（ちょっと、正宗？）」

誰かが呼びかけてくる。振り返ると、優子が手招きしていた。

「どうしたんだ優子。俺ちよつとここから逃げないといけないんだが・・・」

「それは後にしなさい。それよりも・・・」

俺にとってはとりあえず逃げるほうが大事なのだが。

「アンタは、どうして女子更衣室の覗きに加担したの？」

「え？・・・それは、えっと」

なぜか本気の目で訴えてくる。なんとなく何かを期待しているかのようだ。

「もしかして、アタシの着替えを覗きたいとか」

「・・・はあ？ なぜそうなるんだ？」

「先生！ ここにも加担した人がいます！」

「おい！ なんてことを叫んでいるんだ！」

思いつきり時間の無駄だった！ もうまもなく鉄人が来そうなのに、ここにいたら逃げる術はない！

「とりあえず、天井辺りに隠密しようか・・・」

『少しでも興味を示してくればよかったのに・・・』

『そこだ！』

ガラガラ ドッサーン！

「くっ、よく分かったな！」

「所詮隠れたところで、貴様は気配まで消せてない！ まだまだ未熟だな」

まさか、鉄人まで索敵スキルに似たようなものを持っていたとは・

・

「ところで、明久と雄二はどうしたんだ？」

俺を追う余裕があるってことは、あいつらのことをほっといてもよいくらいな余裕ができたってことだが・・・

「俺としたことが、取り逃がしてしまったな。あいつら、こういうときに限って無駄な運動神経を発揮している」

「ああ、それは同感ですね」

「しかし、お前はこうして捕まえることができた。補修室で話を聞こうか」

そういつて右腕をつかまれた。

「は、離せ！」

「無駄なあがきはよせ。お前は武術センスは高いが、腕力はそれほどない。力づくで離せると思うな」

なんて馬鹿力なんだろう。確かにまともに解放できないな。

「じゃあ力づく以外の方法を使おう。これを食らえ！」

掴まれてないほうの手で鉄人の口にあるものを押し込んだ。

「ご、ゴホッ！ これは、ブーツジョロ」

「よくご存知で。これは世界一辛い食べ物と言われている、ブーツジョロキアです」

珍しい。鉄人がここまで苦しそうにしてるなんて。あれだけ強そうな体でも、体の内部は鍛えていないのかもしれない。

それでも手を離してはくれないが・・・

「煙幕！ そして、さらばです！」

「逃げられるわけが・・・ん？ この腕は、作り物!？」

実は偽者だった右腕を取り外して（ルパン3世辺りが使ってたような気がするアレだ）、窓を開けて外に出て、教室に向かうことにした。

『明日は覚えて　　ゴホッ!』

「あんまり大声出さないほうがいいですよー！」

明日がなんとなく怖いが、明日のことは明日考えよう。

「ただいま」

「あつ！ 遅かったじゃない、伊藤！」

Fクラスの教室に戻ると、島田だけがいた。

「おう、鉄人から逃げるのにちよつと手こずってな。それで、明久と雄二は？ あと秀吉は？」

そこから島田から雄二の話していたことを聞いた。3つの問題点、「教室の設備」「教室の環境」「姫路の成長を促す学習環境」についてのこと。その解決法など。

「それで今、アキと坂本は学園長に直訴しに行ってるの」

ちなみに秀吉は部活に行ったらしい。

「じゃあ俺も学園長に頼みに行つてこよう」

「え？ アンタが入ったところで、そんなに効果は」

「任せとけ。いろいろあるから」

「さて、学園長室まで来てみたが・・・」

中の気配を察知してみる。まず手前に俺と同じくらいの年の男子が二人。おそらく明久と雄二だろう。

そして少し奥に椅子に座っている老婆。学園長だな。

しかしなんだろうか？ 人間は3人しか中にいないはずなのに、他にもその話を聞いている者がいるような気配がする。

「考えすぎか・・・」

とりあえず入ってみることにしよう。もう少し何か分かるかもしれない。

「失礼します」

「あ、正宗だ。お疲れ様」

「おう、明久。鉄人は厄介だった。話は島田から聞いているぞ」

「うん、雄二がこのババアに巧みに交渉したんだけど、却下されちゃって・・・」

「正宗、この戦国時代からの老いぼれの説得を手伝ってくれ」

「！・・・学園長・・・アンタ、そんな時代に生きてたのか！？もしかして、俺の先祖と知り合いだったり・・・」

「するかボケ」

かなり冷静に返された。流石に失礼だったかもしれない。

「設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ。なまっちろいガキ共」

なんというか、雄二も相当キレながら交渉したんじゃないかな。

「それは困ります！ 僕らはともかく、体の弱い子が倒れて」

「と、いつもなら言ってるんだけどね……可愛い生徒の頼みだ。こちらの頼みを聞くなり、相談に乗ってやるうじやないか」

珍しいんじゃないか。交換条件でも生徒にチャンスをくれるというのは。

「……………」

雄二は何か考え込んでいる。怪しむのも当然だろう。

「その条件って何ですか？」

それを見かねたように、明久が話を促した。

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

「ええ、まあ」

「じゃ、その優勝商品は知ってるかい？」

「え？ 優勝商品？」

明久は賞品があることは知らなかったようだ。特に大きな興味はなさそうだったからな。そもそも勝ち目は無いし。

「確か、賞状、トロフィー、『白金の腕輪』、『如月ハイランド』のチケットだったかな？」

「『プレオープン ペアチケット』が抜けてるさね」

「正宗、よく知ってるね」

「まあどれもそんなに興味はないけどな」

なぜか雄二は最後の商品に反応したようだ。

「で、それと交換条件がなんの関係があるんですか？」

「手っ取り早く言うと、商品を回収したいのさ」

「回収？ じゃあ商品を出さなければ良いじゃないですか」

「明久。それで召喚大会に参加したい人間が出ると思つか？」

「あ、そうか、それもそうだね」

「流石に優勝商品を出さないわけにはいかないだろう」

「まあ全部じゃないさね。回収するのは副賞の『如月ハイランド』

プレオープン ペアチケット』だけでいいんだよ。でも、如月グループとの契約で、それも行かなくて、今更覆すわけにはいかないんだよ」

契約する前にどうにか・・・ってわけにはいかなかったんだろうな。学園長はシステムの研究で忙しいらしいから。

「まあ契約についてはともかく、どうして回収しないといけないんだ？」

「・・・そのチケット、ちょっと悪い噂があつてね」

悪い噂か・・・如月グループってのはそこそこ有名な企業だ。そんなに悪いことはできないはずじゃあないか？

「如月ハイランドでジnkクスを作ろうとしているのさ。』ここを訪れたカップルは幸せになれる』っていうジnkクスをね」

それだけを聞けばいい話なんだが。

「？ それのどこが悪い噂なんですか？」

「そのジnkクスを作るために、プレミアムチケットを使ってやって来たカップルを結婚までコーディネートするつもりらしい。企業として、多少強引な手を使つてもね」

「な、なんだと!？」

突然雄二が大声を上げた。しばらく考え込んでいたから忘れかけていたが、なにかまずいこともあるのだろうか。

「どうしたのさ、雄二。そんなに慌てて」

「大方、霧島に『チケットが手に入ったら一緒に行ってほしい』と脅迫されたのか？」

「慌てるさ！　そして大当たりだ！　今ババアが言ったことは、『プレオープンプレミアムペアチケットでやってきたカップルを如月グループの力で強引に結婚させる』ってことだぞ！？」

「う、うん。言い直さなくてもわかってるけど。そして死ねばいい」

「落ち着け明久。確かにあの雄二が美人の幼馴染に結婚を脅迫されてるのが羨ましいのは分かるが、いいじゃないか。当人にとっては不幸みただから。それよりも、ああいう雄二は珍しいから、目に焼き付けておけ」

雄二のうろたえる姿はなかなかない。霧島が見たらどうという反応をするだろうか。

「そのカップルを出す候補ってのがわが文月学園ってわけさ」

確かにこの学校は、全国的に一目置かれてるし、なぜか美人ぞろい。どこかの企業が目をつけても不思議じゃない。

「そんなわけで、本人の意思を無視して、うちの可愛い生徒の将来を決定しようって計画が気に入らないのさ」

なるほどな。意外と生徒のことを考えている。本当に可愛く思っているのかは疑問だが。

しかし、他に別の理由がある予感がするのは、俺の思い過ごしだろうか。

「・・・要するに、召喚大会の商品との交換ってわけだな」

「そういうことさな。それができるなら教室の改修くらいしてやるうじゃないか」

なるほど。だったら召喚大会の優勝者から

「無論、優勝者から強奪なんて真似はするんじゃないよ。譲ってもらうのも不可だ。私はお前たちに召喚大会で優勝しろ、と言ってるんだからね」

とはいかないか。これは難しい条件になった。

「・・・僕たちが優勝したら、教室の改修と設備の向上を約束してくれるんですね？」

「何を言ってるんだい。やってやるのは教室の改修だけ。設備についてはうちの教育方針だ。変える気はないよ」

やっぱりそうだな。他のクラスにも示しがつかないから・・・それに、学園長にとっては極秘の取引のようだから、できるだけ内容を隠したいのだろう。

「ただし、清涼祭で得た利益で何とかしようっていうなら話は別だよ。特別に今回だけは勝手に設備を変更することに目を瞑ってやってもいい」

「利益を出せるかがそもその問題だがな。俺たちとしては、どちらかと言えば清涼祭前に教室も設備もよくしておきたいんだが、それはどうにかできないか？」

そのほうが客が寄り付いて利益を得やすいからな。

「ダメさね。前払いは『利益で設備を変更すること』だけ。そういうところはここを使うんだよ」

そういつて自分の頭を指さした。

「・・・それもまた教育方針というわけか」

「悪い状況を打開する力つてのは、Fクラス《弱い者共》には必要だよ」

「「「「「「「「「「「「」

なんかすごくむかつく言い方だ。だがそれ故に焚きつけられた気がする。

「まあそこまで言うならそうしてみようか」

「そのとおりだ。自力で踏ん張ってみようじゃねえか」

雄二もいつの間にか正気に戻ったようだ。

「そだね。この話、引き受けます」

「そうかい。交渉成立だね」

学園長の『計画通り』という不適な笑み。なんとというか、けっこう使いまわされてるネタだよな。

「ただし、こちらからもひとつ提案がある」

ここを出ようと思った瞬間、雄二が学園長に話しかけた。

「なんだい？ 言ってみな」

「と、その前に、俺たち3人の中で誰が出るかだが」

「そこはやっぱり正宗でしょ。点数もそこそこあるし、召喚獣の扱いもうまいし」

「それは構わないが、2対2のタッグマッチだろ？」

少なくとももう一人選出する必要がある。少しでも点数の高い雄二か、召喚獣操作が慣れている明久か……

「そうだ、言い忘れていたよ。伊藤、お前は召喚大会に出るな」

「「「なんでだよ！」「」」

3人一緒にハモった。どれだけ俺たちの条件を悪くするつもりなんだ？

「伊藤には別件で頼みたいことが複数ある。引き受けてくれれば、報酬がある。それと、アンタは『課せられた役職』があるだろう？」

む、その話か。でも、優先するべきは・・・

「・・・悪いが、クラスのことを優先したい」

「その報酬が、『クラスのこと』に関わってもかい？」

「・・・設備の向上に関わるか？」

「関係ないと言わない。ただなにもしないと、アンタらの利益とかにも関わってくるよ」

考えてみれば、もしかしたら俺が出なくても、明久と雄二で組ませても勝てるか分からない。でも、勝ち進めば学園外からのギヤラリーなんかも増えてくる。そうすると俺の存在を知っているやつも・・・

「・・・それは脅迫か？」

「とんでもない、忠告さね」

どうやらお互いにただ事じゃない用件らしい。

「分かった。その仕事は引き受ける。詳しいことは後で聞こう」

「よく分からないが、召喚大会を辞退するほどのことなのか？ 試合の合間を縫ってできることじゃないのか？」

「そうさね。けっこう時間もかかるから、他の暇なんてほとんどないよ」

「ってことは、中華喫茶の仕事の時間もそんなにないのか？」

「ふむ・・・それくらいの時間ならどうにかなるかもね。でも召喚大会は諦めてもらうよ」

「まあいい。それより、こっちの話に戻させてもらう」

雄二の持ちかけた提案は、『対戦表が決まったら科目を指定させて欲しい』ということだった。確かにそれだけで少しは有利になると思うが、様子を見る限り別の理由もありそうだ。

結局召喚大会は、明久と雄二で出場することになった。きっとあの二人ならうまく優勝してくれるだろう。そう信じよう。

「さて、お前に与える仕事なのだが・・・」

学園長室を出て帰るときに、あの二人には用事があることにしてまた戻ってきた。

「その前に伊藤。お前、学園外で一騒ぎ起こしたそうじゃないか」

あ、雄二やムッツも連れて真野と戦ってきたときのことか。

「……………よくご存知で」

「ほとんど出回ってないけど、学園の情報網を侮るんじゃないよ」

「それで、そのとき初めて俺の所在がばれたんだが……………」

「全く……………1年間の隠蔽も大変だったんだよ」

やっぱり学園長が手回ししてくれてたのか。いろいろ感謝するべきかな。

「それはそれとして、今回の仕事のことだが……………」

とりあえずこの件で恩返しとなればいいか。

「正直、引き受けてくれなかったらいろいろヤバイことになってたんだよ」

「断れる立場でもないことは分かってる。だが、いつもと用件は違うようだけどな」

「そうなのさ。アンタにかかってるんだ。しっかりと働いてくれよ。なんせアンタは」

そう、俺は学園機密で、『観察処分者』にも並ぶようなある肩書きを背負っている。知っている人間も生徒はおるか、教師の中でも極わずかの人間だけだ。その名も……………

「裏・観察処分者なんだからね」

第参拾壹話（後書き）

次回から波乱の清涼祭スタートです！

これから冬休みに入るので、更新ペースを上げていききたいと思います。

第参拾貳話（前書き）

冬休みに入り、少し時間ができました。

目標は3日に一度は更新できるようにします。

第参拾弐話

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートに御協力ください

『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか?』

姫路瑞希の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

土屋康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスの様に若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られる位のものを用意し、裏には口ゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを……』

教師のコメント

裏面にまでびっしりと書き込まなくても

吉井明久の答え

『ブラジャー』

教師のコメント

ブレザーの間違いだと思っています

伊藤正宗の答え

『メイド服。ツンデレだとなおよし』

教師のコメント

君の趣味がなんとなく分かってしまいました。意外すぎて驚きです。

side 明久

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」

「ホント、いつもはただのバカなのにね」

バカ、のところだけは強調して言った。

いよいよ学園祭の一日目が始まった。

一時はどうなるかと思ったが、雄二の指揮によって、室内の装飾から、実はきれいなテーブルクロスでごまかしているみかん箱で作ったテーブルなど、準備は完璧にできて「……………
飲茶も完璧」「うわっ！ ムツツリーニ、ナレーションに被せてこないで」

別に誰かに向けてのナレーションってわけでもなかったけれど、考え事をしていて急に背後から声をかけられてびっくりした。

「……………味見用。食べてみるといい」

そういつてムツツリーニが差し出したのは、木のお盆。上には陶器のティーセットと胡麻団子が乗っていた。そして3人の女子がひとつずつとって頬張る。

「お、美味しいです！」

「本当！ 表面はカリカリで中身はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎないところもいいのう」

やっぱり女の子だから甘いものが好きなんだなあ。三人とも。

どれ、僕も……と思ったが、なぜか寒気がしたのでやめておいた。そういえば、さっき姫路さんが厨房から出てきたような……

「……………明久、食べてみる……………細かいことは考えず」

「……………や、やっぱり、『それ』なんだね……………」

おそらく姫路さんの作った胡麻団子なんだろう。食べたら即死だ。

普段から勘のいい正宗と一緒にいたからか、僕も微妙に危険予知もどきが出来掛けてしまったようだ。

「うーっす。戻ってきたぞー」

と、そんなところに雄二が帰って来た。

「あ、雄二。おかえり」

「ん？ なんだ、美味しそうじゃないか。どれどれ？」

そして、躊躇い無くムツツリーニの胡麻団子を口に運ぶ。バイオ兵器とも知らずに。

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても んゴパっ」

危なかった。僕が食べていたらきつとこっとなっていたのだろう。

三途の川を渡りそうになった雄二を何とか起こした。しかしついでに僕が美波に軽く殺されかけた。

「ところで、坂本はどこに行ったの？」

「それと、朝から正宗の姿も見かけんのじゃが・・・？」

美波と秀吉が不思議そうに聞いてくる。

「ああ、ちょっと話し合いにな」

雄二にしては歯切れの悪い返事だ。

本当のことを言うと、学園長室で召喚大会の科目指定してきたの

だろっけど、僕等と同じように召喚大会に参加する姫路さんや美波にフェアではないので、適当にごまかしたのだろう。

「そうですか。それはお疲れ様でした」

それで、正宗はと言つと・・・

「正宗は、どこで何をしてるのか僕等もよく分かんないんだよね・・・」

「そうなんだ。どっかで別の仕事をしてるらしいがな。中華喫茶のほうも、あまり顔は出せないそうだ」

僕等が分かっているのは学園長がらみのことではあることくらいだけど、その辺りは黙っておいた。

「そっか。まあ一人くらい欠けても、たいした問題じゃないわ」

「本人はそこそこ自信があつたようだけどね」

「まあ全く来ないわけでもないようだから、来たときに頑張ってもらおうじゃないか。それじゃ、少しの間、喫茶店は秀吉とムツリ一二に任せる。俺は明久と召喚大会の1回戦を済ませてくるからな」

そういつて秀吉とムツリ一二の肩を叩く。

「あれ？ アンタたちも召喚大会に出るの？」

確認するように僕を見る美波。

「え？ あ、うん。色々あってね」

学園長からは『チケットの裏事情は誰にも話すな』とか、『伊藤正宗への依頼についてもできるだけ伏せておけ』とか言われたから下手なことは言えない。けど、どうして話しちゃいけないんだろう？

「もしかして、商品が目的とか・・・？ 誰と行くつもり？」

突然美波が攻撃色の目でたずねてきた。何事っ！？

「吉井君。私も知りたいです。誰と行くつもりですか？」

気がつけば姫路さんまで戦闘モード。

「だ、誰と行くって言われても・・・」

困った。学園長に渡すだけだけど、そこはいえないことだし、どうやってごまかそう。

「明久は、俺と行くつもりなんだ」

「「え？」」

姫路さんと美波が目丸くして反応した。

「流石に驚いたようだね、僕ですらはじめて聞かされた衝撃の事実なんだから って！」

（落ち着け明久。ここで疑り深くしてもしばれたらババアとの取引がなしになるぞ）

うつ、それはまずいな……。しょうがない、ここは雄二と一緒に恥を耐えることにしよう。

「俺は何度も断ってるんだがな」

「裏切り者！ 自分だけ逃げるなんて！」

結局誤解を解ききれないまま、教室を後にすることになってしまった。

side 正宗

『指令は随時携帯に送信する。基本的にそれに従って、どう解決するかはお前に任せる』

朝、学園長室で聞いた依頼はこれだった。微妙にアバウトな話だ。

「目的くらい教えてくれたっていいんだがな」

服にも盗聴器をつけられた。学園長が俺の行動をリアルタイムで知るためだろう。

最初の依頼だけは、その場で聞いたのだが……

『教頭竹原を監視しろ』

……意味は分かる。だが、意図が読めない。

確かに如月ハイランドの話などを勝手に進めたから警戒しているかもしれないが、果たしてこれがお互いの利益になる行動なのだろうか。

その後教頭を見つけ、しばらく尾行すると、物置までたどり着いた。

人通りが少ない場所だ。『なにか』仕出かそうものなら割と都合のよい場所だが……

「……………」

突き当りまで来ると、急に立ち止まった。

「そこにいるのは分かってますよ。伊藤君」

「!？」

なぜ分かった!? 少なくとも見つかりそうなへまはしていないはずだ。

「私はここでちょっと探し物をしているのですが、よかつたら手伝ってくださいませんか?」

正当な理由のごまかしだ。きつとなにか裏がある。だが、こつち

も怪しまれるわけにはいかない。

「ええ、手伝いましょう。何を探しているのですか？」

「それはですね……いや、出てきなさい」

そういうと、物陰から人間が二人出てきた。あれは……3年生？

「君が学園長の手先であることも知っています。どうか大人しくしててもらいましょう。頼みましたよ、君たち」

「伊藤正宗に、数学勝負を申し込みます」

それと同時に、召喚フィールドが展開された。予め呼んでいたのか、船越先生がいた。

あまりやる人間は少ないが、クラス単位の試召戦争とかは関係なく、個人で戦いを申し込んで勝負をすることができる。通称・模擬試召戦争と呼ばれていて、教師も介して行われることなので非公式ではない。申し込まれたら原則受けなければならず、負ければ当然補修室行きだ。

「つまり、戦死させて行動を封じようとしたいのか」

『お前の事情は知らないが、ここはなんとしても勝たなくちゃならないんだ』

『進路とか、貞操とかのために……』

船越先生を見て納得。先輩は苦勞が絶えない。

とにかく、ここは受けるしかないか。

「……試獣召喚！」「」

俺と敵二人の声が重なり、召喚獣が出現した。俺の召喚獣は、いつもの伊達政宗のデフォルメだった。

この前の戦いで疲れたのか、あれ以来召喚獣に乗り移ることも、俺に乗り移ることもなくなっていた。そんなに精神を使うのだろうか。

『伊藤、とかいったか。お前の調べはついているんだ』

『2年Fクラス所属、日本史、英語はAクラス並みだが、その他はFクラスレベルだっとな』

それを知ってわざわざ数学を選んできたのか。丁度召喚大会も数学だったはずだ。

「間違いなく、計画的な戦闘だな。でも、それは」

『Fクラス 伊藤正宗 数学179点

VS

Bクラス 毛塚 元成 & Cクラス 最知 吉光 数学141点 & 102点』

「古い情報ですよ」

『なっ!?!』』

相手は二人そろって驚いていた。

数学においてBクラス並みの点数を取っているわけだが、その理由は3つある。

一つは、前回の試召戦争で敗北し、一念発起で勉強したこと。

2つ目は、昔やっていたソロバンが役に立ったこと。

そして最後は・・・

「優秀な家庭教師がいたからですよ」

まあその家庭教師とは優子のことである。試召戦争以来、アイツは家まで来て（又は家に呼ばれて）勉強を仕込まれた。本当は打倒目標だから頼りたくはないのだが、優子が無理矢理やらせようとしてくる。でも確実によくなっているので感謝はしている。

『だ、だが、所詮2対1だ！ 合計点も勝っている！』

『そ、そうだな！ とにかくいざ勝負！』

「データにないか？ 俺は、操作も慣れているほつだ」

「戦死者は補修！」

『『うわああああっ！』』

あの二人は哀れにも鉄人に連れられてゆく。そんなに悪いやつらじゃなさそうだったけどな。

気がつけば、教頭の姿が見当たらなかった。あの二人を、足止め程度にしか考えてなかったのだろうか。

ブルルルルル　　ブルルルルル

「ん？ メールだ・・・」

ケータイを開く。学園長からの通達だった。

『Fクラスのほうで何か騒ぎになっている。様子を見に行け』

Fクラスか。全然他人事じゃなくなってきたな。

ひとまず教頭は置いて、急いで向かおう。

そういえば、さっき戦った3年生、何かの名前に似てたような気

がするが・・・今はどうでもいいか。

第参拾貳話（後書き）

3年生の名前のデータが少ない・・・

第参拾参話（前書き）

目標より一日遅いけど、なんとか更新！

第参拾参話

自分で書ける一番難しい漢字を書いてください。また、覚えた方法を教えてください。

姫路瑞希の答え

漢字：檸檬

覚え方：ひたすら練習しました。

教師のコメント

一番確実ですね。

伊藤正宗の答え

漢字：鬱

覚え方：『リンカーンはアメリカンコーヒーを3杯飲んだ』という覚え方を知ってからすぐに書けるようになった。

教師のコメント

先生もどこかで聞きました。よくできてますよね。

吉井明久の答え

漢字：人生

覚え方：とにかく分からないです。

教師のコメント

高校生ならこれからゆっくり覚えていけば良いです。

side 明久

召喚大会の1回戦、楽々と勝てた僕たちは意気揚々と（殴りあいながら）教室に戻ろうとしていた。

正直、雄二の点数があそこまで上がっていることに少し驚いた。

「明久に雄二、少々面倒な客がおつての」

廊下で秀吉が出てきた。何か困っているようだけど・・・

「・・・営業妨害か？」

「あはは、まさか。学園祭の出店程度で営業妨害なんて出てこないんじゃない？ そんな真似をしたところで何のメリットもないと思うよ」

せいぜい僕らが召喚大会に集中できなくなるとか、そんなもんだ」

「いや、それが雄二の言ったとおりなんじゃ」

え？ 本当に営業妨害？

「そうか。相手はどこのだいつだ？」

「うちの学校の3年じゃな」

3年生か。まったく、生徒の中じゃ一番大人なくせに。

「ま、そういうトラブルなら雄二にお任せだね。チンピラにはチンピラを充てるのが一番だよ」

雄二なら腕っ節も強いから、すぐに追い払ってくれるだろう。本当は正宗もいると更に良いだろうけど、それはオーバーキルかな？

「まあ協力してやらんでもない。そうしないと、明久の大好きな姫路が転校しちゃうからな」

「べ、別に好きだったりはしなくもないよ！」

「ツンデレ口調なのに微妙に肯定しておるぞい」

あれ？ これはどっちの意味だろう？

「わかったわかった。お前の姫路に対する想いは」

「全然わかってない！」

実は自分でも姫路さんをどう思っているのかは微妙なんだけど、転校だけはさせたくない。その気持ちだけは間違いない。

『マジできつたねえ机だな！ これで食い物扱っていいのかよ！』

「む。あの連中じゃ」

「じゃ、ちよつくら始末してくるか」

首をコキコキと鳴らしながら教室に入ろうとする雄二。

「雄二。あんまり暴力沙汰すると、それもよくないんじゃない？
普通に交渉で……」

「そうか……じゃあ、爽やかにいこうか」

確かに一度殴っておいたほうが確實だし、何よりスカツとする。
でも、暴力も店の売り上げに響くかもしれないから、避けたほうが
いいだろう。

「爽やかに 始末してこよう」

止めようかと思っただけ、責任者は雄二だからいいか。

そして雄二が教室に入ってしまった。坊主頭と小さなモヒカンの普
通の体格の二人だけど、前にどこかで見たような……

そう考えてるうちに、交渉という名の暴力が終了しそうだ。

「よつつつと！ これにて交渉は終了だ」

「お、覚えてろよ！」

倒れた相棒を抱えたモヒカン先輩が、ザコ敵の定番捨てゼリフを
吐いて去っていった。

殴る、蹴る、絞めるといふ交渉。彼曰く、『パンチから始まる交

交渉術』、『キックでつなぐ交渉術』、『プロレス技で絞める交渉術』
と言うものらしい。確かに見ていて爽やかさはあったけど、できれば
門外不出であってほしいけど、正宗が似たようなのを前に……
あ。

「ねえ雄二。さっきの二人って……」

「ん？ どっかで見たか？ 気のせいだろ」

一年ほど前に僕らの所に来てたけど、本当に忘れてるのだろうか。
それともあえて言わないだけだろうか。

『流石にこれじゃ、食っていく気はしないな』

『折角美味しそうだったんだけどね』

『食ったら腹壊しそうだからな』

それよりも、まだ問題解決ではなかった。このままじゃお客さん
がいなくなってしまう。

そして真っ先に帰ってしまう人が一人。あれは教頭の竹原先生か。
こういった催し物は好きそうではなかったけどなあ。

『店変えるか』

『そうしよつか』

「あ、お客さん！」

お客さんが帰ってしまいそうなところで、雄二が声をかけた。

「失礼しました。こちらの手違いでテーブルの到着が遅れていたの
で、暫定的にこのようなものを使ってしまうました。ですが、たっ
た今本物のテーブルが届いたのでご安心ください」

お客さんたちに深々と頭を下げる雄二。その後ろには秀吉や他の
男子生徒が立派なテーブルを運んでいる姿がある。

あれは・・・演劇部のテーブルか。なるほど。雄二も一応風評に
ついて考えてるようだ。

「おーい、明久、雄二。何か騒ぎになってると聞いたんだが・・・」

テーブルを運んでいる生徒の中に誰か入り込んできた。

「あ、正宗！ 時間ができたの？」

「いや、そういうわけじゃないんだが。それより、解決したのか？」

「うん、雄二が力づくでどうにか」

「そうか。ならいいや」

正宗は安心したような表情をした。自分のほうでも忙しいのに、
こうやって気にかけてくれるのはありがたい。

「ところで召喚大会は？」

「余裕だ。殴り殺してきたぞ」

僕の代わりに雄二が答えた。

「確か、雄二の召喚獣の武器は、メリケンサックだったか」

「そうなんだよ。ある意味雄二にぴったりだ」

見ていて相手が少し可愛そうに思ったくらいだ。当の本人はなぜか何かが不思議そうな顔をしているけど、何を考えてるのだろうか？

「それじゃ、俺は出て行くからな。暇ができれば手伝いに来る」

そういつて正宗は教室を出て行った……途端にすぐに戻ってきた。

「お前ら、教頭どっかで見なかったか？」

教頭？ 竹原先生のことかな？

「それならさつき、テーブルを見て出て行っちゃったよ。雄二ももう少し早く対応すればとどまってくれたかもしれないのに」

「あ、ああ。そうかもな」

雄二が微妙な返事をする。何か違和感が拭いきれていないようだ。

「何だと！？ どこへ行ったかと思えば、まさかここに来てたとは……」

正宗が取り乱しているようだけど、何か困ったことでもあるのだ。

ろうか。

と、考えていたら、すぐに飛び出して行ってしまった。

それと入れ替わるようにして姫路さんと美波が入ってきた。

side 正宗

なんてこった。召喚勝負をしていたら、終わったところに消えてしまつて、さっきまでFクラスにいたとは。

だが、標的は明らかにFクラスだと分かった。

学園長にそのことはメールしておいた（携帯電話は持ち歩いていないからパソコンで打っているらしい）。

「さて、まずは教頭を探さ

」

自分にいいかける途中、妙な気配を感じた。恐怖とかとは違うけど、なんというか、『出会いたくない』みたいな……

『まさか、この学園にいたとはな』

『まったく……よく1年も隠し通せたものだ』

『今日は丁度文化祭。入り込むには絶好の機会だぜ』

校門近くで聞こえてきた声。すべて男。これはもしかや・・・

『最近弥生辺りで暴れていたそうだ』

『悪鬼羅刹、若き虎、独眼竜。中学時代の三つ巴の内の二人がいるんだ』

そうか。やっぱり俺が目的なんだな。雄二の分もあるかもしれないが、きっと俺がメインなんだろう。

『おい、他にも調べがついているが、どうも学校内では威張ってはいないらしいぜ』

今までだって威張ったことなんてない。いろんなイメージが定着したせいで、周りがそうなっただけだ。

流石にこんな奴らを学校に入れては困る。教頭の件もあるけど、ひとまずあいつらもどうにかしないと。だが、校門前だと目立つな・・・ってかあいつらすでに目立ってるぞ。

『案外、信頼されてるようだぜ』

『そりゃあいい。だったら　文化祭、メチャクチャにしてやるっぜ』

一瞬思考が停止した。

俺がいるっただけで、学校に影響するのか？

『まあ待て。こっちはちょっとした依頼もあるんだからよ。それはついででいいだろ』

依頼？　やっぱり依頼者は内部の関係者か？

『その独眼竜　伊藤正宗も、ターゲットの　2-Fクラスだからな』

いろいろ考えて混乱しかけていたけど、それらの考えが、頭の中でひとつになった。

「ふざけんなあぁー！」

とにかく走ることにした。こうなったのは俺に原因の一端がある。

あいつらは殺してでも止める！ 死んでも止める！

第参拾参話（後書き）

不良ネタって、意外と難しい・・・

ご意見ご感想お待ちしております。

第参拾四話（前書き）

予定より遅くなりました。地震は関係ありません。

東日本大震災で被災された方にお見舞い申し上げます

第参拾四話

以下の問いに答えなさい。

『PKOとは何か、説明しなさい』

姫路瑞希の答え

『Peace - Keeping - Operations (平和維持活動) の略。

国連の勧告のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動のこと』

教師のコメント

そうですね。United Nations Peacekeeping Operations とも呼ばれたりします。

余裕があれば覚えておくと良いでしょう。

伊藤正宗の答え

『porrice・警官・お巡りさんの略。地域の治安を守っている』

教師のコメント

珍しくまともな回答なのに、全部ほぼ同じ意味とか、守る範囲が少ないとか、いろいろツツコミどころがあります。

土屋康太の答え

『Pants Koshi-ttsuki Oppai の略。

世界中のスリーサイズを規定する下着メーカーのこと』

教師のコメント

君は世界の平和を何だと思っているのですか。

吉井明久の答え

『パウエル・金本・岡田の略』

教師のコメント

それは世界の平和を守る人達です。

side 明久

「明久。喫茶店も気になるし、戻るぞ」

「そうだね。それじゃ遠藤先生。僕らの勝ちということだ」

召喚大会2回戦、相手は根元&小山カップル(?)だった。

以前、試召戦争で撮られた根元恭二写真集『生まれ変わったワタシを見て!』というものがある。

この写真集、ムツツリー二経営の商会では売り上げ最下位の不人気商品だ。一位は秀吉の写真集らしい。当然僕も持っている。

これを小山さんに見せることを条件に降伏を提案したらあっさり承諾してくれた。

遠藤先生に声をかけたのだが 脇から覗き込もうとしていた。

「あ、はい! 吉井君と坂本君の勝利です!」

これで正式に勝ち名乗りも受けたし、三回戦進出決定だ。良かった

た良かった。

『……………別れましょう』

『ちよ、ちよっと待ってくれ！ これには事情が……………！』

帰り際に聞こえた会話は聞かなかったことにする。正直、これでもまだやり足りないくらいなのだから。

「おい明久。早速だがもう少しテーブルを取りにいくぞ」

「え？ また変なところから奪っていく気じゃ……………」

「いや、今正宗からメールが来たんだが、『正式に許可を取ったテーブルがあるから、運んでおいてくれ』だよ」

「え？ じゃあ今回は追われずに済むの？」

「ああ。ついでに、『さっき投げつけていた明久の上靴も置いとくつてね』

「よかった……………もう返ってこないかと思ったよ」

さっきまでバランスよく歩けなくて大変だった……………

「『テーブルは10個確保してあるから二人で頑張れ』ってさ」

「それ結構重労働だよね!？」

さっきは二人でひとつ運ぶのがやっとだったのに・・・

「ここだ。妙にたくさんあるな。全部運ぶ必要はないだろ」

「それもそうか。Fクラスには収まりきらないからね」

そして二人でなんとか3つ程運んでいたけれど、道行く先生の『またどこから盗んできたか?』という視線がすごく気になった。

「ただいまー・・・って、あんまりお客さんがいないなあ・・・」

テーブルが綺麗になったのにもかかわらず、喫茶店内にお客さんはほとんどいなかった。

「お、戻ってきたようじゃな」

あまり仕事がないようなので、ウェイトレス役の秀吉も暇そうだ。

「無事勝ってきたよ」

「それは何よりじゃ。ところで、雄二の姿が見えんが？」

「うん。トイレに寄ってくるってや」

「……そのテーブルを押し付けられたわけじゃな」

「うん、全くひどいよね」

まあ先生立会いの下、召喚獣で持ち上げて運んできたわけだけど。

「それより秀吉、これはどういふこと？ お客さんがいないじゃないか
いか」

「……むう。ワシはずっとここにおるが、妙な客はあれ以降来て
おらんぞ？」

秀吉が首をかしげる。

「ってコトは、教室の外で何かが起きているのかな？」

「かもしれんろう」

そうやって二人で考え込んでいると、

『お兄さん、すみませんです』

『いや、気にするな、チビッ子』

『チビッ子じゃなくて葉月ですっ』

雄二と小さな女の子の声が聞こえてきた。

「雄二が戻ってきたようじゃが」

「あ、うん。そうみたいだね」

はて、葉月……？ あの声、どこかで聞いたことがある
ような……？ それも一度だけじゃないような気がする。

『んで、探してるのはどんなヤツらだ？』

戸を開けて雄二が入ってくる。隣に誰がいるようだけど、小柄な
のかよく見えない。

『お、坂本。妹か？』

『可愛い子だな。ねえ、五年後にお兄さんと付き合わない？』

『俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなあ』

やばいあのロリコン、後でなんとかしないと。

『あ、あの、葉月はお兄ちゃん達を探しているんですっ』

『お兄ちゃん？ 名前はなんて言うんだ？』

『あう……わからないです……』

『？ 家族の兄じゃないのか。それなら、何か特徴は？』

雄二が何とかしようという気遣いが感じられる。意外と子供好きなのかな？ 霧島さんに伝えるとどうなるだろう。

『えっと……片目のお兄ちゃんとバカなお兄ちゃんでした！』

『『『伊藤だな』』』

うん、学園中でも正宗しかいないだろう。

『そうか。片目のお兄ちゃんのほうは心当たりはあるけれど今はいないんだ』

『あう……残念です』

『そしてバカなお兄ちゃんってのは……ここにたくさんいるんだが？』

否定できない。でも、ここで誰を探してるか分かってしまった。

『あの、そうじゃなくて、すっごくバカなお兄ちゃんだったんです！』

『『『吉井だな』』』

なんでバカを強調するだけで僕だと絞れるの？ 思わず泣きかけたよ？

「全く失礼な！ 僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！ 絶対人違い」

「あつ！ バカなお兄ちゃんだ！」

小さな子が駆けてきて、いきなり抱きついた。やっぱりこの子か。

「やあ葉月ちゃん。久しぶりだね。元気だった？」

「はいですっ！」

一度くらいしか会ってなかったら僕はほぼ完全に忘れていただろうけど、1年のころに2度も会っているから思い出せた。『バカなお兄ちゃん』で思い出してしまった所で泣けてくるけど。

「うんうん。それは良かった。それにしても、よく僕の学校がわかったね？」

「お兄ちゃんたち、この学校の制服着てましたから」

そういつて僕の制服を引っ張る葉月ちゃん。たち、というのは正宗を含めてのことだろう。

「あれ？ 葉月じゃない。来てたのね」

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」

いつの間にか美波が戻ってきていた。あの二人の様子を見たところ、どうやら勝ってきたようだ。

「美波、葉月ちゃんのこと知ってるの？」

「知ってるも何も、ウチの妹だもの……っていうか、前に話したでしょ？」

「へ？」

あれ？ 記憶の片隅に、そんな話があったようななかったような・

・

「明久。チビツ子のことは思い出したのに、そっちは忘れていたのか？」

「吉井君はズルいです……。どうして美波ちゃんとは家族ぐるみの付き合いなんですか？ 私はまだ両親にも会ってもらってないのに……。もしかして、実はもう『お義兄ちゃん』になっちゃったり……。」

雄二はまた失礼なことを、姫路さんはよく分からないことを言っていた。

「とりあえず、この客の少なさはどういうことだ？」

と、店内を見渡す雄二。そういえば僕も考えていたけど、葉月ちゃんの登場ですっかり忘れてたよ。

「そついえば葉月、ここに来る途中でいろんな噂を聞いたよ」

「ん？　どんな話だ？」

雄二が屈みこんで葉月ちゃんの目線に合わせる。

「えっとね、中華喫茶は汚いから行かないほうがいい、って」

思わずつめき声上がりそうになった。

「あとね、怖い顔のお兄ちゃんがいるからやめたほうがいいよ、って」

怖い顔？　確か正宗が『眼帯は海賊とかギャングとかヤクザとかのイメージがあるから怖がられる』って、悩んでいたことがあったような……

「それはひょっとして、正宗のことかな？」

「それは違うと思うです！」

僕が正宗の名を言った途端、葉月ちゃんが否定した。

「片目のお兄ちゃんは、ドイツから転校してきてすぐに学校の道に迷っていた葉月に声をかけてくれて、そして助けてくれた、とってもやさしいお兄ちゃんです！　バカなお兄ちゃんだっって一緒に助けてくれたです！」

葉月ちゃんは必死に叫んでいる。……そうだった、確かそのときは僕も一緒にいて、不良って聞いていたけど実は全然そんなわけ

「ちっ、もういないな・・・」

さっきどこぞの不良を校門に発見したが、着いた頃にはもういなくなっていた。もう入ってしまっただろうか。

「とりあえず主な狙いはFクラスとか言ってたな・・・」

周りを見回していたら、メールが届いた。おそらく学園長かな？

『アンタがさっき見た連中は教頭の差し金で間違いないよ。全部の把握は難しいだろうから、とりあえず教頭を探せ』

「了解、っと」

携帯を閉じようと思ったが、どうやらまだ続きがあるようだ。

『早く移動したほうがいい。少し注目されている。Fクラスでは怖い顔の生徒がいる』という噂があるから戻らないことを薦める』

その文章を読んだ後、もう少し周りを見渡してみた。確かに何人

かはこっちを見ていて、だいたいは眼帯の珍しさだろう。しかし、一部の人間は怯えているようにも見える。

(怯えてるのは気のせい、だと信じたいが・・・)

それともうひとつ、『怖い顔の生徒がいる』というのは、何か引かかる。普通はもう少し違う言い方をすると思うが・・・

と言うか学園長、一体どこから様子を見てるんだ？

「とりあえず、ここを離れよう」

「ここなら、ひとまずいいか」

目立たないように移動して、たどり着いたのが職員室前。一般の客は通れない場所で、教頭がいるかと探しに来たのだが、結局いなかった。

「またFクラスにいるのか・・・？」

しかし学園長の忠告を思い出す。噂が本物だと認識されるかもしれない。

「まさか、それが狙いなのか？」

そうすれば俺は教室付近に行きにくくなる。行ったら行ったで評

判が落ちる。

「結局、裏で働くしかないか」

とりあえずまた天井から移動、と思った矢先、明らかに教師とは違う人間の声が出た。

『それで、Fクラスを妨害すればいいんだな』

この会話、校門にいた連中しかいない。そのうちの一人か。もうすこし聞いてみよう。

『そのとおりだ。そして、注意して欲しいのが、この3人だ』

この声は・・・教頭の竹原だ。割と近くにいた。灯台下暗し、のもりだろうか？ 三枚の写真をそいつに渡している。あれは、俺たちの顔・・・？

『坂本、吉井、
伊藤か。吉井つてのは知らないが、すごいやつなのか？』

『能力の問題ではない。このバカ共は、私の上司から依頼を受けてるんだ。こいつらだけは、事情を知っているんだ』

「バカは余計だ」

「「!!」」

おっと、それだけのことなのについで出てきてしまった。まあ、今更隠れる必要も無かったからいいか。

教頭と話していたやつ（不良Aとしておこう）は、写真と俺を交互に見ている。

「ターゲットその一っ！」

急に殴りかかってきた。

「甘いつ！（ボッコ）」

「がはっ・・・！」

クロスカウンターが決まった。

俺は昔、喧嘩をすることが多かった。出来れば自分から手を出したくは無かったから、相手から来たときのみの戦いをしたくて、通っていたボクシングジムではクロスカウンターのみ習っていた。これだけなら並大抵のやつには負けないさ。

「お、覚えてるよ！」

ザコ敵の捨てゼリフ。一目散に逃げていったが、とりあえず深追いはやめよう。

「つて、また教頭見失ったぞ」

と思つたら、少し遠くに走って逃げていた。意外と足はやいな。

『追え』

学園長からのメール。盗聴器くらいはつけてたんだな。しかし妙に短い文章。

「……内容が簡単すぎるだろ」

だが同感なので、見失わない程度には追うことにした。

第参拾四話（後書き）

次回に続きます。

ご意見・ご感想・罵言荘嚴もお待ちしております。

東日本大震災の被害者の中にも、もしかしたら読者さんのためにも、よい作品にしていきたいと思っています。

第参拾伍話（前書き）

学園祭編ですが、原作とかOVAとかドラマCDとかオリジナルとかいろいろミックスさせています。

第参拾伍話

問 以下の問に答えなさい

『ハットトリックの意味を説明しなさい』

坂本雄二の答え

『サッカーの試合で一人の選手が3回シュートを決めること』

教師のコメント

正解です。一番使われる意味はそれですね。

姫路瑞希の答え

『手品のときに、シルクハットを用いて何かを取り出す芸』

教師のコメント

それはそれで実は正解です。よく知ってますね

吉井明久の答え

『青い忍者』

伊藤政宗の答え

『藤子不二雄？による日本の生活ギャグ漫画。及び、それを原作としたテレビアニメ、劇場アニメ作品のキャラクターの名称である。』

2004年に香取慎吾主演で映画化された』

教師のコメント

それはハットリくんですね。伊藤君はそこまで詳しく書けるのはなぜなのでしょうか。

side 明久

「明久。ここはやめよう」

僕たちが来たのは、Aクラスのメイド喫茶。

「雄二、霧島さんがいるんだから、入ってあげないと可愛そうだよ」
逃げようとする雄二を引き止める。ちなみに姫路さんや美波も連れてこようかと思つてたけど、葉月ちゃんが『片目のお兄ちゃんを探すですっ!』と言うものなので、二人には付き添いをしてもらうことにした。

「……おかえりなさいませ。ご主人様」

すると入り口からメイド姿の霧島さんが出てきた。雄二の声が聞こえて、待ち遠しかったのだろうか。

「ほら行くよ雄二。店のためだよ」

「はいはい仕方ねえな。入ってやるよ」

雄二もとうとう諦めたようだ。素直になれば楽なのに。

「……おかえりなさいませ。今日は帰らせません、ダーリン」
なんて積極的なんだろうか。

そして霧島さんに案内されて席に着く。さて、来たからには何か注文しないとイケないんだけど……

「とりあえず『水』を。付け合せに塩があるととつれしい」

お金がないので水にしておく。雄二のおごりなんて期待できない。

「……ちょっと待て、翔子」

「……なんででしょう？ ダーリン」

「このメニューはどういうことだ……？」

雄二のほうを覗いてみる。おや、雄二だけ特別製のメニューになっているようだ。

「……本日のおすすめ、『メイドとの新婚旅行』、『メイドとのラブラブデート』、『メイドとの甘いキス』。限りあるので、早めに注文を……」

「頼むかつ!」

3つ目盛りでうれしそうな恥ずかしそうな感じで説明していた。これを雄二は幸せと感しないのか!?

「それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな!」

『そうだな。さっき行った2-Fの中華喫茶は酷かったからな!』

『テーブルが腐った箱だったし、虫も湧いてたもんな!』

『店員は不細工だし、右目に眼帯してるやつもいるしな!』

常夏コンビだ! やっぱりあいつらか! こんなに叫ばれちゃ、
店も正宗も悪評になるばかりだ!

「待て、明久」

連中を殴り倒しに行こうとしたところを雄二に止められた。

「止めないで雄二。あそこまで言われて黙ってられないよ!」

「落ち着け。こんなところで殴り飛ばせば、悪評は更に広まるだけだ」

「じゃあどうするのさ!」

分かっているも何もできないなんて、あまりに歯痒いじゃないか!

「・・・明久。ひとつ提案がある。あいつらを始末するためなら、
なんでもするか?」

「それはうまくいくの?」

「お前次第だ。なあに、正体がばれなければ何の問題もない」

「よし、乗った! なんでもする!」

「この際なんでも引き受けよう。店のため、姫路さんのため、正宗のため。」

「よし、じゃあ翔子。メイド服を貸してくれ」

「・・・わかった」

そしてすぐそこで脱ぎ始める・・・って、ちよつと待った！

「雄二！ 霧島さんのメイド服を脱がして何をする気なの！？ 霧島さんもここで脱いじゃダメだよ！」

「・・・雄二が欲しいって言ったから」

「お、俺がいつお前の着ているのが欲しいといった！？ 予備のやつがあれば貸してくれって意味だ！」

雄二が顔を真っ赤にして怒鳴っていた。こんな調子なら、最初から彼女に悪いことをしようなんて考えなかっただろう。

「・・・今、持って来る」

霧島さんが服を着なおして去ってゆく。

「あと、秀吉を呼ぶ」

「？ 秀吉に着せてどうするの？」

秀吉が着ればきつと似合うだろう。見てみたいけど、今はそんな

状況じゃないし、第一攻撃にはならないだろう。

「いや、着るのは秀吉じゃないさ」

「え？ じゃあどつするの？」

「お前言っただろ？ 『何でもする』って」

side 正宗

「くそつ、どこに行った？」

教頭を見失わないスピードで追いかけていたのだが、うまく人ごみに紛れたのか、見失ってしまった。

「仕方ない。とりあえず明久と雄二に警告しておこうか」

確か俺のほかにあの二人も『ターゲット』とか言ってた。何をするかわからないが、知らせといたほうがいいだろう。

そうやって携帯を開こうとしたら・・・

「あ！ 片目のお兄ちゃんだ！」

後ろから急に抱きつかれた。この感じは、小学生か？

「あ、伊藤！ 確か葉月と知り合いなのよね」

すると島田も現れた。　　そんでもってこの子は……ああ、思い出した。

「やあ、久しぶりだな。えっと名前は……」

「葉月ですっ　知らなかったですか？」

いやまああれから会ってないし、名前は聞いたような記憶はあるが、忘れていた。

「そうか、葉月だったな。よくきたな」

「はいですっ」

前に会ったときは大変だったからな。本当はこんな天真爛漫な子だったのか。

「で、喫茶店のほうはどうなんだ？」

すると島田は、耳元まで来て、

「『怖い顔』って、アンタの噂かしら？」

「……やっぱりか」

本当にそこから広まってたんだな。まだ噂で済んでるからいいけど……

「大丈夫ですっ！ きつと片目のお兄ちゃんのことじゃありませんから！」

考え込んでいると葉月がそんなことを言った。

「え？ そ、そうだといいが・・・」

「見た目なんて全然怖くないですし、とってもやさしいし、あのときのことは今でも感謝してますっ！ だから・・・」

普段小学生は避けてたから、こうやって話すのは初めてだ。それにしても、本当にうれしいことを言ってくれるな・・・

「だから、葉月のお嬢さん候補の第一号に入れてありますっ！」

なんか知らんが急に衝撃発言出たー！

「伊藤・・・どつりでさつきからアンタの話ばかりしてると思ってたら・・・よくもウチの妹を毒牙にかけたわね・・・？」

やばい、さつきの発言で姉のほうが怒っているぞ・・・待てよ、1号ってことは・・・

「そして第2号はバカなお兄ちゃんですっ」

「あのバカアキも後でどうにかしないと・・・」

それは俺も同感だ。だから島田姉、俺は無実にしておいてくれな
いか？

「と、ところで、その明久はどこにいる？」

とりあえず俺の本題に移そう。話題転換だ。

「アキなら、2-Aのメイド喫茶に行ったわ。敵状視察とか、噂の発信源とかで」

噂の発信源・・・何者だろうか？

「そうか、じゃあちよつと向かってみる」

すぐにそこを立ち去った。さっきの話が再び出てくる前に・・・

2-Aに向かう途中、なにやら騒がしい場所に出くわした。

「あれは・・・・・・・・・・変態？」

そこで見えた光景は、坊主頭で頭にブラをつけている生徒がいた。

「それよりも、Aクラス、Aクラス」

あんな変態に構っている暇はない。早くしないと明久たちが出て行ってしまふ。あの変態はどっかで見ることがある気がするが、たとえあつたとしても既に忘却の彼方だ。

「「あたっ!」「」

Aクラスに向かおうと振り返った瞬間、誰かとぶつかった。そこにいたのは……メイド服の女だった。

「おっと、済まなかった。怪我はないか？」

「だ、大丈夫……って」

平気ではあったようだが、なぜか顔を背けてしまった。

「ど、どうした？ やっぱり何か」

「だ、大丈夫ですから」

体は全然いいだろうけど、目を向けてくれないのが気になる。もしかして、この片目のせいか……？

「おいアキちゃん！ 早く追っぞ！ ……って、正宗じゃねえか」

「え？ あ、雄二。そいつは……」

「あー、匿名希望で通称ニックネーム・アキちゃんだ。それより、妨害連中始末を手伝ってくれないか？」

妨害連中って、まさかさっきの変態じゃないよな？ と思ってたら、Aクラスの教室から教頭が出て行くのが見えた。

「……悪いが、そっちは任せた」

すべての発端はあの教頭にある。教頭さえ取り押さえれば、万事

解決だ。

「分かった。じゃあ行くぞ、アキちゃん！ おそらくやつらは3-Aだ！」

「了解、雄二」

「じゃあまた後でな！ それと、変な連中がいるから気をつける！」
急いでいるせいで、細かいことは言い切れなかった。

アキちゃんか………なかなか可愛かったな。

メイド服ってことはAクラスの人間か？ 今度優子に聞いてみよう。

「さあ、追い詰めたぜ、教頭！」

また人通りの少ない突き当りまで来た。こういう場所なら俺も都合がいい。

「ふふ。簡単にはいかないようですね。私の計画のためにも、君の行動を止めないといけませんね」

そういうと、後ろのほうから二人ほど人が現れた。制服を着てるってことは、学園の生徒だ。

『伊藤正宗・・・前回の試召戦争では散々やってくれたな・・・』

『Aクラスは無事勝ったから恨みはないが、これでお前に負けたら俺は、あのガラの悪いやつらに・・・』

今度は同学年か。どうやら俺への恨み晴らしたと、脅迫で動いていくらしい。そうか、こいつらも・・・

「ま、まあそうか。あんまり戦いたくないならここでやめとけ。無益な殺生はしたくないからな」

『『^{サモン}試獣召喚！』』

ダメだ、聞いちゃいない。恨みと恐怖が上回ったのだろう。

『Aクラス 紺野 洋平 & Bクラス 井川 健吾
物理 219点 & 173点』

相手はA・Bクラスコンビだった。点数もなかなか。この名前も、さつきとは別の意味でどこかで見ることがある。

もしかやと思い、召喚大会のトーナメント表のプリント（そこらで配られていたものを一応もらっておいた）を見てみたら・・・
やっぱりいた。明久たちと同じブロックじゃないか。

『あいつは次の対戦相手の坂本・吉井と同じクラスみたいだぜ』

『Fクラスなら楽勝だな。肩慣らしには丁度いい』

しかも勝ち上がっているようだ。A・Bクラスコンビなら当然か。おそらく次の相手は明久たちのペアとなる。

「じゃあ俺がここで勝ったらどうなるんだ？」

そのまま補修室に送られるわけだから、試合には出られないよな。

『はっ！ そんなことがあるとでも？』

Bクラスのほう、前に負けたくせに随分と強気だな。

「それはどうかだろうな・・・試験サモン召喚！」

『Fクラス 伊藤正宗 物理 109点』

これでも4月よりマシになったほうだ。

立会いの教師は布施先生。そういえばさっきの戦いといい、俺の得意科目が歴史だと知っているからか、こいつらは逆に理数系科目で挑んできてるようだ。

『じゃあ行くぜ！ 撃て！』

先に来たのはBクラスのほう。召喚獣の装備は、リボルバー式の拳銃だった。

「そんなの当たるかっ！」

召喚獣に少し大きな動きをさせて弾道を避けた。

そもそも召喚獣の武器の方向性・ジャンルは、個人の特性や性格などでランダムに決まる。そんなでもって振り分け試験の点数で武器の性能が決まる。

その中でも銃や弓矢などの、遠距離系の武器は希少であり、なかなか便利な点が多い。うまく使えば最強クラスの召喚獣となるだろう。

『なっ！ 避けられた！？ ま、まだまだ！』

しかしその反面、弱点もある。まず実際の銃で撃つたときよりスピードが遅くなっていること。反射神経があれば避けることもできる。

もうひとつ、狙いを定めることに関しては本人任せであるところだ。

つまり召喚獣の扱いが慣れていなければ、正確な射撃ができない。非常に扱いの難しい武器なのだ。

そうこう考えていると、2発ほど連続で撃ってきた。これは・・・避ける必要もなさそうだ。

召喚獣は直立不動。やはり銃弾は俺の召喚獣に当たらずに抜けていった。

『外したか・・・少し距離をつめなければ・・・』

と言ったところで、Bクラス召喚獣が間合いをつめて発砲してきた。

バンツ カーンツ！

「甘いっ！」

今度は胸辺りに当たりそうだったが、刀で弾き飛ばした。

『あ、ありえるかっ！』

それができてしまっんだな。刀の扱いなら自信がある。

『ここからは迂闊に撃てないな……』

迂闊に撃てない……そうか、もうひとつ弱点を発見したぞ。

と思った瞬間、

ビュンツ

何か飛んできた。ギリギリかわして頬を掠めた程度で済んだ。

『井川！ 援護は任せとけ！ 間合いをつめて確実に当てる！』

どうやらAクラスのほうの召喚獣の攻撃だ。武器はなんと狙撃銃。召喚フィールドギリギリまで下がって構えている。

『頼むぜ紺野！』

井川というほうが突っ込んでくる。紺野というやつのはうも狙いを定めているようだった。

遠距離武器を使うとき、点数がある程度まで高くなれば射撃に補正がかかる時があるらしい。更に狙撃銃ときた。さっきの拳銃と違って確実に当たるだろう。

(まずはもう少しBクラスのやつに撃たせないと・・・)

するとだいぶ近づいたところで、二人が同時に撃ってきた。

動いて避けようにも、もう間に合わない。少なからずどちらかに当たる。

となれば、どうにかできそうなのは刀だけだな。

そうだな・・・致命傷食らうよりいいだろうから、試してみるか(ここまでの思考、撃ってきてから0.2秒)。

飛んできた二つの弾丸が一直線に重なるように刀を当てる。

それをつまい感じに振って・・・!

パーーン　ダーーン

井川の放った弾丸は紺野の召喚獣の腕に、紺野のは井川の召喚獣の足に当たった。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

あまりの出来事に俺たち三人は呆然としていた。

神業・・・・ってレベルなんだろうな。100%イメージ通りにできてしまった。

飛び道具は苦手な俺だが、ひよっとして刀を介せば正確に打つた
りできるだろうか・・・・？

『うわああー！』

バアーン！！

優越を浸っている隙に、井川のほうが撃ってきた。今回はかりは
防御に出遅れてしまった。

「しまった！」

しかし狙いが悪いようで、左腕に当たった程度で済んだ。今はも
う動けそうには

「つつ！！？」

その瞬間、左腕に突然激痛が走った。この感じ・・・フィードバ
ック！？

『さ、さあ！ 俺たちを倒してみろ！ だが近づいたら、この銃の
餌食だ！』

でも前にモニターテストで動かしたときよりも割合がでない・
・実際に撃たれるとこんなに痛いのか・・・？ ていうか、俺の召
喚獣にはそんな設定なかったはずだが・・・？ とにかく、今は勝
負中だ！

俺の召喚獣に前進を命令させた。ダメージのせいかふらふらとお
ぼつかない進み方だ。

『お、おい！ 殺されたいのか？ いやならそこを動くな！』

「脅迫にもなっていない・・・もう撃てなくせに」

「っ！ 分かってたか。なら仕方ない、突撃だ！」

と言った瞬間、

ズバンッ！

俺の召喚獣が井川の召喚獣を切り裂いた。

「もう、お前の召喚獣の銃は・・・弾切れだろ？」

やはりその辺は実際の銃と同じだな。6発までしか入ってないよ
うだ。そこが第二の弱点、弾の補填機能がない。

『やられた・・・』

『井川・・・まだ俺が残ってる！』

紺野というほうがまだいたな。弾はけっこうあるみたいだ。

『おんどれーー!』

なぜ関西弁? というのは置いて、連続的に撃ってきた。やはり正確に当たりそうだ。

「負けるか! 行け、俺の召喚獣!」

召喚獣に突撃させる。さっきと違ってしっかりと走っている。召喚獣の動きつてのは、本人の気合にも比例するものだ。

連続して放たれる弾丸を刀ではじき返す。GGOの世界のキリトの気分だ。

そして紺野の召喚獣の間近まで来たところで飛び上がらせ、

「六爪流モード!」

点数が半分を切っていたので発動できた。ただし左手が使えないので、右手に三本持っている状態だ。

『くそつ、なんで俺が、Fクラスの、刀使いなんかになんか...』

「点数で決まるものじゃないってことだ」

召喚獣を斬りつけ、戦死させた。

「それじゃ、補修の時間だ」

『ま、待ってくれ！ 俺たちはこれから召喚大会があるんだ！』

『そうだ！ こんな形で不戦敗は・・・』

「心配するな。あいつら2人は 俺より強いぞ。2人がかりで俺に負けたんだから、どうせ次も勝てないさ」

「半分ははったりだが、どっちにしてもあいつらが負けることはないだろう。」

そして紺野・井川にFクラスの『姫路特製見本用胡麻団子』を口に押し込んだ。

「鉄人、こいつらは食中毒になったことにしといてくれ」

「誰が鉄人だ！」

「やっぱり聞くとところはそこだけですか・・・あ、その二人、気絶してますよ」

あの胡麻団子、その破壊力は計り知れない。

「仕方ない、保健室にでも運ぶか。補修はその後にしよう」

それでも補修を受けさせようとするところが、鬼と呼ばれる所だろうか？

死んだ2人を運んでいる鉄人を見送ると、メールがかかってきた。そういえば教頭がもういなくなってるな。

『教頭はもういい。学校に入ってきた妙な集団を退治して来い』

教頭はもう確信がついたからな。これ以上追跡しても意味はないだろう。

ついでにさっきの戦いで気になったことを伝えておく。

『俺の召喚獣にフィードバック機能を付けたのか？』

するとすぐに返信が返ってくる。

『放課後説明してやる』

そんなすぐに言えないことが・・・まあそのときでいいか。

とりあえずFクラスに・・・直接行くのはまずいな・・・

ガラの悪い連中でも見つけ出して、追い回してみるとしよつ。

第参拾伍話（後書き）

今回銃などの話が出てきたのですが、作者はそれほど詳しいわけではありません。

どこか間違っているところがあればご指摘願います。

第参拾六話（前書き）

自分の予定よりも少し遅れてしまいました。

推敲に戸惑ってました。

第参拾六話

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？

【？ 可愛らしさ ? 統率力 ? 行動力 ? その他（ ）】
また、その時のリーダーの候補も挙げてください』

土屋康太の答え

『【？可愛らしさ】候補・・・姫路瑞希&島田美波』

教師のコメント

甲乙つけがたいといったところでしょうかね。

吉井明久の答え

『【？可愛らしさ】候補・・・姫路瑞希× 木下秀吉× 島田美波』

教師のコメント

用紙についている血痕が気になるようです。

坂本雄二の答え

『【？その他（結婚相手）】候補・・・霧島翔子』

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが用紙を持ってきてくれたのでしょうか。

他・とあるFクラス生徒の答え

『【?統率力】候補・・・・・・・・伊藤正宗(伊達政宗状態)』

教師のコメント

伊達政宗状態とはどういうことでしょうか？

伊藤正宗の答え

『俺以外の人』

教師のコメント

本人はすごくやる気がなさそうです。

Side 明久

「たっだいまー」

「ただいま戻りました」

お、この声は姫路さんと美波か。助かった！

「丁度よかったよ。二人とも疲れているところ悪いけど、ホールに回ってくれる？」

うんうん、やっぱりチャイナドレスがよく似合ってるな

・・・・・・・・あれ？何か場面がとんだような、そんな感覚だな？

えっと確か、僕が女装したまま常夏コンビを追いかけていたら結局見失って、その後召喚大会の3回戦に向かったら対戦相手が食中毒で不戦勝になった。そして教室に戻って店の立て直しのために姫路さんと美波と秀吉にチャイナドレスを着てもらったんだ。ついでに葉月ちゃんの分をムツツリー二がすごいスピードで作っていたんだっけ。そして秀吉と葉月ちゃんがその場で着替えようとしてムツツリー二が鼻血を吹いてしまった。それはともかく今まで店の手伝いをしていたんだ。なんだ、ちゃんと覚えていたじゃないか、僕。

「良かった。だんだん持ち直してきたのね」

「良かったです」

「女性客も増えてきてるんだよ。きっと味についての噂も流れ始めたんだろうね」

「そういえば正宗が前に言ってたような気がするな。『この学園は噂というものが広まりやすい』って。」

「それじゃ二人ともウェイトレスをやってくれる？」

「はいっ」

「オツケー」

チャイナドレスの裾を翻して注文票やペンを取りに行った。これでまたお客さんが増えてくれるだろう。

「君。注文してもいいかな？」

「あ。はい、どうぞ」

近くのお客さんから声がかかった。失礼のないように急いで注文票を構える。

「本格ウーロン茶と、胡麻団子を」

「かしこまりました。本格ウーロン茶と胡麻団子ですね？」

「つて、この人、竹原先生じゃないか。またきてくれたんだ。」

「ありがとうございます。後ほどお持ちしますので、少々お待ちください」

「それと、聞きたいことがあるのだがいいかね？」

「はい。なんででしょうか？」

決まり文句を告げて厨房に向かおうとする足を止めて振り向く。

「吉井明久とは、君のことかい？」

「え？ 確かに吉井明久は僕ですけど……」

脈絡もない話だな……僕に何の用だろう？ そういえば正宗がしつこく探してみたいだけどなにかあったのだろうか？

「そうかい。君が 吉井君（笑）か」

「教頭先生。人の名前に（笑）はおかしいと思います」

「ああ。それはすまない。だが、私はどうしても教え子である君のことを吉井君（馬）とは呼べなくてね」

「あの、僕は職員室でなんと呼ばれているのですか……？」

（馬）って、どう考えても1つの単語しか思いつかない。

「アキ、厨房の土屋から伝言。茶葉がなくなったから持ってきて欲しい、だって」

そんなやりとりをしていると、いつのまにか用意を終えた美波が戻ってきた。

「ん、わかったよ。先生、ちょっと行ってきてもいいですか？」

「構わんよ。特に用があつたわけではないのでね」

「？ そうだつたんですか？」

それならなんで僕を訪ねたのだろう？ 僕とは特に接点はないはず……

「そういえば、このクラス所属の伊藤正宗っていうのが、教頭先生を探し回っていたのですが……？」

正宗が散々教頭先生を追いかけてたけど、用事は済んだのだろうか？

「ああ、伊藤君だね。さつき会ったところだよ」

「そうですか。それは良かったです」

「ああ、きつと次に会うときは少しは頭がよくなっているはずだ」

頭が良く？ 勉強でも教えてもらったのかな？ でもなんで教頭先生なんだろう？ 鉄人よりは頼みやすいかもしれないけど・・・
・そもそもなんでこの学園祭の日に？

「アキ、土屋が急いで欲しいって言ってたわよ？」

「はい」

かなり疑問が残るけど、後で聞いてみればいいのか。用事を済ませてこよう。

早足で空き教室に着いてから、

「おい」

「うん？」

いくつ持って行けばいいか考えていると、同年代の男3人組に声をかけられた。

「ああ。ここは部外者立ち入り禁止だから出て行ってもらえます？」

全然見慣れない顔だから、きつと他校の生徒なんだろう。

「そうはいかねえ。吉井明久に用があるんでな」

そう言って、向こうの一人が後ろ手で扉を閉めた。

「へ？ 僕に何か？」

「お前に恨みはねえけど、ちょっとおとなしくしててくれや！」

言つや否や、拳を固めて殴りかかってきた。ええっ？ なんで？

「ちょっと待った！ 人違いじゃないの!？」

屈んで拳をかわし、立ち位置を入れ替える。殴られることが多い
て避けるのがうまくなってきた気がするなあ……。

「逃げんなコラ！ おとなしくしてろ！」

「いや、そんなこと言われても」

扉側に来たからいつでも出られるけど、そうすると喫茶店にも影
響が出るかもしれない。どうしようか。

と、模索していると、突然その扉が開いて、

「おい明久。ムツリーニが茶葉のついでに餡子も急いで持ってき
てくれと」

「あ、雄二。丁度よかった」

タイミングよく雄二登場。これはラッキーだ。と、思った瞬間、

反対側の扉も開いた。

「とりあえずここなら一般客は来ないな。Fクラスの誰かが来るのを待って……」

なぜか正宗が入ってきた。またもやラッキーだ。

「ん？　なんだこいつらは？」

「お！　明久、雄二！　Good timingだ！」

3人を見て眉をひそめる雄二。僕たちを見て喜ばしそうな正宗。

「よくわからないけど、雄二と正宗と喧嘩がしたいみたいなんだ。だから、後は宜しくね」

戸惑う雄二を教室の中に引き入れ、代わりに僕が廊下に出る。

「おい明久。これは　ああ、そうか。そういうことか」

「これはこれで丁度いいな。話もあとでいいか」

「コイツらどうする？」

「面倒だから一緒にやっちまおうぜ」

「ちょっと待て。直接見たことがあるわけじゃないが、この眼帯男、独眼竜」じゃないか？」

「……ま、まさかなあ」

『そんなことないだろう。確かに文月学園にいるって噂があるけど・・・』

『そんなのもって、こっちのやつは『悪鬼羅刹』じゃ・・・』

『・・・』

そんな会話を背に、扉を閉めて1分待つ。すると

「お、覚えてろっ!」

「てめえらの面、忘れねえからな!」

「夜道に気をつけるよ!」

見事な負け犬の完成です。流石は雄二と正宗、強いなあ。

「雄二、正宗。あの連中なんだったかわかる?」

「わかるぞ。一言で言つと、いわゆる妨害するチンピラだ」

「やっぱりか。Fクラスの売れ行きがいいからか?」

「あはは。そんな理由で絡んでくるバカはいないよ」

「どつだかな。とりあえず急いで戻るぞ。ムッツリーニが待ってる」

「はいよ。あ、正宗。手伝いに来れる?」

「正宗も仕事が忙しいかもしれないけど、本心としては喫茶店も手伝って欲しい。」

「うーん、ちょっとあの連中を探ってくる。気をつけるよ。狙われているのはFクラスの中でも　俺たちだからな」

「え？　どういこと？」

「じゃ、喫茶店頑張ってくれよ！」

結局詳しいことは聞けずに行ってしまうそうだ。と思いきや、

「ちょっと待った正宗」

「なんだ？」

「次の試合、もし俺たちが勝ったらちょっと手伝って欲しいことがある。頼めるか？」

「多分それくらいなら何とかなるか・・・用事が入らなければ」

「じゃあ頼むぞ。指示は携帯で送るぞ」

「いや、なんか携帯がさつきから調子が悪いんだ。だからお前らに通達したいことがあったんだが、ここまで来る羽目になった」

「そうか・・・じゃあとりあえず俺たちが勝ったと分かったらAクラス教室前まで来てくれ。秀吉やムツリー二にも手伝ってもらうことになっている。」

「よし、じゃあ、ああいう連中には気をつけるよ」

そう言い残し、正宗が駆けていった。もう見えなくなった。

「さあ戻るぞ。時間食いすぎた」

「しまった！ 早く行かないと！」

僕たちは茶葉と餡子を抱えて教室に戻った。

side 正宗

なんとか明久たちへの警告は済んだ。あとはチンピラどもを見つけて出したいのだが……

「なんで通信できないんだ？」

さっきまで学園長とは通信できたんだが、明久たちにかげようとしても一向につながらなかった。

「とりあえず、探してこようか、チンピラ集団」

まずさっき逃げていったやつらは……一応盗聴器をつけておいた。

盗聴するためには受信機が必要であり、幸い普通に動いた。

『すまねえ……失敗した』

『吉井ってやつは拉致できなかった』

『坂本と独眼、恐ろしく強ええ……』

さっきの3人組だろう。仲間の下へ合流したらしい。

『あいつらに出くわしたのか……そりゃ運がなかったな』

『とりあえず、クライアント依頼者に電話しておこうぜ』

クライアント依頼者……教頭のことだろうな。

『おう、吉井の拉致は失敗したらしい……ああ、その伊藤と、あと坂本ってやつにコテンパンにやられたらしい……教頭なんていう立場の人間が、そんな頼みごとをするとはな……』

教頭か……生徒を暴行事件に巻き込もうとしてたわけだな……

『特にその伊藤ってやつに邪魔されて、相当焦ってるみたいじゃねえか……おお、そんなことまでしていいのかっ!?!?』

なんだろうか？ 何をする気なんだ？

『ああ、好きにさせてもらっせ……。』文月の独眼竜への復讐『
だけじゃ、報酬として物足りなかいと思っていたところだ……。』

『全くだ。』戦っても勝つのは困難だから、文化祭をつぶしてやる
う』って考えてたんだよな』

そういうことか……。利害が一致していたから教頭に1枚かんで
いたってわけか……

いつの間にか、文月に変わってるな……。俺の存在を漏らしたの
も、教頭だったんだろうな。随分前から計画していたことだったの
だろう。

『意外と自責の念みたいなのが強いやつだったらしいからな。精神
的にどん底にしてやる』

『そりゃいいな。なんせ、自分がいるせいで、周りが災難になるっ
て思わせるわけだ』

ここまで言われると、ますます自分の存在を恨みたくなる。

俺がいたら、周りの人間に迷惑がかかるかもしれない……

俺のせいで、俺の仲間が何かを失うようなことにさせたくない・

『それじゃ、もう少ししたら、行動しますか』

やつらは何かを始めるつもりらしい。

俺のせいで、この事件が起きたようなもんだ。なんとか教頭やこいつらの企みを阻止したい。

そのために、何ができるだろう？

.....。

.....。

.....。

いろいろ考えてみたが、

「俺は.....無力だな.....」

自分が引き金になったことも自力で解決できねえとは.....

仲間の力を借りる。それしか思いつかなかった。

明久、雄二、秀吉、ムッツ、島田、姫路、その他Fクラス。孤独で孤高だったそれまでの間、作ることも許されなかった仲間。できれば俺の抱えたトラブルとして片付けたかったが……

だがここまでできたらしょうがないか……

前回の試召戦争だって、あいつらがいなければ、あそこまでやれなかったな。

「じゃあまずは、俺が助けに行こう」

人に助けを求めるきりじゃ、情けないからな。まずは、俺があいつらを助けてやりたい。

「仲間を……関わる人すべてを　俺が守る！」

第参拾六話（後書き）

シリアス場面は書くのは難しいですけど、僕は読むのも書くのも、
こつこつ場面が好きです。

第参拾七話（前書き）

遅れてしまい、申し訳ないです。

ちよつとバタバタと忙しかったもので・・・

タイムリー（？）なことに、バカテストは遅刻の話です。

第参拾七話

問 あなたが学校に遅刻をしてしまったとき、どんな言い訳をしたことがあるか答えなさい。

姫路瑞希の答え

『昨日まで熱を出していて、なんとか下がったのですが、今度は寝過ぎてしまい……』

教師のコメント

振り分け試験のあとのことですね。体調管理はしっかりしましょう。

坂本雄二の答え

『朝、俺のベッドの上に幼馴染がいて、殺気を感じて逃げ回っていたら……』

教師のコメント

なんですかそのギャルゲー展開は。先生は大人です、羨ましくなんかありません。

吉井明久（その1）&伊藤正宗の答え

『UFOを見かけていた』 『バルタン星人と交信していました』

吉井明久（その2）

『道で倒れていたおじいさんが、急に産気づいて……』

吉井明久（その3）

『青春』

教師のコメント

嘘をつくにしても、もう少しまともな嘘をつきましょう。特に3つ目は意味が分かりません。

side 明久

「ひきょうもの」

「二人とも酷いです……」

「あ、いや。あれも勝負だったからさ」

4回戦、姫路さんと美波が相手だったけど、なんだかんだで雄二が勝った。僕も一応ペアだから、勝ったといえば勝ったんだけど、実質雄二の一人勝ちみたいな勝利だった。

(ところでアキ。葉月がアンタと伊藤にすぐくなついているみたいなんだけど、どういうことなの?)

そういえば大会の直前と間に、僕が葉月ちゃんを大人のデートとか如月ハイランドに連れて行くという話を勝手に雄二がしていたんだっただった。

(正宗は、前に話していたとおりだよ、きっと。僕は違うと思うんだけど……)

(もしかしてアキはそのとき以外にも葉月に会ったことがある?)

あるといえはあるかな。あのぬいぐるみのことだ。あれが原因で僕は観察処分者になっちゃったんだけど、葉月ちゃんは何も悪くはない。

(まあ、一応ね)

ここではあえて深いことは言わない。あのときは、葉月ちゃんがお姉ちゃん〓美波のためにやっていたことなんだ。僕が関わっていたことにしなくてもいいだろう。

(そう……それはそうと、本当に葉月に手を出そうとしてるわけじゃないわよね?)

僕って信用ないなあ……

(大丈夫だよ。僕はAカップに興味はないんだ)

(……あ、あはは。それは安心ね)

美波はそうやって軽く笑い、少し後に目を逸らした。

『……女は胸じゃないのに。アキの、バカ……』

??何か呟いていてツツコミが来ない。冗談とは言えセクハラ発言をしたんだから、反応がないと僕が恥ずかしいんだけどな……このままだと胸で女の子を見ているヤツだと誤解されそうだ。

「あの、絶対に優勝してくださいね・・・？」

姫路さんが上目遣いに覗き込んでくる。こ、これは凄い威力だ・・・！

「もちろんだよ。絶対に優勝する。全部うまくやって見せるさ！」

こんなに可愛い姫路さんを転校させるものか！

「やれやれ。それなら明日の朝は気合を入れて起きてこいよつと。ほう。なかなか盛況じゃないか。」

「そうだね。結構いい感じだね」

「良かった。宣伝の効果があつたみたいですね」

「そうでなきゃ、こんな恥ずかしい格好で大会に出た意味がないものね」

さっきの試合開始前、出場者が全員2年Fクラスであることを利用して、宣伝をさせてもらっていたんだけど、うまくいったみたいだ。

「あ！ バカなお兄ちゃん！ お客さんがいっぱい来てくれたんだよー！」

葉月ちゃんが僕らの姿を認めて、店の中からトトツツと駆け寄ってくる。

「そうだね。葉月ちゃん、お手伝いどうもありがとね」

「んにゃ〜……………」

頭を撫でると気持ち良さそうに目を細めている。本当に猫みたいで可愛いな。

「さて、俺たちも突っ立ってないで手伝うか。秀吉、ムツツリーニ。後で例のこと、頼んだぞ。念の為、正宗にも頼んでおいたが、アイツは来ないかもな」

「了解じゃ。遂行させてみせよう」

「……………任せておけ」

雄二が秀吉とムツツリーニに耳打ちしている。よく分からないけど、次の試合で何かするのだろうか。

とりあえず今は考えず、エプロンをつけて、仕事をすることにした。

side 正宗

「よ。来てやったぞ」

「おお、正宗。よく来てくれたのう」

「・・・・・・・・助かる」

雄二の依頼どおり、Aクラスの教室まで来た。

「で、なにをすればいいんだ？」

「それがじゃの・・・・・・・・」

秀吉から作戦を聞いた。そして、

「却下だ」

「なぜじゃ!？」

優子をどうにか取り押さえて、秀吉が入れ替わろうという作戦らしい。できれば前回の経験から優子を避けるようにしたいところなのだが……

「・・・・・・・・裏切るのか？」

うっ、そう言われると・・・・・・・・さっきあいつらのやることを全てサポートすると自分に誓ったばかりだったな。

「いや、それでも引き受けるさ」

とりあえず返事はYES。方法はいろいろある。

「で、具体的にはどうするんだ？」

「・・・・・・・・これを使う」

ムッツが何か道具を取り出した。スタンガンか。流石の優子もコイツを使えば・・・

と、思った矢先、Aクラスの喫茶店から二人組の男が出てきた。あれは・・・・・・・・さつき見た変態？

「なあなあ、秀吉、ムッツ。あの二人組はなんなんだ？」

「うむ？・・・・・・・・む、例の妨害連中じゃな」

「・・・・・・・・何かしているのか？」

そうか、あいつらがFクラスに現れ、かつAクラスで妙な噂を流していた、常夏コンビってやつらだな。ついでに1年前に見たことがあったことも思い出した。

で、さつき雄二たちが退治したらしいのだが、なぜまたここに来ているんだ？

「いい予感がしないな・・・・・・・・」

わざわざ俺たちの来るところにまた現れるとは・・・・何か仕掛けるつもりか？ 下手すると、もう手遅れか？

「・・・・・・・・2人も、ちょっとここで待機してくれ」

「うむ？ 正宗はどうするのじゃ？」

「俺は、あいつらが何をしていたか調査する。もしかしたら、このままだと失敗するかもしれないから」

「なんだこれ？」

Aクラスのメイドの目をかいくぐってやってきたのは、休憩室のようなところだった。メイドってのは目の毒だな……嫌いじゃないが。

そこで見つけたのは、よく分からない機械。マイクのようなものがついている。

「もしや、小型の録音機か何かだろうか？」

同時に再生もできるようだ。まさかと思い、かけてみることにした。

《おいおい、次の試合、Fクラスが何をするんだって？》

《木下ってやつが双子の姉と入れ替わるつもりらしいぞ》

《はっ、姑息で単純なFクラスらしいな……》

一番姑息で単純なのはこんなメッセージを残していくお前らだろ

う。

しかし、これではつきりした。どうやって知ったかは知らないが、俺たちのやるうとしていたことが流出してしまったようだ。

こうしちゃいられない。秀吉たちのところへ戻る

「あれ？ そこにいるのは誰カナ？」

「……………はは、誰のことを言っているのやら。」

「あ！ Fクラスの伊藤君だね！」

「……………Fクラスに伊藤なんていうのは……………俺しかないな。」

「や、やあこんにちは。えっとお前は……………」

「あはは。僕のこと、覚えてないのかな？」

えーっと、誰だっただろうか？ あっちは俺のことを知っているみたいだが……………？

「じゃあ自己紹介してあげるよ。Aクラス所属の工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞でスリーサイズは上から78・56・79、特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよ」

ツッコンだら負けだな。よく考えたら思い出したが、この前の試召戦争で戦っていた相手じゃないか。ムツツにやられてたけど。

「じゃあ俺も自己紹介しよう。伊藤正宗だ。得意教科は歴史と英語、あだ名は筆頭、よろしくな」

相手に名前を言われたなら、こちらも名乗らないといけないと思
い、とある極道育ちの先生のノリで自己紹介してみた。ちなみにい
ろんな自己紹介でこの言い方をしてみているのだが、ほぼ初対面の
人からはあまり気に入られなかった……。はっ！まさかで
極道に勘違いされてたのか！？

「ははは、君もなかなか面白いね。ところで、なんでこんなところ
にいるの？」

よかった。まあ元から知っていただろうし、むしろ彼女の性格な
らこういふ反応をとりそうな感じもした。好感触のようだ。

「いや、まあ、はっきり言うと、敵状視察つてやつだろうか」

「なるほどね。でもこんなところまで普通見に来るカナ？」

「こういふのは裏の裏まで調べておくつてのが俺の主義だ」

更衣室的なものだったら入るのは間違いだが、休憩室なら問題な
いはずだ。見てはいけないものがあるってわけでもあるまいし、別
に見つけてもいない。あえて言うなら、さっき見つけた……

「ふうん。ところで、その机に何か機械が置いてなかった？」

おそらく今俺が左手を後ろに回して隠しているこのことだろう。
だが、これは俺たちの不正がばれないための、隠滅すべき証拠だか
らな……

「いや、見てないな。どういふものだ？」

「うん、小型の録音機なんだけどさ……それより正宗君、左手に何か持ってない？」

「え？ いや、ちょっと腰が痛くてな……それより、なんでそんなものを探してるんだ？」

「それは僕のだからだよ。授業の復習で使った」

なるほど、流石はAクラスさんだ。

「まあ、もつと面白い使い方もあるんだけどね。それで、たまたま録音ボタンを押しちゃって、偶然よくわからない声が録音されちゃってたんだけど……」

それがさっきの常夏の声だな。工藤はもう聞いてたのか？

「で、それがFクラスがどうのとか優子とかって言ってたんだけど、もしかして知ってるの？」

聞いたんだな。俺もこれを聴いたことが分かってしまったら、何かと危うい。

「いや、知らないな。内容は気になるが」

「……待てよ、ってことは優子ももう知っていたりするんじゃないや

「そっか……どこに行っちゃったんだろ……？」

もし知ってたら、表に待たせてある秀吉たちに被害がかかる。食
い止めてこないと・・・

「ね、ねえ。良かったら、一緒に探して」

「これのことだろ」

「あ！ なんだ、やっぱり持ってたんだ」

「じゃ！ 俺は急いでるんで」

工藤に録音機を返して、その場を立ち去ることにした。

『う、うん。ありがとう・・・ってあれ？ データが入ってない・
・・・』

悪いがデータは抜かせてもらった。もし作戦が成功していたとし
ても、これが出回ったら失格になるからな。

Aクラス教室前、そこにいたのはただ一人。

「・・・ムッツ、秀吉は？」

「・・・・・・・・・・作戦は実行した。しかしどこから漏れていたのか、作戦は失敗。秀吉は木下優子に連れ去られた」

「お前でも敵わなかったのか？」

「・・・・・・・・・・本能を優先してしまった」

「・・・・・・・・・・何をやってたんだ」

優子や霧島のメイド姿でも撮ってたのだろう。お前らしい行動だが、時と場合は分かって欲しいところだ。

「とにかく、行き先は分かってるんだ、召喚大会会場に行こう」

「・・・・・・・・・・（コクン）」

ムッツが無言で頷く。責任を感じてるかどうかは無表情なのでよくわからないが、後でやってほしいことができるかもしれないのでひとまず許しておこう。

で、大会会場に着いたわけだが・・・

『・・・・・・・・・・！（パシャパシャ！）』

『ムッツリーニ！ いつの間に!?!?』

ムッツが縛られている秀吉を見て、すばやくカメラを構えていた。本当にお前の原動力はそういうことなんだな。

ちなみに俺は、やはり観客の目が気になるので、入り口付近で様子を眺めている。

『撮影なんかしないで《その写真》、早く秀吉の縄を解いてあげてよ《後で売って欲しい》！』

『明久。本音が混ざってるぞ』

意外と器用にしゃべれるんだな。どうやったんだ今の？

『・・・・・・・・・・了解』

そういつてムッツは秀吉の縄を解き始めた。今の了解という言葉、どっちのことに対してだろうか。両方か？

しかしこれはピンチだ。だが、そういうときこそ、相応のチャンスが眠っているって、どっかの海のコックが言ってたな。そして俺は策を思いついた。

しかしどう明久に伝えるか。隠れられる場所もなさそうだから隠密術は使えない。携帯もきかない。投げつけようにも俺はノーコン。

仕方ない。けっこう辛いんだけど、あれを使うか。

《聞こえるか、明久》

『え？　だ、誰？』

独眼流・思念波（もう何でもアリだろ、とは言わせない）で、メッセージを送っている。

《諦めるな。雄二をうまく利用すれば霧島を抑えられるだろう。気絶させてもいい。後は計画通り、だ》

『な、何なんだろうこれ？』

『どうした明久！　ここに来て電波に目覚めたのか！？』

後は自力でどうにかしろ。この能力、時間が限られてる上に、すごい疲れるし、頭に激痛が走るんだよな……

『そうか……雄二、今から僕の言うことをそのまま言って。棒読みにならないように』

『しょうがない、今回だけはお前に任せよう』

よかった、俺の考えを分かってくれたようだ。あと、秀吉にも手伝ってもらうことになるだろう。しかし思念波を使うまでもなく、既に明久たちのもとへ向かっていた。

(翔子、オレの話を聞いてくれ。)

『翔子、オレの話を聞いてくれ。』

(お前の気持ちは嬉しいがオレにはオレの考えがあるんだ)

『お前の気持ちは嬉しいがオレにはオレの考えがあるんだ』

『雄二の考え?』

(オレは自分の力でペアチケットを手に入れたい。そして胸を張ってお前と幸せになりたいんだ。)

『オレは自分の力でペアチケットを手に入れたい。そして胸を張ってお前と幸せになりたい。ってちょっと待て!』

それだ! いい感じだぞ明久! そこからは・・・

『うるさい! 頸動脈をこつだ!』

『くへっ』

気絶させたようだ。丁度背後に秀吉とムッツが着いたようだ。

(秀吉、よろしく！)

(うむ、了解じゃ)

『だからここは譲ってくれ。優勝したら結婚しよう。愛してる、翔子』

計画以上だな。せいぜい雄二には今後幸せになってもらおう。誇りに思え、俺が他者を祝福することは滅多にない。

『……雄二、私も愛してる……』

『ふっふっふ……はっはっは！ これで最大の脅威は封じた！ 残るは君だけだよ！ 木下優子さん！』

『ぐっ、卑怯な……！ でも、私一人だって吉井君には負けな
いはず！ 行くよ！ 試獣召喚！』

さて、ここからは当初の作戦通りいけるだろう。なにせ、教科は保健体育だからな。

実際のところ、召喚勝負で俺が優子を倒すまで、他のやつには負けて欲しくないというような感情もあった。だが今回は仲間の運命が関わっている。背に腹は変えられない。

とまあ、速攻で決着はついた。会場からはブーイングの嵐だったが、勝ちも勝ちだ。さっさと引き返そう。

「明久。なかなかの機転であつたな」

「そうだな。あんな作戦を考え付くとは、流石明久だ」

さっきのような独眼流の術はあまり広めたくはない。ここは明久の手柄としておけばいいだろう。

「………ありがとう。秀吉とムツツリーニと、よくわかんない天の声のおかげだよ」

「はて？ 天の声じゃと？」

「なんだ明久、電波系にでも目覚めたか？」

「そ、そういうのじゃないよっ！ なんかこう、頭の中に誰かが語りかけてくるような……」

「そういうのを電波と言うんじゃないか？」

「明久……とうとうやってしまったのじゃな……」

「………腕のいい脳外科医を紹介してやるう」

「もう、3人そろってなんなのさっ！ あとムツツリーニ、腕のいい脳外科医なら僕も知ってるからねっ」

それはそれでどうかと思う。明久はただのバカだと信じたいけど

な……

「まあなんにしても、3人ともよくやってくれた。残るは決勝だけだな！」

「そうじゃな。ところで、雄二をあのままにしておいていいのか？」

「え？ 別にいいんじゃない？」

「そうか。明久がそう言うのであれば良いのじゃが」

「あはは。雄二もたまには正直になるべきだと」

「そうです。このまま行けばいろんな人が幸せに」

「霧島が雄二に一服盛って持ち帰ろうとして心配になっての」

「き、霧島さん！ 雄二には決勝もあるからクスリは許して！」

「……………霧島は、幼馴染なのに、ヤンデレ属性も入ってるんだな……………」

振り返ってみたら、虚ろな目をしてタキシードに着替えている、雄二の姿があった。普段があんな感じとはいえ、これは少し哀れに感じた。

第参拾七話（後書き）

今後の展開としては、順調に進んでいます。

東日本大震災で被災された方にお見舞い申し上げます

第参拾八話（前書き）

少し遅くなってしまいました。

前回に続き、電波ネタからです。

第参拾八話

以下の文章の（ ）に入る正しい物質を答えなさい。

『ハーバー法を呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（ ）である』

姫路瑞希の答え

『水酸化カルシウム』

教師のコメント

正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要な内容なので、確実に覚えておいてください。

土屋康太の答え

『塩化吸収剤』

教師のコメント

勝手に便利な物を作らないように。

吉井明久の答え

『アンモニア』

教師のコメント

それは反則です。

伊藤正宗の答え

『アンモナイト』

教師のコメント

そこはせめてアンモニアでしょう。いや、それも間違いますが。

side 明久

「明久。今日と言う今日はお前を殺す」

「あはは。やだなあ雄二。目が怖いよ？」

なんとか雄二を正気に戻した。頑丈にできてるようだったから、雑に扱っても全然平気だ。

「正宗。もしやお前の入れ知恵か？」

すると次は正宗に目を向ける。別に正宗からは何も聞いてないよ？ よく分かんないけど、僕（？）が僕にアドバイスしたんだ。天使でも悪魔でもなかったけど……

「まさか。策士・明久の考えた名作戦じゃないか」

「いや〜 それほどでも……」

「……まあ、こんな電波バカと眼帯男は置いて……」

「なんなのさ！ その某電波系美少女SF小説のタイトルみたいな呼び方は！」

「『眼帯』をせめて『独眼』にしてくれれば……」

「そこが問題じゃないでしょ！ だいたい、雄二の作戦が読まれていたのがいけないんじゃないか。相手はあの霧島さんなんだから、充分考えられた事態のはずだよ？」

「ぐっ、それを言われると反論できん……」

やっぱり霧島さんがらみになると甘いんだよね、雄二は。素直じゃない……

「いや、読まれたところじゃない。流出されていたんだ」

「え？ どういうこと？」

「そういえば、木下優子が妙なことを言っていたな。『匿名の情報提供があった』、と」

「そうだよな。僕もそのときまで知らなかったのに」

「とりあえずこれを聴いてみる」

正宗がカセットテープのようなものを取り出した。するとある二人の男の声が聞こえてくる。それは、僕らにとってとても憎たらしい敵の声だった。

「……常夏だな」

「……常夏コンビだね」

「常夏コンビだろ」

僕も知らなかった話が敵側にばれていたなんて……やるうと
したことは事実だけだ。

「しかしこの声、どこで手に入れたんだ？」

正宗がこれを手に入れた経緯を説明してくれた。作戦実行時、A
クラス教室から常夏コンビが出てくるのを見つけ、その後隠れつつ
Aクラスに侵入。工藤さんのボイスレコーダーにこの音源があった
らしい。

「なるほど。おおそ秀吉とムツツリー二に伝えたときに掴んだん
だろ」

「直接口で伝えたのか？ どこでだ？」

「ん？ そりゃ教室だが……」

「あつた」

正宗がFクラスのある机の下で何かを探していた。やっぱりと思
ったけど、盗聴器の類のものだったらしい。今は無効化しているそ
うだ。

「くそっ、いつの間に……!」

客足が微妙だったとはいえ、仕掛けられる人間なんていくらでもいる。でも、僕には一人だけその席に座っていた心当たりのある人がいる。

「そういえば、その席には竹原先生が……」

「……いろいろつながってきたな」

「え？ どういうことなの？」

「いや……それより、姫路や島田や秀吉の姿が見えないが……」

「え？ あ、あれ？ そういえばいな」「……」「……ウ
エイトレスが連れて行かれた」　　「ってムツツリーニ！　また僕の
背後に！　……ってええっ！？」　　「姫路さんたちが！？」」

いきなり背後から現れてびっくりしたけど、ムツツリーニが言ったことのほうがもつとびっくりだ。

「やはり俺や明久や正宗と直接やりあっても勝ち目がないと考えたか。当然と言えば当然の判断だな」

「そういうことだったかの……汚い策略だな……」

直接って、喧嘩のことだろうか？　確か中学時代雄二と正宗は喧嘩がかなり強かったらしい。自分からけしかけるようなことはしなかったそうだ。僕はともかく、この二人に敵うヤツなんてそうはいないだろう。でもこの前、正宗と互角に戦ってた人がいたって雄二とムツツリーニから聞いたけど……。

「ってそんなことより、姫路さんたちは大丈夫なの！？ どこに連れて行かれたの！？ 相手はどんな連中！？」

「落ち着け明久。これは予想の範疇だ」

「え？ そうなの？」

「ああ。もう一度俺達に直接何か仕掛けてくるか、あるいはまた喫茶店にちよっかい出してくるか、そのどちらかで妨害仕事を仕掛けてくると予想できたからな」

「どうやら今回は店の売り上げの妨害が目的らしい。こんなことをされたら、売り上げの影響は計り知れない。」

「なんだか随分と物騒な予想をしてたんだね」

「引つかかるところが随所にあつたからな」

「………済まない……俺は、連れて行かれてるときに何もできなかった……」

「気にするな。俺たちに知らせてくれただけ良かった。無傷だったようだし」

ムツツリーニは目の前でみんなが連れ去られるところで、何もできなかったことを悔やんでいるらしい。それでも、僕らに知らせてくれただけで充分なのに。

「……責任を感じているのならば、場所を突き止めてくれ。ほら、

こいつで逆探知とかできないか？」

「正宗、ムツツリーニ、それはなに？ ラジオみただけど」

「盗聴の受信機」

「オーケー。敢えてなんで持つてるのかは聞かないよ」

クラスメイトから2人も犯罪者を出したくないし。

「雄二、明久、ムツツ。お前らにも、話しておいたほうが良さそうだな……」

「いや、だから聞かないけど……」

なんで盗聴器なんて持つてるのかちょっと謎だけど、今はそれが役に立ちそうなんだ。かまったら救出なんてできない。

「正宗、何か知ってるのか？」

「おっと、別に黒幕とかそういうことはないからな。むしろ因縁深い奴らで……」

あれ？ 僕が考えてるのと違う話なのかな？

「でも正宗、随分と落ち着いた感じだね。こう、クラスメイトがさらわれたって時に……」

「……俺だって、内心すごく腹が立っている……連れ去った連中も、食い止められなかった自分にも……」

「正宗……」

「だからって、冷静さを欠くと救えるものも救えなくなる。明久には前の試召戦争で言ったはずだ」

「^{ハート}心は熱く、でも理論は^{ロジック}coolに」ってやつだったかな？ そうか、正宗なりにも責任を感じて……いや、正宗の正確からすると、僕らの思う以上なのかもしれない。

「俺があんな連中を不本意に招いてしまったようなもんだ。本当なら俺1人ではじめをつけるべきだが……」

「え？ 知り合いなの？」

「悪いほうのな。とにかく頼む！ あいつらを助けるのを」

「正宗！」

大声で正宗の言うことを止めさせた。

「……今更、『頼む』なんて言わなくてもいいでしょ。目的は一緒だし、僕たちも正宗の力が必要なんだ。同じ仲間を助けるために、1人で責任を負わなくていいんだよ」

「明久……お前……」

正宗に何があったのかは今は関係ない。とにかく今は姫路さんたちを……

「・・・・・・・・場所を掴んだ」

「ムツツリーニ！ もう分かったのか!？」

「早いな！ 流石だ」

「・・・・このクラスメイト達と一緒にいて、大丈夫なのかな・・・？」

「こんな盗聴器を所持してる人たちとか、それについて何も思わないブサイクと。」

side 正宗

『さて、どうする？坂本と吉井と伊藤だったけか？そいつらこの人質を盾に呼び出すか？』

『いや、待て。吉井ってのは知らないが坂本と伊藤には下手に手を出すとマズイ。今はあまり聞かないが中学時代は相当鳴らしていたって話だしな』

『坂本ってまさかあの坂本か？』

『伊藤ってのは、『独眼竜』のことだろ？』

『ああ。できれば事を構えたくないんだが・・・・』

『気持ちには分かるがそうも行かないだろ？ 依頼はその3人を動けなくすることなんだから』

依頼・・・教頭・竹原のことだろう。

今いるのは文月学園から歩いて5分程度のカラオケボックス。そのパーティールームに連れて行かれていた。

そして俺は現在、受信機を明久と雄二に渡し、天井裏からこの会話を聞いていた。ムツツは別のところであることをしてもらっている。

『お、お姉ちゃん...』

『アンタ達！ いい加減葉月を放しなさいよ！』

そうして聞こえてきたのは島田の声。そうか、葉月が最初に捕まってる、それを脅しにて、ろくに抵抗させずこういう状況なわけか。葉月がいなくてよかったとしても、いくら普段から明久に暴力を振るっている島田だからって、こいつらには手も足も出ないだろうな。

『・・・・・・・・・・灰皿をお取り換えします。』

『おう。で、このオネーチャンたちどうする？ ヤツちゃっていいの？』

『だったらオレこの巨乳チャンがいいなー！』

『あ、ズリー！ それならオレ2番ね！』

っ！ この上なく不愉快な最低集団だ……

いい加減冷静でいられなくなってきた……

『あ、あのっ！ 葉月ちゃんを放して、私たちを帰らせてください！

』だってさ。 どうする？』

『それはオネーチャンたちの頑張り次第だよな？』

『やつ！ さ、触らないで』

このまま見てるだけだったら姫路たちに一生の傷をつけることになる。喫茶店も失敗で、最悪の転校となりうる。

もう我慢ならねえ……！

『ちょっと、やめなさいよ！』

『あーもう。うっせえ女だな！』

『きゃあっ！』

ドン、と何かを突き飛ばした音と島田の悲鳴。その後ガシャンと

何かが落ちて割れた音が聞こえてきた。

……どこかで、何かが切れた音がした。

『おじやましーす！』

何者かが部屋の中に入ってきた。誰かと思えばなんと明久だった。

『よ、吉井君？』

『アキ……』

『ハア？ お前誰よ？』

『それでは失礼して……死に腐れやああ！』

『ほごあああつー！』

明久が早速一人殺ったらしい。だが、一人じゃ無理だ……！
気持ちは分かるが、一人先走るとは

《それをお前に言ったのは、アイツだろ？》

……誰だ？

まさか電波ってことは……

《アホか。俺だ》

そうだな『伊達政宗』。確かにそのとおりだな。

忙しいんだ。これから突撃する。

俺が最初からやればよかったことを明久がやってくれてるんだ。
ここで助けに行かなくて、何が仲間だ……！

《その意気だ。そこで俺を解放しろ。力を貸してやる》

必要ない。俺が行きたい。俺の意思で助ける。

《分かってるぜ。意思是9割5分残る。『力』を貸してやる。一連
のやり取りを聞いたが、俺も腹が立つ。成敗に加わってやる》

明久がもう一人倒したようだが、すぐに囲まれた。雄二も助太刀
に来るだろうが……

「！」

一人、ヤバイ奴を見つけた。

中学時代、1度だけ対峙したが、強さは俺と互角以上、しかし恐
ろしいほどの殺気、その末に俺が戦闘を離脱してしまったほどの奴
だ……俺だけの実力でどうにかなるレベルじゃないんだ。

さっきから一言も言葉を発していないし、ただ座っているだけだ

が、もしかしたら真の狙いは……

勝手にしろ。

第参拾八話（後書き）

新キャラ登場の気配。

名前何にしようかな・・・？

とりあえず織田信長か明智光秀とか、BASARAの悪役キャラから・・・

それと、活動報告書き始めました。

たまに更新する程度ですが、暇があれば見てください。

第参拾九話（前書き）

最近電波ネタが多い気がします。

というわけで、バカテストにもしてみました。

あと、前回予告したとおり、新キャラが登場します。超悪役です。

人によって好みが極端に分かれると予想してます。

第参拾九話

問 電波とは何か答えなさい。

姫路瑞希の答え

『電磁波のうち光より周波数が低いものを指す。光としての性質を備える電磁波のうち最も周波数の低いものを赤外線と呼ぶが、それよりも周波数が低い』

教師のコメント

正解です。

伊藤正宗の答え

『妄想や妄想癖のある人のこと。頭の中に何かを受信しているかの様子であることから、そう名付けられた』

教師のコメント

人の性格の電波系のことではありません。問題の説明不足だったとしてもこの間違いはないでしょう。

坂本雄二の答え

『最近の明久の言動』

教師のコメント

何があつたか知りませんが、ある意味バカよりひどいですね。

ドゴゴッ ン！！

「ゴハツ……！！」

すごい音と共に何か天井から落ちてきた。というかどう見ても人だった。丁度さっきの鼻血を散らして倒れている男の真上に落ちてきて、そいつが少し悲鳴を上げたけど、別に気にすることではないだろう。

「やっと来たか……何やってたんだ」

その人物は、僕の親友かつFクラス副代表かつ、相棒だった。

「正宗！　なんで天井から！」

「そういう話は後だ！　それよりこじ……明久！」

「今まさか一瞬小十郎って言いそうにならなかった！？」

「どうでもいいだろ！　それにしても、筆頭の俺を差し置いて先陣切るとは……立派な根性だな！」

「それこそどっちでもいいんじゃない！？　まあ褒めてるんだろうけど……」

いずれにせよ、正宗と雄二が来てくれたならもう安心だろう。

「で、出たぞ！ 坂本と『独眼』だ！」

「二人とも来やがったか！」

この二人を見て連中が浮き足立つ。これならいけるか……？

「お前ら！ このお嬢ちゃんがどうなってもいいのかア？」

向こうの一人が葉月ちゃんを羽交い絞めにした。女の子に、しかも小学生になんてことしやがるんだ！

「いいか？ おとなしくしてるよ？ さもないと、ヒデエ傷を

」

「……………負うのはお前」

ゴインッ

「あがぁっ！」

白目を剥いて倒れる外道。その後ろにはクリスタルの灰皿を振りきったポーズで立っている一人の小柄な男がいた。バイトのフリをして先に侵入していたムツツリー二だ。

確かに宣言通り酷い傷を負ったように見える。有言実行とは見上げた根性だ。

「お、お姉ちゃん！ お姉ちゃん！」

「葉月っ！ 良かった……。怖かったよね……。？」

解放された葉月ちゃんを美波が抱きしめる。感動の再会だ。

「お前ら！ 先に戻ってる！」

そう声をあげたのは秀吉の縄を解いていた正宗。なんで秀吉だけ縛られてたんだろう……。？

「分かったわ！」

美波を先頭に、葉月ちゃん、姫路さん、秀吉が部屋を出て行く。喜ぶのはこの後で

「待ちな！ この部屋からは出させねえ！」

しかし部屋の外にまだチンピラがいた！ さっきの半分ぐらいの人数だけど、逃げられない！

「おっと！ ここはどいてもらう！」

そのピンチに現れたのは木刀を持った正宗。本気状態なんだろうけど、いつもと何かが違う……。

「命の保障はしねえぞ！ 双剣！」^{ダブル}

そう言ってどこからか2本目の木刀を取り出した。

「か、かかれ」

その瞬間、正宗の姿が消え、気付けばチンピラの集まりの中心に、そして正宗の周りで鋭い残像が見えた……。十人弱の集団が一瞬で倒れた。

「正宗がなんかいつもより強い!？」

「今はどうでもいいだろ! さあ、早く学園に戻れ!」

「わ、分かったわ!」

少し動揺しながらも美波たちが部屋を出て行く。ひとまず安心だ。ムツッリーニには念の為、護衛についてもらうことにした。

「それにしても言いストレス発散の相手ができたな! 生まれてきたことを後悔させてやる!」

「こ、これが坂本か……。!」

「悪鬼羅刹の噂は本当だったか……」

雄二は雄二でいつもより活き活きとしている気がする。霧島さんに追い詰められているときに雄二と喧嘩なんて、ご愁傷様としかいようがない。

「残るはお前だな」

襲ってきたチンピラはみんな倒した。雄二が指したのは、あと一人、一言も話さず、ずっと座っていた男だ。

見た感じ、明らかに年上だ。それも高校生じゃないようなくらい。背が高めで、鍛えられた体型をしている。

なんとというか、さっきまでのチンピラに比べて只者じゃない、って感じた。

「……………ふっ」

「とりあえず、死ねえ！」

ブンッ ガシッ

「っ!?!」

雄二は空を切るような正拳突きをしたのに、その男はしっかりと拳を掴んでいた。

「うぐっ……………放せっ……………!」

雄二の拳は未だに引き下がらない。というか、掴まれたまま放してくれないようだ。

「おい……………そいつは放してやれ」

その声をかけたのは正宗。

「正宗、またお前の知り合いか？」

「すごく悪いほうのな。チンピラ共だったらお前も知り合いだったんじゃないか」

「すごく悪い……か。なにか深い因縁でもあるのだろうか？」

「いいや、全く知らないな。だが、妙な馬鹿力だ……」

確かに雄二の拳を軽く掴んでいる感じにしか見えない。すごい腕力の持ち主だ。

「先に手を出したのはこの男だ。なのになぜ私が手を放さなければならぬ」

荒々しく低めな声。冷血感を感じさせる。

「そう言い切れるか？ お前がこの誘拐の主犯だろ！」

「違うな。私はお前たちへの妨害なんざに興味はない。別件で居座らせてもらったただけだ」

「別件？ どういうことだ？ 明らかに座ってみていて」

「こいつらのボスらしき者は、その鼻血で倒れている奴のようだったかな」

「初対面ということか……じゃあなぜここに……」

「それは当人は分かっているはず……」

雄二が質問を浴びせ続ける中、その人が見つめる先には……

「私の目的はお前だ……伊藤正宗 『文月の独眼竜』！」

文月の独眼竜？ そんなのは知らないけど、正宗が関わるなら人
事じゃない。

「私はたまたま近辺を通りすぎただけだったのだが、偶然にも独
眼竜の名が聞こえた。その、吉井と言ったか？ お前がこの部屋
に入った隙に上がらせてもらった。こいつらは……何者だろう
か、興味もない」

要するに、依頼とかそういうのは全く関係なく、ただ正宗に用が
あつたらしい。

「ほう……とりあえず名前を聞かせてもらおう。そしてなぜ俺
を狙う？」

「………まつみやひろひで松宮久英。目的は……」

雄二の拳を放して左手を挙げた。指を鳴らすような形となってい
る。

「お前と同じ『正宗』の名を持つ、その木刀だあっ！」

パチンツ

ドオン！！

カラオケ部屋の四隅で突然何か爆発し、火が燃え広がった。な、何だっ！？

「うわぁ！ 何！？ リアル火事！？」

「熱っ！ くっ、爆弾なんて用意してやがるなんて……」

「………ん？ な、なんだ！？ 火事か！？」

煙とか熱を感じ取ったのか、さっきまで倒れていたチンピラたちが起き上がっていた。

「命までは奪わんよ……今ここを去れば、お前たちは助かる」

「……おい松永 じゃなくて、松宮！ ころしたらお前だつて」

「私は死なんよ……さあ、出て行くなら行くがいい」

「……覚えてるよ……！」

僕たち3人はカラオケボックスを出て行こうとした。

ついでにチンピラたちも出て行こうとしてるけど、そもそも命まで奪うほどじゃない。不本意だけど放っておこう。

「おっと、『独眼竜』だけは残ってもらおうか。木刀を置いてゆかない方がいいが」

僕と雄二は部屋を出られた。でも正宗だけは足止めを食らっていた。ああっ、扉が閉まりそうだ！

「「正宗！」」

僕と雄二の正宗を呼ぶ声が重なる。

「……構わねえ。お前らは先に行け！俺は何とかするから、早く戻れ！」

「くっ……分かった！行くぞ、明久！」

「う、うん。必ず戻ってくるんだよ！」

「任せとけ！戻ったら話しておきたい事が」

と言う声を聞いた瞬間、部屋の扉が閉まった。念の為開けてみようとしたけど、強い力がかかっているのか、開くことができなかった。

「雄二！遅かったのう……」

「ああ、つい楽しんできちゃった。だが一人やばいのがいてな、そいつをまだ正宗が」

「・・・・・・・・・・雄二」

「何だ？ ムツツリーニ」

「アキはどうしたのよ？」

「吉井君はまだ来てないようですが・・・・・・・・？」

「は？・・・・・・・・・・。・・・・・・・・・・あのバカ、こんなときにご行きやがったんだ！」

side 正宗

轟々と燃えるカラオケ部屋の中、俺はある男と向き合っていた。

名前は松宮。名前と雰囲気から、戦国BASARAの松永を連想してしまっただが、非常に似た空気を持つ。

そしてこの部屋の状況なのだが・・・・天井を見るとスプリンクラーがついているのだが、一部が深く凹んでいる。いつの間にか無効化させたのだろうか。

「この火がしばらく消えることはないだろう。他の部屋の心配もいらん。周囲の電話回線は切断した。消防を呼んだとしても、辿り着くのに時間がかかるように仕向けてある」

恐ろしい敵だ。偶然居合わせただけのはずなのに、まるで前から計画していたかのような準備の良さだ。

「この部屋は完全なる密室。だが私はいつでも出ることにはできる。お前がここを出るのは、「私に勝つ」・「木刀を渡す」・「焼けた死体となる」の3択だ。どれを選ぶ？」

木刀を渡す？ 左手に持っている普通の奴はともかく、右手のこれは、鷲ノ宮という家の家宝らしい。人の家のものを借りているわけだから渡すわけには行かない。

第一、刀は武士の命（一高校生だが）。それを渡すとなれば、もう二度と何かと戦う気にもならないだろう。

焼死体？ 死んでもいやだ。命は保障すると言っておきながらその選択肢はどうかと思うが、俺はまだやりたいことがある。死ぬようなことはしないさ。

よって、残り1択。

「死んでも、お前に勝つ！」

「……………ふっ、命知らずは嫌いではない。その心意気に免じ、その命、散らせて見せよう」

俺は戦う！ 大事なもののために！

「うらあぁっ！」

まずは左の木刀で首元をを攻撃。だが左腕で止められた。

すかさず右手の木刀を振り下ろす。今度はまた左手ではられる。

それから連続的に斬りつける。それらもすべて防がれた。

「貴様など、片腕だけで充分だ」

「……………随分なめられたものだ。だが、まだまだっ！」

「良いのは威勢だけだな」

それから何連撃も攻撃をしたが、100パーセント止められる。片手真剣白刃取りなんてはじめて見た。俺もいずれマスターしたいと考えているのだが……………

「うがああっ！」

左右同時に木刀を振る。それも2本同時に止めた。

そして奴の右拳が俺の懐に入った。速くて重い。壁まで吹き飛ばされた。

「ぐはっ！ 熱っ！」

火の中だということを忘れかけていた。壁際に燃え移っていた炎が更にダメージが大きくなる。

「み、右手は使わないんじゃ……………」

「サービス期間は終わったのさ……」

フリ ザみたいなこと言いやがって……火の中なのに。

《すまねえ……俺の力を貸せるもここまでだ……後は……
任せた!》

……おいご先祖さん! このタイミングで力尽きてんのか!?

「だが、右手を使わせたのは評価しよう。私が左手だけだろうと、
殴る隙をほとんど与えさせなかった。他の者共ならとっくのとうに
瀕死しているだろう」

余裕こいてんのも、今のうちだ!

「……こんなものが」

俺の体は瀕死に近い。体が動かすのもつらくなってきた。

「ほづれ……む、『正宗』のほづではなかったか……」

「?……あ!」

気がつくのと、左手に握っていたはずの木刀がなくなっている。奴
が持っていた。

「……ふんっ!」

松宮が木刀を握っている手に力を込めているようだ。するとさっきまで俺が左手に持っていたほうの木刀は、バキツという音を立ててへし折れた。そのまま床に落ち、炭と化してゆく。

「残りはその一本、木刀『正宗』だけだな」

「……一本あれば充分だ！ ……」

とは言ったものの、もう体は打撃と熱のダメージで使い物になりそうもない。

「強がりならやめておけ。……ひとつ言っておこうか。お前はまだ、その木刀を使いきれていない」

使い切れてない？ どういうことだ？

「その木刀 『正宗』は、使用者の潜在能力を極限まで引き上げる力がある。腕の立つ剣士が使えば天下だって取れるだろう。だが、お前は腕がそれなりの割には、全く引き出せていない。お前が持っていて、宝の持ち腐れと言うものだ」

すごい木刀という話は聞いたことがあるが、木刀そのものより、そっちの効果のほうがすごいわけか。確かに今まで使ってた他の木刀と違いを感じたことはほとんどないな。

「故に、私なら持つ価値があるだろう。さあ、そいつを渡せ！」

「ほらよ……」

手放すのは惜しい。借り物だからって、渡したくはないのだが、ここで燃えてなくなるよりいいさ。

そう思い、松宮へ握っていた木刀を投げ渡す。

ところが、松宮が掴むと思った瞬間、落ちてきた天井板が木刀に当たった。そのまま俺の手元に返ってくる……

「っ！ そいつまで私を裏切るか！」

そうか……『正宗』、お前の意思で返ってきてくれたんだな。一度は手放そうとして済まなかった。

「よかるう。そいつはもういらん。落ち武者もろとも炭にしてくれるー！」

頼む『正宗』！ もう一度俺に力を貸してくれ！ 潜在能力とやらを出させてくれ！

松宮がまた殴りかかってくる。体はとてもじゃないが、動きそうもない。攻撃はできなくても、せめて避けるくらいのごときは……

「……終わりだ！」

拳が目の前まで来た。もう避けられそうもない。

感情のままに、刀を振り回せ！

どこからか声が聞こえてきた。そうだ、避けられないなら

ドオン！！

止めればいい。

「む？ まだ動けるのか？」

そこから先は考えもなく、感情のまま刀を振った。勝つ、倒す、ブツ殺す……。憎悪にも似た感情もあるが、そう思えば思うほど木刀の振るスピードが速くなり、衝撃も重くなつてゆく。

「くっ……。この場で潜在能力を引き出したか……。だが、まだ3割程度だろう」

3割か。だがこうしてる間にもどんどん力が込上げてくる。極限まで至れば、勝てるぞ！

「そこまでして立ち向かう心意気。手強いものだ」

そういつて、松宮がどこからともなく何か取り出す。あれは、真剣だ！

「底知れぬ器と見た……。得物を使う同じ条件下で戦わせてもらおう。光栄に思え」

「なんだろうと、お前を、倒す！」

まだ諦めない！ 倒れるまでは！

「なかなか・・・健闘、したな」

奴は真剣を握った瞬間、更に強くなった。剣術は俺より完全に上回っている。しかも全ての攻撃が峰打ちだった。

潜在能力の問題じゃない。俺が未熟で、倒された。

「木刀を渡す気はない。殺したければ殺せ」

『正宗』は俺を裏切らない。俺も『正宗』を裏切ったりしない。もう二度と、渡すものか。

「潔い。敵ながら見事。木刀も、もういらんよ」

真剣を握ったまま、近づいてくる。殺気だけを感じる。

「もう扉は開くようにした。火消しが入るだろうが、今しばらくかかる。安心しろ、死体は残らない」

くそつ、本当に死を覚悟する日が来ると思わなかった。

安心して。君はまだ死ぬときじゃない。

さつきから話しかけてるお前。もしやと思うが、『伊達政宗』でもない……

君にはまだ潜在能力が隠れている。僕でも引き出せない、秘めた力が。

『木刀・正宗』だな。どういうことだ？ お前でも引き出せない秘めた力？

「とりあえず……その独眼を貰おう！（ズバツ！）」

「ぐああああー！」

その刹那、眼帯をしてない左目を切り裂かれる。目も開けなくなり、何も見られなくなった。

その瞬後、何者かが扉から入ってきた気がする。

だが意識が朦朧として、もうあまり覚えていない……

『……興味深い。また会おう』

第参拾九話（後書き）

後半はバカテスらしからぬテイストになってしまった・・・

「死ぬ」とか「殺す」という言葉、あまり使うものじゃないですね。

第四拾話（前書き）

とうとう40話目までできました。

更新遅れてしまい、申し訳ないです。

テストとかで忙しかったのが理由です。

正宗の所持している木刀について、後書きのほうに説明があります。

第四拾話

問 次の擬態語を使って、短文を作りなさい。

『スカット』

姫路瑞希の答え

『スポーツをするとスカットとした気分になる』

教師のコメント

正解です。問題ないでしょう。

伊藤正宗の答え

『スカットをすると、スカットとした気分になる』

教師のコメント

なんですか。スポーツのスカットに掛けてるんですか。しかし問題としては合ってるので点はあげましょう。

吉井明久の答え

『マスカットは甘くて美味しい』

教師のコメント

少し前に同じような回答を見たような気がします。そのまま食べても全く問題ないですが。

side 明久

「うっ……煙が……」

さっきの部屋を必死に開けようとしたけど、一向に開かなかった。

しばらく奮闘して、少し休憩したまた開けようとしたら、簡単に開いた。

「開いた！ 正宗！」

そこで見たのは火で覆われたような部屋、二人の男が対峙している姿だった。

そのうち一人はよく見かけている顔、正宗だった。但し、左目は切り裂かれた跡がついている。

「正宗、無事なの!？」

「……………」

呼びかけても返事はない。それどころか、なぜだか「意識がある」という感じがしない。

すると、正宗は右手の眼帯を取り外した。何の意味が？

「何も聞こえていないようだな。」

「っ！」

様子を変だと思っていると、急に正宗の姿が透明になり、そして消えた。

「……………ぐっ」

いわゆる残像ってやつだったのだろうか？ 気がつくとも正宗は、松宮、とかいう名前だった人と戦っていた。

「ど、どういうことだ？ あれだけのダメージで、もう片目も切り裂いたはず お前、その眼は……………」

そうだ、正宗の右目は元々見えないはずだから眼帯をしている。そしてもう片方が見えなくなったら、それこそもう何も見えないはず……………

「……………しかし、なぜかは知らないが、私と対等に戦えるようになったようだな」

確かにさっきの二刀流もいつもの刀装備・正宗より強かったけど、今度は別次元に感じる。刀は……………いつもの木刀1本だけ。

そのまま剣の打ち合いが続く。微妙に正宗が圧してるようだけど……………いや、同じくらいかな？

そして一撃、大きな音が響く。そして松宮が一步下がる。

「……………この傷は、高くつくぞ……………」

よく見ると松宮の持っていた真剣（銃刀法違反と言うものでは……………

・(にヒビが入っている。まさか木刀と打ち合っただの？

更に自分の頬を押さえている。木刀でも当たったのだろうか？

「……………ふう、ここで倒すのも倒されるのも惜しいな」

そういつて、壁に背を向けて立つ。

「興味深い。また会おう……………そう伝えておけ、吉井明久」

パチンツ ドオン！

「ここから出れば近道だ」

さっきのように指を鳴らすと、壁が爆発。外に繋がる大穴ができた。

「ううっ……………」

「あ……………正宗！」

正宗が膝からぐったりと倒れる。とりあえず体を支える。

「……………」

力尽きたのか、気絶しているようだ。息は……………してるのかな？

気がつくともう松宮久英はいない。その大穴から出て行ったのだろうか？

「とりあえず、早く出よう！」

倒れている正宗を背負つてと。あ、一応眼帯も持っていていこう。

近道……か。信じていいのだろうか。

でも、入り口の扉を通るよりは早いかもしれない。ここは通ってみよう。

「よつと、さあて、行こうか　　あぁっー！」

歩き出した途端、天井板が僕の頭上を覆うように落ちてきた。

火事現場、正宗を背負う僕（大振りな動きができない）、当たったら多少の支障が出る。

あ、当たる！

「　　っ！」

来るべき瞬間に備え、目を瞑った……

……

……。

・・・・・・・・・・あれ？落ちてこない。

と思つたら、天井板は粉々に砕けていて、それが降り注ぐ。

「・・・・・・・・・・全く、こんな日に何に巻き込まれているのやら・・・」

この野太い声・・・・・・・・・・まさか！

「て、鉄人！？」

「西村先生と呼べ」

助けてくれたのは補習の鬼・鉄人こと西村先生だった。僕のところに落ちてくる前に砕いてくれたようだ。

「ほれ。伊藤は担いでやろう。帰ったら清涼祭中にカラオケ屋に入つたことについて反省文だ！」

「こ、これにはいろいろ理由が・・・・って、壁が倒れてきてるよ
うな・・・・・・・・」

「くっ！ 吉井！ 召喚しろ！」

いつの間にか鉄人が召喚フィールドを展開していた。鉄人は片腕に正宗を抱えているし、もう片方だけじゃ足りなそうだ。そう
いうことか！

「分かりました！ 試獣召喚^{サモーン}！」

そして僕の観察処分者仕様の召喚獣が現れる。人よりもずっと強い力を持つてるから、壁を支えるくらい楽勝だ！

そういえば召喚獣って、文月学園とか、そこと関係する施設でしか召喚できないんじゃないかなかったような・・・

「行くぞ吉井！ その穴からだ」

「分かりました！ 正宗をお願いします！」

そして僕と正宗を抱えた鉄人は、倒れた壁を召喚獣で支えて道を確保し、松宮が爆弾で空けた穴から脱出した。特に畏とかそういうものはなく、文月学園に戻ってこれたのだった。

ただ、カラオケ屋を出るときに、鉄人が何かを言ってたような気がするけど、なんだったのかな？

『・・・・・・・・この穴は・・・・・・・・爆弾の・・・・・・・・いや、まさかな』

side 正宗

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「……どこだ？」

気がつけば、どこかのベッドのような場所で寝ていたようだ。

えっと、確か俺は……

「……っ！」

そうだ、思い出した！ 確か俺は松宮とか言う奴にいいところまで戦って結局完敗。そして眼帯をしていない左の目を切り裂かれたんだ！

そしてその左目は……

左目は……

……見えてる？

「……どういうことだ？」

左目のあたりを触ってみる。あの時、眼球まで深く傷つけられたはずだ。今はしっかり見えて、それどころか目の周辺に傷ひとつない。

「あ、気がついたね、正宗」

その声を聞き顔を向ける。すると明久がいた。

「お、おう。何があったんだ？ 俺」

まだ現状が把握できない。ここは学校の保健室みたいだが、なんで火の中にいて俺は助かっているのだろうか。

「えーと、それは……」

明久から俺が話を聞いた。明久が俺を助けに戻ってきたこと、その後俺が松宮と対等に戦っていたこと（？）、松宮が壁を爆破させ、消えていたこと、そこから鉄人が現れ（雄二たちが事情を話したらしい）、無事脱出（カラオケボックスはその部屋のみ全焼。他の部屋は無事）できたようだ。そして俺は気を失っていて、保健室に連れてかれた、ということらしい。

「そうか。それはいろんな奴に感謝しないとな」

「とにかくみんな無事でよかったよ。正宗は傷とか火傷とかは……」

「ああ……？　ほとんどない……？」

松宮との戦闘中、殴られた時の痣、真剣の切り傷、そして壁に当たれ、床に伏したときの火傷。いろいろあったと思うが、軽かったものは一切なくなり、深かったものも随分軽くなっている。

「まあそこはいいや。それより、俺が明久が来てからまだ戦っていたとはどういうことだ？」

左目を切り裂かれた瞬間、俺は気を失ってたと思う。誰かが部屋

に入ってきた気配と音は明久によるものだったのだろう。でもそれ以降の記憶は全くない。

「え？ 戦ってたじゃないか。僕が呼びかけても返事はしないし」

さっぱり記憶にない。明久がこんな手で俺を落としいれようとはしないだろうし……

「それにしても、今日の正宗は強かったね。なんか張り切ってた感があったというか……二刀だったから？」

「それは要因じゃないな。確か、伊達政宗って話はしたよな？」

そういつて明久に「伊達政宗」のことを話した。体だけ「伊達政宗」を借りること、更に刀は本数が多いほど強くなるなんて話もした。

「ところで、今回は正宗が持っている木刀を狙ってたんだよね？」

「ああ、そうなるな」

「どうしてただの木刀なんか狙われてるの？ そもそも、どうやって取り出してるの？」

そこはとりあえず気になるのか。この前は禁則事項と流したのだが……

取り出して。

この声は……木刀・『正宗』か。いいのか？ 聞こえるのは
だけなのか

まあ現れ方は見えないようにね。いつものように、どこ
からともなく出てくる感じで。君だけにしか聞こえてないはずだよ。

そうかい、分かったよ。どこからかはちょっと見えるだろうが。

「明久。まずここを見る」

俺が寝ていた布団を少しだけめくる。

「うん、足があるね」

そして布団をかけなおす。

「だがな………ほれ！」

「手品!？」

布団の中から木刀を取り出した。これが例えば漫画とかだったら
コマの範囲外から出てくる感じだ。

ところが……

ガーンッ!

「ぐあぁっ！」

突然木刀が俺を殴りかかってきた。そして頭に当たる。

『正宗！ 一体どうしたの！？』

明久が呼びかけてくる中、意識が薄れていく……

何があったのか、見せてあげるよ。

「とりあえず……その独眼を貰おう！（ズバツ！）」

「ぐあぁぁぁー！」

その刹那、眼帯をしてない左目を切り裂かれる。目も開けなくなり、何も見られなくなった。

って、なんだこりゃ？ 全然痛くねえ。

視覚と聴覚だけだからね。この部屋の暑さとかも感じないはずだよ。

確かに。松宮とか周りの音は聞こえる。何も見えないのは、眼帯

と左目の傷のせいかな。

いやいや、そもそもこれは何なんだ！？

これは君が気を失ってからの行動の再現を君の目線で見せてあげてるんだよ。

そんなことができるのか。じゃあ殴りかかったのもお前自身か？

まあね。本当はちょっと頭に当てればよかつたんだけど、勢いつきすぎちゃった

・・・まあそれで気絶した風に見せられたからいいけどな。あと星やめろ。

だいたい最近、ゴールデンウィークぐらいから前のご主人が別の宝刀を使い始めてさあ・・・確か名前は白ざく

「正宗！ 無事なの！？」

誰かが部屋に入ってきたようだ。そういえば開く様になってるといつてたな。しかもこの声・・・明久！

とりあえずお前の愚痴はまた今度聞いてやるから、今はこっちに集中させてくれ。

しよーがないな！。でもしばらくは君専用の刀になるからね。

分かった分かった。とりあえず何とか見えるようにならねえか？

それについてなんだけど、多分大丈夫だよ。

多分ってなんなんだ、と思っていいたら、見ている風景（真っ暗だが）が微かに動いているのが分かった。

とととと視界が開き、周りを見ることができたようだ。

眼帯をしていた《……………》、右目で《……………》。

なぜ見えるんだ？ しかもただ見えるだけじゃない。

《む 眼帯を外した……………見えるわけ……………》

誰かの声が聞こえてくる。まさか……………松宮？

心の声、つてもものが聞こえたんじゃないかな？ それも今聞けるよ。

そんなバカな と考えた矢先、

ガキンッ！

いつの間にか斬撃戦が始まっていた。

すごい……………アイツの斬撃について……………

それどころか、周りも、松宮も、止まってるような速さに見える。手の動きまでは速く
なっていないようだが、充分についていってる。いや、むしろこちらが
圧してるのか！

・・・・よしっ！ 一撃頬に入った！ 更に力強く真剣を叩き
割った！

予め聞いとくけど、これは君の無意識のうちなんだね。

ああ、そうだな。未だにどういふことかさっぱりだ。

その後松宮はまた指を鳴らす。すると壁に大穴があいた。

それと同時に、また意識が薄れていく……………

と、言うようなことがあったんだ。

起き上がるとまたベッドの上に。

さっきまでいた明久も、今はいない。急に俺が倒れて、誰かを呼
びに行ったのだろうか？

代わりに、別の人物がベッドにうなだれていた。

「優子……」

明久と入れ替わりで看病に来たのだろうか。余計な心配かけたもんだ。

（あの時、『俺』は右目で、見てたんだよな……？）

昔、とある事故で右側の目は見えなくなった。眼球だけは残っているのだが、それは違和感の有無の問題だ。

実は優子もちょっと関わってるんだが………今はどうでもいい。

今はまた眼帯がついている。それを取り外し、手で無理矢理開いてみた。

「……」

いつものように、何も見えてなかった。

第四拾話（後書き）

正宗の持つてる木刀ですが、

某執事コメディイに出てくるアレそのものです。

世界観は少しつなげてますが、そっちのキャラは一切出すつもりはないので

ご了承下さい。

第四拾巻話（前書き）

更新遅れて申し訳ないです。

最近テストでバタバタしておりまして、気がつけば来週またテストが……

オリ設定多数登場です。

第四拾巻話

次の漢字の読み方をひらがなで書き、その意味を答えよ。

『森羅万象』

姫路瑞希の答え

『読み方：森羅万象

意味：、宇宙に存在するありとあらゆる事象』

教師のコメント

正解です。簡単だったでしょうか。

吉井明久の答え

『読み方：もらまんぞう

意味：明治時代の政治家』

教師のコメント

本当にいそうな雰囲気もありますが、おそらくいませんよ。

伊藤正宗の答え

『意味：ビツクリマンチヨコのパクリ』

教師のコメント

パクってるかどうかは知りませんが、意味は全く違いますからね。

「そうかい。むこうはそこまで手段を選ばなかったか………済まなかったね」

放課後、（なぜか自分の木刀で倒れた）正宗は木下さんに任せ、僕と雄二は教室で学園長と話をしていた。

雄二は予め廊下で学園長に話しを聞かせるように呼びかけたらしい。

とりあえず今日の僕たちの被害について話したところ、誘拐の話しの辺りで突然学園長が僕等に頭を下げてきた。あの厚顔な学園長がっ！

「そうだ、今回のトラブルだけど、警察関係には伏せてあるけど、問題ないね」

「世界的に注目されてる進学校だからだな。公になるとまずいこともあるんだろうな」

まあ確かに評判は下がるんだろう。近所のカラオケ屋っただけならともかく、その生徒まで関わってるとなれば、全然話は変わる。

「とりあえず、俺たちに話してないことがあるんじゃないか？ 或いは、嘘をついているか」

嘘か………確かに矛盾してる話もいくつあった。何か伏せておきたいこともあるのだろう。

「あと、正宗のこともな」

「え？　そこでなんで正宗なの？」

「いろいろ不可解な節があっただろ。喫茶店の不参加、カラオケ屋でも別行動、今日の正宗は、まるで裏で何かを掴んでそれを元に行動してるようだった。俺としては、ババアが一枚噛んでいとと推測してるが、どういう関係なんだ？　正宗は、何者なんだ？」

「……さあ、知らないね。ただアタシが伊藤に依頼したってだけだよ」

ほぼ否定する学園長。でもこの反応、明らかに何かありそうだ。

「……まあ詳しいことは本人が来てからでいいや」

雄二もとりあえず妥協したようだ。かなり疑問は残ってるようだけど。

「そもそも、最初に取り引を持ち掛けられた時からおかしいとは思っていたんだ。あの話だったら、何も俺たちに頼む必要はない。もっと高得点を叩き出せる優勝候補を使えばいいからな」

「あ、そういうえばそうだよな。優勝者に後から事情を話して譲ってもらうとかの手段も取れたはずだし」

「そうだ、わざわざ俺たちを擁立するなんて、効率が悪すぎる」

擁立……えっと、確か『支持すること』だったけ？

「いろいろまとめると、俺たちが教室の改修を申し込んできたのを都合よく利用して、俺たちが召喚大会に出場するのを仕向けるように、渋っていたわけだ」

「やっぱりアンタが諸悪の根源か……！」

「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされてないかい？」

「まあ、黒幕つてのは間違ってもない」

「！……正宗！」

そこに現れたのは、さっきまで自爆していた正宗だった。

「よう明久。さっきはありがとな」

「よう正宗。丁度俺からお前に聞きたいことがある。お前も俺たちに話すことがあるんじゃないか？」

「そうだったな。とりあえず、学園長。話を続けていいぜ。それからのほうがいいだろう」

「全く……この話は、アタシの無能を晒すような話だから、できれば伏せておきたかったんだけど……」

公言しないで欲しい、と前置きをして、僕らに真相を明かし始めた。

「それと、学校やカラオケ屋にいたチンピラだが……」

「そいつらは、教頭の差し金だよ」

教頭……竹原先生か。

「なんでチンピラたちは竹原先生なんか協力してるの？」

「そこは……俺のせいだ」

正宗がそういった。また自分だけで責任負って……！

「明日以降はどうなんだ？」

「まさか、また来るの……？」

あの後、逃げるのに精一杯で結局取り逃がしてしまった。明日まで来られたらたまったもんじゃない。

「仕方ない。俺が校門で見張っていよう。学校の敷地を踏ませやしない！」

正宗がそういつてるけど、また正宗一人にまかせっきりにしちゃっていいのだろうか……？

「ああ、心配いらないよ。チンピラたちなら今は警察のご厄介にな
ってるよ」

「ほ、本当ですか!？」

「アタシの特殊なツテでね。少なくとも明日は大丈夫だろうさね」

「そういう方向にもスポンサーがいるわけか」

それはよかった。明日はもっと大事な日だから、邪魔が入ったら
大変だ。

「但し、敵が完全に消えたわけじゃないけどね」

そういうと学園長は一枚の紙を出した。それは召喚大会のトーナ
メント表。

「決勝戦のカードを見な」

勝ち上がったペアの線には赤い線が上書きされている。決勝まで
引いてある二本の線の片方は僕ら。もう片方は……………

「常夏コンビ……………!」

「その通り。偶然だろうけど、相手側にとってはアンタらを直接的
に倒すチャンスがあるということになるね」

よく見ると常夏コンビはAクラス所属らしい。実力は本物だ。

「大丈夫だ。お前らなら、正攻法で勝てる」

正宗は応援してくれてるけど、正直自信はない。今日だって正攻法で戦ったのは最初の一戦だけだったし……

「決勝戦の教科は？」

「日本史だったな……ああ、最初からそのつもりだ」

そのつもり？ 雄二は何を言ってるんだ？

「正宗、明久にラストスパートで教えてやってくれ」

「それを言うなら雄二だって正宗に教えてもらったほうがいいんじゃないの！？」

ようやくコイツの言いたいことがわかった。正宗に日本史を教わって点数の底上げをしてもらおうって魂胆だな！ でもそれならよりバカな雄二が教わればいいだろ！ 僕だってこの前の試召戦争以来、必死に勉強してるんだから！

「任せておけ。二人とも俺が教えてやる。なあに、お前らの点数や操作センスを考えれば既に勝てる領域だろうが、確実性を高める必要もあるからな」

「……………（ガンのくれあい）」

でも、せっかく得点をあげるチャンスなんだ。藁でも何でもすがっておう。

「よろしく頼むよ、伊藤。このガキ共に力をつけてやってくれ。悪

いけど、流石に裏であつても学園側で得点の水増しなんてことは許
可できないからね。実力で優勝するんだよ！」

「「「おうー！」「」」

僕、雄二、正宗の声が重なる。よし、気合が入った！

が、そこで雄二が別の話を始めた。

side 正宗

「そつといえば学園長、あと正宗」

俺たち3人がひとつになつて常夏コンビ撃破に誓いを立てた後、
雄二が学園長と俺に話しかけた。

「なんだい？ 話すことは一通り話したよ」

「ああ、そのようだな。それでも、少し聞きたいことがある」

聞きたいこと。なんだろうか？

「率直に言う。六爪流を召喚獣に施すにはどうしたらいい？」

「それは、俺の召喚獣のアレか？」

「そつだ。アレはきつと、正宗の召喚獣特有のものではないと思っ
ている。現に形が違えど、Bクラス戦で明久が出したものと同じも

のだろう」

「ふむ。それがどうかしたのかい？」

「まさか、明日の戦いで使いたいと言うのか？」

「ああ、それを使えば、更に有利な勝負ができると

「簡単に言うな」

「ん？ お前はよく使ってるじゃないか」

「残念ながら、アレは簡単に引き出せるものじゃないんだ。特に、明久にはおすすぬめない。できれば2度と使わないほうがいい」

「え？ どうしてさ？」

「あのモードはな、召喚獣への負担が大きいんだ。だから観察処分者が使おうものなら普段以上のフィードバックを味わうことになる前に経験しただろう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ああ・・・」

最悪の場合、リアルに命に関わるような事態になりえない。

『吉井には使わせるな』と、学園長からのお達しも前に受けたほどだからな。まああの調子なら簡単には出ないと思うが・・・

「確かに、俺と明久のあの能力は、同じシステムのものだ。発動条件とか発動後の変化が同じ現象だからな」

点数半分以下で発動、攻撃力・素早さ上昇、防御力低下、丁度1分で0点になるように点数が減少していく(ダメージを受けてもペースは一定) etc・・・といったところ。微妙に違うのは、俺の場合六爪流だったが、明久は雷をまとった感じだっただろうか。

「そもそも、2人の召喚獣のあの変化はイレギュラーなものだったんだよ。アタシもある日偶然発見してびっくりしたよ」

学園長も召喚獣の持つ特殊能力は、腕輪くらいしか設定はなかったらしい。科学とオカルトと偶然が重なってできた、何が起きても不思議じゃないってことか。

「だが、能力を引き出せれば相当な戦力だ。誰でも使えるのか？」

「さあね。でも、引き出せる人はかなり限られてると推測してるよ」

意味ありげに答える。そのまま学園長は話を続ける。

「まだ二人しか例がないから確実な話じゃないけど、アタシの仮説だと、召喚獣の『操作の巧さ』が関係してると考えているさね」

「なるほどな・・・観察処分者の明久と、操作センスの高い正宗の共通点だな」

俺としては、まだそれだけじゃないと思うんだよな・・・なんかこう、ここぞって時に突然出てくる感じに・・・

「ま、そういうのならこの話はいい。最後に1つ。正宗・・・」

さっきの話は諦めたようだが、今度は雄二に、何かを疑うような、
そういう目で尋ねられた。

「お前は……何者だ？」

「………というと？」

「今日のお前の行動を見て、いろいろ疑問に思ったんだ。なぜ教頭の
思惑を最初のほうで知っていたのか、なぜやたら俺たちにも事情
を隠すのか……」

少しためて続ける。

「そんでもって、なぜ見てたわけでもないのに俺の召喚獣の装備を
知っていたのか、とか挙げれば山ほどある。俺は2年になって今日
始めて召喚獣を出したんだぞ」

そういえば、すっかりそんなことを言ったな。メリケンサックだ
ったって。

俺たちは1年の頃から実習とかで召喚獣を呼ぶ機会は少しだけ
あった。そのときも、召喚獣は点数にあった装備をしていたわけだ
が、2年の振り分け試験でまた装備が変わっているものもいる。雄
二はその一人だった。

当然そのときまで本人ですら装備を知る者はいないはずだが……
・知る者はいなくもない。

例えば、『試験召喚システムの関係者』、とかだ。

「勘付いたか。流石、元・神童。……学園長、話していいよな？」

「……好きにしろ。その二人には、隠し通す意味もないよ」

学園長もやれやれという顔をしている。それと同時に、厳密な表情も混ざっている。

「そうだな。率直に言おう。俺はこの学園で、ある称号且つ役職を担っている」

明久も雄二もよく分からず驚いた顔をしている。そのまま続けて言い放つ。

「その名も……裏・観察処分者。影の観察処分者だ」

第四拾巻話（後書き）

次回も同様の場面・オリ設定多数で続きます。

少しは早くなるかと約束します。

第四拾貳話（前書き）

ほとんど前回の続きです。

オリ設定で分からないところがあれば

感想で送って下さい。

第四拾貳話

問 次の英文を和訳しなさい。

『He named his son Masayoshi.』

姫路瑞希の答え

『彼は息子をマサヨシと命名しました』

教師のコメント

正解です。特に問題はないです。

伊藤正宗の答え

『彼の名前は孫正義といっています』

教師のコメント

son=息子です。小文字ですから。しかも実在してる人物です。

side 明久

「その名も……裏・観察処分者。影の観察処分者だ」

裏・観察処分者？

僕が普通の観察処分者で……そんなものがあったの？

「なんなんだそれは？　そもそも観察処分者ってのは、学園に一人・明久のことしか聞いたことがないぞ？」

僕だって初耳だ。

「無理もないさ。知ってる人間だって、指で数えるほど。例えばまず学園長。あとは学年主任、そして生活指導の教師　　鉄人くらいなもんだ」

今思えば、なぜだか鉄人はいつも、正宗との接し方は他の人と少し違っていた。決して鼻肩してるとかじゃないけど、こういうわけだったのか。だから一緒にいる僕たちも……それは違うか。

「そんな役職があつて、一体何をしてるってんだ？」

「簡単に言えば、教師の雑用。基本的には通常の観察処分者と一緒かもしれないな」

「どこが違うんだ？」

「裏で働く、暗部での活動、ってところだ。召喚獣を使った力仕事をしてるわけじゃないぞ」

「……具体的には？」

「例えば、召喚獣のモニターとかだ。召喚獣の動きや、400点以

上の腕輪機能や、そういうのを誰より先に定期的にテストしてただ。明久の召喚獣の物理干渉だって、まず先に俺が試したんだ」

「そうだったの!？」

「ああ、フィードバックの調節も、『罰』として丁度いいよりちょっと強めっていう絶妙なダメージに設定にしたんだ。体を張ってな」

それはちよつと驚いた。僕以外にも、あの痛みを知ってる人がいるんだな。

「それなら、もつと弱めに設定して欲しかった」

「ある日の朝、鉄人に『観察処分者が任命された』と聞いてすぐに調節させられた。まさか明久だったとは思わなかった」

「いや、想定できるだろ。でも設定はお前がやった。ということは、明久の観察処分者より前からあったのか？」

雄二の僕をバカにしている暴言が聞こえる。失礼な。

それは置いといて。確かに、僕が学園創立以来、初の観察処分者だったらしい。それがだいたい2年に上がる直前ぐらいだったから、話を総合すると通常の観察処分者より裏・観察処分者のほうが先にあったことになる。

「その通りだ、入学当時からやってる。裏・観察処分者なんて名前は後付け。そのときは名前なんてなかった。正確には俺で『式代目』らしい」

「ふうん、一代目は？」

「それとも『き代目』か？」

「……………」

な、なぜか正宗どころか、学園長まで顔を背けてしまった。よく分からないけど、この話には触れないほうが良いのかな？ そしてなぜ難しいほうの漢数字を？

「要するに、『召喚システム』の関係者ってことか。じゃあ俺の召喚獣の装備を知っていても不思議じゃないな」

「知り合いだからな。記憶に残りやすさ」

流石に全部覚えてるわけじゃないようだ。

「それにしても、別に隠すほどの称号でもないじゃねえか。なんで影の役職になってるんだ？」

まあ確かに、広く知らしめる必要はないけど、そんなに隠す必要もないような気がする。

「仕事は召喚獣絡み以外にもあるんだ」

「召喚獣以外？」

その辺りが僕とは少し違うようだ。

「例えば、機密事項関連の仕事とか、隠密行動とか、用心棒とか、

いわゆる裏や影で暗躍することもやってんだ。明るみに出ると、それじゃ動きにくい」

そうか。スパイ系のゲームとかやるときに気にも留めたことはないけど、存在そのものがばれていると、それだけ警戒されるよね。

「さて、これが裏・観察処分者の全て（仮）だ。当然、学園の生徒にも漏らせない話だったが、状況が状況だったりしたからここで話しておくことにした」

状況が状況でも、僕たちに話してしまっただろうか。

「これもな、俺がお前ら二人を信頼してるから打ち明けられたんだ。だから、周りには黙っててくれよ」

「分かった。誰にも言わないよ」

「そうだな。貸し1、と」

雄二、こんなことで貸しを作らなくても……

「じゃ、そんな感じで頼むぞ。それと、俺も学園長と話があったんだ」

「なんだい？」

「メールで送ったじゃねえか。戦いの途中、フィードバックみたいな現象が起こったと」

戦い……？

「ちょっと待って。正宗は、今日召喚獣の戦いをしてたの？」

「ん？ ああ、そうだ。竹原の妨害で2対1の戦いを2回やった」

「どっちも勝ったの？」

「負けてたら、ここにはいないだろう」

何気に僕らの裏ですごくいいことやってたんだ。僕だと、立ち回るのがやっとなのに……。

「じゃあ、“あの部屋”に来てくれ。その2人も、案内してやりな

「……いいのか？ 連れて行って」

「そこまで暴露したんだ。それなら、どこまでも引き込んでやろうじゃないか。いずれ有効利用してやるさね」

堂々と魔女みみたいな発言をした。いや、容姿も含めて元からだっ
たか。

「それじゃ、後で合流しようか。アタシと一緒にいくと怪しまれる
から別々に」

「ああ、分かってるよ」

そういつて学園長は教室を出て行った。

「それで正宗。俺たちを巻き込んでよかったのか？」

「どうせ俺は行かなくちゃならないし、勉強教わるうってのに俺がいないんじゃないだろ」

「それを忘れてくれたのはよかったよ。それで、どこへ行くの？」

“あの部屋”というくらいだから、口に出していえないような場所なのかな？

すると正宗は言った。

「試験召喚システムの管理室だ」

side 正宗

「遅かったじゃないか」

やってきたのは、学園の地下にある試験召喚システム管理室。ここに入る方法は二つあるのだが……

「なんだってババア、こんなところから入らせるんだ……」

雄二が不満を言う。

一つはカードキーを使って入る正面入り口。もう一つは俺たちが通ってきた排気口のように狭い裏ルートだ。

「そりゃこんなところまで一緒に来てたらアタシとアンタらに何かあるって思う輩がいるかもしれないからね」

「まあそうだろう。それで、わざわざここに来て話すのか？」

「おお、中はこんな感じだったんだ」

明久が感動している。

この施設の場所は一般生徒もよく知ってるし、中身だつてだいたい公表されている。但し当然生徒の立ち入りは禁止。入れるのはカードキーを持っているシステムの関係者のみ（俺はカードキーを発行されてないのでさっきのような入り方をするしかなかった）。

「つて、正宗。壁のこの部分、なんか黒く焦げた跡があるけど・・・
・しかも傷になつてる」

明久が壁の一部を指しながら聞いてきた。それは確か・・・

「さあな・・・学園長なら何か「知らないよっ」「知らないそうだ」

俺が説明している途中で否定された。俺自身、このことに触れるのは初めてじゃない。俺が初めてこの施設に入ったときから気になつていた。質問したが、学園長は答えてくれない。

それ以後、学園長がうつかり喋つたような話がある。俺

なりに統合してみた仮説がある。

「俺は『き代目』が関わり深いと睨んでいるんだが……いい加減話してくれよ、学園長」

「……そんなことより、聞きたいことがあるんじゃないのかい？　ないなら解散するよ？」

うーん、やっぱり学園長はき代目について話したがないんだよな……絶対関係ある。

それにしても、き代目って、何者だったのだろう……？　実は俺もよく知らない。

「……そうだな。じゃあ学園長。いつの間に俺の召喚獣はフィードバック仕様になってんだ？」

学園長はさっきまでの話を全て忘れたように答えた。

「そもそもね、召喚獣を多く使用すると、いずれは起こるんじゃないかって、予測はしていたこと。実証したのはアンタが初めてだよ」

「既に分かったことなのか？」

「まあまずその話の前に　ほれ、そこで召喚してみな。ついでに、アンタらもね」

学園長がキーボードを叩きつつ、明久と雄二に向かって言った。もしか、それが目的で呼んだのか？

そしてそこというのは、自動召喚フィールド。教師のフィールドよりやや狭く、場所も移動させられないが、教師なしで召喚獣を呼び出せる。それでも起動させるためには教師（システム関係者）が必要だが。

「『『試獣^{サモシ}召喚』』」

俺たちは迷わず召喚していた。なぜだか二人は試したくなっただけらしい。

「別にそんなに変わんねえな……」

「そうだね。まあ普通に動くよ」

「これは召喚獣のあらゆる情報を測るためのものだからね。ついでに、こんなこともできるよ」

学園長はまたキーボードを動かした。するとフィールドから何か出てくる。こいつは……

「正宗の召喚獣が出てきたよ」

「ああ、だがこっちにもいるじゃねえか」

俺が今さっき呼び出した召喚獣と、更にもう一体同じ特徴の召喚獣が出てきた。比較的颜色が薄い。いわゆる、ホログラムみたいなものだろうか。

「あれ？ この2匹は？」

「拳銃と狙撃銃か。珍しいな。名前は……、これは……！」

俺の召喚獣2とその2体には頭の部分に名前と点数が浮き上がっている。俺にも見覚えがあるぞ。

『Aクラス 紺野 洋平 & Bクラス 井川 健吾

物理 219点 & 173点

』

「こいつらは、3回戦で俺たちが戦う予定だった奴らだ」

「でも、食中毒で棄権したんじゃ……」

すると急にホログラムたちがバトルし始めた。それも、昼間の戦いと全く同じ動きをしている。

「本当は俺が戦って倒したんだ。で、それよりも、これはなんなんだ？」

「正宗が倒してたのか……」

「試召戦争の戦いの記録は全てここに入っているさね。今はそれを再現する機能だよ。この場所限定で見ることができる」

要するに、見せたかっただけか。

「それより本題を……」

「最近アタシは、召喚獣と人間の心と体の繋がりを示す数値を取り入れた。とりあえず仮に『シンク口率』と呼んでるけどね」

また別の話を……シンクロ率？ 本題と同じくらい気になるが……

「この数値が高ければその人は召喚獣をうまく扱える。逆に、召喚獣をうまく使える人はその数値が高い、とも言えるね」

興味深い。本題は置いといて、こっちを聞いておくことにしよう。

「それで、なんなんだ？」

「その数値は召喚獣の特殊機能にも深く関係する、と分かったのさ。アンタの、六爪流ってやつにね」

関連性は、よく分からないが……

「じゃ、試しにアンタらの召喚獣のシンクロ率を割り出してみるよ。2学年の今頃だと、吉井と伊藤を除いて 平均10%ぐら이다よ。個人差もあるけどね」

百分率か。素質にも影響があるってことなのか？

「じゃ、まずは坂本からいこうか。稼働時間としては、Fクラスの中でもかなり短いだろうね」

「2年に上がって今日が初めてだ」

「同じ点数の女子相手にボコボコにしてたよね。僕から見ても、意外とうまかったと思うけど……」

しばらくすると、雄二の召喚獣の頭にある数字が浮かんできた。

『坂本雄二 シンク口率 15%』

「こういつ感じで出るのか。って、15%って……」

「かなり高いんじゃないか？」

「驚いたよ。まともな戦いだって、今日の一回戦だけなんだろう？」

これは神童の成せる技か。それとも才能なのか。

「じゃあ、次は吉井だね。観察処分者だから、平均よりかなり高いはずだよ」

『吉井明久 シンク口率 29%』

普段からよく動かしている明久。痛みまで共有してるからな。なかなかのものだ。

「観察処分者でも、こんな程度なのさね」

「俺としてみても、才能が発揮されてるとは思えん」

雄二は辛口のコメントだ。俺としても、雄二はまだ上がり代があるよつな気がするぞ。

「じゃ、最後は伊藤だ。アンタは入学以来から頻繁に動かしてるからね。この学園の誰よりも稼働時間が長いよ」

「正宗は無駄にスペックが高いからな」

「そうだね。無駄に召喚獣も操作巧いし」

二人とも、『無駄に』が余計だ。

『伊藤正宗 シンク口率 47%』

「「っ!」」

明久と雄二が飛び上がって驚いていた。確かに、ダントツに高くても自分でも驚いた。

「しかし、こうやって見ると、この数字の意味はかなり大きいな」

「え？ そうなの、雄二？」

「ああ。例えば、ほぼ同じ特性の武器で、同じ得点の相手と戦うとする。有利に戦えるのは、召喚獣の扱いが巧いやつに決まっているだろ？」

「そういうことが」

明久にも分かりやすい、単純な説明だな。

「更に言うと、ある程度シンク口率が勝っていれば、ちょっと点数が高い奴にも対等以上に戦えるわけだ」

「その数値はまだ初期状態さね。戦闘中には更に上昇していくよ。試しにちよつと軽く戦わせてみな」

よく分からないが、俺たち3人で三つ巴の戦いをした。軽い攻撃で、武器同士が合わさるように。

『坂本雄二 シンク口率 18%』

『吉井明久 シンク口率 31%』

『伊藤正宗 シンク口率 48%』

「上がる度合に差があるぞ？」

「その通りさね。元々の数値が高ければそれだけ上がりにくくなる。本気でやれば、もっと上がりやすいよ」

俺は最初がかなり高かったから1%しか上がってないらしい。

「『本気』というか、操作の中で細かい行動をすれば大幅に上がるよ。ちよつとそこの戦いを見てみな」

学園長に言っているのは、さっきのホログラムの戦いだ。丁度俺が神業らしきことをした場所だった。

「またすごいことやってたね……」

「どつという芸当だよ……」

「まあコツだよ、コツ」

「それじゃ、やっと本題だよ」

気がつけば丁度俺のホログラム召喚獣の左腕に銃弾を食らったところだ。すると、急に動きが止まった。一時停止のような機能を使ったらしい。

「この瞬間のシンクロ率を割り出すよ。アタシの仮説だと」

『伊藤正宗 シンクロ率 76%』

「 シンクロ率・7割5分のところでフィードバックが発生する、と考えたさね」

なるほど、さっきの芸当で一気に上がったのか。

「その数値はともかくとして、どうしてフィードバックが発生するんだ？」

「本人と感覚を共感し過ぎてしまい、ついにはダメージの共感を引き起こした、だろうと考えている」

「よく分かんが、意外とスジが通っていることはなんとなく分か

「たぜ」

まあ要するに、召喚獣と感覚が馴染みすぎたわけだ。能力は相当なものに違いないが。

「今回は導入の数値で、しかも一撃だけだったからよかつたけど、これからもっと　　極端な話、100%にでもなってみな。戦闘不能時に本当に死にかねないよ」

それは恐ろしい話だな・・・だがそこまでのシンクロ率に達したら大体の敵に勝ってるんじゃないだろうか。

「それとちなみに、六爪流の目安は5割くらいだよ。伊藤ならすぐに引き出せるだろうね」

「そうか。まあよく分かったぜ学園長」

収穫は大きかった。明るみにはでないだろうが、重要な話だった。

「ところで正宗。お前はよくこの妖怪ババアのことを、学園長と呼び通せるな」

「そこは・・・あれだ。矯正させられた」

俺は最初の最初はババアと呼んでいた。だがそのうち蔑称できない状態になってきて・・・まあそのあたりの経緯は、いずれ語ることになるだろう。

「それじゃ、地上に戻るか。勉強教えてやらねえとな」

「頼んだ」

明久と雄二の声が重なった。やる気も充分、明日は絶対勝たせてやる！

「伊藤。アンタにもうひとつ依頼がある」

地上に帰る際、学園長に呼び止められた。明久と雄二には内密の話らしいので、2人には先に帰らせた（自習しておけ、と言っておいた）。

「それで、他にまだ依頼があるのか？」

「まあチンピラも消えたことだし、とりあえず明日は、基本的にはとんどやることはないよ。空いている時間はクラスのほうを手伝ってきな」

そういえば、今日はクラスのほうでは何もしなかったな。なにかしら手伝ってやらないと。

「教頭の動きは常夏コンビのこと程度しかしないと踏んでいるよ。でも、吉井たちが失敗したときの保険用に……」

「明久たちは失敗なんてしない」

「それが一番いいさね。保険用ってのは言い過ぎたよ。率直に言う」

と・・・」

それは、このときの俺が一番避けたいことだった。

「アンタには、公の場に出てもらおうよ」

第四拾貳話（後書き）

学園祭編、1日目終了です。

2日目は目線は基本的に正宗、時々変則的になりそうです。

前は「前回よりもっと早く更新する」と言っていました、

完全に公約違反ですね。申し訳ないです。

お詫びとってはなんです、要望があれば、できる限り実現させます。

何でも送って下さい。

第四拾参話（前書き）

更新遅れて申し訳ないです。

もう少しで夏休み入りますので、

一気にペース上げます！

あと、暑苦しい夏ですが、あの暑苦しいオリジナルキャラクター再登場です！

第四拾参話

以下の問いに答えなさい。

『冠位十二階が制定されたのは西暦（ ）年のことである』

姫路瑞希の答え

『603』

教師のコメント

正解です。

坂本雄二の答え

『603』

教師のコメント

一体どうしたのですか？ 驚いたことに正解です。

吉井明久の答え

『603』

教師のコメント

君の名前を見ただけでバツをつけた先生を許してください。

「それじゃみんな。今日もしっかりやりなさい！」

大変だった1日目の次の日。島田の号令と共に清涼祭2日目が始

まった。

明久も心配していたが、姫路も島田も昨日のことはほとんどトラウマにもなっていないことが分かる。

さて、今日は俺もクラスに参加せねば……

「俺は厨房だったよな。料理の腕を見せてやろう」

「あれ正宗？ 今日喫茶店できるの？」

「おう。午後にまた用事があるけどな」

昨日学園長に頼まれた仕事は、召喚大会決勝戦の直後にある。他に私事もあるが、とにかく午前中は暇なのだ。

「……………」

なぜだか話していた明久が黙り込んで考え事をしている。珍しいな。

「ちよつと“正宗以外”全員集合」

その明久の号令と共に、主に雄一・島田・姫路・秀吉・ムッツを中心にクラス全員が集まった。

内容がかなり気になるが、俺以外といわれては、強制されても入る気がしない。

『……………に、したいんだけど……………』

『なるほど、面白そうだ。乗ったぜ』

『この際、少しでも克服させてあげましょ』

『料理なら私だっていますし……………』

『そ、そうじゃな。それで、衣装のほうは……………』

『……………任せろ。いつか着せたいと思って、作ってある服がある』

なんか1つか2つ、変な言葉が聞こえたな。

そして雄二が最初に口を開く。

「それじゃ、俺は午前中休ませてもらおう」

「そうね。午後頑張ってちょうだい」

なんだ、そんな相談か？ 確かに雄二は召喚大会とかもあるが……………

「うむ。しかし、ホール班が欠けてしまったぞい」

「厨房と比べて、ホールは人が減ると困りますよね……………」

「……………厨房は余力充分」

なぜだろう。妙に演技じみたやり取りだな。

「そうだ！ 正宗、厨房班に　　「断る」　　早っ！ 即答してる！」

何かと思えば、そんな話か。別に俺じゃなくたって、他に回せる人材があるだろうに。

「まあそういうな。お前には、特別にこんな衣装を用意した」

ムッツが用意していた紙袋を受け取る。中身を見て驚いた。

「こっ、これは……！」

「ホール班に回ってくれるのなら、その衣装を着させてやる」

それだけの対価があるものだろうか？ 少し考える……

「まあちよつと練習してみるか。とりあえず着替えて来い。姫路・島田・秀吉、客役をやってくれ」

「し、ご注文は……」

「ふふっ……私は胡麻団子を……」

「クスツ……ウチは肉まんぞ」

「ワシはマンゴープリンを……」

「うおおーい！ 笑うな！ 実は秀吉も演技で隠しているだけだろ！」

「まあ気にすんな。やっぱりよく似合ってるぞ。ちょっと場違いなだけじゃないか」

「その場違いが『ちょっと』じゃないんだよ！」

三日月のモチーフの兜。

蒼い甲冑。

そして俺のおなじみ右目眼帯。

「なんで『伊達政宗』の衣装なんだよ！」

渡された衣装は戦国BASARAの伊達政宗の装備であった。

「眼帯はお前のデフォルト装備じゃないか」

確かに渡されたときは結構テンションが上がった。

だが、中華喫茶でウェイトレスをしている伊達政宗がチャイナドレスをまとった少女たち（内一人が男の娘）に注文を取る……

「あまりにもシユールだと気がついた！」

「大丈夫だ、問題ない　　クククッ」

「やっぱり笑ってんじゃねえか！　大丈夫じゃねえ！」

「・・・・・・・・・・・・一番いい素材で作っている」

「そういう問題でもないぞ！」

確かにこの甲冑、わりと丁寧につつてあるし、素材的には出来が丈夫そうだ。いい素材ではあるだろうが・・・・

「さっきからなんであの二人は話題のRPGをパクってるんだろう？」

明久の意見は放っておいて、

「だがやっぱり、中華喫茶で伊達政宗は無理があるだろう」

「そこはギャップというものだ」

「適当に言っていないか？　どうせなら、いつそ『コスプレ喫茶』に変更するとか・・・・」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「何人かそれもアリだと考えただろ！」

全くFクラスの連中は……。ちなみにムッツが一番、目を輝かせていた。

「しかしそうだな。実際それも人気が出そうだ。そしたら明久にはメイド服を着せればいいか」

「やめてよ雄二そういうのは！」

「いいんじゃないの、アキ」

「可愛いと思いますよ、吉井君」

「美波も姫路さんもそういうのに乗らないで……」

おいおい、明久に着せるなんて……

「そうだぞ。明久にメイド服なんて似合わないだろ」

「正宗！ 君は僕の味方だ！」

「伊藤君！ 吉井君のメイド姿を見たことがないからそういう」

「

「少なくとも昨日雄二と一緒にいたメイド程にはならないだろ。あれはなかなか可愛かったな。確か、『アキちゃん』って名前だったかな」

「」「」「……」「」「」

あれ？ なぜ明久・雄二・姫路・島田が黙り込んでしまったんだ・
・・・？

『・・・・・・雄二。僕は猛反対だからね』

『・・・・・・分かった。善処してやる』

『私も、昨日見た分で諦めます・・・』

『そもそも、今から改装する暇がないわよ』

ああそうか。雄二とアキちゃんが一緒にいた話をしたら霧島が飛んできてアイアンクローか。それはうっかりだな。

「それじゃ、中華喫茶のまま行くとして、俺はもう着替えていいか？ 厨房がいい」

「それは無理だ。もうまもなく客が来る。接客やつてもらっぞ」

時計を見ると、8時59分。9時に清涼祭2日目が始まる。

この店に客が入ってくる気配も感じる。

「・・・・・・分かったよ。やってやるっじゃないかっ！」

「正宗。その意気だ」

「期待してるよ」

まあ今日はせっかくの祭りだ。いろいろ大目に見たり見られたりで行こう。

さあやってやるぞ！ 『伊達政宗』らしくだ！

午前九時。清涼祭2日目が始まった。

「伊達さん！ 注文いつすか？」

「おう、今行くぜ！」

「伊達様！ いいですか？」

「ちよつと待つてな！」

結論から言えば、現在大盛況だ。

客層は『中華喫茶』よりも、『伊達政宗』による効果が大きく、戦国BASARAファンや、歴女も結構いる。

例えば、最初に来た生徒の集団は、

『とりあえず、どこ入る？』

『そうだな。ここは……中華喫茶か』

『ええ、Fクラスじゃん。汚いって噂聞いたぞ』

『いや、でも実際噂ほどじゃなさそうだが』

『なあ、喫茶店の中にいるアイツはなんだ？』

『なんか変なのがいたか？ どれどれ……あ！』

『どうしたそんなに驚いて……ん？』

『なんだ、大げさな……え？』

『……なんで、中華喫茶に伊達政宗が？』

『驚くほど場違いだ……』

『ああ、伊達政宗って、中国と関係浅いだろ』

『まあ、なんか面白そうではあるな』

『それもそうだな。よし！ ここ入ろうぜ！』

『そうだな！ ツッコミどころも多いけど、楽しければいいか！』

『学園祭だからな！』

……と、他の客もだいたいこういうノリで、集客数が急上昇。中華喫茶にいることについては、様々な見解で判断され、とりあえず直接聞くような客はいなかった。

しかもその正体が俺であることすら生徒間でもツッコまれなかった。

「わーい、片目のお兄さん、とってもかっこいいです」

そういつて褒めてくれたのは、昨日と引き続き手伝いに来てくれた葉月だった。

「はは、ありがとな。葉月も、手伝いに来てくれてうれしいぜ」

「はいです！ お兄ちゃんたちのためなら何でもするです！」

実は客層の一部には、葉月が目当ての客もいたりする。女子ならともかく、ロリコンがいたら注意しよう。

「何でもしますから、葉月のお嬢さんになってくださいね！」

「む、難しいな……明久を婿にしようってんならとりあえず許可するが」

「葉月的には、バカなお兄ちゃんも片目のお兄さんも二人ともお嬢さんにしたいです！」

「法律とかいろいろ無理があるから！」

普通そうというのは女の子が　　しかも小学生が　　考えることじゃない。近頃はそこまで進んでいるのか……

「伊藤……葉月には手を出さなって言っているはずよね……」

「い、いや島田！　俺は普通に話をしていただけだ！」

むしろそういう方向の話を振ってきたのは葉月なのだが。いずれにせよ、姉というのは恐ろしいものだ。

そして周りからは『この伊達政宗、犯罪者っぽい』、『小学生に手を出すな。このロリコン伊達正宗』みたいな視線もある。とりあえず仕事に戻ることにしようか。

「……正宗。記念に一枚」

しばらく働いていると（秀吉にやり方を聞きながら仕事している。うまくこなせるようになったし、接客業も案外楽しいもんだ）、ムツツがカメラを構えて話しかけてきた。

「そうか。じゃあせっかくだから撮ってもらおうか」

「……ポーズ」

ポーズ、といったらやっぱりあのポーズかな。

刀を頭の上に掲げ、腰を少し低くする。刀の刃先と自分の目方向を併せる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・（パシャパシャパシャ！）」

我ながらなかなかのものだと思う。ムッツが男の姿を写真に撮るなんてのも珍しい。

「ありがとな。さて、じゃあ仕事の続きを」うおおおおおおおおお！』しようか・・・・・・・・！！？」

気合を入れなおそうとしたところ、どこからか叫び声。

まさか、この異様にテンションの高い叫び声は……

『うまい！ うまいぞ！ この胡麻団子は！』

ああ。遠目に見たが、間違いないな。

「え〜と、お客さん。店内では静かにしてくれ」

「す、すまぬ！ って！ なぜ伊達政宗が！」

真野雪村。説明は面倒だ。とりあえず『暑苦しい知り合い』とだけ説明しておこう。詳しいことは……どこかで話したような気がする。あと、BASARA知ってるらしいな。

「静かにしろ。俺だよ、俺」

「むっ！ 現・文月の独眼！」

「名前で呼べ」

「だったら！ 正宗と呼ばせてもらおう！」

いきなり名前か。問題ないけど、服装とマッチしすぎだ。

「それでいいか。今日は何の用だ？ とうとう学校内まで入ってきたやがって」

「うむ！ それがだな……！ 昨日、ある男がこの近辺に出現したと……！」

「男ならどこにでもたくさんいるけどな」

「見た目の特徴はよく知らないが、社会人ぐらいな年齢と聞いている！ 指を鳴らして爆発を起こし、剣術も格闘術も超人並みだともな！ 独裁者のような喋り方で、戦国BASARAにも出ていたよ
うな……！」

……。

心当たりは、ありまくりだな。当事者だ。

でも、その話題は、振られたくねえな……。

「さあ。知らないな。多分この近所にはそんな奴、いないだろうよ」

「ふむ！ そうか……！」

本当に全ての句点部分に『！』《エクスクラメーションマーク》マーク』がついてるな。余計すぎるくらいに。癖なのか、こだわりなのかも分からなくなってきた。黙っていればイケメンなんだけどな……

「俺もよく知らないが、何でもそいつは、ある伝説の宝具を探しているらしい。確か、木刀だったか」

「まあそんな話はもういいだろ」

明らかに『木刀・正宗』のことだろ。なんとか守り抜いたけど、ここで余計な話をする、再度来てしまう可能性がある。

「それよりも、うつ……こんなに食べるのか？」

真野の座っている席には、大皿に山盛りの胡麻団子。実は甘いもの（特に餡子）が好きではない俺にとっては、ちよつと見難い光景だ。

「心配するな！ 俺は、甘いものは好きだからな！」

そういつてまた胡麻団子をすごい勢いで頬張る。BASARAの真田幸村も、甘党という設定だった気がする。

「それだけ食ってくれるのはうれしいが、金は」
「働いて稼ぐ」
「払うという概念すらないのか!？」

こんな感じだと、働く技能もあるのかと怪しい。

……姫路印の胡麻団子をまぎれ込ませておこう。

「はあく、うまかった!」

仕事をしつつ様子を見てみると、どうやら完食したらしい。

……嘘だろ？ あの恐怖の胡麻団子に気付きもしなかったのか？

「そうかい、じゃあ約束どおり、働いてもらうのでしょうか。秀吉、ウェ이터の服は」

「……これを着て欲しい」

代わりにムッツが登場。どうやらウェ이터とは違う服を持ってきたらしい。

「でも、そもそもその人は部外者なのに、働かせていいの?」

島田がそういつてきた。

「そうだな……じゃあ、何か言われても、責任は俺が取ってやる。俺の友人ということにしておいてくれ」

「友人か……！！ 宿敵と書いて『とも』ならば……！！」

「そこはどうでもいいだろ。それじゃ、着替えて来い」

「うおおおおおおお！！ やる気MAX！！」

ほんの少し、キャラまで変わったな。より暑苦しい方向に。

真野が着た服は、BASARAの真田幸村だ。やっぱりよく似ている。

「それじゃ、やっぱりお前はホールかな？」

「俺は一応……！ 料理もできるぞ……！」

「やばい、本当に暑苦しい。『！』『！』になってパワーアップしている。本当に黙っていればイケメンなのに……」

「早速作ってみた……！」

「……早っ……！！」「……」

今まで普通に話していたのに、その一瞬で目の前に胡麻団子が人数分。おかげであいつより『！』が多くなってしまった。

「ふむ。普通にうまいぞい」

「本当ね。土屋ほどでもないけど、お店には出せるレベルだわ」

秀吉と島田が試食をしている。高評価のようだ。

接客に回しても暑苦しくて引く客が出るだろうし、ちょっと見世物にしたら厨房に入ってもらおう。

「じゃあ厨房に行く前に、写真を撮っておこうぜ」

「うむ！！ タダ飯食らいだから！！ それくらいは何でも協力するー！！」

「……………正宗。２ショットを撮りたい」

「それはいいな。協力しよう」

その後俺と真野は、『伊達政宗&真田幸村』として、客の前で撮影会が繰り広げられた。

俺自身、『伊達政宗』という仮面を被っているせいだろうけど、人前に出ることに抵抗がなくなってきた気がした。

余談だが、このとき撮られた写真は店頭で販売され、Fクラスの売り上げに大きく貢献したんだとか。

第四拾参話（後書き）

真野君の人気があれば、
まだまだ再登場考えてます。

第四拾四話（前書き）

夏休み入りました。イエイ！

更新ペース上げていききたいと思います。

第四拾四話

問 次の空欄に言葉を入れなさい。

『結婚とは、生い立ちも個性も異なる者同士の（ ）（ ）の出發を意味しています』

姫路瑞希の答え

『共同生活』

教師のコメント

正解です。

坂本雄二の答え

『人生の墓場』

教師のコメント

結婚をそんな風に見ないでください。

霧島翔子の答え

『夫の矯正』

教師のコメント

せめて『人生の墓場』と回答に書かないような人に矯正してあげてください。

伊藤正宗の答え

『カカア天下による嫁の制裁（例：坂本夫妻）』

教師のコメント

坂本君の回答の意味が理解できました。

昨日の帰りにて・・・

明久たちには俺の教えられること全てを叩き込んだ。

あとはあいつら次第だが・・・

そう思ったそのとき、

ドカツ！

背後から何者かに飛び蹴りされた。倒れ際に振り返ってみると・・・
優子？

「ちよつ、なんで」

「黙りなさい！」

更にもう1発、飛び膝蹴り。今度は顔面に入った。

「・・・・・・・・・・なんでだい、優子さん」

「アタシを置いて帰るんじゃないわよ！」

あ、そういえばすっかり忘れてた。いくら優子でも、夜道に女が一人で歩くのは危ないよな。

「それもそうだな。お前にも心配かけたな」

「わ、分かればいいのよ・・・・・・・・」

微妙に動揺して、返事をした。どうしたのだろうか？

「しかしそれで2度も蹴るのか・・・・・・・・」

「最初の1発は、それが理由よ」

「じゃあもう一回はなんだよ？」

それを聞いた瞬間、目の前に立ちふさがり、指をピシッと指し
てくる。

「なんでAクラスの出し物に来ないのよ！」

「ああ、来た方がよかったか？ だったら悪いな。ちょっと今日は忙しくて・・・・・・・・」

「本当に？ アタシが来ても、アンタいなかったじゃない」

「なんだ、ウチのほうには来たのか」

「……………アンタがいなきゃ、意味ないわよ」

「なんか言ったか？」

「な、なんでもないわよ！ と、とにかく……………」

「わかったわかった。明日は時間取れそうだから、行ってみる」

伊達政宗の姿をして、客呼びは成功。波に乗ってきたところで30分ほど休憩をもらえた。昨日は何もしなかったのに、休憩時間がもらえるとは思わなかった。

そんなわけで、昨日の約束どおり、Aクラスの出し物に行ってみることにした。だが……………」

「お前までついてくるか……………」

「正宗のクラスの喫茶店もよかった！ だが！ 他のところはまだ全く見ていないからな！」

そう、真野までついてきた。さっきまでの強いテンションも冷めたらしい。

ちなみに着替えるのも面倒なので、2人ともまだ『伊達政宗』・『真田幸村』のままである。周りの視線はかなり気になるが……………」

・まあ宣伝ってことで、気にしない。

・・・・・・・・・・・・・・・・中華喫茶ですが何か？

そしてたどり着いたAクラスのメイド喫茶。

店名『ご主人様とお呼び！』・・・・・・・・誰視点の発言だ？

「真野。ここでいいよな？ 嫌ならおごらないぞ」

「おごってもらえるなら！ やむをえない！ ここに入る！」

やむをえない、って話なのか。なんだ、洋物は苦手だったりするか？

そういう疑問はどうでもいいか。早速店に入ってみた。するとそこには・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

メイド服の優子が無言で待ち構えていた。

「よ、よう。来てやったぞ」

「なにしに来たのっ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・え？

「い、いや、お前が今日こそは来いって……」

「適当に座ってれば？」

……。

お、おいおいおい。招いておいてその態度は……

「……店間違えたかな」

出て行くことにした。が、すごい力で肩をつかまれた。

「正む　ご主人様。適当に座ってれば？」

わ、わけわからん！　だが、逆らうと殺される気がしたので、とりあえずそこらへんの席（優子以外のメイドが案内した）に座った。

「……とりあえず、何か頼もうか。えーと、真野、お前は……

」

「……（ポケット）」

気がつくと、真野は赤い顔で呆けていた。

「どうした！？　いつもの暑苦しい感じはどこに行った！」

胸倉をつかんで意識を戻そうとする。するとようやく口を開いた。

「……正宗よ」

「な、なんだよ？」

「あのメイドの、名前は？」

「名前？ 木下優子だ」

「その者とは、知り合いなのか？」

あのメイドとは、おそらく優子のことだろう。

「ああ、幼馴染だ」

「幼馴染………」

しばらく考え込む。そして……

「幼馴染だとっ！？」

「だ、だからなんだってんだ。とりあえず他クラスの店中だから静かにしている」

しかし俺のその言葉も無視して、真野は叫んだ。

「正宗！ 貴様とは！ このことも決着をつけねばならぬようだな
！」

「なっ！ わけがわからん！」

そもそも『どっちが強いか』を決めるだけだったのに、なんで理由もわからない理由が増えている！

「まあまた今度な。メニューは勝手に決めるぞ、奢られ人」

「今回は馴れ合えない！ 仕事に戻らせてもらおう！」

そういつてAクラスを出て行った。なんなんだ、あいつは。

しかしその矢先、出て行こうとする真野を優子が呼び止めた。何の話をしているのやら。

『そのあなた。正宗とどういう関係？』

『っ！？ ……おお！ 美しい方だ ……！』

『な、何を言ってるの？』

『俺は真野雪村。正宗の宿敵だ』

『そ、そうなの。ふむ ……妄想力がかきたてられるわ ……』

『こ、今回のところは失礼する！』

なんだか真野が騒がしく出て行った。一瞬優子からも変なオーラが立ちこめたのだが、なんだったのだろう？

『誰だか知らないけど、面白いことになってるようだね』

優子の近くに、ピンクのメイド服を着た工藤がそういつていた。

真野がどこかに行ってしまったが、特に追う義理もないので、放っておくことにした。店に戻っていればいいが……

「おーい、そのメイド。注文いいか？」

軽く注文も決まったところで、近くにいたメイド（優子）に声をかけた。

「何？ 今忙しいんだけど」

「いや、思いつきり待機状態だったじゃねえか」

優子はさつきからずっと、俺の座っている近所で壁際に立っていた。注文が入っても、他のメイドに任せている。

しかしこの態度。普通の接客じゃないが……

「なあ優子。いつまでその態度でいるつもりだ？」

「べ、別にコレがいつもどおりなんだからね！」

よくわからないが、何かを履き違えている気がする……

ん？ この口調……まさか

「もしかして、『シンデレ喫茶』というものをやりたいんじゃないだろうか？」

「……………そのつもりだったんだけど、どうかしら？」

「やっと元の優子になったな。何でさっきからシンデレ口調だったんだ？」

「だって、前に勉強を教えに行つたときに、正宗の部屋の本棚にそういう系統の漫画とかが多かつたから……………」

「え……………そう思うか？」

「そうよ。『シンデレ』、『メイド』なんていうワードが含まれてるものが半分以上あったから、おそらくそういうのが好きなんだろって……………」

「……………ああ、要するに、『シンデレ喫茶』というものをやりたかつたのか。」

「別に無理してやらなくてもよかつたのに。現実リアルのシンデレメイドなんて、特に望んではない」

「なっ!?!? ……実はアンタって、真性の二次元オタク？」

「そんなわけじゃない。それに……………」

「それに?」

「お前は普段どおりのほうが可愛いぞ？」

「なっ!?!?何を言ってるのよ!?!?」

優子が顔を真っ赤にして叫んだ。

「いや、別に可愛さを求めないなら　　って優子、なんで俺の肘の関節を曲げる体制を取っているんだ？」

一応褒めたのに、なんで殺されかけられそうなんだ？

「木下さん。お客さんにそんなことは　　ん？ 君は確か」

命の危機中に現れたのは、執事服をまとった男子生徒。学年次席・久保利光だった。この店は執事ウエイトレスも働いているらしい。

「久保か。試召戦争以来か」

「僕のクラスのためだったんだ。悪く思わないでくれ」

「いや、別に恨みはねえからいいさ」

意外と律儀なところがあって驚いた。でも、あいつ自身は姫路に負けてたらしいな。

「霧島は？」

「坂本君を探してるそうよ」

後で見かけたら、『屋上にいる』と伝えておこうか。

「ところで……」

「ん？ なんだ？」

久保が話しかけてくる。初めてのことだ。

「吉井君は、一緒にいないのか？」

なんだ？ なぜこいつが明久の心配なんてしているんだ？

「アイツは今日、召喚大会の決勝に出るからな。午前中は休んでるぞ」

「決勝戦か！ 意外だね」

そりゃFクラスが召喚大会決勝に勝ち進むなんて、誰も予想しなかっただろうな。

「雄二も含めて、あいつらはやるときはやるんだよ」

「そうかもしれないね。僕は準決勝で負けてしまったし……」

「え？ お前も出てたのか？ 誰と組んでたんだよ？」

しかも準決勝まで来たなら、明久&雄二 VS 優子&霧島の反対側。常夏コンビに敗れたのか。

「Eクラスの中林さんだ。とても積極的に誘ってきたから、どうも

断れなくて……」

「Eクラスの人間か。戦争経験も浅いし、苦戦だっただろうな」

「……僕も吉井君と組みたかったな」

「うん？　なんか言ったか？」

「いや、別に。吉井君はすごいよね」

雄二もいるけどな。

「そうだな。あいつがいなければ、今の俺はない。俺は明久が親友で、誇りに思っている」

「……」

なぜだか久保が黙り込んだ。

「こういうカップリングもいいかもしれないけど……やっぱり納得しちゃういけないというか……」

さつきから黙っていた優子も妙なことを言っている。

「なんていうか、伊藤君」

「？　なんだよ？」

「君は、後に僕の同志であり、ライバルになる。そんな予感がする」

同志？ ライバルはともかく……

「よくわからんが、そうだな。俺たちは戦争におけるライバルだろ」

「伊藤君。多分久保君の言いたい事とは違ってるからね」

工藤にツッコまれたが、違っててもいいや。

「次の試召戦争は負けねえからな！ 特に優子！」

「ふん。成長をせいぜい期待しておくわ」

「だから、特にもう勉強は「分からないところがあってもなくても教えてあげる」……よろしくお願いします」

とりあえず優子を越える以外にも、勉強地獄から抜け出すことも目標だ……

「あ！ もう休憩終わりだ！ それじゃ、俺はこの辺で……」

一応また店の手伝いはしなければならぬ。

「ちょっと正宗！ お代は……って何も頼んでなかったわ」

「結局時間つぶしただけだったか……」

「でも優子が言ったとおり、ちゃんと来てくれたね。伊藤君って、なかなか面白い人だね」

そういえば、店の中もこの『伊達政宗』状態だったな。きっと周りの人間はシュールな目で見ていたに違いない……

第四拾四話（後書き）

あえて真野×優子フラグを立ててみた。

ご意見・ご感想お待ちしております。

第四拾伍話（前書き）

更新する直前、「歌詞の無断転記禁止」となっており、早速今回の問題に出ていましたので、予めネタバレしておきます。リトルバスターズを参考にしました。

・・・・・・・・・・コレでいいんでしょうか？

ダメだったらいずれ内容を変えます。

第四拾伍話

問 次の言葉を使って、文章を作りなさい。

『やがて・・・だろう』

姫路瑞希の答え

『やがて芋虫はさなぎとなり、蝶となるだろう』

教師のコメント

正解です。模範的ですな。

伊藤正宗の答え

『やがて来る過酷も、乗り越えてくれると、信じさせてくれるよ』

教師のコメント

詩的な表現で良い文章（歌？）だと思いますが、『だろう』で終わってないので間違いにしました。

吉井明久の答え

『矢が鉄砲に勝てるはずがないだろう』

教師のコメント

君はある意味の文才ですか？

『それでは試合に入りましょう！ 選手の皆さん、どうぞ！』

審判の先生の説明は終わり、いよいよ勝負のときだ。

清涼祭、2日目午後の部。午前中は屋上で休ませてもらい、それから少し手伝い。そしてこの観客の多い大盛況の場所にやってきた。

手伝っていたとき、なぜか正宗がいなかった。しかし代わりに、妙に暑苦しい人が働いていて……

『ねえムツツリーニ。あそこにいる人は……』

『……正宗の知り合い』

『ああ、アイツが来ているのか。いいのか手伝わせて？』

『……いざというときは雄二に責任を押し付けるって……』

『なんだとっ！？ 正宗が言ったのか？』

『……というのは冗談で、俺が責任を取る、と正宗がいていた』

『そこまでが一人称だったか』

『それで正宗は？』

『……………（フルフル）。でも、店の売り上げには貢献している』

『よくわかんないけど、またいなくなっちゃったのかな？』

『今日のことだけは、アイツから聞いてないぞ？ まあいいか。俺たちも30分程度、手伝っていくぞ』

『……………ありがとう。決勝も頑張って欲しい』

『ありがとう、ムツツリーニ』

『むむっ！ そこにいるには悪鬼羅刹！』

『大声でそう呼ぶな！ とりあえずこっちに来い！』

『では坂本！ これから戦いくに行くのだな！』

『戦いくつてのは大袈裟だが、まあ大事な戦いだ』

『吉井も！ 絶対勝て！ 健闘を祈る！』

『あ、ありがとう。真野君』

……………という具合だった。

出会って間もない僕まで応援してくれるなんて、真野君っていい

人だな。

常夏コンビの目的は、やっぱり受験に有利になるように、教頭先生に掛け合ってもらうのが目的だったようだったらしい。

それだけ聞ければ充分だ。こういう理由なら 思う存分やれる。

「『『『試獣召喚』』』」

掛け声を上げ、それぞれが分身を喚び出した。

向こうの装備はオーソドックスな剣と鎧。高得点者の召喚獣らしく、質はかなり良さそうなものに見える。

『Aクラス 常村勇作 & Aクラス 夏川俊平
日本史 209点 & 197点』

確かにAクラスに所属しているだけのことはある。3,400点と飛び抜けるほどじゃないけど、実際兵士としては十分な強さだ（Fクラスだと足軽か鉄砲玉かおとし砲か使い捨て装甲板程度だ）。

「どうした？ 俺たちの点数を見て腰が引けたか？」

「Fクラスじゃお目にかかれないような点数だからな。無理もないか」

誇らしげにディスプレイを指す常夏先輩たち。

今気付いたんだけど、坊主先輩、まだ頭にブラつけてる……

観客からくすくす笑い声が聞こえるのはこれのせいだろう。普段の僕なら大笑いしていただろうけど、今回は事情が事情なのでなんとこらえた。

あいつらは、できることをしようとせずに、僕たちの人生で一度しかない高校二年生の学園祭を壊そうとした。楽しい思い出作りの邪魔をしてきた。僕の大切な人たちに取り返しのつかないよくなひどいことをしようとした。

「ホラ、観客の皆様に見せてみるよ。お前らの貧相な点数をよ」

「夏川。あまりいじめてやるなよ。どうせすぐに晒されるんだぞ？」

趣味の悪い笑い方だ。

こんな連中のせいで、姫路さんの転校を阻止できないなんて、馬鹿げている。

「……前に」

「あん？」

「前に、クラスの子が言った」

「なんだ？ 晒し者にされたときの逃げ方でも教えてくれたのか？」
そういつてまた下らない笑い方をする。

試召戦争のとき、姫路さんが言ってくれた言葉が頭に浮かぶ。そう。あの時、彼女はこう言っていた。

「『好きな人の為なら頑張れる』って」

「ハア？ コイツ何言ってるんだか？」

「僕も最近、心からそう思った」

『Fクラス	坂本 雄二	&	Fクラス	吉井 明久
日本史	236点	&		188点

「「なっ!?!」」

点数が表示されたディスプレイを見て、二人の顔色が変わった。

それもそのはずだ。このテストは今日の朝受けたもので、モチベーションの高さや、正宗のアドバイスによって20点以上の大幅アップ。

それを差し引いても、Fクラスでは普通は取れない点数だと思っただろう。

「アンタらは小細工なしの実力勝負でブッ倒してやる！」

召喚獣が得物を構える。戦闘開始だ。

ビシッ バシッ ドンッ

『坂本・吉井ペアの勝利です！』

「いいいよっしやああー！！！」

やはり1年多くやっているせいもあるが、相手の召喚獣も点数に
関係なく強かった。時には目潰しなんかもされたけど、根性で勝っ
た！

「やったな、明久！」

雄二とハイタッチ。この男もいなかったら結果は違ったかもしれ
ないな。

『優勝おめでとございます！ それでは、すぐに表彰式に移りま
す！』

「さあ明久。もう一仕事だ」

手伝いの生徒がテキパキと準備をしている。学園長ももついるようだ。

確かその後にも、白金の腕輪のデモンストレーションが

『その後はデモンストレーションを兼ねたエキシビジョンマッチです！ 最後までお楽しみください！』

エキシビジョンマッチ？ そんなのあったかな？ そんな疑問を頭に抱えながら、僕は表彰台に向かった。

「それで雄二。どういふことなのかな？」

「さあな。ババアが急に何か思いついたのかもな」

簡単に表彰式を終えてから、僕たちはまた決勝の舞台に立たされていた。

さっきと違うのは、常夏コンビどころか、相手側には誰もいないこと。

それと僕たちは白金の腕輪を装備しているところだ。

『さあそれでは、エキシビジョンマッチに移ります！　まずは先ほどの召喚大会優勝チーム、坂本・吉井ペアです！』

観客席からわーという声援が聞こえる。よく見ると、姫路さん・美波・秀吉・ムツツリーニ・葉月ちゃんが観客席の前のほうの席にいた。この面子で正宗はいないけれど、喫茶店だろうか？

『対する相手は、今回の召喚大会には参加しませんでした。が、学園長も認めるほどの猛者！　本日、優勝者と勝負をしたいという希望で、急遽エキシビジョンマッチという形にさせてもらいました！』

学園の猛者、か。まだそんな人もいるのか………たまたま相手が常夏コンビだったからよかったけど、霧島さんみたいに、まだ学園の生徒にはもっと強い人がいるだろう。

『では、登場してもらいましょう！　どうぞ！』

その合図と共に、反対側から出てきた人の影。それは　　普
段からよく見る友人の姿だった。

「よう、明久。とりあえず、優勝しやがったな」

彼のトレードマーク。右目の眼帯。今は『伊達政宗』ではなく、
文月学園の制服を着ている。

「正宗！ 何で君が！」

勝負の相手は、昨日自分の正体を明かしてくれた親友・伊藤正宗
その人だった。

第四拾伍話（後書き）

2巻の内容、そろそろ終わらせたいです・・・

第四拾六話（前書き）

夏休みなのに、更新遅くてすみませんでした。

勉強もせずに、遊びに忙しかったです。

現在ラストスパート……

第四拾六話

問　ゾウリムシのスケッチを描きなさい。

姫路瑞希の答え

『（省略）』

教師のコメント

正解です。特徴を捉えていますね。

伊藤正宗の答え

『．．．原寸大』

教師のコメント

毎年Fクラス中心にやる人は見かけます。きちんと覚えて下さい。

吉井明久の答え

『原寸大』

教師のコメント

いくらなんでも大きすぎます。

「正宗！　なんで君が！」

やっぱり驚いているみたいだな。無理もないな。

『奇しくも2・Fクラス同士の対決となりました！　彼は2年Fクラス所属の伊藤正宗君です！　先日行われていた試召戦争でも大活躍で、Aクラス生徒と対等に戦っておりました！』

結局負けたけどな。あと1点で。

「いや、学園長から頼まれてさ。ただ単に腕輪を使っても面白くないだろうから、どうせなら相手を用意しよう、ってな」

「観客は見ていて楽しいだろうな」

「そういうことなら、納得だね。でも僕にとっては不都合だ！」

「何で不都合なんだよ？」

本当はもっと別の理由もあったんだが、おそらく何も起こらないだろうから特にもう意味はない勝負だ。でも・・・それでもやる価値はある。

「本気でやったら、フィードバックが・・・」

「そんなことが明久。どうせもう目的は達成したんだ。気楽にやるうぜ」

「そ、そうだよな。正宗なら、フィードバックのことを気にかけてくれるよね?」

「と、言いたい所だが……」

「……え? 気に……かけて……」

「あんまり本気でやらないようなら、交換条件の件も全てなしだそ
うだ。学園長がそう言っていた」

半分は嘘だが、焚き付けるためにあえて言った。

「そんな! じゃあ、手加減とかは……」

「当然なしだ。むしろ お前とは本気で戦ってみたかった!」

「ええ! 本気で言ってる?」

「紛れもなく本心だ。同じクラスだから、なかなか戦う機会もない
からな」

普通の日に模擬戦を申し込んでも、本気で戦うことなんてないだ
ろうからな。

「でも正宗。2対1でいいのか?」

「心配するな。最初から1対1、俺と明久の勝負になるぞ」

「なに? 俺はどうなるんだ?」

「今回はデモンストレーションだ」

『今回は、立会いの教師は用意しておりません！ それでは坂本選手！ 腕輪を使ってください！』

俺が説明するまでもなく、司会者が説明してくれた。

そう、周りを見回しても、今回は教師がいない。雄二のほうには、おそらく召喚フィールド作成用の腕輪が渡されているだろうから、それを使って召喚フィールドを作る手筈だ。

「起動キーはもう聞かされてるよな？」

「そういうことか。それじゃあ、頑張れよ、明久」

「ええ！？ 一瞬にして不利になった！」

「1対1で条件は相手と一緒にだから問題ないだろ。行くぜ！ アウェイクン 起動
！」

雄二の掛け声と共に、周りに魔方陣が作られていく。

通常の教師が作成するフィールドよりもやや狭いが、1対1ならそれほど問題はない。

「とりあえず明久、召喚しろ。 サモン 試獣召喚」

「しょ、しょうがない、 サモン 試獣召喚」

俺と明久の召喚獣が現れた。俺のほうはいつも通りの『伊達政宗 戦国BASARAバージョン』だ。明久もいつもの学ラン木刀。

「さてと、教科は」

「それと正宗。ここでもし、お前が勝つたら、条件はどうなる？」

雄二がそう聞いてきた。ぶつちやけ勝敗はどうでもいい。だが学園長が言うに、来賓や会場が満足するような試合を見せれば、帳消しにもならないどころか、報酬まで付いてくるのだが……

「そうだな……無しになる、と言ったらどうする？」

「……なん、だと……？」

雄二が動揺している。冗談にしては強すぎたな。弁解しよう。

「いや、本当は別に」

「……やっぱり、正宗にとって姫路さんの転校は、『別に』
どうでもいいの？」

「え？ いや、明久？」

明久が妙に重い口調で話しかけてきた。

「正宗。本当にそう思っているのなら、僕は……全力で君を

「倒す！」

「おい、明久！？ 別にそういう事実はい

「さあ、勝負だ正宗！ 君に勝って、姫路さんの転校を阻止してみせる！」

「なんということだ！ 明久が想像以上に本気になってしまった！

『本気にさせる』って意味では目標達成だが、方向性は俺が悪役過ぎるぞ！

「覚悟おお！」

「なっ！？」

明久の不意打ち。何とか回避した。

まあ召喚されたところからもう勝負は始まっているから違反とかはないが、そこまではまだいい。

問題は、俺自身にも直接攻撃しようとしていたのだ。

「ちっ……外したか」

「おい、今俺に直接当てようとしたよな！？ 殺す気か！」

「死んでもいい！」

「なっ！？」

まさか親友（又は相棒）の俺にそんなセリフまで吐くとは……このままじゃ後の関係も悪くなるな。

そつだ、ここは雄二を使ってなだめよう。いつものアイコンタクトで……

（雄二。明久の怒りを治められないか？ 俺は姫路の転校がどうでもいいなんて思っていないぞ？）

雄二にだけは真実を伝える。本人に直接言っても効果は皆無だからな。

（安心しろ。お前の気持ちは分かってる）

よかった。雄二には伝わっていたようだ。

（だが、あの状態の明久を元に戻すことは難しい。勝負は避けられないだろう）

やっぱり勝負は避けられないのか。いや、それでいいんだ。

斬りかかってくる木刀を峰で止める。

「上等だ！ てめえがその気なら、力づくで分からせてやる！ ついでに、表・裏の観察処分者、どっちが強いかわッキリさせとこうじゃねえか！」

「望むところだあ！」

なんか自然と口が悪くなって、完全に悪役だな、俺（観客には俺たちの会話は聞こえてないだろう・・・きつと）。

だがそうだったのならば、俺のテンションが上がっている証拠だ。フィードバックなんて気にしてやるな！ アイツはその覚悟で向かって来ている！

その覚悟、受けて立つまでだ！

『Fクラス 吉井 明久 化学 61点

VS

Fクラス 伊藤 正宗 化学 65点』

雄二の持つ白金の腕輪。本当は教科の指定はランダムなのだが、実は今回は化学になるように仕組ませてもらった。

理由は、同じ点数で勝負するためだ。

本当に同じ点数になるかは不安だったが、狙い通り4点程度しか差がなかった。

会場的には興奮めを感じる点数かもしれないが、そこは目を瞑ってもらおう。

「それえ！」

「くっ、よっ」と

明久の動きは、ほとんど単純な突進。だがその中にも、繊細さのある太刀筋だ。熱くなってるかと思えば、ちゃんと冷静に対応している。俺の教えたことだ。最初から手加減なんて、いらなかったな。

『吉井選手、伊藤選手、両者互角の闘い！ 勝負は全く予想がつきません！ 会場も盛り上がりが最高潮です！』

確かに観客の大きな声援が聞こえる。俺の眼帯なんてもう気にしていないかのようだ。

よし、ここらで一気に攻めてやる！

「悪いが、剣術で勝てると思うな！」

明久の召喚獣が木刀を振りかぶったところを、払いのけて逆にこちらが腹部に攻撃。剣道で言う『面払い胴』みたいなものだ。

「ぐあっ！」

直前で後ろに下がったようで、完全には当たらなかった。しかしダメージを与えることに成功ではあるか。

「ふんっ、これで終わりか……？」

「これしきのことだ、引き下がるものか！」

それでも諦めようとしないう。こういうところが奴の長所だ。

「絶対に勝つ！」

「負けるかあ！」

ここで召喚獣同士、お互いの得物が相手の肩に突き刺さった。

『Fクラス 吉井 明久 化学 29点

VS

Fクラス 伊藤 正宗 化学 41点』

それでも大分点数が開いているはずなのに俺とは互角。前にも話したが、召喚獣の力は点数だけでなく、召喚者の感情にも深く影響する。

その中でも、『怒り』とは人間の持つとても強い感情だ。

「ぐあっ！」

それでもよろけそうになっていた召喚獣を起こして再び木刀を構えてくる。

「さあて、そろそろ降参したらどうだ？ フィードバックとかきついだろ」

「正宗！ 僕はまだ、諦めないぞ！ 絶対に倒す！ うおおお！」

その時だった。明久の召喚獣の頭上に、突如雷が落ちた。

「！…………ぎゃあああっ！」

「明久！？」

明久の断末魔のような叫び声。フィードバックだろう。いや、そもそも雷なんてどこから

「……………はっ！」

少し静止していたかと思えば、再び目覚めた。いや、今はむしろ明久本人より、召喚獣の変化があった。

前髪がパラリと落ちた髪型、そして全身に電気を帯びている。

「極殺モード……………！」

俺の六爪流と同じ原理で起こるとされる謎の現象。

発動できれば、攻撃・スピードUP & 防御力DOWN。更に1分で丁度0点になる速さで点数減少etc という諸刃の剣^{せうは}。

だからフィードバックがある明久には危険とされることだったが、『点数が初期の50%以下』という条件も達成してしまった。

い。こんなときだが、発動条件その2を発見してしまったかもしれない。

ズバリ、『召喚者の心の底からの意思』といったところだろうか。

どんな感情でもいい。喜び、楽しさ、悲しさ、哀れみ、正負は関係ない。何かの感情で心が満たされれば召喚獣のほうにも大きく影響が出る。

そして今回引き起こした感情は『怒り』。出てきた効果が『極殺モード（BASARA的表現）』であることも納得できる。

「だ、大丈夫か、明久！」

「……………何が起こったか知らないけど……………」

「ぶ、無事か……………」

「正宗！ 僕は、君を倒す！」

その瞬間、突如明久の召喚獣が消え 一瞬で俺の召喚獣の目の前に。そのまま木刀を振り下ろす！

「なっ！？ ちっ！」

ギリギリをかすめて避けた。その木刀は地面に叩きつけられる。

その衝撃で、地面にヒビが入った。

「……………生身で食らったらひとたまりもないな……………」

「くらええ！」

そうつぶやいた矢先にまた俺への直接攻撃。食らったらリアルに大怪我だ！

反則 の申告も面倒なので、こうなったら『木刀・正宗』を
ダメだ、あくまで召喚獣を使わねえと……

なんとか召喚獣の刀で取り押さえた。しかし長く続けるとこちらの
刀が折れそうだ。

……心なしか、手のひらに重い感覚が……
うか、シンクロ率がフィードバックが現れるゾーンに入ったのか。

なんとか重圧に耐えているところだが、俺の召喚獣の点数はジリ
ジリと減ってきている。

「ぐおおお！」

「落ち着け明久！（ガンッ）」

「いでっ！ ……なんなのさ、雄二！」

もはや暴走状態まで陥った明久を、雄二が頭を叩いて止めた。

コイツの場合は力づくで殴って意識を戻したようだ。雄二らしい
かもしれないが……

「そこまで荒れてどうする！ 確かに姫路の転校を気にしない、鬼
のような人間が憎いのはよく分かる！」

待て！ 俺は気にしてないわけじゃないぞ！ 鬼ってなんだ、鬼
って！

「だがな、それが本心とも限らない。むしろ逆である可能性だってあるんだ」

逆？ というのはよく分からなかったが、ナイスフォローだ。なぜこのタイミングなのかも分からないが。

「まずは気を鎮める。そしたら正宗と話し合え。怒り狂ってたら、お前の身も危ない」

「そ、それもそうか・・・あ！」

明久は気を落ち着かせているが、その瞬間召喚獣が急にまた動き出した。

おそらく明久の召喚獣への集中力が切れたからか。召喚獣自身の判断で動き出したわけか。

そうだな、まずは武器を払って・・・

「それっ！」

「っつて、危なっ！」

あ、吹っ飛ばした木刀が雄二に当たった。

直撃したら流石の雄二も大怪我 と思いきや、案外平気だったようだ。

なぜなら、腕輪を使ってガードしていたからである。

「おいおい、腕輪壊れてないか？」

「ああ、一応大丈夫そうだが……って、ん？」

召喚フィールドが歪んで見える。そして消えた。

「ちくしょう、やっぱり欠陥が……」

「お、大丈夫だ。またフィールド出現したから」

「マジかい……」

案外すぐに済んでしまったが、このことが『白金の腕輪の欠陥』と挙げられたら……

『えー、只今、召喚フィールドが一瞬消えてしまいましたが、坂本選手が間違えてOFFにしてみました。開発者の学園長も『問題ない』とのことです！』

(貸しは………取っつけ)

(恩に着る！)

手筈が早いじゃねえか。雄二も、学園長も。

おかげで、極殺モードは解除された。勝手に動くことはない。

さてそれじゃ、明久と交渉して………それでいいのか？

「・・・それで正宗。君は姫路さんが嫌いなのか？」

「そ、そんなことは」

果たして、『交渉』という名目の話でいいのか？

「前に言ってたよね。初対面で怖がられたとか、接点がないとか、前に美波や秀吉と転校の話をしていても、どうでもいいみたいなの・・・」

「・・・」

確かに、そう思っていたときもあったかもしれない。否定できない気持ちではあった。

「姫路さんのほうからだって、最初はちょっと距離を置いていたかもしれないけど、それでも仲良くなるうと努力してたんだよ！」

「ここはどうぞやってごまかし いや、ごまかすのはやめだ。

本音で話さないと伝わらない。

「もう一回だけ聞く！ 本当に『どうでもいい』って思ってるのか？」

だから、今は違う。そんなの

「どうでもいいわけないだろー！」

そつだ、仲間の転校なんて、本人が嫌なら阻止するべきなんだ！
最初から分かったたことだ……

「顔は良いし、スタイルもいい！ 頭の良さだつて最強レベルだ！
そして何より、穏やかだが強い意志を持った性格を持っている！
料理スキルは殺人級でヤバイが、決して離れたくない、大切な仲
間だ！」

ガラでもないのにスラスラと言葉が出てきたと思う。考えてみれば、姫路にはいいところはたくさんあるし、嫌う理由なんて何ひとつないんだ。近づこうとしてくれるのも、すごくうれしい。

ひとつマイナスポイントを言ったが、それもまた本音ということ
で。

「そつか……ごめん正宗！ 誤解してたよ！」

「わ、分かってくれて何よりだ」

やっぱり、本心を分かってもらうには本音以外ありえないな。

「うん、僕が考えていたのとは全然逆のことだったよ……！」

「ああ、そういうわけだ……って、逆？」

意味はよく分からない。何が逆なんだ？

「……まあ、なんでもいいや、後で聞こう。それじゃ……」

第二ラウンドと行くのか。やれるよな？」

「もちろんさ！ 当然全力でね！」

「その意気だ！ ところでよ、白金の腕輪、覚えてるよな？」

「も、もちろんこれから使うつもりだったよ！」

多分忘れてたな。まあ使う気分でもなかっただろうし、使うまでもなかったのだろう。

なんかいつもの調子に戻った気がする。

「よし、じゃあ再び勝負だ、明久！」

「OK！ それじゃあ早速、二重^{ダブル}召喚っ！」

その掛け声と共に、明久の召喚獣が2体に分裂した。

「んじゃ俺のほうも……六爪流《WAR DANCE》！」

この掛け声によって、俺の召喚獣は両手に合計6本の刀を構えた。

「って、明らかに武器が多いじゃないか！ こっちは2体あわせて木刀2本なのに！」

「黙れ！ そっちは召喚獣が2体じゃねえか！ それにいくら真剣でも、この初期点数じゃナマクラで、しかも結構刃こぼれしてるくらいなんだからな！」

俺の召喚獣の装備は刀だが、やはり　せいぜい平均点はいかないと　満足な切れ味にはならない。しかも戦闘中に刃こぼれした場合、六爪流を使っても全ての刀が同じ状態になっている。

木刀で真剣を刃こぼれさせた。それほどの力って、もうパワーだけは鉄人レベルじゃないか？

「それじゃお互い準備万端ということ・・・」

「そうだな。俺のほうは時間もないから・・・」

「いざ勝負っ！」

この瞬間が、ただ単純に楽しい。今までやった歴史アクションゲームよりも、ずっといいな。

持つべきは友だ、仲間だ。

第四拾六話（後書き）

闘いの結果は次回に持ち越しです。

第2巻はあと二回で終わらせる予定なので、それからは番外編（オリジナル有）をやってすぐに3巻入ります。

第四拾七話（前書き）

前回のバカテスト、ちょっと手を抜きすぎたかと思って反省しています。

今回はドラマCCDからの出題 + です。

第四拾七話

問 源氏物語について簡潔に説明しなさい。

姫路瑞希の答え

『平安時代に成立した、日本最古の長編小説。作者は紫式部。現代語訳は与謝野晶子のものが有名』

教師のコメント

正解です。ちなみに主人公は光源氏だけではなく、第三部は光源氏の次男である、薫の君が主人公です。

土屋康太の答え

『親友の彼女を寝取ったり・・・(ボタッ)・・・年上から年下までチヨイチヨイと摘み・・・(ブボッ)・・・女癖が悪くて大活躍・・・(ドバツ)・・・』

教師のコメント

鼻血、大丈夫ですか・・・？

伊藤正宗の答え

『平家物語のもう片方のバージョン。ポケモンで言うなら、ブラックとホワイト等の関係』

教師のコメント

百人一首の源平合戦などで比較したのかもしれませんが、全然違いますからね。

ポケモンで表現しないように。

吉井明久の答え

『源氏、頑張る！』

教師のコメント

簡潔過ぎます。

『両者、見事な闘いを見せてくれました！ 二方の健闘を称えて、拍手をお願いします！』

その掛け声で、会場から大きな拍手。デモンストレーション&エキシビジョンは大成功のようだ。

結果的に勝負は、引き分けで終わった。

具体的な状況としては、まず召喚獣の動きは互角 と思いきや、明久の召喚獣はすごく動きが不自然で、明久自身にも操作ミスが多かった。考えてみれば、二つのものを同時に動かすなんて簡単なことじゃない。しかも初めて使うものだったから相当戸惑っただろう。

ちなみに俺もその前にモニターしたのだが、俺でも扱うのは難しく感じた。ゲーム的に言うなら、『ひとつの画面でコントローラーを二つ操作する』感じだろうか。『慣れ』もそうだが、『集中力』のほづが必要となってくるだろう。

それでもだんだん慣れてきたか、六爪流を使った俺に互角の戦いをしてきた。

そして明久には珍しく考えたようで、2つの召喚獣をそれぞれ違う方向から突撃させてきた。フェイントも織り交ぜてきた。何とか隙を突いて一体撃破したが、もう1体が背中を叩きつけ大ダメージ。

その後、お互い最後の1撃とばかりに大振りの攻撃。武器の攻撃力の差で微かに俺が残った。のだが、ほぼ同時に六爪流のデメリット効果で0点となった。

そんなわけで、今はお互いの健闘を称え、握手している場面。

「ありがとな、明久。デモンストレーション&エキシビジョンは大成功だ」

「それもそうだけど、僕も正宗と戦えて楽しかったよ」

最初はフィードバックがきついと言ってたのに………きつと今も辛いだろうな。

「それに、正宗の気持ちも知れてよかった。きっと雄二に一度止められなかったら、あのまま勘違いしてただらうね」

「そうだな。危つく絶交もあつたかもな」

「勘違いってのは恐ろしいね。考えていたこととは全く逆のことだ

「ったんだから」

「明久、その、逆つてのはなんだ？」

「え？ だから、僕は正宗が姫路さんのことを嫌いだと思っていたんだ」

「やっぱりそう思ってたのか」

「そして、ようやく気づいたんだ」

そして明久が言い放つ。

「要するに　好きなんだね、姫路さんが！」

「え？ いや、明久？」

明久が妙に軽い口調で呼びかけてきた。

知らないうちに変な話になってる……

「正宗。本当にそう思っているのなら、僕は……全力で君を応援する！」

「おい、明久！？ 別にそういう事実には」

「さあ、和解だ正宗！ 僕も協力するから、姫路さんの転校を阻止してみせよう！」

なんということだ！ 今度は『俺は姫路が大好き』という、さつきとは真逆でより悪い方向の勘違いになっている！

あれ？ なんかデジャウ`なのは気のせいかな？

こうなったらデジャウ`に従って、雄二に誤解を解く協力をさせよう！

（雄二。明久の勘違いを正せないか？ 俺は姫路のことが好きなんて思っていないぞ？）

雄二にはさっきのようにアイコンタクトで伝える。

（安心しろ。お前の気持ちは分かってる）

よかった。雄二には伝わっていたようだ。

（だが、あの状態の明久に間違いを正してやることは難しい。諦めて受け入れる）

そう訴えてきた雄二の表情は笑っている。

この野郎・・・・・・・・この状況見て楽しんでやがる・・・・・・・・！

「いや、だつてさ、あのときにあれだけの褒め言葉を並べられるなんて、嫌いな人にできるわけがないよ。確かに料理のことは嘘をつけないけどね・・・・・・・・」

なんか言ってることは間違っていないんだが、そんな風に捉えられ

ていたとは……

「いや、だから、別に好きっていうのは、仲間とか友達とか、そういう意味で……」

「はっはっは、そんな照れ隠ししなくたっていいんだよ?」

くっ、ダメか! やっぱり説得が通じない……

「大丈夫だよ。多分ここからだったら姫路さんには聞こえてないし、僕もしばらく黙っててあげるから。ね、雄二?」

「なんなら今ここで告白するか? マイク借りてきてやるぞ?」

雄二、お前もか! 事情は知っている分、余計たちが悪いな!

「いいか、お前ら。俺が好きなのはな……」

「「好きなのは?」」

「好きなのは……」

あれ? 俺、誰が好きなんだ? 少なくとも姫路ではない。

「……」

俺のほうはとりあえずいいか。

それよりも今後は、島田と並行して、姫路も明久とくっつけてやるっ、と心に決めた。

「すまねえ、教頭。優勝できなくて……」

「だがやるだけのことはやった。どうか、推薦のほうは……」

「……あなたたちならやってくれると思っていたのですが……
……今回の話は、ここまでです。諦めなさい」

「そこを何とか！」

「もうあんなバカどもにやられやしねえ！」

「全く……最後のチャンスですよ」

デモンストレーション&エキシビジョンを終え、教室に戻り再び喫茶店の手伝いをした。

試合の影響もあり、店は大繁盛。ちなみに真野もまだ厨房にいた。

「坂本！ 吉井！ よくやった！ 祝・優勝！」

なんでコイツが一番テンションが高いのだろう。

「うん、ありがとうね、真野君」

「おう。部外者のくせに、よくやってくれてるじゃないか。教師から注意とかされなかったのか？」

「うむ！ 先程、担任を名乗る人間とは思えない強者が訪れた！ 敵わぬ気配がしたのでその場は隠れた！」

「じゃあまだばれてないわけか。それを言ったら葉月も咎められるだろうし」

「もう学園祭も終わり時だ。見つかっても大したことにはならないさ」

「それで！ 俺はあとどれほど働けばよい！？」

「本当はまだ終わりまで働いても足りやしない。片付けにも参加してもらおう」

「了解した！ どんどん作るぞおおー！」

本当は計算すらしていない。でもあんまり作りすぎて余るのも困るけどな……。どんどん作ったところで片づけが面倒になることを想定してるのか？

「それじゃ、終わりまで俺たちも働くか」

俺は『伊達政宗』の衣装を再び着て仕事をした。

「あ、学園長。優勝の報告に来ました」

「言われなくてもわかってるよ。アンタたちに賞状を渡したのは誰だと思ってるんだい」

相変わらず口の悪いババア

もとい、学園長だ。

ようやく喫茶店終了の時間、片付けは他のクラスメイトに任せ、俺、明久、雄二、秀吉、ムッツのメンバーで学園長室にやってきた。初期よりメンバーが増えたが、この学園長のせいもあってこの二人もひどい目に合わされた。元凶の顔でも拝ませてやろう、という雄二の言い分だ。

しかし、やはりこの部屋に來ると、妙に誰か別の人物のような気配がする……

いや、今思えば、いろんなところで感じていたか……？

「ところでババア。デモンストレーションをしたのはいいんだが、なぜエキシビジョンなんて形も取り入れたんだ？」

「……。そんなもの、場を盛り上げるためだよ。ただ見せるだけじゃ、つまらないからね」

「……本当にそれだけか？」

雄二は気付いたようだな。

「実は確かにそれとは違う真の理由があるのだが、あくまでそれは『もしも』の話だ。」

「まあ、誤魔化したってしょうがないことなんだけどね。保険だよ、保険」

「要するにババアは、『もしも明久と雄二が常夏コンビに負けて腕輪が奴らの手に渡ってしまったとき、俺が勝負として参加して暴走を阻止しろ』という保険だったのさ」

「要するにババア、俺たちを信用してなかったのか？」

「そんな！ それと僕と正宗の戦いは案外無意味だったんじゃない？」

「いや明久。楽しかったとは言ってたよな」

「いや、そうではあるんだけど・・・」

「結局、召喚獣を使った場の盛り上げになったのは間違いない。召喚システムの宣伝としても有効。何より、学園長は俺の六爪流も見せびらかしたかったらしい」

「み、見せびらかしたかったなんて、とんでもないさね」

明らかに動揺してるじゃねえか・・・

「だったら僕がやってもよかったんじゃない？」

「何度も言うが明久。お前はまだアレのコントロールができていない。デモンストレーションでも発動してたが、結局暴走してたじゃねえか」

「そ、そういうわけか・・・」

未だにアレが使えるのは俺と明久しかない。しかし制御ができる分、俺にやらせるしかないわけだ。当然暴走させればマイナスイメージだからな。

「雄二のほうも、あのと きうまく誤魔化してくれて助かったぜ」

「ちなみに、俺を狙ったことに悪意はないよな？」

「そういうことにしておけ」

いずれにせよ悪ノリした分で両成敗だ。

「それで、白金の腕輪は返却したほうがいいですか？」

「そうさね、坂本のほうだけちょっと預かってくよ。吉井のほうは後でいいさね。どうせすぐに不具合は直せないんだ」

確かに明久のほうは問題なく動いてたが、雄二のほうは一瞬フィールドが消えてまた出たトラブルが発生した。俺のミスもあるのだが、もしかしたら故障が起こってるかもしれない。

「む？ 明久。不具合とはなんじゃ？」

「あ、そつか。秀吉は知らなかったんだね。この白金の腕輪はちょっと欠陥品でね、得点の高い人が使うと暴走しちゃうんだよ」

「そうじゃったのか……………。む？ どうしたのじゃ雄二？」

雄二が何か考え事をしている。俺もそうなんだが、何か突っかかるものがあるんだよね……………

「そういえば、なんであいつらは俺たちがババアとつながっていると知っていたんだ……………」

かなり小声でつぶやいていたが、かろうじて聞き取れた。確かに、それは妙な話かも知れないな……………

「だから、教室の改修と交換条件で僕と雄二がこれをゲットするっていう取引を学園長と……………」

「待て明久！ その話はマズい！」

「え？」

雄二が急に真剣な顔で怒鳴りだした。まさか！

「ムッツ！」

「……………盗聴の気配」

「やられたか！」

雄二が部屋の扉を開けると、およそ2人の人間の駆け出す音が聞

こえた。

誰かが聞いている気配の正体はこれだったか！

「あいつら………追うぞ、明久、正宗！」

「OK！ すぐ追いつくから、先行つててくれ！」

「ちょ……雄二、正宗、どういうこと!？」

「盗聴器だ！ あの連中、この部屋に盗聴器を仕掛けてやがったんだ！」

「なんだって!？」

明久・雄二・秀吉・ムッツを見送った後、再び学園長に向き合う。

すると筆談である文章を書く………なるほど。

俺も筆談で『OK』とだけ書いた。

そして学園長から『ある物』を返してもらい、すぐに部屋を出た。

「待たせたな！ 今どうしている？」

いろいろ走り回り、明久と雄二に合流。

「正宗！ とりあえず秀吉とムッツリーニにも協力してもらって探している！ お前は どうするんだ？」

「……俺は、少し別行動を取る。常夏は見つけ次第排除するが、あまり期待しないでくれ」

「よくわかんないけど、わかったよ」

どっちなんだよ、明久。

「それと雄二、これを返してもらった。もしかしたら使うときが来るかも知れない」

そういつて雄二に渡したのは、フィールド作成用の白金の腕輪。発動自体に問題はないはずだ。

「そうだな。そっちもうまくやれよ」

「頑張つてね、正宗」

「ああ、それじゃ、また後でな。それと、教頭室の場所、気に留めとけ」

「」「？」

首をかしげている二人を信じ、そこから進路変更して、ある部屋に向かうことにした。

「さて、追い詰めたぞ、竹原」

俺が向かったのは、教頭室。案の定、竹原がいた。

「ふう……まさか、君がここまでやるとはね……裏・観察処分者君」

余裕そうにコーヒーを飲んでいる。

やはり俺がそもそも学園長とつながりがあったことは分かっていたようだ。

「俺はここで、アンタの計画を阻止する。今すぐに常夏の行動をやめさせる」

「……あの二人については、別に構いませんよ。万が一、あの二人の作戦が失敗したところで、私には他の方法がいくつもある。私の計画を完遂させるのには差し支えありませんから」

「要するに、あいつらは捨て駒だってわけか」

「まあそんなものです。よくやってくれたものですよ」

一瞬だけ常夏に同情しそうになってしまった。だがやはり、俺たちの妨害をしていたことに変わりはない。本心からの行動だっただろう。

「それよりも、私は君のことが気に入りました。どうでしょう？ 私の下につきませんか？」

「はっ、何を言ってるのやら」

「もちろん、捨て駒ではなく、右腕としてです。このまま計画を通してくれれば、君にも山のような利益が入り込んできますよ」

「そんなもの興味がない」

「本当にいいのですか？」

「ふざけんなっ！ お前の下についたところで、得るものには何の価値もない！」

どんな条件だろうと、今更仲間を裏切るようなことはしない！

「俺は、仲間と一緒にいる現状が一番いいんだ！ それを守れるのなら……俺は何も要らない！」

「……交渉決裂のようですね」

そういうと、竹原は戸棚から一枚のプリントを取り出し、それをFAXに入れようとする……

「なんだそれは？」

「『伊藤正宗』という生徒についての資料です。家柄のこと、入学の経緯、“悪い”人間関係のことetc……これをPTAにでもばら撒きます。普通なら大した話ではないですが……」

「なっ！？ それはやめろ！」

「だったら素直に私の下につきなさい。流出したら、即退学ですよ」
竹原の広げようとしていることは、どれもこれも俺にとって都合の悪いこと　俺がこの学園にいられなくなる事情　ばかりだ。

「結局私の計画の成功失敗に関わらず、君は文月学園から立ち去ることになりますが、私の下につき計画を成功できれば、君の素性を知らない良い学校へ転入も掛け合えますよ」

……だが……

「……いいぜ。流出させればいいじゃねえか」

「ほう。君がこの学園から消されるのですよ？　学園長が関わっても難しい話です」

「だが、きつとそれは阻止されると思うぜ」

確信ではないが、おそらく失敗する。

「言っただろ？　俺は仲間を裏切らない。そして……」

俺がこんな風に言えるのは、教頭室の窓の外から、“ある光景”が見えたからだ。

「俺の仲間も、俺を裏切らない！」

ドオン！

およそ屋上のほうだろうか。何かが爆発した音がした。

「なっ、何の物音ですか!？」

俺が外に見たのは、雄二が『白金の腕輪』を使用し、明久が召喚獣で打ち上げ花火を投げた光景。

そういえば、屋上に放送機材がある。常夏コンビもそこから俺たちの話を流そうとしたのだろう。

「あれは………! とんでもないことを仕出かしますね……

」

「隙あり!」

驚いている隙に、奴の持っている資料を木刀で斬り刻んだ。

「あっ! やってくれましたね……」

「脅迫は封じた。ほら、もう一発来るぞ………!」

ヒュウ……… ドオン!

2発目も屋上へ飛んで行く。追撃だろうか。

「くっ、やはり君たちはバカですか!」

「ああ、バカでいいさ」

「しかし、さつきも言いましたが、私にはまだ策はいくらでも……」

「おっと、それ以上は動かないことを薦める」

木刀を竹原の首元に当てる。気休めだが、立ち止まらせる効果はあるだろうか。

「ふん、何の脅しかは知りませんが、あそこに……」

それでもなお、何らかの目的で窓際のほうへ移動。だが、もう一発は……

ドオオオオオオン！

やはりこの部屋に当たった！ 離れてて良かったぜ。

「あつ……あつ……あつ……」

竹原もギリギリ生きていたようだ。まあ死んでもらってもあれだが、運が良かったな。

「お前の計画とやらも、ここまでだな……この状況なら、いくらでもガサ入れできるからな。直に目的も計画も証拠も出てくる」

「……………ふっ、参りましたよ。明日からは普通の教師に戻ります」

「そこは俺の権限じゃない。もし権限を持っているのなら、俺は認めない」

俺たちにやったことはそれだけの重さがある。そもそも、このまま復帰させたとしても信用ならない。しばらくは監視するようになるだろう。俺を介するかは分からないが。

それからはもう砲弾が来なくなったので、教頭室の爆発したところを覗いてみる。そこからは、鉄人から逃げ回っている“三人”の男の影。

ん？ 三人？

明久と、雄二と、あとは…………

「正宗よ。すごい音がしたから来てみたのじゃが、なにやらすごいことになっておるのう…………」

妙な人員増量に疑問を抱いていると、背後から秀吉の声。ふむ、秀吉ではない。

「お、秀吉。放送は阻止できたみたいだぜ」

「うむ、この状況とどう繋がるのかは分からぬが、めでたいことじや」

一件落着、と言ったところか

「……………正宗」

「うん？ どうしたムッツ？」

「……………ちょっと携帯電話を見せて欲しい」

「?? 俺の携帯がどうかしたのか？」

ムッツがまたよく分からない怪しげな機械を使って何か調べている。

「……………やはり」

「何が『やはり』なんだ？ ……って、なぜ急に分解し始める！？」

手際の良い作業であつたという間に俺の携帯は電子部品のクズに。代わりに黒光りする妙な機械がひとつ残った。

「……………それは？」

「……………盗聴器&電波受信妨害装置」

「……………なるほど…」

道理で明久や雄二との電話がつかない時があつたはずだ。何かに話を聞かれている気配もあった。

「……………この装置は、どちらも外部から、リモートで

ON/OFFができる」

「もしかしてこれのことかろう?」

秀吉が見つけたのは、これまた黒光りする機械。携帯電話ぐらいの大きさだ。スイッチもON/OFFの切り替え型が二つ付いているのみ。これで教頭が操ってたのか。

「これらを破壊すれば万事解決、だよな」

そんなわけでまずは携帯に仕掛けられていた機械を踏み潰す。

「こつちのリモコンはどうするか……」

「……………俺にくれ」

「……………いや、それも問題ありそうだが……………しょうがないな」

この盗聴のスペシャリストに渡すと、とんでもないことになりそうだ。でも使い道も無く、なかなか壊しにくそうなので、専門家に引き渡すことにしよう。せいぜい平和なことに使ってもらいたい。

「それじゃ、証拠も根絶やしにしたし、明久たちと合流して、打ち上げといこうか!」

しかし、この後明久たちは鉄人に捕まって、特別指導を受けていると聞き、学園長はそこに掛け合ってくれてるらしかった。

ちなみに何故か真野も一緒に受けている。

そっだ、後で報酬とやらを取りに行こう。何ももらえるのかは分からないが、期待しないほうがいいかもな……

第四拾七話（後書き）

次回、清涼祭編完結です。

きつと原作順守となるかもしれませんが。

第四拾八話 (清涼祭編 終了) (前書き)

清涼祭編、最終話です。長くやりすぎましたね。

前回、原作に沿うといいましたが、結局別目線の話にすることになりました。

そしてとあるお菓子のネタが大量に……

第四拾八話 (清涼祭編 終了)

問 頭の体操として一風変わった英語のクイズをどうぞ。

【?】と【?】に当てはまる語を答えてください。

『マザー(母)から【?】を取ったら【?】(他人)です。』

姫路瑞希・伊藤正宗の答え

『マザー(母)から【M】を取ったら【other】(他人)です』

教師のコメント

その通りです。Motherから『M』がなくなるとother(他人)という単語になります

こういった関連付けによる覚え方も知っておくと便利でしょう。

土屋康太の答え

『マザー(母)から【M】を取ったら【S】(他人)です』

教師のコメント

土屋君のお母さんが『MS』でも『SM』でも、先生はリアクションに困ります。

吉井明久の答え

『マザー(母)から【お金】を取ったら【親子の縁を切られるの】(他人)です』

教師のコメント

英語関係ないじゃないですか。

俺は秀吉・ムッツを連れて再び学園長室に来た。

この部屋に取り付けられていた盗聴器を回収した。

「それで学園長。報酬とやらは……」

「そうだったね。持っていきな」

そういつて渡したのは……

うい棒（30本入り・マーボー味）

「3000円相当かよっ!？」

「なんだい、うま 棒は嫌いなのかい？」

「いいのではないかのう、正宗。この菓子に、マーボー味があるなんて、ワシは初めて知ったぞい」

「………珍しい」

「いや、マーボー味って、レギュラー商品らしいぞ」

売ってるのはあんまり見たことないし、食ったこともないけどな。詳しくはwiki。

俺が言いたいのは、アレだけの仕事をして、3000円じゃ割りに合わないところだ。

「しょうがないね。もう1セットつけてやる」

「そ、それにしたって、納得いかねえな……」

6000円相当。学園の危機まで救ったんだが……

「じゃあこれもつけるよ」

まい棒（1本・ブートジョロキア味）

「なぜブートジョロキア　　！！」

この前俺が使ったやつか！ 鉄人に食わせたけど……何のお咎めも無かったな。

「というか、そんなのあったか？」

「いや、文月学園印の特注品さね。何でも、ぜひとも試作品として伊藤に食べさせたって、西村先生が考案してくれたんだ」

まさかの形の逆襲だった。

そういえば、文月学園印のパン粉とかあったな。学園ブランドがあるにしても、まさかこのシリーズまで……

「というわけだ、食ってみてくれ」

「運がいいのう、正宗。まだ誰も食べたことのない菓子を、一番早く食べられるぞい」

「……………頑張れ」

とりあえず袋を剥いて、うう……明らかに辛そうだな……。意を決して、一口食べる……。食感は至って普通のうい棒。

「ふむ、確かにメンタイ味よりは少し辛く　　って、辛あああああ！　ポオオオオオオオオ！！　ぎゃーーーーー！　み、水、いや、氷水をーーーーっ！！！」

文字通り、口から火を噴出しそうな勢いの辛さだった。というか今更だが、なぜ俺は口に入れてしまってるのだろう……！！

「ふむ、なるほどね。購買で売り出すにはもうちょっと押さえたほうがいいかもさね」

「これは胃がやや丈夫な正宗でなければ、病院行きになるぞい」

「……………売り出し当初の初見ではきつと流行る………！」

俺自身の感想は全く聞くこともなく、この3人は俺のリアクシヨンのみで判断していた。

「それじゃ、本命の報酬を渡そうかね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ここへ来て何を言っているのやら、このババア。

「今度は信用していいんだよ。さっきの二人も出払わせただから。そんなに脂汗をかかないでくれ」

いや、この汗はむしろ、さっきの辛味成分が原因だ。所謂カプサイシンって奴だ、全く汗が止まらない。

ちなみに味の感想を言うと・・・・・・・・ただ辛いだけだった。覚えてろ、鉄人。

秀吉とムッツはのた打ち回っている俺を置いていって、先に学園長室を出て行った。薄情な奴らめ、とも思うが、これでこのババアと裏の話もいろいろできる。

「・・・・・・・・次は何味のうま 棒だ？」

「特にないけど、まだ欲しかったのかい？」

「無いならソレデイイ。安心したぞ」

「豚足味とか、シールドストレンジ味とかも、現在考案中で」

「絶対作るんじゃないぞ！間違っても俺に食わせるな！製作廃止だ！」

この話は根絶やしにしたほうがいい。伏線にならないうちに、話題も切り替えよう。

「……それで、本命の報酬とは？」

あまり期待はしていないし、危険な予感もするが、まい棒よりはマシだろう。やむを得ず、その話に乗ることにした。

688

「未完成？」

「もう少ししなだけどね……」

どうやらどこかで買うような代物ではなく、学園長自身が製作しているものらしい。

「よく分らんが、また召喚獣関連のアイテムか？」

「そこは秘密さね」

この人が作るものといったら、それ以外考えられないけどな。

「……はあ。まあいいや。できたら連絡くれよ」

「分かったよ。アンタらが強化合宿に行ってる間には完成させようかね」

強化合宿。目的は文字通りが、勉強そのものよりも、学習のモチベーションの向上が目的らしい。

「そつだ、合宿では、くれぐれも覗き騒ぎとかするんじゃないよ」

「何を想定して言ってるんだ。まるで俺たちが本当に起こしそうな言い方だな」

「アンタはともかく、その仲間を起こしかねないからね」

「はあ……とにかく、俺ももう出て行くぞ」

いくらなんでもアイツらが覗きなんてことを起こすわけがない。よほどの理由がない限り……。

「遅れた〜。うん、大分盛り上がってるな」

Fクラスは近所の公園で打ち上げをやっていると聞き、そこに向

かってみると、とても賑わっていた。

「おう、正宗か。遅かったじゃねえか」

「ちよつとな。そうだ、差し入れだ」

食べ物類の集まりのところに、さっきもらったうい棒（60本）を広げる。クラス1個ぶんより少し多い、妥当な量だ。倍にしてもらえてよかったかもしれない。

「・・・なぜうま　棒？　それにマーボー味・・・」

「細かいことは気にするな。それよりも、俺も宴会に参加するぞ」

「打ち上げな。それだと酒飲んでるみたいじゃねえか」

いや、微妙に酒のおいがするんだが・・・？

「それはそうと、鉄人の拷問、大変だったな」

「学園長が手を回してくれてよかった」

「やっぱり真野は見つかって、咎められたんだな」

「いや、営業に参加したことはばれなかった。ただ、少な・・・

」

「？　何やったんだ？」

「俺と明久は、召喚獣を使って花火を2発屋上に投げ込んだ。で、

後もう1発止めに投げようと思ったたら、急に召喚フィールドが消えた。そこで、偶然通りかかった真野に投げてもらったのだが、見事に飛距離が足りず、教頭室の壁に直撃。鉄人に見つかり、3人で逃げて捕まった」

そうか、3発目はアイツが投げた砲弾　　もとい、花火だったのか。

……あれ？　俺が信頼した雄二や明久は一体……？

「ちなみにアイツは解放された後すぐに帰ったぞ。『いつかは……あの教師に勝つ！』と捨てゼリフを吐きながら」

何百年後の話になるのやら。

「ところで明久は？」

「ああ。明久なら、あそこで島田に殴られてるぞ」

「また今度は、なにやらかしたんだ？」

そして明久に抱きつく姫路の姿。修羅場なのか？

「ま、放っておこう。俺もちょっと飲み物をもらいたい」

「そこにある。オレンジジュースばかりだが、取ってけ」

そういわれ、そこにあつた箱から缶ジュースを1本取り出し、プルタブをあけ　　すぐに異臭を感じる。少なくとも、高校生の集まりの中にあつてはいけないにおいが……

「おい雄二。これ酒じゃないか？」

「ん？ そうだったか？ がははははは」

ダメだ。コイツ、酔ってる。島田と姫路もこれの影響だろうか？

まあ気にせずいただこう。これでも俺、酒の耐性は強いほうだと思っっている。飲んだことはないが、多分大丈夫だ。

それにしても、やはり予想したとおり、いや、予想以上に、今年の学園祭は大波乱だった。

姫路の転校阻止、裏で動いていた教頭の陰謀阻止、そして凶悪な敵との遭遇。

姫路の転校は阻止できたみたいだ。それに教頭の陰謀も完全に止めることができた。だが、あの男は一体なんだったのだろうか。

松宮久英……確かにあの時はほぼ初対面だった。

いつだかの記憶の片隅……多分俺は、あいつをどこかで見ている。明久に『知り合いだったのか』という質問をされ、咄嗟に『すごく悪いほうの知り合い』と答えられたのも、それ所以だろう。

次に対峙したときは……命があるのかも分からない。

まあ、今はとりあえずいいか……話の先送りが多いな、

俺。

何はともあれ

『うぎゃー！ー！ー！ー！ 美波！ 姫路さん！ お願いだから離れて！
そして落ち着いて話を聞いて！ あぎゃあー！ー！』

今回のところは、大切な仲間と居場所を守れたからな。

第四拾八話 (清涼祭編 終了) (後書き)

清涼祭編、終了です。読了ありがとうございます。

次回からはとりあえず番外編をやります。

予定としては『正宗が裏・観察処分者となった経緯』についての話を考えています。

マーボー味については、『僕が興味あるけど食べたことがない』という感じです。

食べたことがある人はぜひ感想を書き込んでください！

裏の経緯 (物語風な設定説明) (前書き)

今回は予告したとおり、過去に不良と呼ばれていた正宗が文月学園に入れたことについての話。

一人称は正宗ですが、所々過去目線・今日線が混同しています。

タイトルどおり、設定資料として読んでください。

やや破綻している設定もありますが……

裏の経緯（物語風な設定説明）

伊藤正宗、という一人の少年がいた。

小学時代、とある暴力事件を起こし、周囲の人間から恐れられるようになる。

中学時代、他校の生徒との、喧嘩の毎日。

彼自身が手を出したことはほとんどない。

特徴は右目の眼帯。

これは、『彼』が文月学園に入学し、裏・観察処分者となった経緯の話……

俺が文月学園に入学する半年前……およそ中3の夏休み頃。

「ああ……どうすっかな……」

先日、俺はある廃工場で普段より大きな闘いに巻き込まれた。

そのせいで、現在通っている中学校 師走中学校からの通達があった。簡潔な内容は、『地元の高校に受け入れ拒否された』というものであった。

むしろ俺は被害者だ、という言葉も“いつも通り”聞き入れてもらえなかった。

よっぽどのがない限り欠席無く毎日通ってたし、授業だって時々は寝ているが、参加はしていた。

成績？ はっきり言って悪い。

なぜか俺はテストには出ないようなところだけは良く覚える傾向があるからか、定期テストでは点数に発揮できなかった。

そうであろうとなかろうと、やはり時期の問題が大きい。夏休み中というと、入学説明会などのことをする高校も少なくはない。問題を起こせば、それが響いてくる。

それ以前に元から俺の噂がいろんな所に蔓延してて、『自分のところに入れさせたくない』という考えで、チャンスとばかりに対処したのだろう。

(まあ老婆一人、救えたからいいか……)

その廃工場では、老婆が一人捕まっていた。理由はよく分からなかったが、とりあえず縄だけ解いてやった。

その後、すぐさま警察を呼んでいたが………何者だったのか。

数日後。差出人不明の手紙が俺の元に届いていた。

『今から指す場所に、誰にも見つからないように来なさい』

「どこだこれ………？ 文月^{ぶんつき}？」

辞書で調べ、文月^{ぶんつき}と読むことが分かった。

指された場所は、文月学園・理事長室。

「学園長。この間は、大丈夫だったのですか？」

「ん？ ああ、ちょっと危なかったけれど、助けに来てくれた輩がいてよかったさね」

「誘拐犯たちの目的はなんだったのですか？」

「結局よくわからなかったね。大方『試験召喚システムのデータ』
といったところじゃないかい？」

「さようですか………これからはボディガードでも雇ったほうが
いいんじゃないでしょうか？」

「そうさな………だったら丁度いいのがある。腕は確かだし、

値段も超格安で済むさね」

「待っていたよ、『伊達政宗』」

「……………」

誰に言ってんだ、このババア。という感想だった。

(伊達政宗って、まさか眼帯で判断したのか?)

「かつこいいじゃないか、『伊達政宗』。ちょっとDQNっぽいけどね」

「いや、伊藤だ」

「え…………あ、ああ、そのようさね。字体が似てるね…………」

「…………俺の名前を見てそんな呼ばれ方をしたのは今回が初めてだ。それとDQNとは…………?」

このときの俺は、DQNの意味がよく分からなかった。

(ってよく見たら、この前捕まってたババアじゃねえか…………顔はあんまり見てなかったが、残念な感じにしわがれてる…………そこらの老婆のほづがよっぱど朗ほがらかだろつに…………)

「伊藤正宗、アタシの顔がどこか可笑しいかい？」

「丁度そう考えていたところだ。流石は妖怪、読心までしてくるとは」

「誰が妖怪さね!？」

「いや、人間界に溶け込むのは大変だった。普段は川沿いにいて小豆を洗ってるのか？」

「誰が小豆洗いさね!？」

「違うのか？　じゃあ、砂でもかけてくるのか？」

「砂かけばあ、とでも言いたいのか？」

「おっと、自分でババアと認めたな」

「黙れクソガキ……言い方の問題だよ」

なにやらとんでもない人外生物に出くわしてしまったようだ。

「ところで妖怪ババア。アンタは何者なんだ？」

「まあそれはひとまず置いてもらおうか。そしてその呼び方はやめるさね。アンタのことは調べがついてるんだ。だ　　伊藤正

そもそも、俺が地元の高校に拒否されたのに、このババアが関わってるんだっただけ……

「助けてくれたお礼みたいなものさ。学費のほうも負担してやるよ」

「なるほど、そりゃ俺にとってもうれしいが……俺なんか入って大丈夫なのか？」

「実は無害だつても分かってるよ。」

「本当に、いいのかよ……」

「それでも実は……ちょっと条件があるよ」

「なんだよ、条件つて……」

「入学と同時に、ある役職に就いてもらう。拒否するのなら、当然今までの全ての話しは無効さね」

「聞くだけ聞くから、さっさと答え」

「一言で言えば、アタシの右腕になれ、ってところか」

「？ そりゃ教師の誰かでもいいんじゃないのか？」

「それじゃダメなのさね。それに、アンタの実力も見込んで頼んでるんだよ」

「実力？」

「なかなか危険なんだ。多分痛い目に遭うさね」

「……進学さえ掛からなければ、絶対断るが……」

「まあ手紙の通り、本当に誰にも見つからずにここまで来れたんだ。実力は充分つてところかね」

そこはうちで習っていた流派があつて……詳しくは省略。

「お前さんにとつてもチャンスだと思つだろ。どうせこのまま就職活動なんてできないだろうからね。しかも、アンタの住む町よりも少し遠いところだ。小規模にしか広がらないはずだよ」

「まあ確かにな。いずれにせよ、高校は出ときたいと思つていたところだ」

「3年間身を隠しておけば、きっと噂も消えかかるだろうし、消えて無くてイメージを変えることはできるかもね」

ただどうしても抗えないのが、この眼帯だが……そのときはどうにか誤魔化せるのだろうか？

「それと、一応この取引は裏道入学ということになるから、他言禁止だよ」

「誰に話すんだよ、この俺が」

とりあえず信頼できる人間がない。家族とは連絡を取る気はない（一応一緒に暮らしていることになってる人はいるが、現在海外にいる。中学生で一人暮らしだが、大問題だろうか？）。

ましてや友達なんて……受け入れてくれるのだろうか？

「……それもそうかい」

その後もいろいろと条件を言い渡された。それほど大したものでもなかった気がするので省略。

「それじゃ、決定だ。お前さんは、今年の4月から文月学園の生徒として通ってもらおうよ」

「何から何まで悪いな、“ババア”」

「その呼び名はやめな。入学前に退学なんてしたくないだろ」

「ちっ、分かった分かった」

「それでも堂々と呼ぶ奴は呼ぶだろうさね」

「既にいるのか？」

「いいや。今のところは聞いたことはないが……むしろ未来視かね」

「？ まあいいや……」

よく分からんが、そいつとは仲良くなれそうなのがする……ダメか。俺に友達なんて、できねえな。

まあとにかく俺は、それなりの履歴を持って仕事に就かなきゃいけないから、この話、乗ってみようじゃないか。

もう『あの家』に戻らないために。

裏の経緯 (物語風な設定説明) (後書き)

こういうわけです。

次回は、まだ少し未定です。

とりあえず人物紹介の追加をしようかと考えています。

正宗のほかに、真野雪村も追加しようと考えているのでお楽しみに！

(松宮久英については、設定そのものが定まりきってないので、現在はまだ未定です)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5769n/>

バカとテストと独眼竜

2011年10月17日01時52分発行